

埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書 第46集

# 上 北 浦 遺 跡

2 0 2 4

埼玉県熊谷市教育委員会

埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書 第46集

かみ きた うら い せき  
上 北 浦 遺 跡

2 0 2 4

埼玉県熊谷市教育委員会



# 序

私たちの郷土熊谷は、丘陵、台地、沖積低地と地形が変化に富み、肥沃な大地と豊かな自然が広がっております。こうした自然環境のもと、市内には先人たちによって多くの文化財が営々と引き継がれてきました。これらの文化財は、郷土の発展やその過程を物語る証しであるとともに、私たちの子孫の繁栄の指標ともなる先人の貴重な足跡であります。私たちは、こうした文化遺産を継承し、次世代へと伝え、さらに豊かな熊谷市形成のための礎としていかなければならないと考えております。

さて、熊谷市内には地下に埋蔵されている多くの遺跡が所在しております。そして、これらの遺跡内では、様々な工事が行われ、遺跡を保護できない場合があります。このような状況が発生した際には、発掘調査を実施して記録保存を行い、後世に伝えるべく方策を採っております。

本書は、令和3年度に発掘調査を行った上北浦遺跡について報告するものであります。上北浦遺跡は、古くから利根川の水害を受けてきた妻沼低地における数少ない縄文時代の遺跡として知られていました。調査の結果、遺跡からは縄文時代から鎌倉時代までの竪穴建物跡や溝跡等が多数見つかри、岩版をはじめとする大量の遺物も出土して、大変貴重な成果を得ることが出来ました。今後、本書が埋蔵文化財保護、学術研究の基礎資料として、また埋蔵文化財の普及・啓発の資料として、広く御活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書刊行に至るまで、文化財保護の趣旨を尊重され、御理解、御協力を賜りました株式会社アゼントラスト様をはじめ、地元及び工事関係者に厚くお礼申し上げます。

令和6年3月

熊谷市教育委員会  
教育長 野原 晃



# 例 言

- 1 本書は、埼玉県熊谷市江波字上北浦 27 番 3 地内に所在する上北浦遺跡（埼玉県遺跡番号 61-024）の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査及び整理・報告書に係わる費用は、株式会社アゼントラストに負担していただいた。
- 3 本書は、工場建設工事に伴う事前記録保存のための発掘調査であり、整理・報告作業も含め、熊谷市教育委員会が実施した。
- 4 本事業の組織は、第 I 章 3 のとおりである。
- 5 発掘調査期間は、令和 3 年 4 月 12 日から令和 3 年 6 月 21 日までである。また、整理・報告書作成期間は、令和 4 年 4 月 1 日から令和 6 年 3 月 31 日までである。
- 6 発掘調査の担当は、山川守男及び大野美知子が、本書の執筆・編集は山川が行った。
- 7 発掘調査における写真撮影及び遺物の写真撮影は、山川が行った。
- 8 基準点測量は、東京航業株式会社に委託して実施した。
- 9 本調査とは別に、菅谷浩之氏によって本遺跡出土の資料が採取された。また、出土品のうち、石核・剥片の分析を田部井功氏に、獣骨の鑑定・分析を茂原信生氏、櫻井秀雄氏及び梶ヶ山真里氏に依頼した。各氏から賜った玉稿を付編として掲載する。
- 10 本書にかかる資料は、熊谷市教育委員会が保管している。
- 11 発掘調査及び本書の作成にあたり、下記の方々及び機関等から御教示、御協力を賜りました。記して感謝申し上げます（敬称略）。

株式会社アゼントラスト 代表取締役 大久保直政

田部井建設株式会社 大塚 久・川内信司

江田真毅 小野美代子 梶ヶ山真里 金子彰男 小林まさ代 小林 克 櫻井秀雄 茂原信生

島村範久 菅谷浩之 須永光一 田中正夫 田部井功 中村哲也 半田宏伸 細田 勝

渡辺清志 渡辺慎也

# 凡 例

- 1 調査区全測図及び出土状況等の挿図縮尺は、原則として次のとおりであるが、それ以外のものについても個別に示した。

調査区全測図… 1/200 竪穴建物跡・土坑・井戸跡・性格不明遺構… 1/60

溝跡平面図… 1/120 溝跡断面図… 1/60

また、遺構の略記号は次のとおりである。

竪穴建物跡：SI 土坑：SK 井戸跡：SE 溝跡：SD 性格不明遺構：SX ピット：P

- 2 遺構挿図中のトーン等は次のとおりだが、それ以外のものについては図中に併記した。

地山： 焼土：

- 3 遺構挿図中、断面に添えてある数値は標高を示している。

- 4 遺物挿図の縮尺は、原則として次のとおりであるが、それ以外のものについても個別に示した。

土器… 1/4 土器拓影図… 1/3 石剣・石斧・磨石… 1/4 石皿… 1/5

岩版・ミニチュア土器・土製円板・石錘・砥石・土錘・鉄製品・鞆羽口・鉄滓… 1/3

石鏃・耳飾り・土偶・垂飾品・骨角器・土製品・石製模造品… 1/2

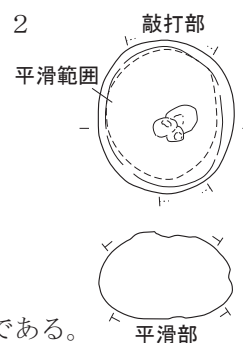
- 5 遺物実測図の表現方法は、次のとおりである。

須恵器・古代陶器の断面：黒塗り

赤彩・赤色顔料付着：

須恵器底部回転ヘラ削り： 同左・回転糸切り：

石皿・磨石の使用痕：右図のとおり



- 6 土器拓影図は、断面図の左側に外面、右側に内面を示した。

- 7 縄文土器以外は、遺物観察表にまとめた。表現方法は、次のとおりである。

・法量の単位は、cm、gである。

・縄文時代の耳飾りは、復原による推定径にカッコを付した。

・古墳時代～中世の土器は、復原による推定径及び残存高にカッコを付した。

・土師器・須恵器の胎土は、土器に含まれる鉱物等を次のとおり記号で示した。

A：白色粒子 B：黒色粒子 C：赤色粒子 D：褐色粒子 E：赤褐色粒子

F：白色針状物質 G：長石 H：石英 I：白雲母 J：黒雲母

K：角閃石 L：片岩 M：砂粒 N：礫

- 8 写真図版の遺物縮尺は、すべて任意である。

- 9 土層及び土器の色調は、『新版標準土色帖 36 版』(小山正忠・竹原秀雄編著、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修、日本色研事業株式会社発行 2014) を参考に示した。

- 10 本書の「遺構と遺物」の構成は、第IV章縄文時代及び第V章古墳時代～中世の2つに分けたが、遺構番号は両者を通して連続して付している。

# 目 次

序

例言

凡例

目次

I 発掘調査の概要	1
1 調査に至る経過	1
2 発掘調査・報告書作成の経過	1
3 発掘調査、整理・報告書作成の組織	3
II 遺跡の立地と環境	4
III 遺跡の概要	9
1 調査の方法	9
2 検出された遺構と遺物	9
IV 縄文時代の遺構と遺物	12
1 下層の土器集中地点	12
2 竪穴建物跡	15
3 土坑・ピット	33
4 性格不明遺構	37
5 各種遺物	39

V 古墳時代～中世の遺構と遺物	88
1 竪穴建物跡	88
2 井戸跡・土坑・ピット	93
3 性格不明遺構	97
4 溝跡	98
5 各種遺物	106
6 遺構外・試掘採取遺物	109
VI 調査のまとめ	110
付編1 上北浦遺跡における 縄文時代未調査区域の遺物	116
付編2 上北浦遺跡の剥片石器製作	124
付編3 上北浦遺跡出土の獣骨	139

# 挿 図 目 次

第1図 埼玉県の地形図	4
第2図 周辺遺跡分布図	5
第3図 調査地点位置図と調査区全測図	11
第4図 縄文時代遺構全測図	12
第5図 縄文時代下層出土遺物	13
第6図 第1・2・3号竪穴建物跡	14
第7図 第1・2・3号竪穴建物跡出土土器	15
第8図 第4号竪穴建物跡	16
第9図 第4号竪穴建物跡出土土器(1)	17
第10図 第4号竪穴建物跡出土土器(2)	18
第11図 第5号竪穴建物跡	18
第12図 第5号竪穴建物跡出土土器(1)	19
第13図 第5号竪穴建物跡出土土器(2)	20
第14図 第6号竪穴建物跡	21
第15図 第6号竪穴建物跡出土土器(1)	22
第16図 第6号竪穴建物跡出土土器(2)	23
第17図 第6号竪穴建物跡出土土器(3)	24
第18図 第7号竪穴建物跡・周辺ピット群	25
第19図 第7号竪穴建物跡出土土器(1)	26
第20図 第7号竪穴建物跡出土土器(2)	27

第21図 第8号竪穴建物跡・周辺土坑群	28
第22図 第8号竪穴建物跡出土土器(1)	28
第23図 第8号竪穴建物跡出土土器(2)	29
第24図 第8号竪穴建物跡出土土器(3)	30
第25図 第8号竪穴建物跡出土土器(4)	31
第26図 第8号竪穴建物跡出土土器(5)	32
第27図 土坑・ピット	33
第28図 土坑・ピット出土土器(1)	34
第29図 土坑・ピット出土土器(2)	35
第30図 土坑・ピット出土土器(3)	36
第31図 第1号性格不明遺構	38
第32図 第1号性格不明遺構出土土器	38
第33図 包含層等出土土器(1)	39
第34図 包含層等出土土器(2)	40
第35図 包含層等出土土器(3)	41
第36図 包含層等出土土器(4)	42
第37図 包含層等出土土器(5)	43
第38図 包含層等出土土器(6)	44
第39図 包含層等出土土器(7)	45
第40図 包含層等出土土器(8)	46



第41図	包含層等出土土器(9)	47	第69図	磨石(1)	77
第42図	包含層等出土土器(10)	48	第70図	磨石(2)	78
第43図	包含層等出土土器(11)	49	第71図	磨石(3)	79
第44図	包含層等出土土器(12)	50	第72図	磨石(4)	80
第45図	包含層等出土土器(13)	51	第73図	石錘(1)	81
第46図	包含層等出土土器(14)	52	第74図	石錘(2)	82
第47図	包含層等出土土器(15)	53	第75図	古墳時代～中世遺構全測図	88
第48図	包含層等出土土器(16)	54	第76図	第9・10・11号竪穴建物跡	89
第49図	包含層等出土土器(17)	55	第77図	第9号竪穴建物跡出土土器	90
第50図	包含層等出土土器(18)	56	第78図	第12号竪穴建物跡	92
第51図	包含層等出土土器(19)	57	第79図	第13号竪穴建物跡	92
第52図	包含層等出土土器(20)	58	第80図	第13号竪穴建物跡出土土器	93
第53図	包含層等出土土器(21)	59	第81図	井戸跡・土坑・ピット	94
第54図	土製円板	60	第82図	第2・3・4号性格不明遺構	95
第55図	耳飾り(1)	61	第83図	井戸跡・土坑・性格不明遺構出土遺物	96
第56図	耳飾り(2)	62	第84図	第1号溝跡	99
第57図	特殊製品(1)	64	第85図	第1号溝跡出土土器(1)	100
第58図	特殊製品(2)	65	第86図	第1号溝跡出土土器(2)	101
第59図	特殊製品(3)	66	第87図	第1号溝跡出土土器(3)	102
第60図	独鈷石・石剣・石棒	67	第88図	第2・3号溝跡	104
第61図	石鏃・石錐・スクレイパー(1)	69	第89図	第2号溝跡出土遺物	105
第62図	石鏃・石錐・スクレイパー(2)	70	第90図	第4号溝跡	105
第63図	打製石斧	71	第91図	土製品・石製品・鍛冶製鉄関連等遺物	107
第64図	磨製石器	72	第92図	遺構外・試掘調査採取土器	109
第65図	石皿・台石・凹石(1)	73	第93図	妻沼低地の 縄文時代後期～晩期の遺跡	110
第66図	石皿・台石・凹石(2)	74	第94図	館林・大宮台地の 縄文時代後期～晩期の主な遺跡	113
第67図	石皿・台石・凹石(3)	75			
第68図	砥石	76			

## 目 次

第1表	遺構番号新旧対応表	3	第10表	井戸跡・土坑・性格不明遺構 出土遺物観察表	96
第2表	周辺遺跡一覧表	6	第11表	第1号溝跡出土遺物観察表	103
第3表	土製円板観察表	83	第12表	第2号溝跡出土遺物観察表	105
第4表	耳飾り観察表	83	第13表	土製品・石製品・鍛冶製鉄関連等 遺物観察表	108
第5表	特殊製品観察表	83	第14表	遺構外・試掘調査採取遺物観察表	109
第6表	石器観察表	84	第15表	岩版集成表	113
第7表	石錘観察表	87			
第8表	第9号竪穴建物跡出土遺物観察表	91			
第9表	第13号竪穴建物跡出土遺物観察表	93			

# 図 版 目 次

- 図版 1 調査区付近遠景 調査区全景
- 図版 2 調査区付近遠景 古墳時代～中世面北東側全景・調査風景  
縄文時代面上層全景・調査風景 縄文時代面下層遺構検出状況・掘削状況
- 図版 3 (遺構) 縄文下層第1地点 第1号・第5号・第6号竪穴建物跡
- 図版 4 (遺構) 第6号・第7号・第8号竪穴建物跡
- 図版 5 (遺構) 第4号・第5号・第9号土坑 第1号・第2号溝跡岩版出土状況
- 図版 6 (遺構) 古墳時代～中世面東側全景 第9号・第12号・第13号竪穴建物跡 第10号・第11号土坑
- 図版 7 (遺構) 第17号土坑 第1号・第2号井戸跡 第2号・第3号性格不明遺構 第1号溝跡
- 図版 8 (遺構) 第1号・第2号・第4号溝跡 第4号性格不明遺構 第17～21号土坑
- 図版 9 (遺物) 縄文時代下層 縄文時代中期～後期遺物 第1号・第2号・第4号・第5号・第6号竪穴建物跡
- 図版 10 (遺物) 第7号・第8号竪穴建物跡 第5号・第9号土坑
- 図版 11 (遺物) 第9号竪穴建物跡 E2・E3グリッド 大波状口縁 突起のある平口縁  
帯縄文及び無文帯の平口縁
- 図版 12 (遺物) 紐線文をもつ平口縁 有段口縁 列点文をもつ有段口縁 姥山式土器  
大洞式土器 製塩土器 土製円板・石錘 耳飾り
- 図版 13 (遺物) 土偶・土版等特殊製品 岩版 独鈷石・石剣 石剣未製品 石鏃・石錐・スクレイパー  
打製石斧 磨製石器 石皿
- 図版 14 (遺物) 砥石 赤色顔料付着磨石 付編3掲載以外の鹿角・肋骨 縄文時代遺構・包含層出土の鉱物  
第4号土坑第4層白色物質 焼成されたジガバチの巣 古墳時代～中世面全景
- 図版 15 (遺物) 第9号竪穴建物跡
- 図版 16 (遺物) 第13号竪穴建物跡 第10号土坑 第2号・第3号性格不明遺構 第1号溝跡
- 図版 17 (遺物) 第1号・第2号溝跡 第1号井戸跡 土錘・鞆羽口・鉄滓  
貝巢穴痕泥岩・石製模造品 付編1第1図
- 図版 18 (遺物) 付編1第1～5図 付編2写真1～4
- 図版 19 (遺物) 付編2写真5～12
- 図版 20 (遺物) 付編2写真13～20



# I 発掘調査の概要

## 1 調査に至る経過

平成30年8月27日付けで、田部井建設株式会社から文化財保護法第93条第1項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。工事内容は、熊谷市江波字上北浦27番3・7地内における工場建設である。これを受け、熊谷市教育委員会では、事業予定地内が上北浦遺跡(埼玉県遺跡番号61-024)に該当することから、平成30年10月16日に遺跡の詳細な状況を確認するため、試掘調査を実施した。その結果、一部が攪乱を受けていたものの、事業予定地内ほぼ全面において縄文時代から平安時代までの遺構・遺物を多数検出した。

その後、事業者が株式会社アゼントラストに代わり建設計画も変更されたため、改めて令和2年10月28日付けで、同社から文化財保護法第93条第1項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。これを受け、熊谷市教育委員会では、令和2年2月2日から3月18日までの間に前回とは異なる地点の工事立会(2次)及び試掘調査を実施した。その結果、前回同様に事業予定地内ほぼ全面において縄文時代から平安時代までの遺構・遺物を多数検出し、埋蔵文化財包蔵地の範囲が広がることも確認できた。

事業予定地は、利根川とその支流である福川が形成した自然堤防上にあり、遺跡は地表面下80～110cmで確認された。事業者から提出された工事内容は、20m×30mの範囲を地表面下270cmまで掘削し、雨水浸透施設を建設するものであったが、試掘調査の結果及び工事内容に鑑みると、計画どおりの工事では遺跡が破壊されてしまうことから、熊谷市教育委員会は事業者へ、発掘調査を実施し記録保存を行うか、もしくは工事計画の変更が必要となる旨を伝えた。その後、保存について協議を重ねたが、工事計画の変更は不可能であるとの結論に達したため、令和3年3月31日付けで埋蔵文化財包蔵地の変更増補を行なったうえで、遺跡の破壊される箇所を対象に発掘調査を実施し、記録保存の措置を講ずることが適当との判断に至った。

この結果を踏まえ、熊谷市教育委員会は、令和3年4月2日付け熊教社埋発第25号で埼玉県教育委員会教育長宛に記録保存の措置が適当である旨の副申を付して「埋蔵文化財発掘の届出」を送付した。これにより、事業者宛には、埼玉県教育委員会教育長から令和3年4月2日付け教文資第4-281号の「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について」の通知により、発掘調査実施の指示がなされた。

その後、発掘調査の実施について具体的な協議を重ねた結果、熊谷市教育委員会が調査主体者となり発掘調査を実施することとなった。そして、事業者の(株)アゼントラストと令和3年4月2日付けで「埋蔵文化財に関する協定書」を締結し、次いで同年4月6日付けで「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」を締結した。

なお、文化財保護法第99条第1項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘調査の通知」は、埼玉県教育委員会委員長宛に熊谷市教育委員会から令和3年4月9日付け熊教社埋第26号で送付し、記録保存のための発掘調査を、同年4月12日から実施した。

## 2 発掘調査・報告書作成の経過

### (1) 発掘調査

発掘調査は、令和3年4月12日から6月21日まで実施した。調査面積は655㎡である。事前の試掘調査に

より、遺構が確認できる土層面は2面存在することが分かっていたため、まず、重機により地表面下50cmの深さで調査区全面の表土除去を行った。この面で確認できたのは、古墳時代から中世までの遺構であり、5月末まで遺構の掘削、平面図・断面図の作成、遺物の取り上げ、写真撮影を順次行った。

6月からは、さらに40cm下の面に存在する縄文時代の遺構を調査するため、第1号溝跡と第9号竪穴建物跡の周辺を手掘りにより掘り下げ、6月21日まで215㎡の範囲で遺構の掘削、平面図・断面図の作成、遺物の取り上げ、写真撮影を順次行い、約440㎡の未掘削部分を残して発掘調査を終了した。

調査地点の工事は、雨水浸透施設建設のために、調査後全面を地表面下270cmまで掘削する工程があることから、改めて7月12日から7月17日にかけて工事立会を実施し、掘削地点や排出土中からの遺物採取や土層状況等の記録をした。

なお、施設完成後は、8月下旬から9月上旬にかけて、上記の掘削排出土を使って埋め戻しと整地が行われたが、この工程では、熊谷市文化財保護審議会会長菅谷浩之氏が立ち会い、埋め戻し土の中から、7月に採取し切れなかった土偶をはじめ縄文時代の土器や石器が多数採取された。

## (2) 整理・報告書作成

整理・報告書作成作業には2ヶ年を予定し、令和4年度は、(株)アゼントラストと令和4年4月25日付けで「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書(整理・報告書作成)」を締結した。4月から8月までは古墳時代～中世の遺構図面整理と遺物の注記、接合、復元、実測を行い、9月から3月までは縄文時代の遺構図面整理と遺物の注記、接合、復元、実測を行った。

次の令和5年度は、改めて(株)アゼントラストと令和5年4月17日付けで「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書(整理・報告書作成)」を締結した。4月から5月までは遺物実測、4月から8月までは遺構・遺物のデジタルトレース、8月から9月までは遺構・遺物の版組みと原稿執筆、10月には写真撮影編集作業を行った。そして、12月に印刷業者選定の後、印刷に入り、数回の校正を行って3月25日に本調査報告書を刊行した。

## 3 発掘調査、整理・報告書作成の組織

主体者 熊谷市教育委員会

### (1) 発掘調査

令和3年度

教育長	野原 晃		
教育次長	鯨井 敏朗		
社会教育課長	三友 孝二		
社会教育課文化財保護		同係主査	山下 祐樹
・市史編さん担当副参事	吉野 健	主任	新井 端
社会教育課主幹兼文化財保護係長	松田 哲	主事	山川 愛希子
	主査 星 祥子	主事	大野 美知子
	主査 小島 洋一	主事	山川 守男
	主査 腰塚 博隆	主事	中山 浩彦

(2) 整理・報告書作成

令和4年度

教育長	野原 晃		
教育次長	権田 宣行		
社会教育課長	野村 和弘		
社会教育課文化財保護		同係主査	山下 祐樹
・市史編さん担当副参事	吉野 健	主任	新井 端
社会教育課文化財保護係長	松田 哲	主事	山川 愛希子
	主査 星 祥子	主事	大野 美知子
	主査 小島 洋一	主事	山川 守男
	主査 腰塚 博隆	主事	中山 浩彦

令和5年度

教育長	野原 晃		
教育次長	権田 宣行		
社会教育課長	原 光則	同係主査	腰塚 博隆
社会教育課文化財保護		主任	森田 安彦
・市史編さん担当副参事	吉野 健	主事	山川 愛希子
社会教育課副課長	松田 哲	主事	大野 美知子
	主査 茂木 留美	主事	山川 守男
	主査 小島 洋一	発掘調査員 (会計年度嘱託職員)	磯崎 一

第1表 遺構番号新旧対応表 (左: 本書掲載番号 右: 調査時旧番号)

縄文時代			
SI 1	JSI 1	SK 1	JSK 1
SI 2	JSI 2	SK 2	JSI 5 東土坑
SI 3	JSI 3	SK 3	JSK 3
SI 4	JSK 2	SK 4	JSK 4
SI 5	JSI 5	SK 5	JSI 5 内土坑
SI 6	JSI 6, JSI 9	SK 6	JSI 8 北東土坑
SI 7	JSI 7	SK 7	JSI 8 南東土坑 1
SI 8	JSI 8	SK 8	JSI 8 南東土坑 2
SX 1	谷状遺構	SK 9	E4 土坑
第1地点	D7 下層		
第2地点	B6 下層		

古墳時代～中世			
SI 9	SI 1	SK 10	SK 1
SI 10	SI 2	SK 11	SX 3
SI 11	SI 3	SK 12	SK 11
SI 12	SI 5	SK 13	SK 2
SI 13	SI 4	SK 14	SK 3
SD 1	SD 1	SK 15	SK 4
SD 2	SD 2	SK 16	SK 5
SD 3	SD 4	SK 17	SK 6
SD 4	SD 3	SK 18	SK 7
SE 1	SE 1	SK 19	SK 8
SE 2	SE 2	SK 20	SK 9
SX 2	SX 1	SK 21	SK 10
SX 3	SX 2		
SX 4	SX 4		

SI: 竪穴建物跡 SK: 土坑 SD: 溝跡

SE: 井戸跡 SX: 性格不明遺構

グリッド内ピットの番号の変更はない

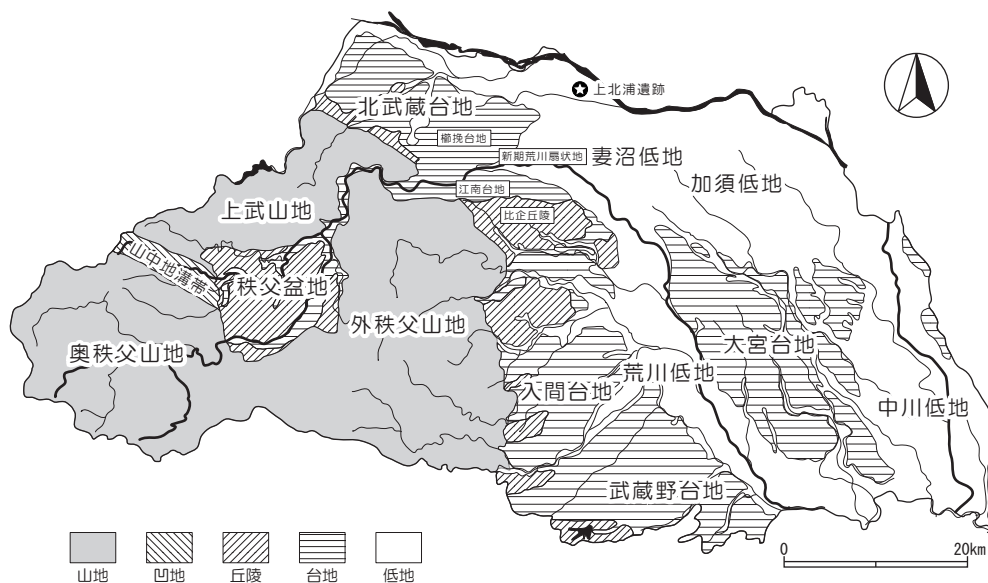
## II 遺跡の立地と環境

熊谷市は、埼玉県北部に位置し、市の北側には、群馬県との境を利根川、南側には荒川がそれぞれ西から南東方向に流れて、関東地方の2大河川が最も近接する地域にある。地形的には、市の西側に櫛挽台地、荒川を挟んで南側には江南台地、北側及び東側には妻沼低地が広がっているが、市の大半は妻沼低地上にある（第1図）。櫛挽台地は、洪積世に形成された荒川扇状地の左岸一帯の総称で、寄居町の波久礼付近を扇頂として東は熊谷市西部の三ヶ尻付近まで、北東はJ R高崎線籠原駅から北へ約2kmの西別府付近にまで延びている。標高は約36～54mを測り、妻沼低地に向かって緩やかに下る。櫛挽台地の東側には、沖積世に荒川の乱流により新たに形成された新期荒川扇状地が広がる。新期荒川扇状地は、熊谷市の南西に位置する深谷市菅沼付近を扇頂として妻沼低地へと広がっており、自然堤防や微高地、後背湿地が発達している。

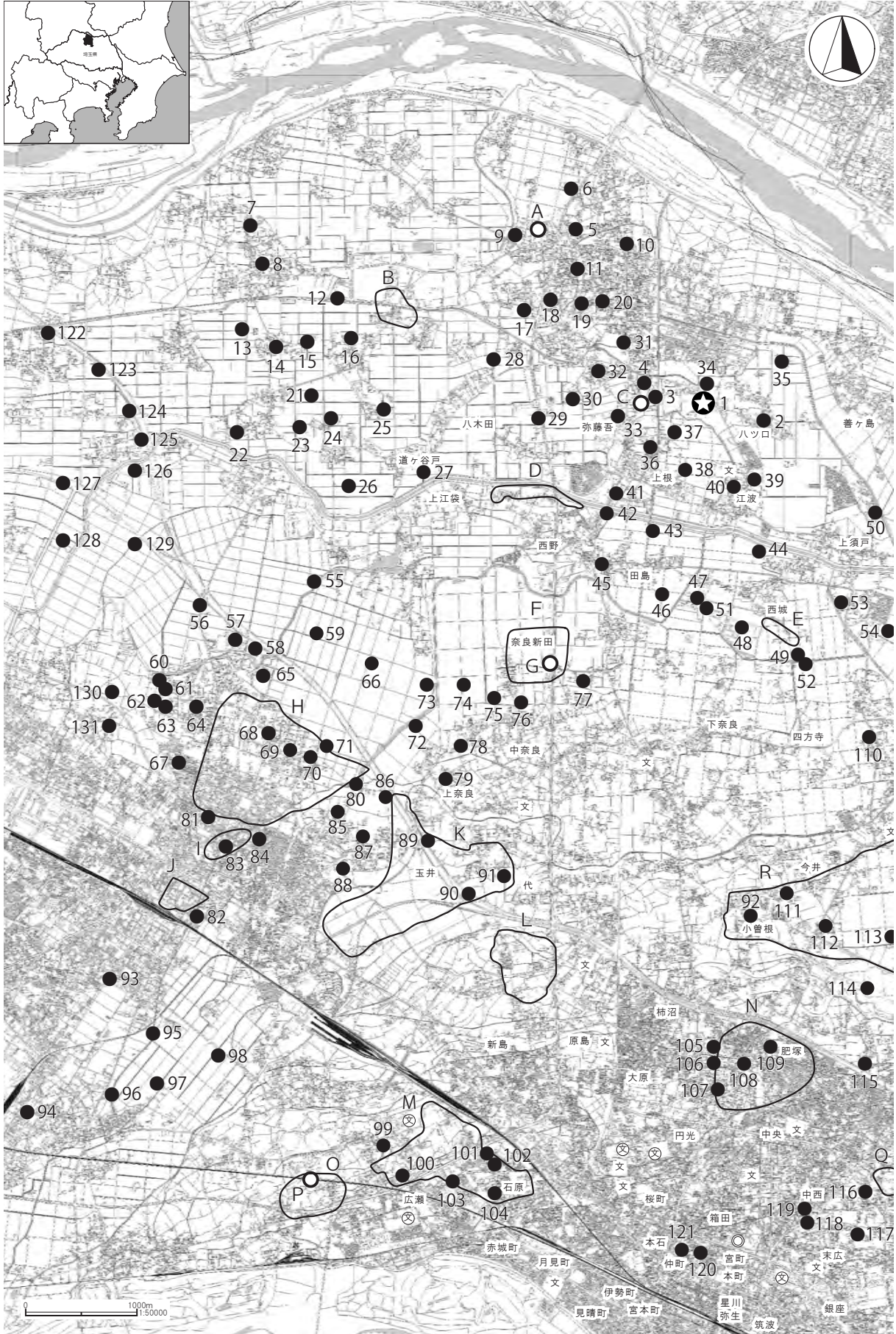
今回報告する上北浦遺跡は、熊谷市北部の妻沼地区に所在する。妻沼地区は、利根川及びその支流によって形成された自然堤防とその後背地からなる低地帯（妻沼低地）が広がっており、西から東へ緩やかに傾斜する。遺跡は、かつて蛇行していた福川の旧流路左岸、標高27.5mの自然堤防上に立地し、南側の流路跡低地に向かって下り、高低差が約1mある。利根川の流路は、時代とともに変遷し、縄文時代には、上北浦遺跡の東側から現在の荒川低地に向けて南下していたと考えられており、福川の流路と重複していた可能性もある。

次に、上北浦遺跡周辺の歴史的環境を概観する（第2図）。

旧石器時代から縄文時代中期までの遺跡は、熊谷市西部及び深谷市域の櫛挽台地及び台地直下に多く見られる。旧石器時代は、櫛挽台地東端に立地する籠原裏遺跡（82）から出土した黒曜石の尖頭器が唯一の事例である。縄文時代は、早期段階は櫛挽台地北端に位置する深谷市東方城跡において尖頭器が検出されているのみである。前期は、次第に遺跡数が増え始め、台地上では三ヶ尻遺跡（94）で集落跡が確認されている。中期になると、遺跡数が大幅に増え、特に中期後半の加曽利E式期の遺跡が多い。前期と異なり、台地以外に低地上にも集落跡が確認されるようになるが、特に櫛挽台地北東端及び台地下



第1図 埼玉県の地形図



第2図 周辺遺跡分布図



第2表 周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
	熊谷市		61	西方遺跡	奈良、平安、中世、近世
1	上北浦遺跡	縄文中～晩、古墳後、平安、中世	62	西別府遺跡	古墳後、奈良、平安
2	屋敷遺跡	古墳後	63	西別府廃寺	古墳後、奈良、平安、中世、近世
3	南王子遺跡	古墳後、平安	64	西別府館跡	平安末～中世
4	王子遺跡	古墳	65	石田遺跡	縄文中・後、弥生中、古墳前
5	緑川遺跡	弥生末、古墳前・中・後、奈良、平安、近世	66	別府条里遺跡	奈良、平安
6	観音堂瓦窯跡	平安、中世	67	大竹遺跡	古墳後、奈良、平安、中世、近世
7	永井太田北廓遺跡	古墳後、奈良、平安、近世	68	埋鳥遺跡	縄文中、奈良、平安
8	永井太田西浦遺跡	古墳前、奈良、平安	69	別府城跡	平安、中世
9	雉子尾遺跡	古墳後、奈良	70	別府氏館跡	平安末～中世
10	大我井遺跡	古墳前、奈良、平安、中世	71	寺東遺跡	縄文前～後
11	池ノ上遺跡	古墳後	72	天神下遺跡	古墳前・後、奈良、平安
12	飯塚北遺跡	古墳後、奈良、平安	73	一本木前遺跡	古墳前・後、奈良、平安、中世、近世
13	本新田遺跡	古墳後	74	中耕地遺跡	縄文中、古墳前・後、奈良、平安
14	前新田遺跡	古墳後、奈良、平安	75	西通遺跡	古墳後
15	藤屋敷遺跡	古墳後、奈良、平安	76	東通遺跡	古墳後
16	飯塚遺跡	弥生中	77	横塚遺跡	古墳前、平安
17	年代遺跡	古墳後	78	土用ヶ谷戸遺跡	古墳後、奈良、平安
18	彦松西遺跡	古墳後、奈良	79	奈良氏館跡	平安末～中世
19	彦松遺跡	古墳後、奈良、平安	80	稲荷東遺跡	古墳後、奈良、平安
20	彦松東遺跡	古墳前、奈良、平安	81	別府三丁目遺跡	奈良、平安
21	中西原遺跡	奈良、平安	82	籠原裏遺跡	旧石器、縄文前・中、古墳後、平安、中世、近世
22	踏切遺跡	平安	83	在家遺跡	古墳後、奈良、平安
23	八幡木遺跡	古墳後、奈良	84	五反畑遺跡	中世
24	飯塚南遺跡	縄文後、弥生中、古墳後、奈良、平安、中世	85	玉井陣屋跡	平安末～中世
25	羽黒遺跡	古墳後	86	新ヶ谷戸遺跡	古墳後、奈良、平安
26	道ヶ谷戸条里遺跡	奈良	87	水押下遺跡	古墳後
27	道ヶ谷戸遺跡	古墳後、平安	88	稲荷木上遺跡	古墳後
28	中浦遺跡	奈良、平安	89	下河原中遺跡	奈良、平安
29	弥藤吾新田遺跡	古墳前、奈良、平安	90	下河原上遺跡	近世
30	一本杉遺跡	古墳後、中世、近世	91	本代遺跡	古墳後、近世
31	下宿遺跡	古墳後	92	東浦遺跡	古墳前、平安
32	杉之道遺跡	古墳後、奈良、平安	93	拾六間後遺跡	古墳後、奈良、平安、中世、近世
33	王子西遺跡	古墳後、奈良、平安	94	三ヶ尻遺跡	縄文前～後、弥生中、古墳後、奈良、平安、中世
34	堀ノ内遺跡	縄文後、古墳後	95	樋の上遺跡	縄文前～後、古墳後、奈良、平安、中世、近世
35	釜ノ上遺跡	奈良	96	若松遺跡	中世、近世
36	長井庵遺跡	古墳後	97	黒沢館跡	中世
37	出口北遺跡	古墳後	98	東遺跡	平安、中世
38	出口南遺跡	古墳後	99	高根遺跡	縄文、古墳後、平安、中世、近世
39	東嬉愛遺跡	奈良、平安	100	不二ノ腰遺跡	奈良、平安
40	西嬉愛遺跡	古墳後、奈良、平安	101	天神前遺跡	古墳中・後、中世
41	高林遺跡	古墳後、奈良、平安	102	兵部裏屋敷跡	中世
42	夷盛館	平安	103	田角遺跡	平安
43	山ヶ谷戸遺跡	古墳後、奈良、平安	104	御蔵場跡	近世
44	西城切通遺跡	縄文後	105	肥塚中島遺跡	奈良、平安、近世
45	場違ヶ谷戸遺跡	縄文後	106	出口上遺跡	奈良、平安、中世、近世
46	鷺ヶ谷戸遺跡	奈良、平安	107	肥塚館跡	中世
47	森谷遺跡	古墳後、奈良、平安	108	出口下遺跡	古墳後
48	鶴森遺跡	弥生後、古墳後、奈良、平安	109	八幡山遺跡	古墳
49	西城城跡	平安	110	光屋敷遺跡	古墳後、奈良、平安、中世、近世
50	上葛和田遺跡	縄文後	111	下本郷遺跡	古墳後、奈良、平安、近世
51	森谷遺跡	古墳後、奈良、平安	112	赤城遺跡	古墳、奈良、平安
52	長安寺遺跡	古墳後、奈良、平安	113	女塚遺跡	古墳後、奈良、平安
53	東城城跡	平安	114	北島遺跡	弥生中、古墳、奈良、平安、中世
54	先載場遺跡	古墳後、奈良	115	河上氏館跡	中世
55	入川遺跡	縄文後、古墳前・後	116	藤之宮遺跡	弥生中、古墳、奈良、平安、中世
56	根絡遺跡	縄文中、古墳前・後、奈良、平安	117	前中西遺跡	縄文晩、弥生中・後、古墳前、奈良、平安、中世、近世
57	横間栗遺跡	縄文後、弥生前・中、古墳前・中、奈良、平安、近世	118	中西遺跡	縄文後～晩、弥生中、古墳前
58	関下遺跡	縄文中、弥生中、古墳後	119	箱田氏館跡	平安末、中世、近世
59	深町遺跡	縄文中・後、古墳前・後、奈良、平安	120	宮町遺跡	奈良、平安、中世
60	西別府祭祀遺跡	古墳後、奈良、平安、中世、近世	121	熊谷氏館跡	中世

深谷市		D	上江袋古墳群	古墳後
122 砂田遺跡	古墳中・後、平安、中世	E	乙鶴森古墳群	古墳後
123 柳町遺跡	古墳中・後、奈良、平安、中世	F	奈良古墳群	古墳中・後～末
124 城北遺跡	古墳後、平安	G	横塚山古墳	古墳中期後
125 居立遺跡	古墳後、奈良、平安、中世、近世	H	別府古墳群	古墳後
126 前遺跡	古墳前、奈良、平安、中世、近世	I	在家古墳群	古墳末
127 原遺跡	縄文後・晩、古墳後	J	籠原裏古墳群	古墳末
128 東川端遺跡	古墳前・後、奈良、平安	K	玉井古墳群	古墳後
129 清水上遺跡	縄文晩、弥生中、古墳前・後、奈良、平安	L	原島古墳群	古墳後
130 幡羅官衙遺跡	古墳後、奈良、平安、中世、近世	M	石原古墳群	古墳後
131 下郷遺跡	縄文中・後、古墳後、奈良、平安	N	肥塚古墳群	古墳後～末
古墳・古墳群		O	広瀬古墳群	古墳後・末
A 摩多利神社古墳	古墳後	P	宮塚古墳	古墳後（末）
B 飯塚古墳群	古墳後	Q	上之古墳群	古墳後
C 王子古墳	古墳末	R	中条古墳群	古墳中・後～末

の低地上に集中する。上北浦遺跡では、さらに台地から離れた地表面下の深い位置で、これまで知られていなかった中期後半から後期前葉までの時期の痕跡が確認された。後期後葉～晩期になると、台地周辺の遺跡数は減少する一方で、低地上の遺跡は増加する。増加の顕著な地域のひとつは福川流域で、上北浦遺跡（1）、西城切通遺跡（44）、場違ヶ谷戸遺跡（45）等が集中し、遡上すると深谷市新屋敷東遺跡、上敷免遺跡、上敷免北遺跡があり、最上流部には深谷市原ヶ谷戸遺跡がある。もうひとつの地域は新期荒川扇状地扇端部で、中西遺跡（118）、諏訪木遺跡、古宮遺跡（いずれも地図未掲載）等がある。上敷免遺跡では、晩期最終末の浮線文土器が多数検出されており、次世代へのつながりが見られる。

弥生時代は、東日本初期弥生土器を語る上で非常に重要な資料が出土している。前期末～中期後半の遺跡は、櫛挽台地北東端及び台地下の低地上に集中するが、検出されたのは集落跡ではなく、再葬墓である。横間栗遺跡（57）で、前期末から中期前半までの再葬墓が13基確認されたのをはじめとして、妻沼地区の飯塚遺跡（16）、飯塚南遺跡（24）、飯塚北遺跡（12）、そして深谷市上敷免遺跡等でも再葬墓が検出されている。中期中葉以降は、これまでの状況と一変して市東部の低地上に集落が出現する。東日本でも最古段階の集落とその墓域として方形周溝墓が造られた池上遺跡や行田市小敷田遺跡（いずれも地図未掲載）等をはじめ、本格的な農耕集落が営まれ、さらに北島遺跡や前中西遺跡（いずれも地図未掲載）等で大規模集落が展開されるようになるが、かつて再葬墓が集中した市北部及び西部では確認例が少ない。後期の遺跡は減少し、深谷市明戸東遺跡（地図未掲載）等いくつかの点在するのみである。

古墳時代になると、前期に再び低地上への進出が活発化する。市北部では一本木前遺跡（73）で約100軒もの膨大な数の竪穴建物跡の他に4基の方形周溝墓が検出されたほか、弥藤吾新田遺跡（29）や緑川遺跡（5）でも集落跡が確認されている。また市東部においても北島遺跡、池上遺跡等で方形周溝墓を伴う大規模集落跡が調査されているが、北島遺跡では集落を取り囲む方形区画溝の存在が特筆される。熊谷市内においては、江南台地上の塩古墳群以外に、墳丘を有する前期古墳は確認されておらず、該期の集落跡に付随する方形周溝墓が主流である。中期前半の集落跡はほとんど見られなくなるが、行田市埼玉古墳群（地図未掲載）の展開と歩調を合わせるように、中期後半のカマドを導入する時期から再び遺跡数は増加し、古墳では帆立貝形前方後円墳ではあるが、B種横ハケの埴輪を持つ奈良古墳群（F）の横塚山古墳（G）や、須恵器の大型器台を用いた墓前祭祀跡が検出された中条古墳群の鎧塚古墳（地図未掲載）が築造された。後期になると低地上の集落跡は増加して大規模になり、河川に沿った自然堤防上に群集墳も形成された。妻沼地区の集落跡では飯塚南遺跡、道ヶ谷戸遺跡（27）、鶴森遺跡（48）、

緑川遺跡、上北浦遺跡等がある。また、古墳群では、飯塚古墳群（B）、上江袋古墳群（D）、乙鶴森古墳群（E）等がある。上江袋古墳群及び乙鶴森古墳群は、上北浦遺跡と同じ福川の自然堤防上に展開する古墳群で埴輪を有するが、上北浦遺跡でも埴輪片が出土しており、近隣に古墳が存在した可能性がある。また、西方 500 m には、埴輪を持たない終末期の王子古墳（C）が存在した。古墳群は、概ね 6 世紀から 7 世紀末ないし 8 世紀初頭にかけて築造されたが、埴輪を持たない終末期の古墳群には在家古墳群（I）、籠原裏古墳群（J）等がある。市内の古墳群で特筆すべきは籠原裏古墳群で、墳形が八角形を呈する古墳が検出されたこと等が挙げられ、後述する深谷市幡羅官衙遺跡（130）や熊谷市西別府祭祀遺跡（60）、西別府廃寺（63）等の郡家や郡家に関連する遺跡と時期的・地理的に近い関係にあり、注目に値する古墳群と言える。

律令体制の始まる奈良・平安時代において本地域一帯は、武蔵国幡羅郡に属する。上秦、下秦、広沢、荏原、幡羅、那珂、霜見、余部の八郷からなる中郡であり、熊谷市北部及び西部、深谷市東部を含む一帯が該当すると考えられている。楡挽台地北東部端に立地する深谷市幡羅官衙遺跡では、幡羅郡家推定地として確認調査が実施されており、これまでに多数の大型掘立柱建物跡や区画溝等が確認されている。幡羅官衙遺跡の東側に所在する西別府廃寺は、8 世紀初頭に創建された県内でも古い寺院であり、瓦溜り状遺構、建物基壇跡、区画溝等が検出されている。出土した瓦には 9 世紀後半まで下るものも見られ、寺院は平安時代まで存続していたと考えられている。西別府祭祀遺跡は、西別府廃寺北西の楡挽台地縁辺部に位置する。現在は湯殿神社となっているが、発掘調査によって神社裏の湧水堀から土師器、須恵器の他に、人形、馬形、楡形、勾玉形、剣形、有孔円板形等の滑石製模造品が多数検出されており、これらは水辺の祭祀に用いられたと考えられている。出土した土器群から、祭祀は古墳時代から平安時代末まで存続していたことが確認されている。よって、西別府廃寺、西別府祭祀遺跡、そして幡羅官衙遺跡は、時間的・空間的に密接な関係にあったことは明白である。

集落跡では、古墳時代後期以降継続し、かつ規模の大きいものが多い。妻沼地区では、飯塚北遺跡や鶴森遺跡等があるが、飯塚北遺跡では、8 世紀から 10 世紀にわたる堅穴建物跡約 300 軒、掘立柱建物跡約 40 棟等膨大な数の遺構が検出され、緑釉・灰釉陶器、円面硯、銅製帯金具も出土し、有力者の居宅・拠点であったと考えられている。上北浦遺跡も集落跡の一部の調査であるが、幡羅官衙関連遺跡群や飯塚北遺跡の居宅跡と同時期のものであることが明らかになった。特に、福川に面していたことは重要で、幡羅郡家やさらに河川上流の榛沢郡家と水上交通によりつながっていたことになる。

平安時代末から中世にかけては、武蔵七党やその他在地武士団が台頭してくる時期であるが、妻沼地区では、実盛館（42）、西城城跡（49）、東城城跡（53）等の実態が不明な館跡がある一方で、館跡以外で特筆される遺跡が存在する。大我井遺跡（10）は 4 基の経塚が確認されていることで著名であり、最古の経筒には「久安」（1145～1151 年）の紀年銘が記されている。この遺跡に隣接して現在も存在するのが歓喜院長楽寺で、治承三年（1179 年）に斎藤別当実盛による白髪神社の改修・合祀を端緒とし、建久八年（1197 年）に良心僧都によって、別当聖天山歓喜院長楽寺として建立されたものとされている。また、観音堂瓦窯跡（6）は 13 世紀前半を中心に瓦を生産し、鎌倉大慈寺まで送られていたと見られている。上北浦遺跡では、これらに近い時期の 13 世紀の陶器・磁器が出土した溝跡が検出されたが、これは、これまで知られていなかった館跡の堀と考えられる。

### Ⅲ 遺跡の概要

#### 1 調査の方法

発掘調査を進めるに当たり、世界測地系国家方眼座標（国土標準平面直角座標第Ⅸ系）による基準点測量を委託して行い、一辺 5 m のグリッドを設定した。グリッドの設定は、調査区が網羅できるよう、東西軸方向を 5 m ごとに西から東へ A～H、南北軸方向を 5 m ごとに北から南へ 1～8 とし、双方の交差するグリッドをアルファベットと数字の組み合わせで呼称し、北西隅を A-1 とした（第 3 図参照）。実測作業に当たっては、交点を基準に水糸で 1 m 間隔のメッシュを張り、簡易遣り方の方法で行った。

本遺跡の調査では、特徴として、複数の遺構確認面が存在することや、調査期間後の観察や採取活動において、重要な資料や情報が得られたことが挙げられる。これらを次の①～④の調査順にまとめた。

まず、試掘調査の成果に基づき、遺構の確認面が間層を隔てて①②のように 2 面存在することを認識して調査を進行した。発掘調査終了後には、掘削工事立会の際の観察により、さらに下位に③の面を確認するとともに、④のように多数の遺物も採取された。③④で得られた情報や資料は、正規の調査方法によるものではないが、本遺跡を評価するにあたり欠かせないものなので、本報告書に組み込む。

##### ① 古墳時代～中世面の調査

調査区全体を、重機を使用して古墳時代～中世の遺構が確認できる地表面下約 50 cm まで掘削した。この面で遺構確認を行い、遺構の掘り下げを行った。

##### ② 縄文時代後期～晩期面

上層の古墳時代～中世の遺構の多くが、下層に所在する縄文時代後期～晩期の遺構や遺物包含層を掘り込んでいたため、上層遺構の壁面や底面において、下層遺構の存在や広がり認識できた。特に、第 1 号溝跡及び第 9 号竪穴建物跡において認識できた下層遺構の存在状況が顕著であったため、この 2 遺構の周辺を重点的に①の確認面から約 40 cm 下までを人力で掘り広げて可能な限り調査した。この結果、この面の調査面積は、全体の 3 分の 1 にとどまり、残りは未掘となった。

以上が、調査期間中の調査状況である。

##### ③ 縄文時代中期～後期面

調査期間終了後の工事は、調査区全面を地表面下 270 cm まで重機で掘削し、その排出土を調査区脇に積み上げる工法がとられた。この掘削作業は、未掘部分についても行われるため、発掘担当者が掘削作業に立ち会うことにより、出土した遺物を採取しながらメモや写真によって記録することに努めた。

掘削面が工事掘削計画レベルに達し、水平に広げられた面において、焼土粒や炭化物片を伴う縄文時代中期～後期の土器片の集中地点を 2 か所確認し縄文時代下層と呼称したが、これらの存在は上記①②の調査中には全く想定していないものであった。

##### ④ 遺跡内採取

前述の発掘調査の経過で記述したように、熊谷市文化財保護審議会会長菅谷浩之氏によって、この地点の構造物完成後の整地土内から多数の遺物が採取された。これらの遺物は、本調査で得られた情報や遺物を補完・補強するものであるため、本編とは別にこれらが集約されたものを付編 1 として巻末に掲載する。

## 2 検出された遺構と遺物

### (1) 縄文時代中期～後期

縄文時代下層においては、明確な遺構は検出できず、土器集中地点を2か所確認した。

両地点で採取した土器は、加曽利E式土器と称名寺式土器であるため、下層面の時期が縄文時代中期～後期初頭であることが確認できた。

### (2) 縄文時代後期～晩期

縄文時代上層において、竪穴建物跡8軒、土坑9基、性格不明遺構1基を検出した。

これらの遺構及び埋土から出土した土器は、晩期前葉の安行3a・3b式土器が中心であり、これに他地域における同時期の姥山式、大洞式、天神原式の各系統の土器が共伴する。また、曾谷・高井東式の土器片も認められるため、後期後葉からの存続が考えられる。

土器や石鏃、石斧、石錘等の実用品以外に、装飾品としての耳飾り、呪術品としての独鈷石、石剣、土偶、土版、岩版、骨角器等も出土した。東北地方や北関東地方との関連が考えられる岩版が検出されたことを通じて、縄文時代の館林・大宮台地を南下する分布圏を読み取ることができる。

また、製作に関わる遺物も検出され、石鏃等の製作関連遺物として原石、石核、未製品、剥片が、石剣の製作関連遺物として未製品や破片が、赤色顔料の原料や製作道具として小礫、磨石、石皿が、また骨角器の製作関連遺物として未製品や砥石がそれぞれ確認されている。

さらに、他地域との交流を示すものとして、製塩土器と見られる土器片も出土している。

### (3) 古墳時代

古墳時代後期～終末期の竪穴建物跡4軒、土坑2基、溝跡1条を検出した。

自然堤防上に展開した集落跡で、その中心部は調査区の南東にあると考えられる。

第9号竪穴建物跡は、有段模倣坏を持つ6世紀末のものと思われる。第1号溝跡は、自然堤防を南北に横断するように掘削された大溝であるが、第9号竪穴建物跡よりやや新しい7世紀代の土器を伴い、集落の西端を区画するような性格を持つと考えられる。また、底面には土器片や小礫が敷かれ、踏み固められていた。

第9号竪穴建物跡及び第1号溝跡の埋土からは、多量の遺物が出土した。第9号竪穴建物跡からは須恵器の出土が少なく、第1号溝跡からは多数の須恵器や陶器の破損品が捨てられた状態で出土した。また、土錘や穿孔貝巣穴痕跡軟質泥岩（貝巣穴痕泥岩）も出土した。

### (4) 古代

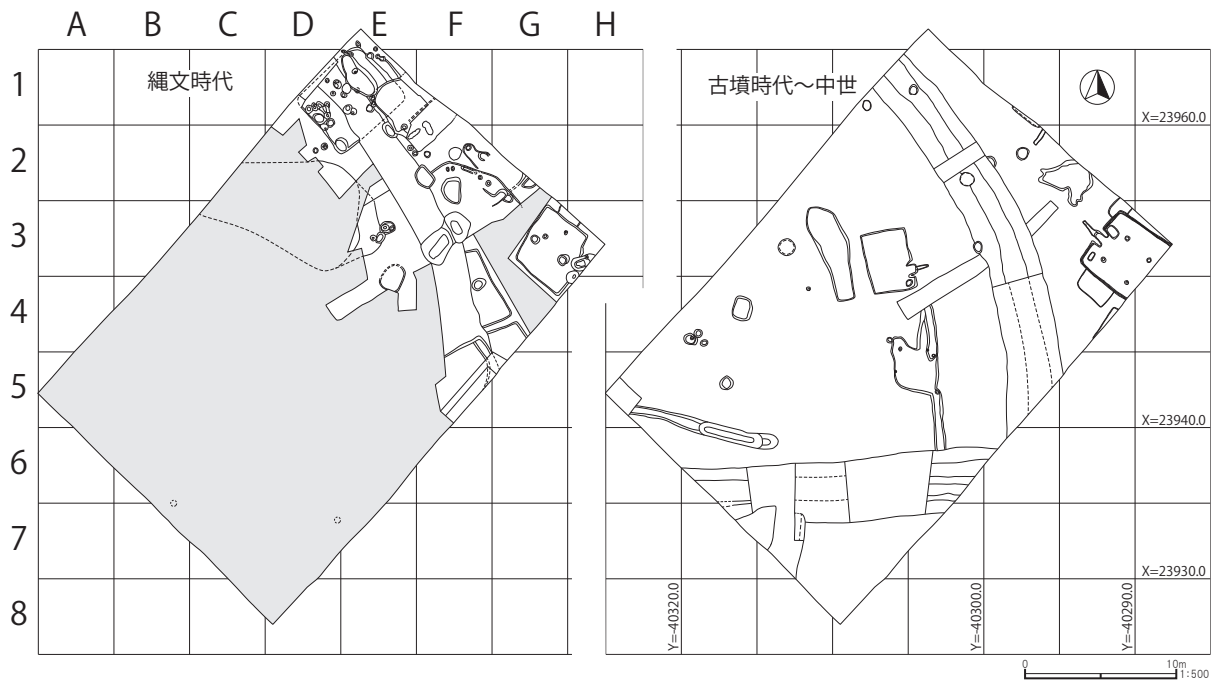
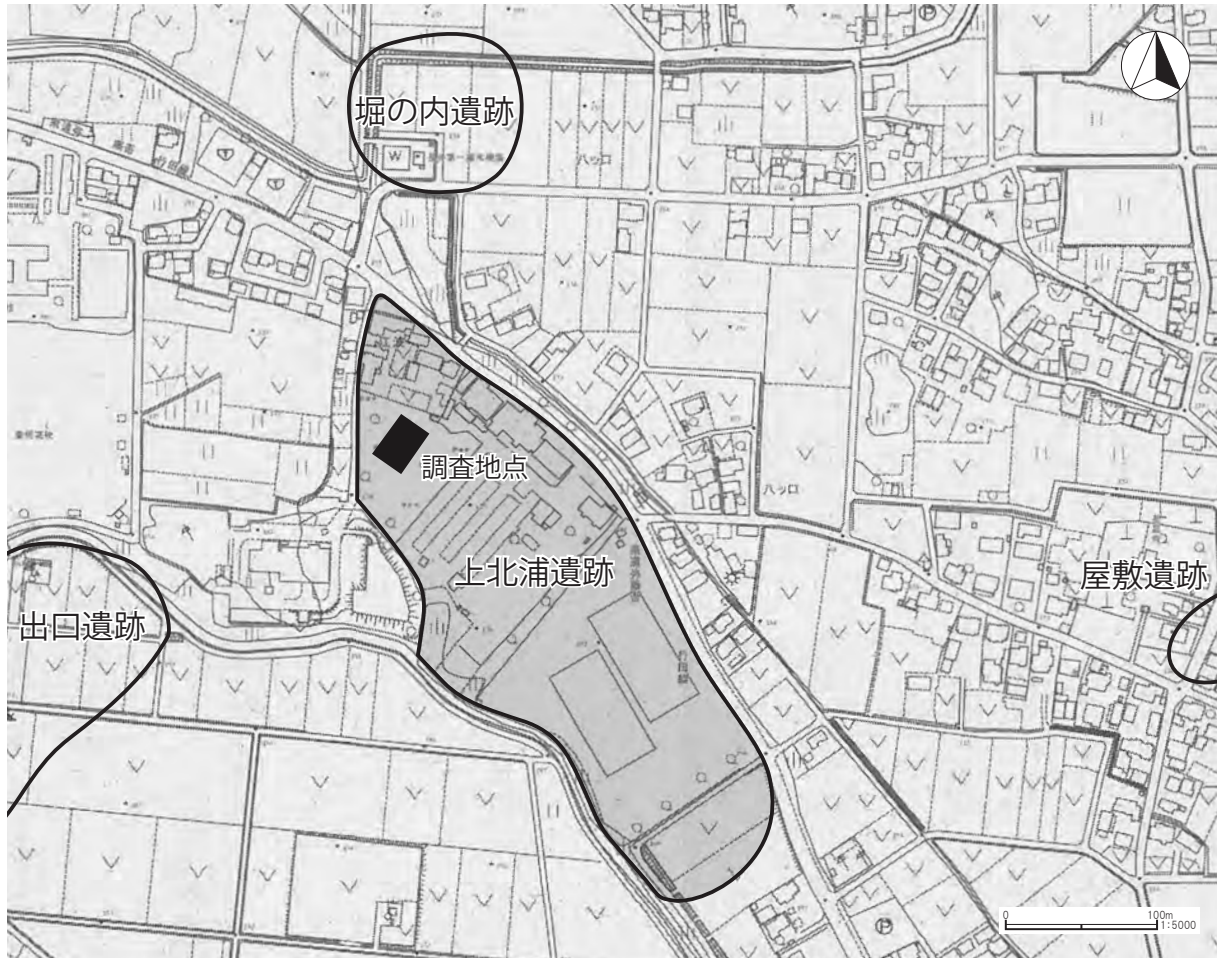
平安時代の竪穴建物跡1軒、土坑9基、溝跡1条、性格不明遺構3基を検出した。

第13号竪穴建物跡、第10号土坑、第2号性格不明遺構からは、10世紀前半の土器が出土している。また、第10・11・12号土坑は同規模の円形土坑で、壁面や底面が被熱して焼土化している共通点があり、第3号性格不明遺構でも焼土ブロックが多量に出土した。なお、これらの遺構の周辺からは、鞆羽口片、取鍋片、鉄滓が出土しており、鍛冶製鉄に関わる一連の遺構と考えられる。

### (5) 中世

鎌倉時代の溝跡2条、井戸跡2基、土坑1基を検出した。

第2号溝跡は東西方向に直線的に掘削された大溝で、13世紀前半の陶器・磁器や鉄鎌等が出土した。この溝跡は、館跡の堀と見ることができる。

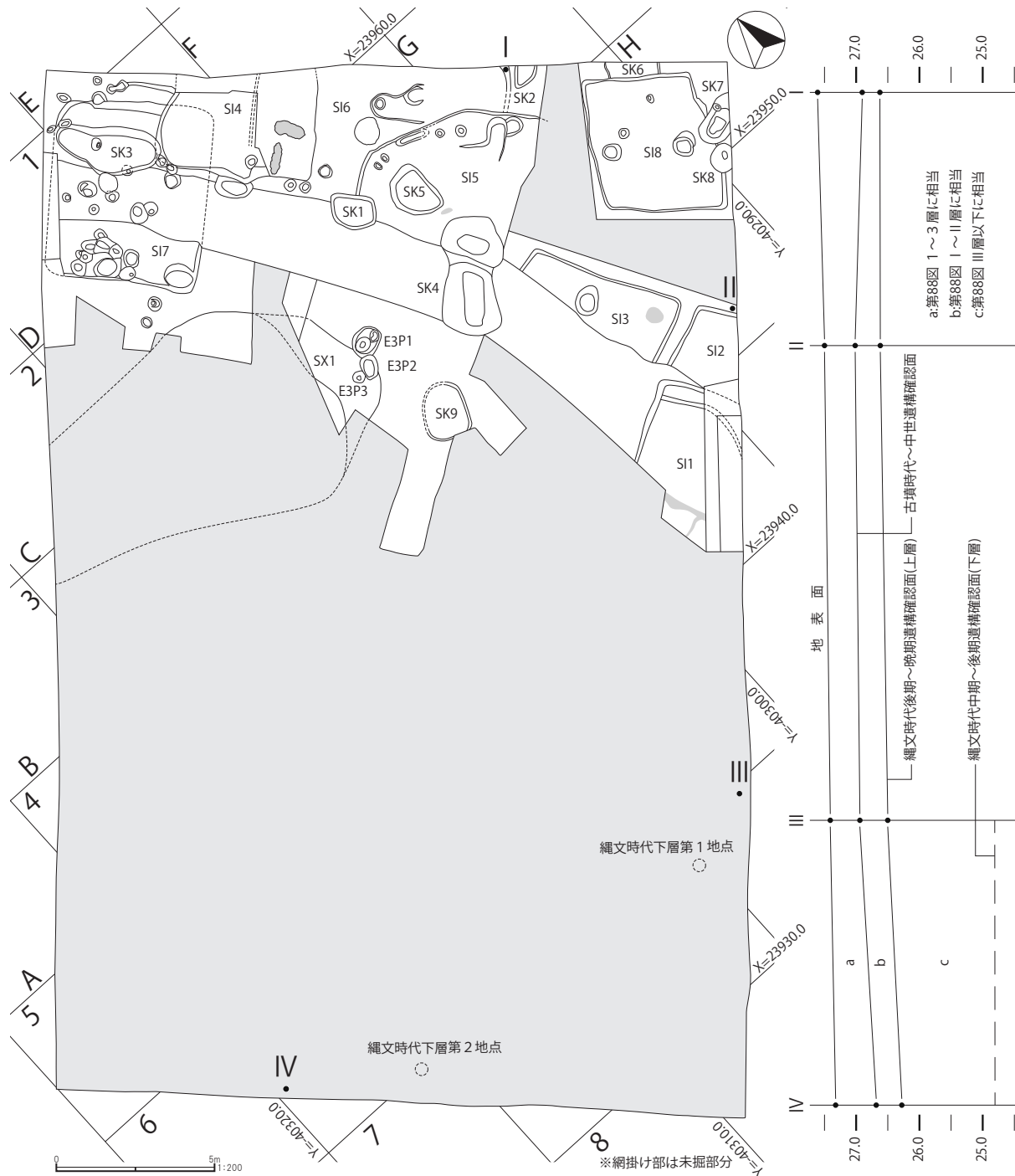


第3図 調査地点位置図と調査区全測図

## IV 縄文時代の遺構と遺物

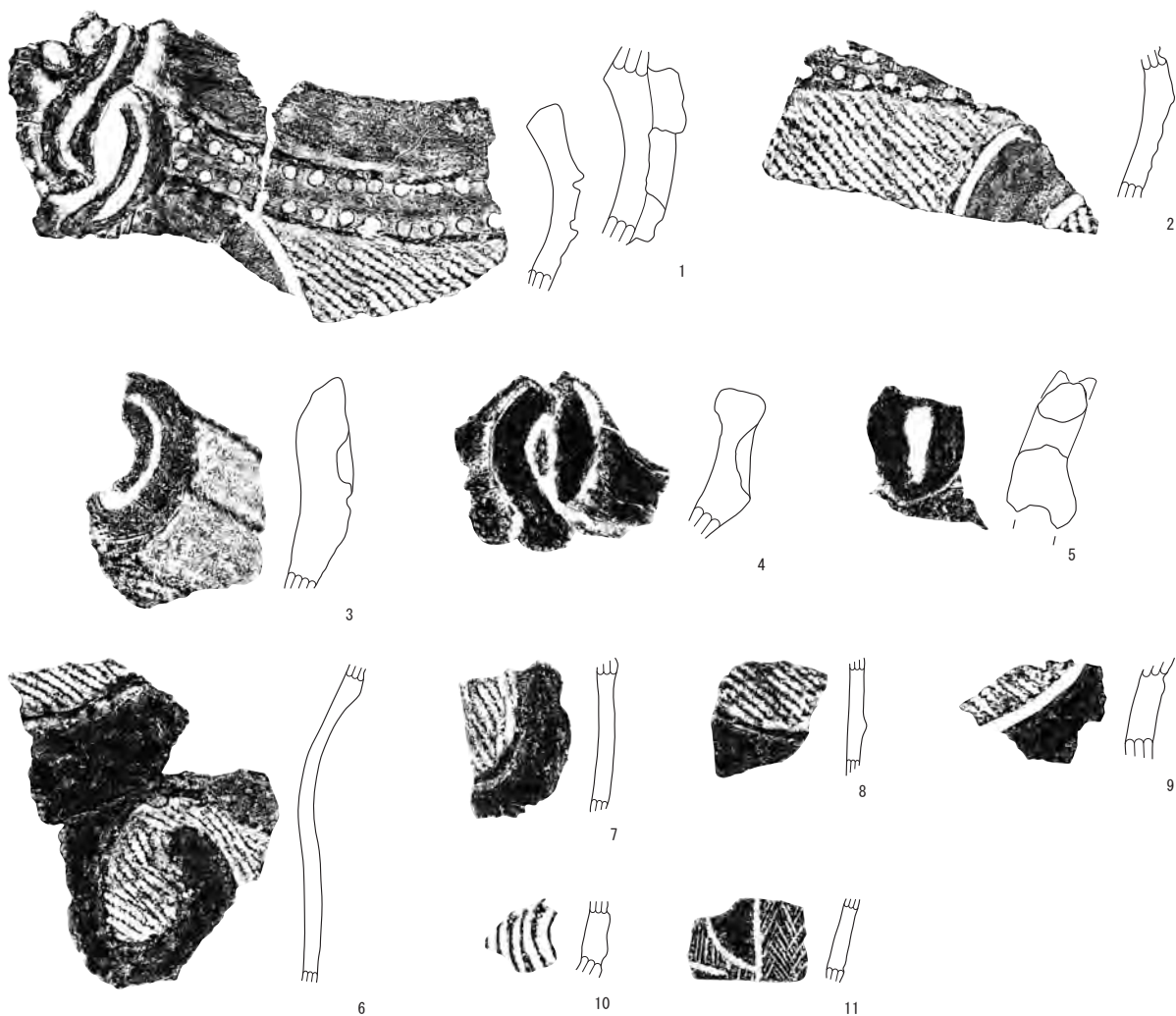
### 1 縄文時代下層の土器集中地点

現地表面下 2.5 ～ 2.7 m (縄文時代の上層遺構確認面下 1.5 ～ 1.7 m) において、縄文時代中期後半～後期初頭の遺物が出土する面を確認した。調査後の施設建設のために重機で掘削し水平に広げられた面は、妻沼低地内では通常の試掘調査や発掘調査で掘削することのない深さであった。また、調査区全体にわたる掘削面で炭化物粒や焼土粒の点在が認められる中で、明瞭な遺構の検出には至らなかったものの、想定していなかった該期の土器集中地点 2 か所 (縄文時代下層第 1・2 地点) を捉えることができた。

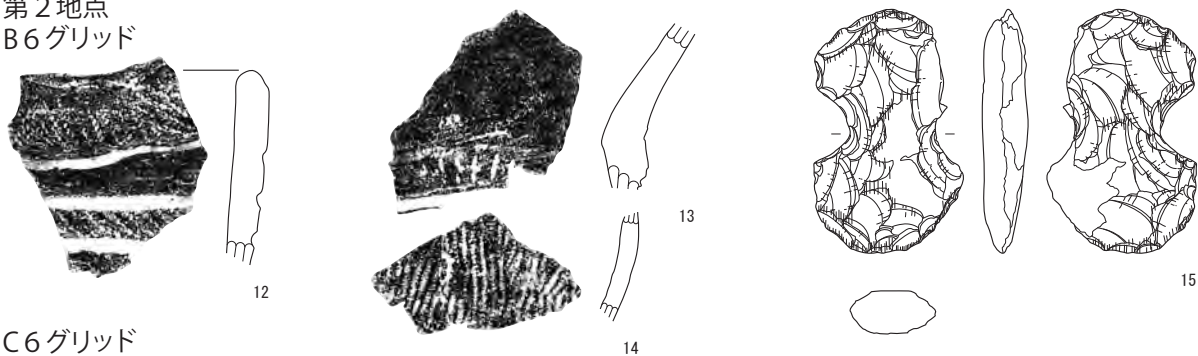


第 4 図 縄文時代遺構全測図

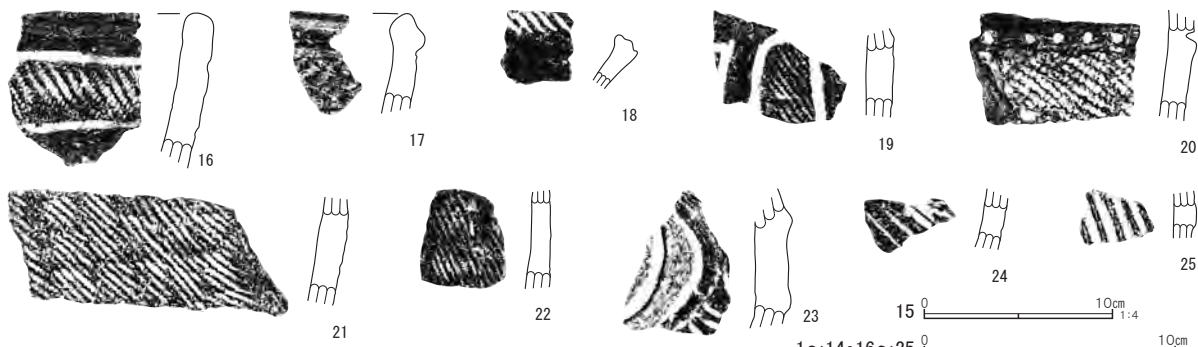
第1地点



第2地点  
B6グリッド



C6グリッド



第5図 縄文時代下層出土遺物



(1) 第1地点 (第5図)

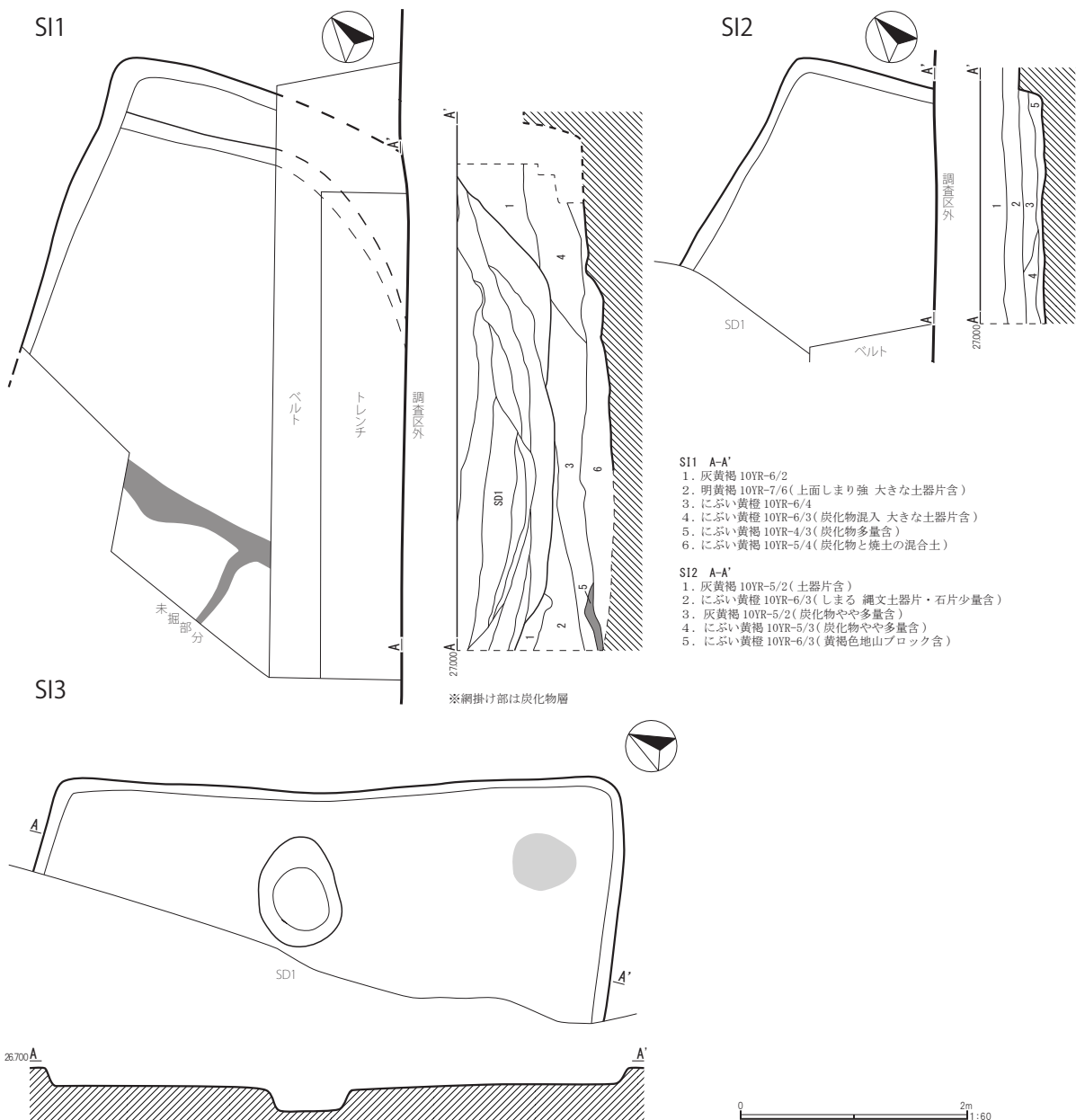
D7グリッドに所在する。径0.25mの範囲を囲むように2点の深鉢形土器片(第5図1・2)を横長に立て、傍らに変成岩の角礫が置かれて、この範囲を中心に焼土粒及び炭化物粒も認められたことから、炉跡の可能性はある。

第5図1～9は、称名寺式期古段階のもので、10は曾利式、11は北陸系の可能性はある。

(2) 第2地点 (第5図)

B6グリッドを中心にC6グリッドにかけて土器小片、焼土粒、炭化物粒の集中が認められた。土器と共に、打製石斧(第5図15)も出土した。

第5図12・14・16・17は加曾利E式、19～23は称名寺式、13は曾利式、18・24・25は勝坂式と見られる。



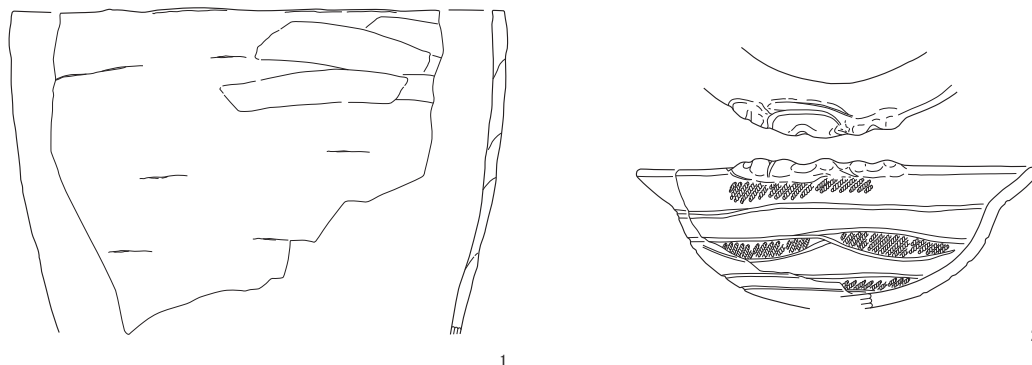
## 2 竪穴建物跡

### (1) 第1号竪穴建物跡 (第6・7図)

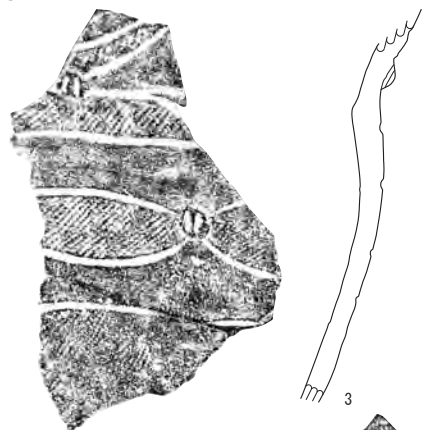
F 5 グリッドに所在し、第1号溝跡の底面で検出したが、西方に広がる部分は調査できなかった。北方にコーナーをもつ方形プランと見られ、北西壁 2.7 m、北東壁 1.5 m の範囲を調査した。第1号溝跡の底面からの深さは 0.25 m である。北東壁沿いで床面に 10 cm 程の緩い段差があることと、西寄りの床面で土層断面図第5層の炭化物層が帯状に延びることを確認した。今回の調査で検出した縄文時代の竪穴建物跡 8 軒のうちで、床面レベルが最も低い位置にある。第2号竪穴建物跡と切り合う位置にあるが、両者の新旧関係は確認できなかった。

出土遺物は少ないが、調査区壁沿いのトレンチ掘削の際、第3層から深鉢形土器片 (第7図1) が、第4層から浅鉢形土器 (同2) が出土した。他に磨石 (第69図14) 及び石錘 (第73図1) が出土した。

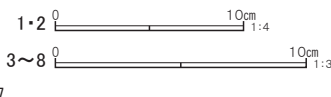
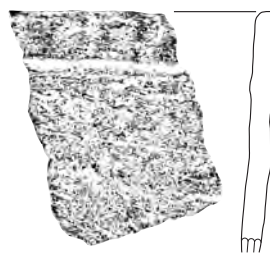
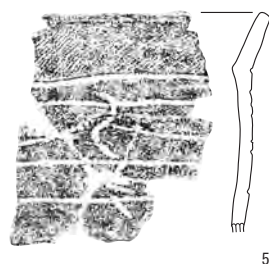
SI1



SI2



SI3



第7図 第1・2・3号竪穴建物跡出土土器

(2) 第2号竪穴建物跡 (第6・7図)

G4グリッドに所在するが、第1号溝跡によって大きく壊されている。北方にコーナーをもつ方形プランと見られ、北西壁2.1m、北東壁1.2mの範囲を調査した。深さは0.18mで、第1号竪穴建物跡の床面よりも0.72m高いが、両者の新旧関係は不明である。安行3a・3b式期の深鉢形土器片が認められた。

この他、土製円板(第54図1)、筒形土製品(第59図4)、石錘(第73図2・3)が出土した。

(3) 第3号竪穴建物跡 (第6・7図)

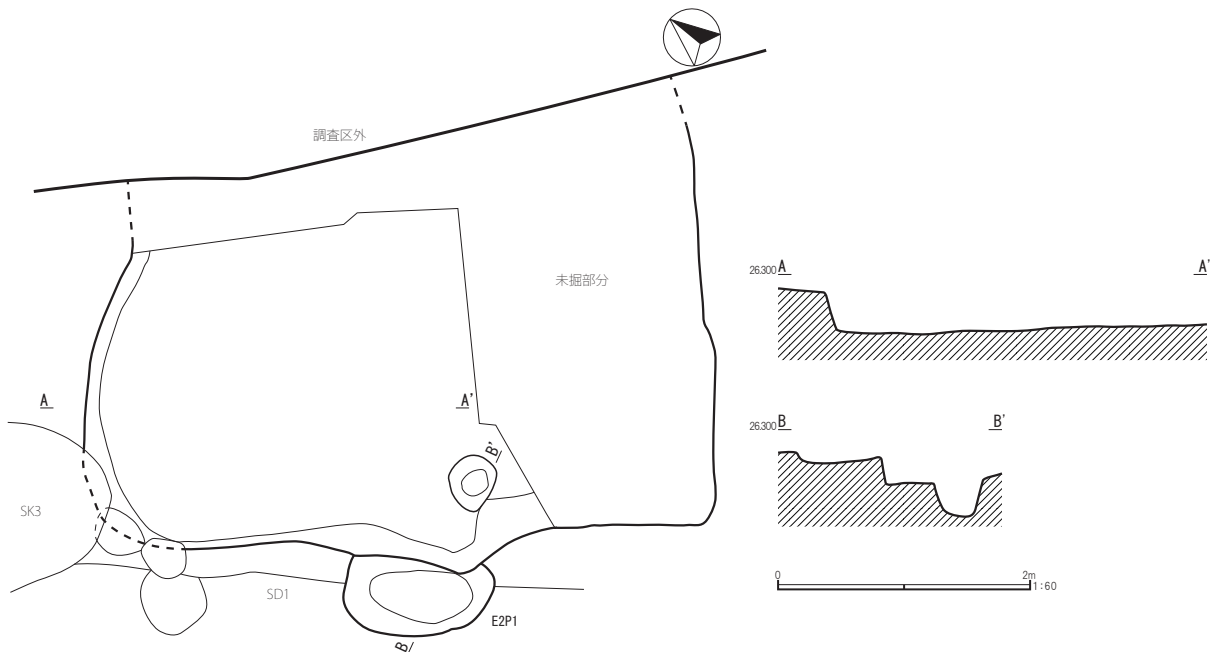
F4グリッドに所在するが、第1号溝跡によって大きく壊されている。北方にコーナーをもつ方形プランと見られ、4.92mの北東壁から幅2.0mの範囲を調査した。深さは0.12mで、東コーナー付近に径0.5mほどの焼土が認められた。床面に径0.9m、深さ0.18mの土坑があるが、本建物跡に伴うものかは不明である。

出土遺物は少なく、土製円板(第54図2)及び石鏃(第61図1)の他に、床面の土坑から土器片(第7図8)が出土した。

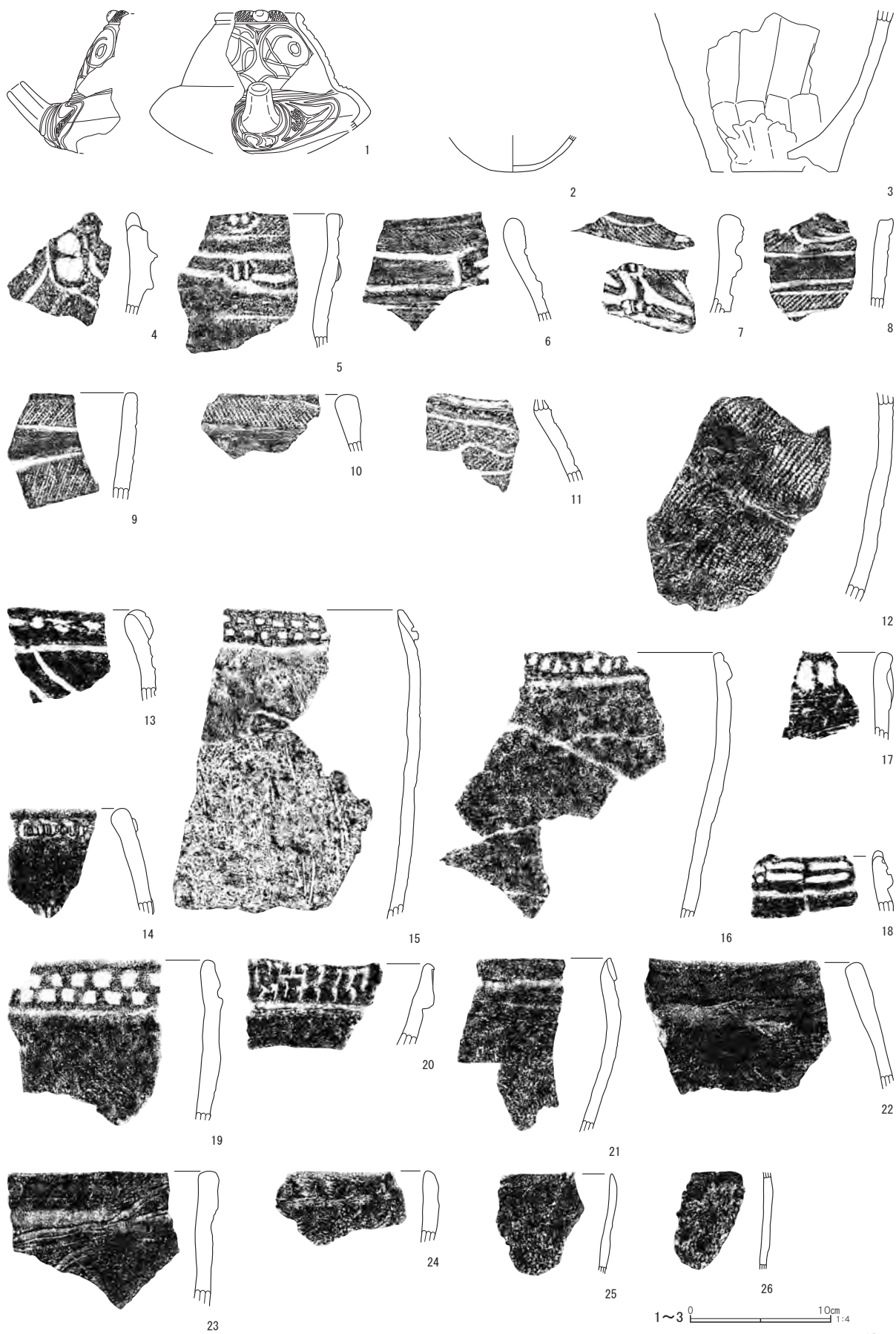
(4) 第4号竪穴建物跡 (第8～10図)

E1グリッドに所在する。南西壁長4.8mの方形プランで、南東壁側が第6号竪穴建物跡と重複する。第6号竪穴建物跡の方が新しく、本遺構埋土上に構築されていたため、その下に相当する部分以外の3.0m×2.7mの範囲を床面まで掘り下げて調査した。深さは0.36mである。

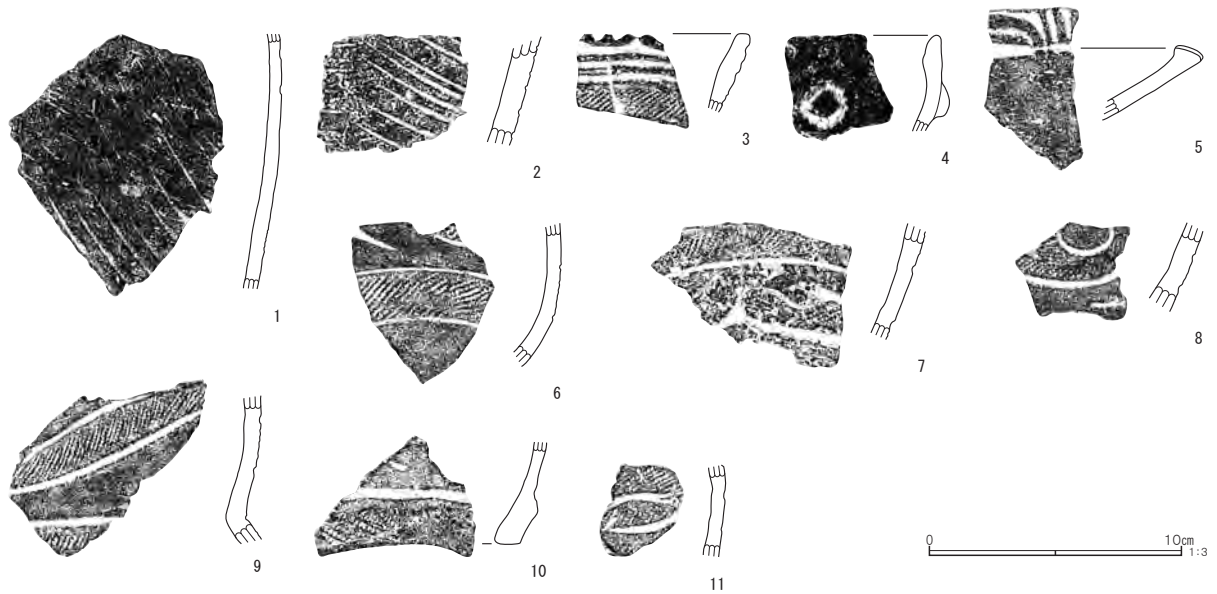
出土遺物は、多種多量である。土器は大洞B式期の注口土器をはじめ、列点文を施した有段口縁の粗製深鉢形土器が目立つ。特筆されるのは、赤色顔料に関わる遺物の多さで、石皿、台石(第69図1・2)や磨石(第69図3～13)のうちの6点(第69図3～8)には赤色顔料が付着している。その他に、耳飾り(第55図26・30)、土玉(第57図14)、石鏃(第61図2)、砥石(第68図1・2・16)、石錘(第73図4～8)も出土した。



第8図 第4号竪穴建物跡



第9图 第4号竖穴建物跡出土土器(1)

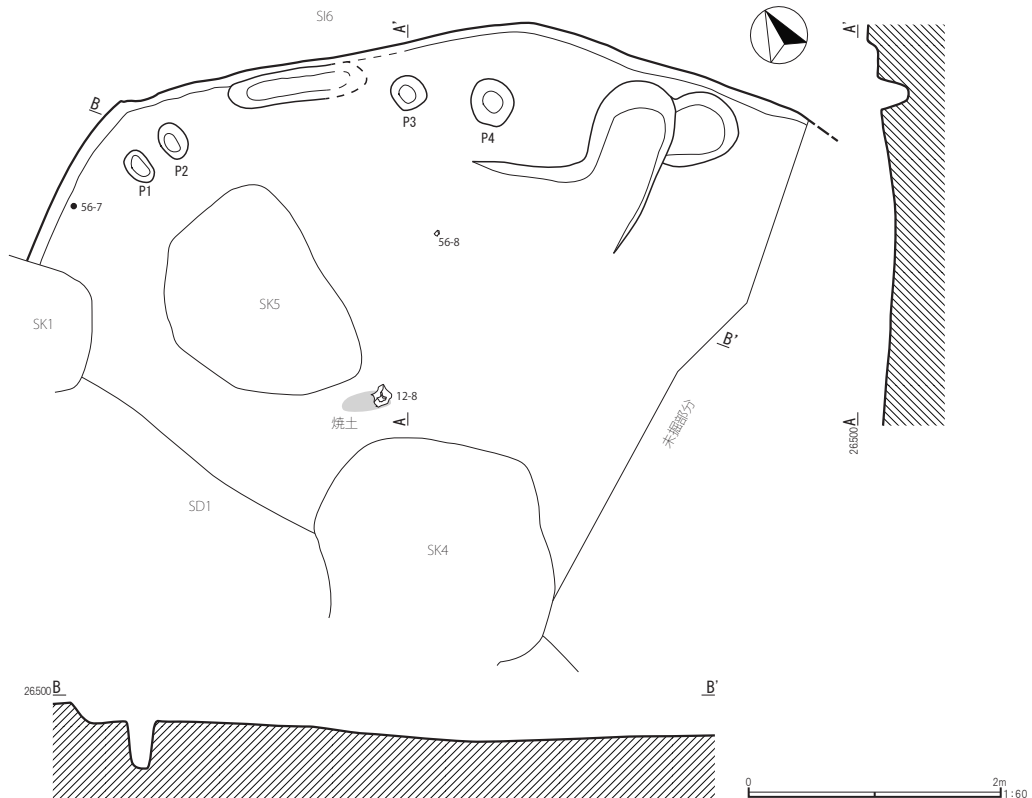


第10図 第4号竪穴建物跡出土土器(2)

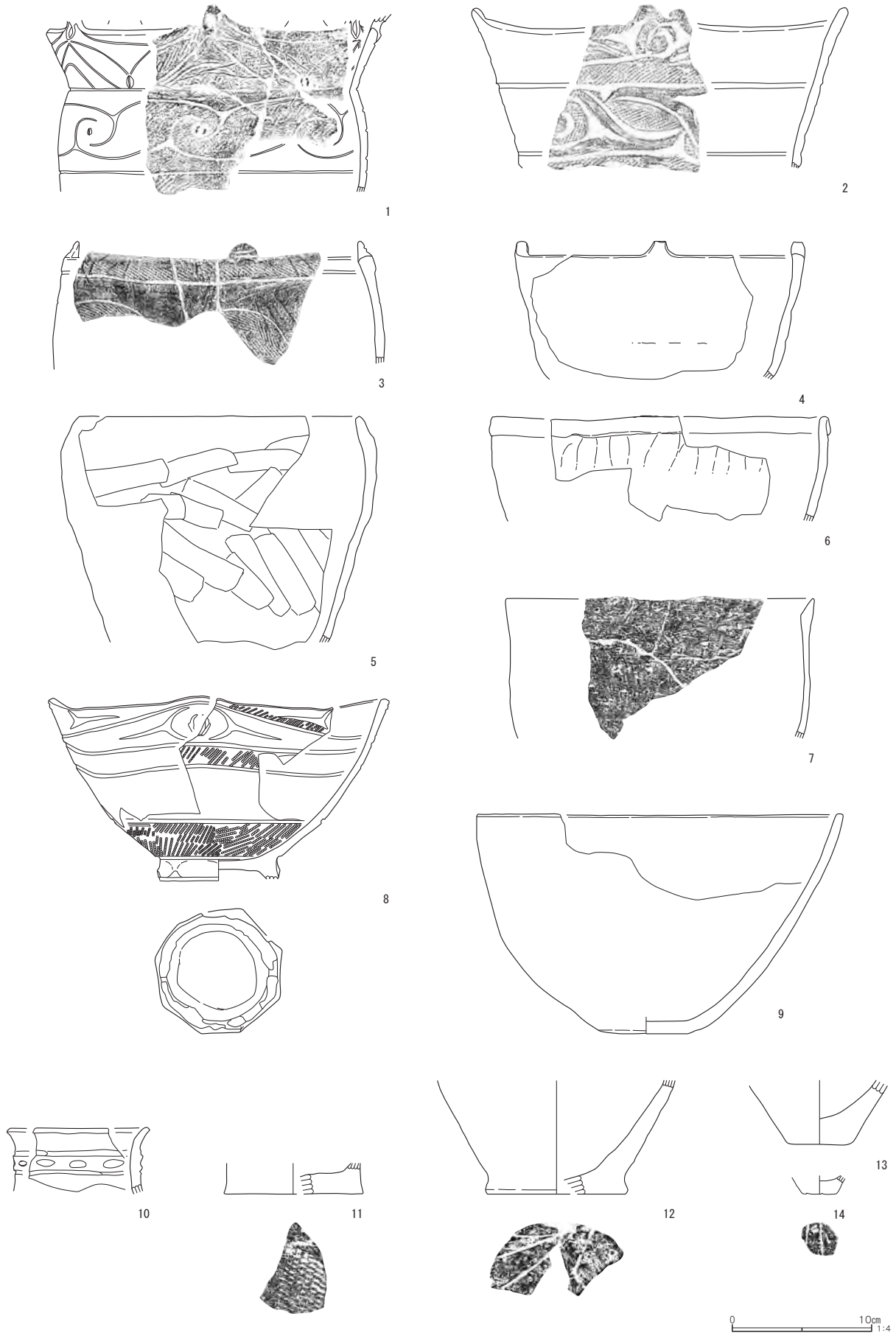
(5) 第5号竪穴建物跡(第11～13図)

F 2 グリッドに所在する。南北 4.8 m、東西 4.2 m の範囲を確認したが、検出した北東壁のプランは不整形で、確認面から床面までの深さは中央部で 0.25 m である。南西側を第 1 号溝跡に壊され、南東側は未掘であるため、プランは不明である。第 5 号土坑は、本遺構を切り込んでいるが、他に隣接する第 6 号竪穴建物跡、第 1 号土坑、第 4 号土坑との新旧関係は不明である。

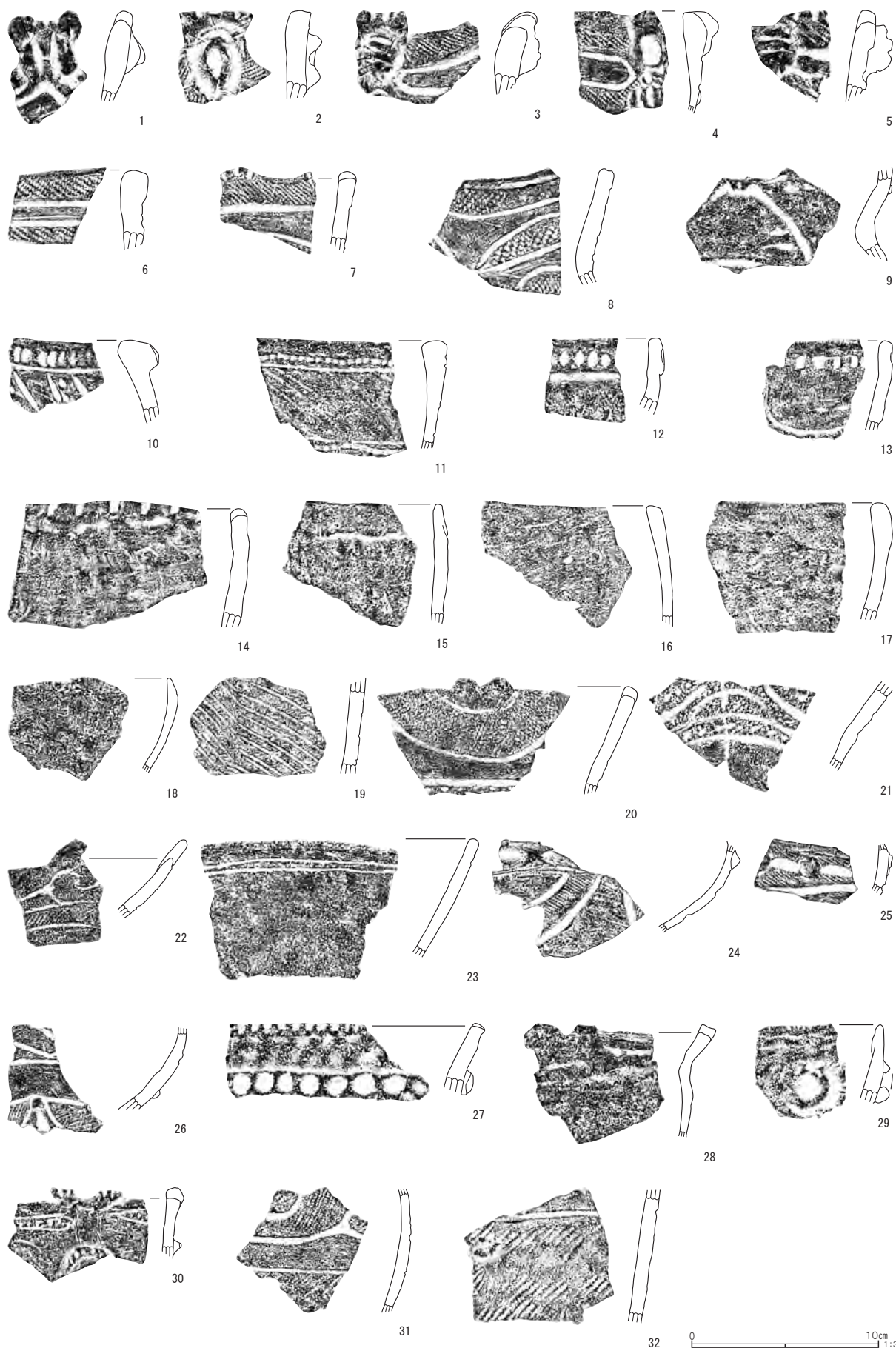
明確な炉跡は無いが、第 4 号土坑と第 5 号土坑に挟まれた位置で、焼土が認められた。また、壁際にピットが並び、深さは P 1 が 12 cm、P 2 が 37 cm、P 3 が 20 cm、P 4 が 25 cm である。



第11図 第5号竪穴建物跡



第12图 第5号竖穴建物迹出土土器(1)



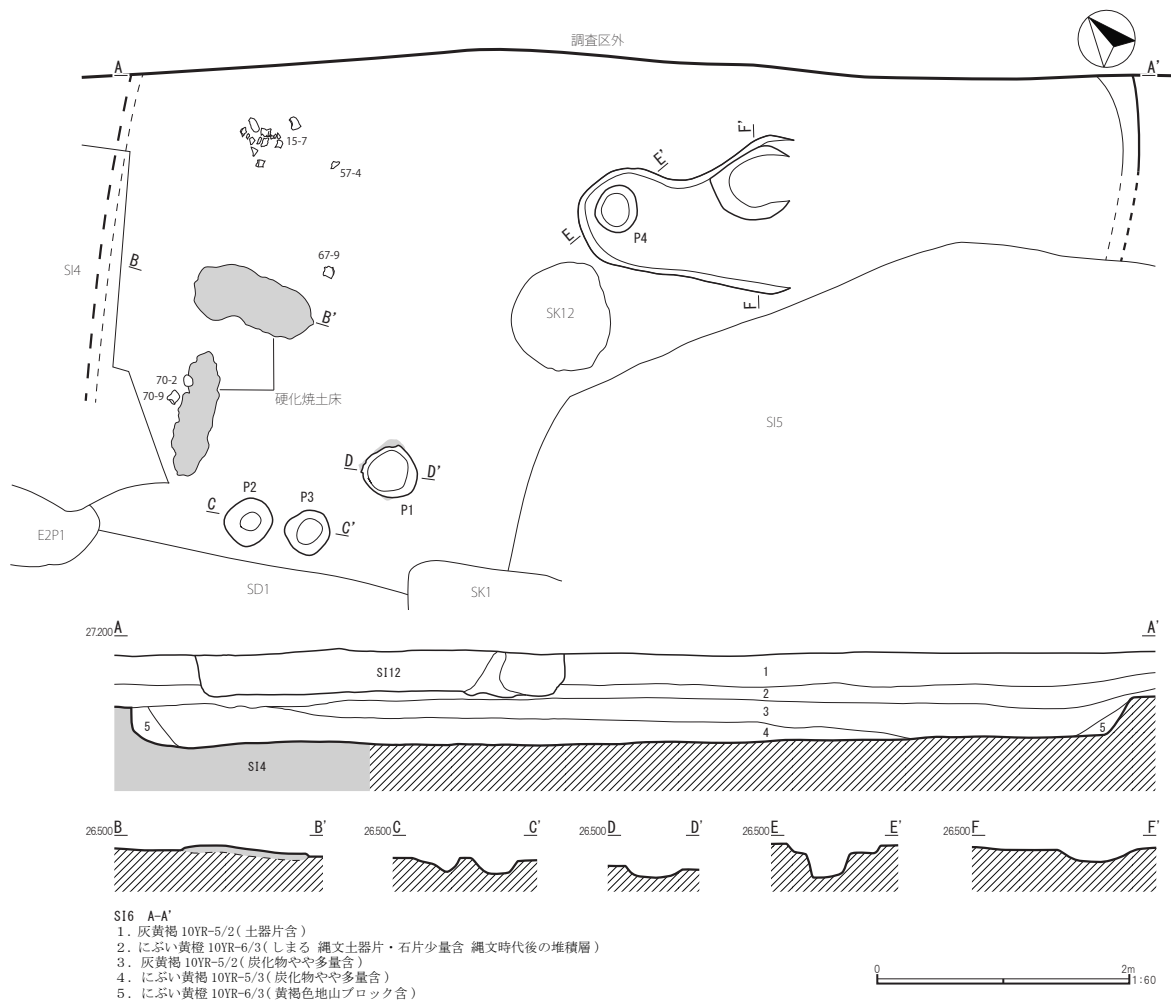
第 13 图 第 5 号竖穴建物跡出土土器 (2)

出土遺物は、焼土付近から第 12 図 8 の台付浅鉢形土器が出土した。台脚部欠損後、割れ口を平滑に整えて使用している。安行 3b 式期のものである。また、出土遺物は多種多量だが、特筆されるのは耳飾りが多いことで、第 56 図 4・7・8・10・17・20・22・23 の 8 点がある。その他に、土製円板（第 54 図 3）、岩版片（第 58 図 2）、石剣（第 60 図 3、8、17、18）、石鎌（第 61 図 3～7）、磨製石斧（第 64 図 3・6）、砥石（第 68 図 7）、磨石（第 69 図 15～17）が出土した。

(6) 第 6 号竪穴建物跡（第 14～17 図）

F 2 グリッドに所在する。南東壁の一部を検出したが、北西壁は第 4 号竪穴建物跡を切り込み不明瞭で、断面観察から位置を想定した。両壁間の距離は 8.1 m で、深さは 0.3 m である。南西側は遺構の重複によって壊され、北東側は調査区外であるためプランや規模は不明である。第 5 号竪穴建物跡や第 1 号土坑との土層による新旧関係は不明だが、土器は第 5 号竪穴建物跡より本遺構の方が新しいようである。第 1 号溝跡及び第 12 号土坑に壊されている。

本遺構の特徴は、北西壁寄りに 2 基の硬化焼土床が存在することである。1 基は壁から 0.6 m ほど離れて平行に配され、長さ 1.0 m、幅 0.28 m の規模である。もう 1 基はこれに直行する位置に配され、長さ 1.0 m、幅 0.4 m の規模である。どちらも壁側から建物中央に向けて傾斜が下るように造られ、上面が硬化した焼土層は厚さ 5 cm ほどで、層下面は黒色化していた。この周辺には遺物も集中し、焼けた



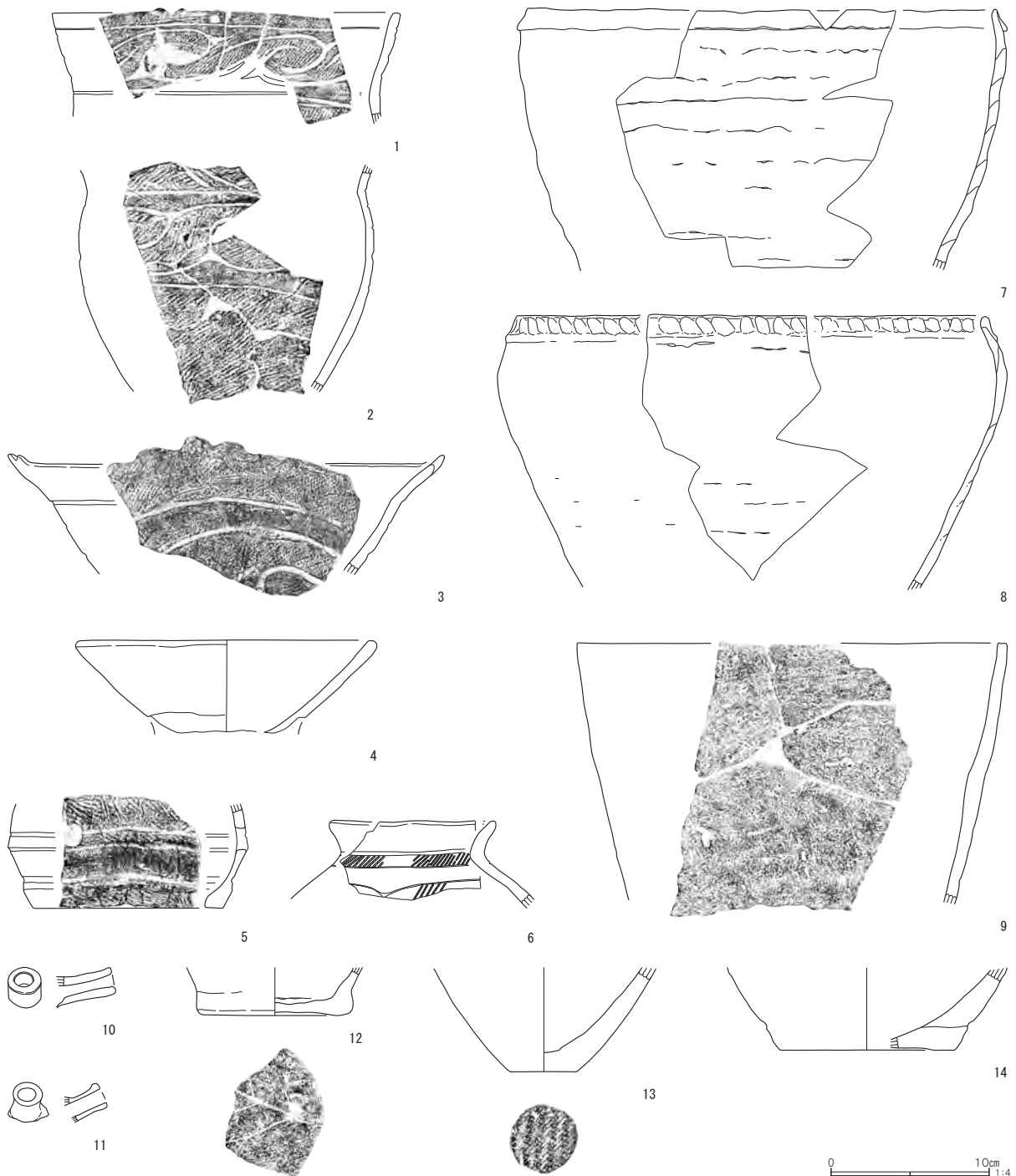
第 14 図 第 6 号竪穴建物跡



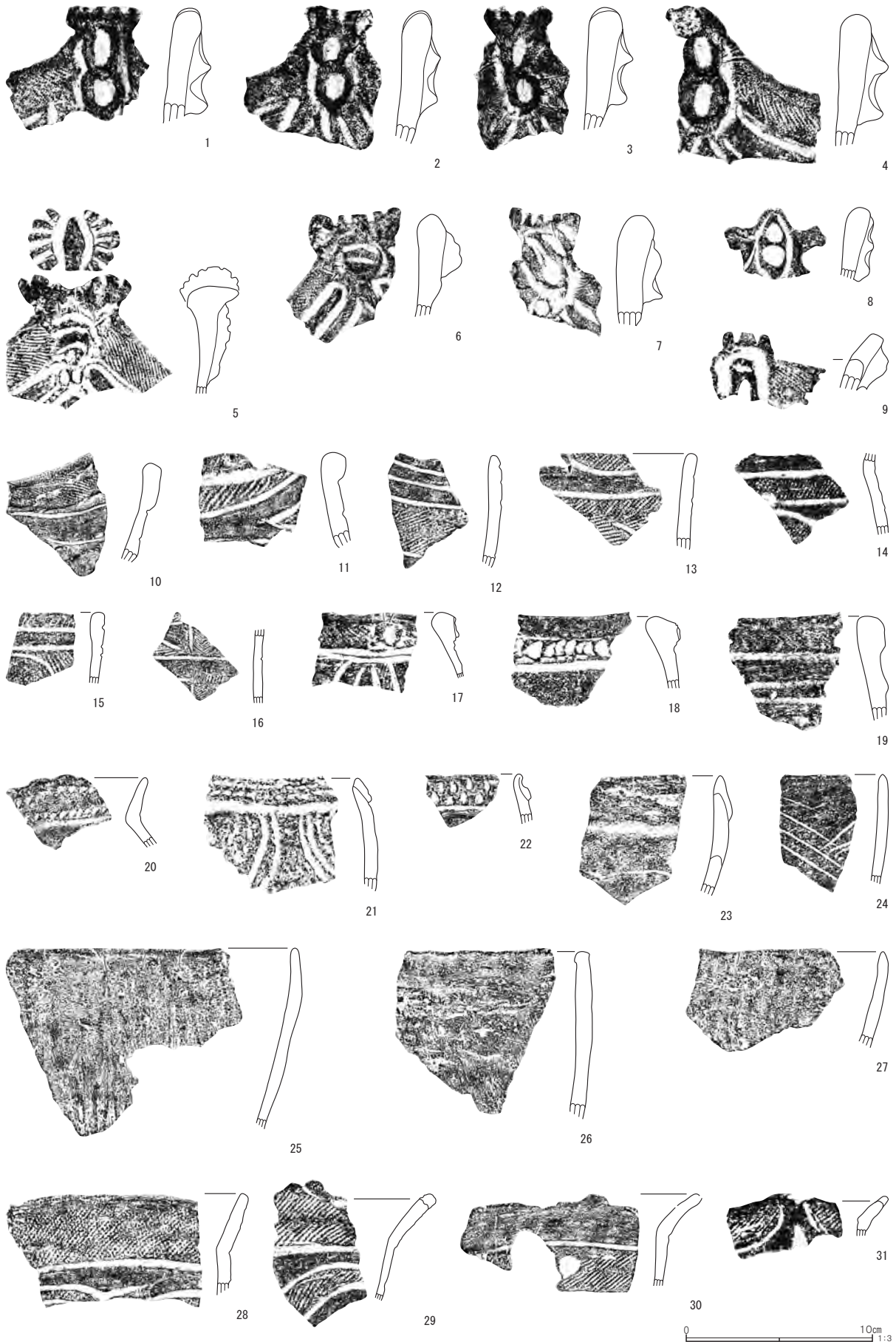
獣骨や被熱した磨石、同じく被熱して脆弱になった粗製深鉢形土器（第15図7）、さらに土偶片が出土した。

小ピットが4基存在し、深さ0.24mのP4以外は、深さ0.1m弱だが、P1では周囲に焼土が認められた。

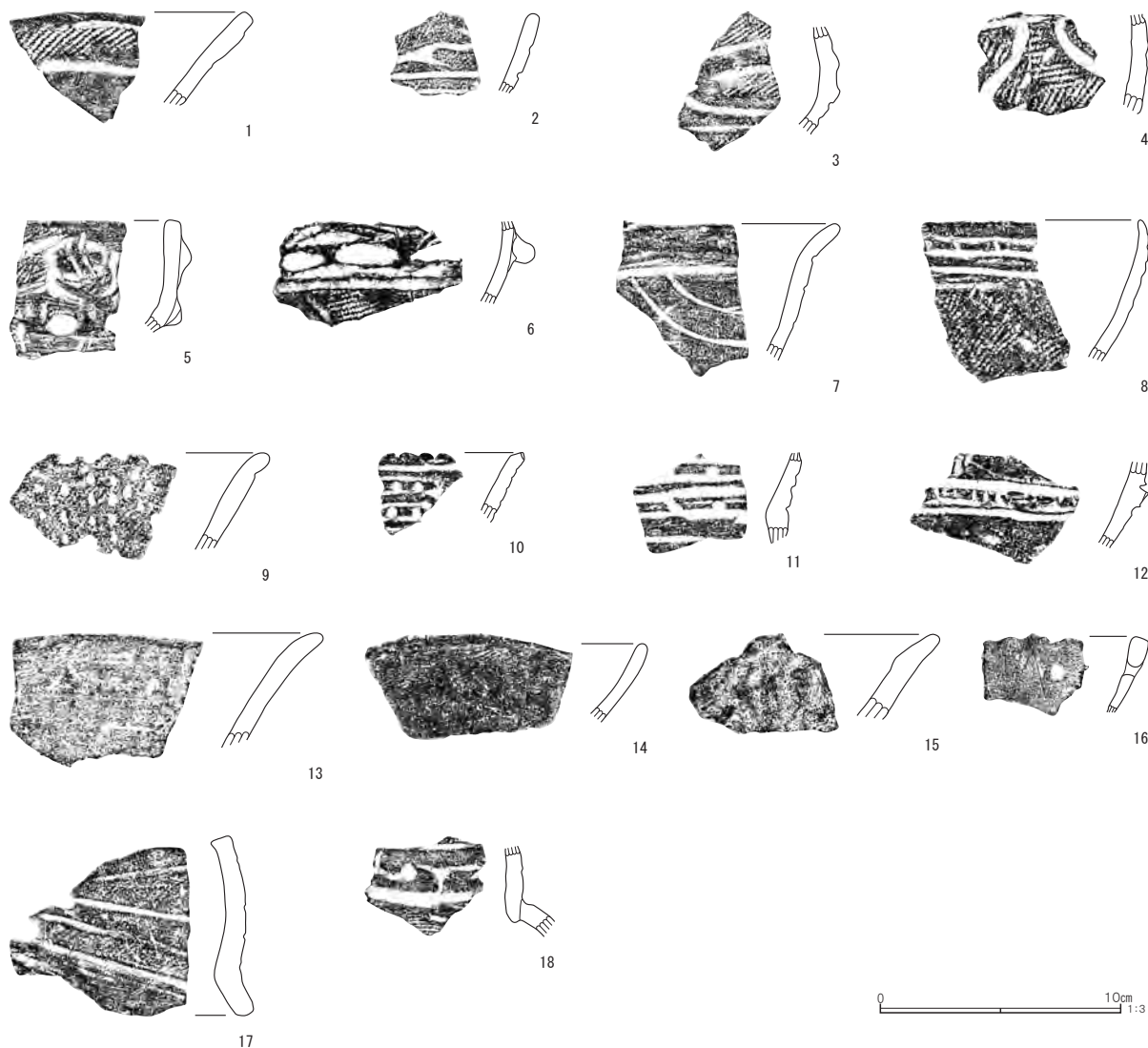
出土遺物は多種多量だが、土器の他に、土製円板（第54図4～7）、耳飾り（第55図8・18・23）、土偶（第57図4）、土版（第57図7）、石鏃（第61図8～11）、石皿（第65図5、第67図5）、砥石（第68図6）、磨石（第70図1～10）、石錘（第73図9）が出土した。磨石には赤色顔料が付着するものがある（第70図1～3）。



第15図 第6号竖穴建物跡出土土器（1）



第16图 第6号竖穴建物跡出土土器(2)

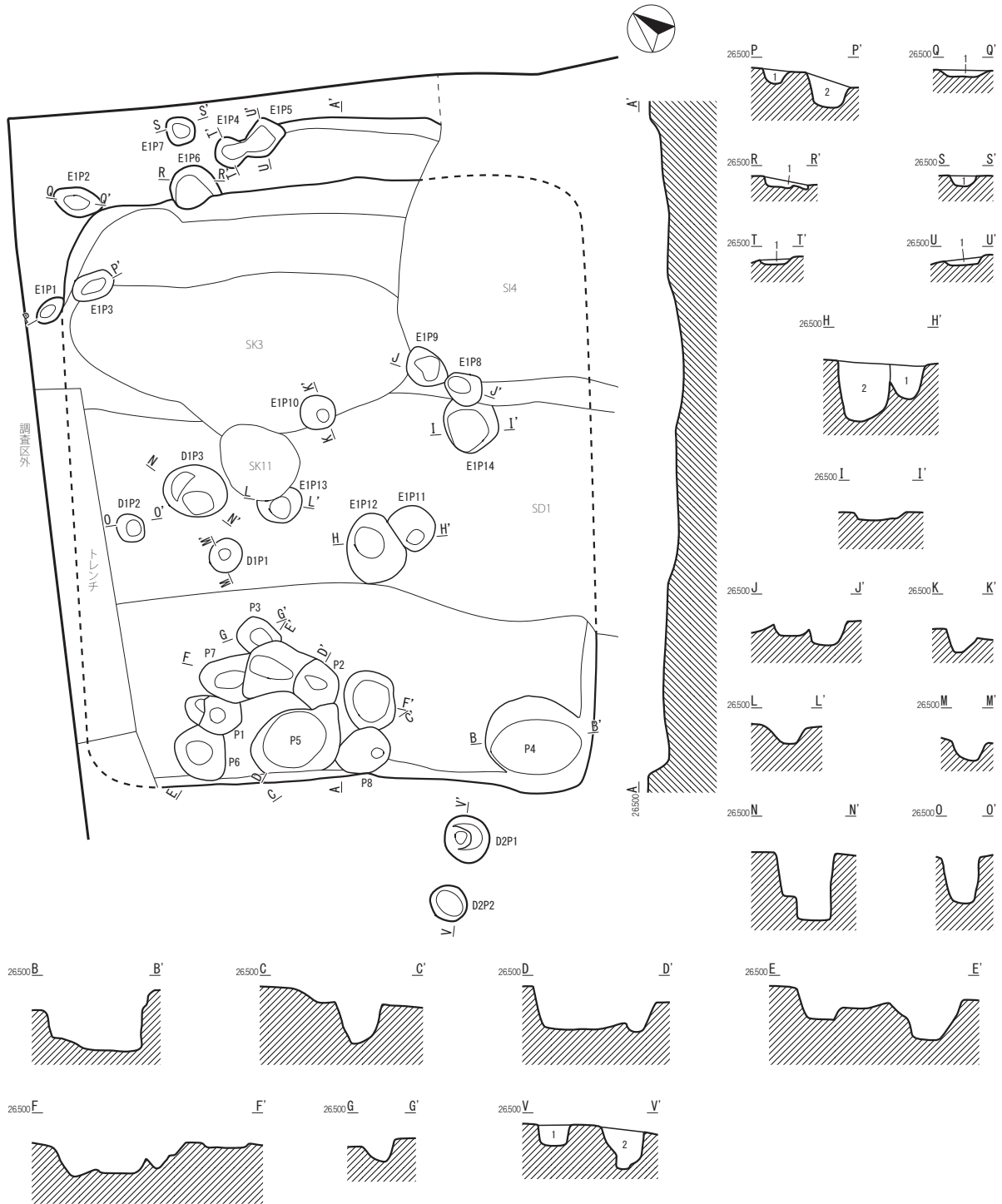


第17図 第6号竪穴建物跡出土土器(3)

(7) 第7号竪穴建物跡(第18～20図)

D1グリッドに所在する。北コーナーと北東壁、南コーナーと南西壁を検出することができたため、長径5.7m、短径4.8mの方形プランを復元することができた。床面中央部は第1号溝跡及び第11号土坑に壊され、第3号土坑にも切られる。第4号竪穴建物跡や周辺ピット群との新旧関係は不明だが、南西壁沿いのP1～8は本遺構に伴うものである。特筆されるのは、P4以外のピット集中部が炭化物・焼土粒・焼骨片を多量に包含する黒褐色土に覆われ、その中から骨角器(第57図17)が出土したことと、ピット内から遺物が出土したことで、P1から高井東式土器の装飾把手(第33図3)、P4から石剣(第60図13)、その上層から磨製石斧(第64図1)、P8から注口土器(第19図2)が出土した。これらの遺物は、磨製石斧以外は破損品だが、特徴的な部分の破片である。

出土遺物は多種多量だが、上記の他に、耳飾り(第55図10・11・37)、土偶(第57図3・6)、有孔土製品(第59図24)、焼成粘土塊(第59図26)、石鏃(第61図12～14)、石皿(第65図6、第66図2)、砥石(第68図11)、磨石(第70図11～15)が出土した。磨石には赤色顔料が付着するものがある(第70図11～13)。



**EIP11・P12 H-H'**

1. 暗褐 10YR-3/3(しまる 炭化物粒子・焼土粒子少量含)
2. 黒褐 10YR-3/2(しまる ローム粒子多量含 ロームブロック φ10～50mm少量含 炭化物粒子微量含 炭化物粒子微量含)

**EIP1・P3 P-P'**

1. 褐 10YR-4/4(しまる 炭化物粒子・ローム粒子微量含)
2. 褐 10YR-4/4(しまる 炭化物粒子・ローム粒子微量含)

**EIP2 Q-Q'**

1. 褐 10YR-4/4(しまる 灰色土粒子少量含)

**EIP6 R-R'**

1. 明黄褐 10YR-6/6(しまる 褐色土ブロック φ10～50mm多量含 炭化物粒子微量含)

**EIP7 S-S'**

1. 褐灰 10YR-6/1(しまる 酸化鉄少量含 鉄分粒子少量含 褐色土ブロック φ10～50mm少量含)

**EIP4 T-T'**

1. にぶい黄褐 10YR-4/3(しまる 炭化物粒子微量含 灰色土粒子少量含)

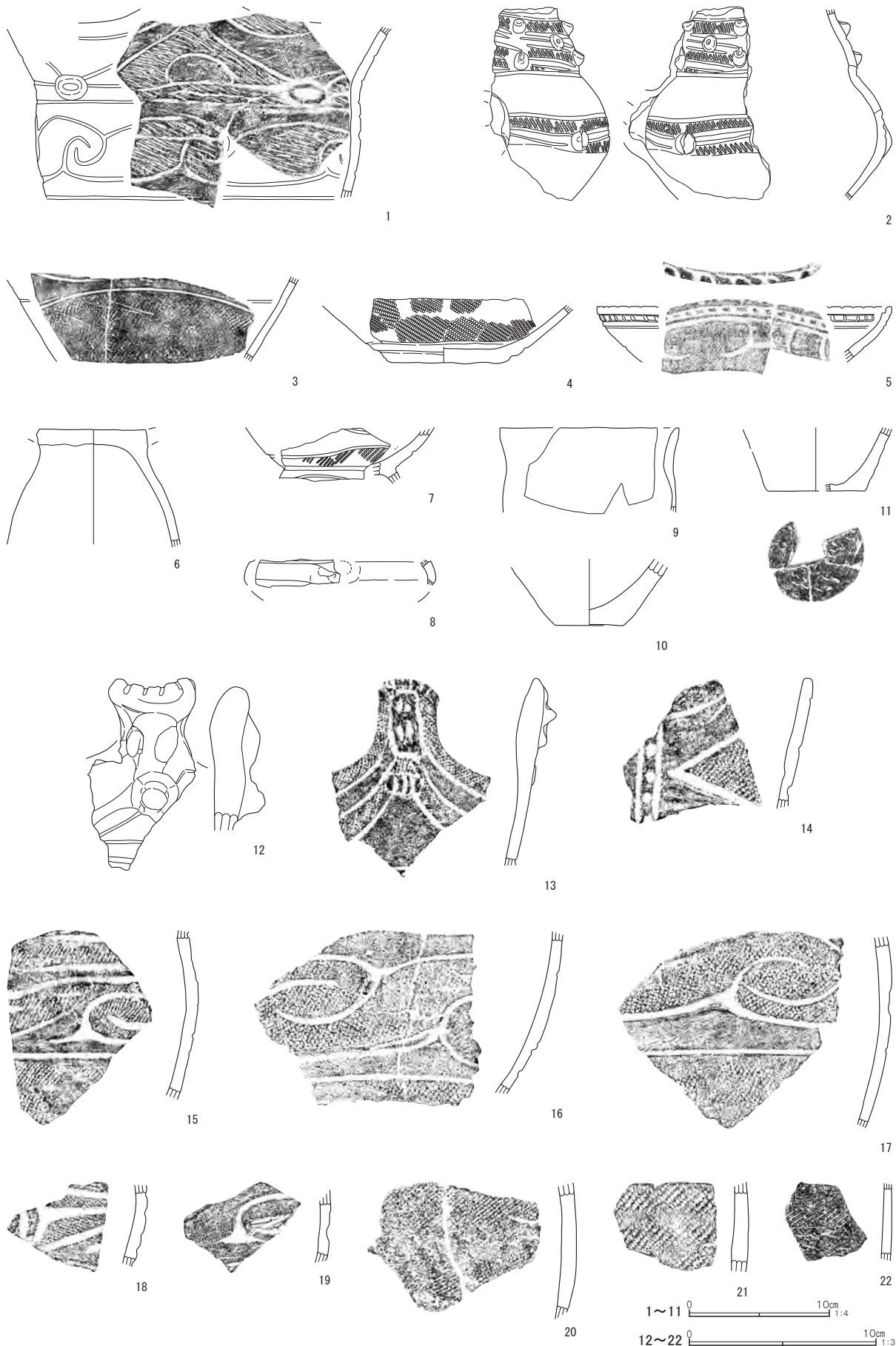
**EIP5 U-U'**

1. 褐 10YR-4/4(しまる 灰色土粒子多量含 焼土粒子微量含)

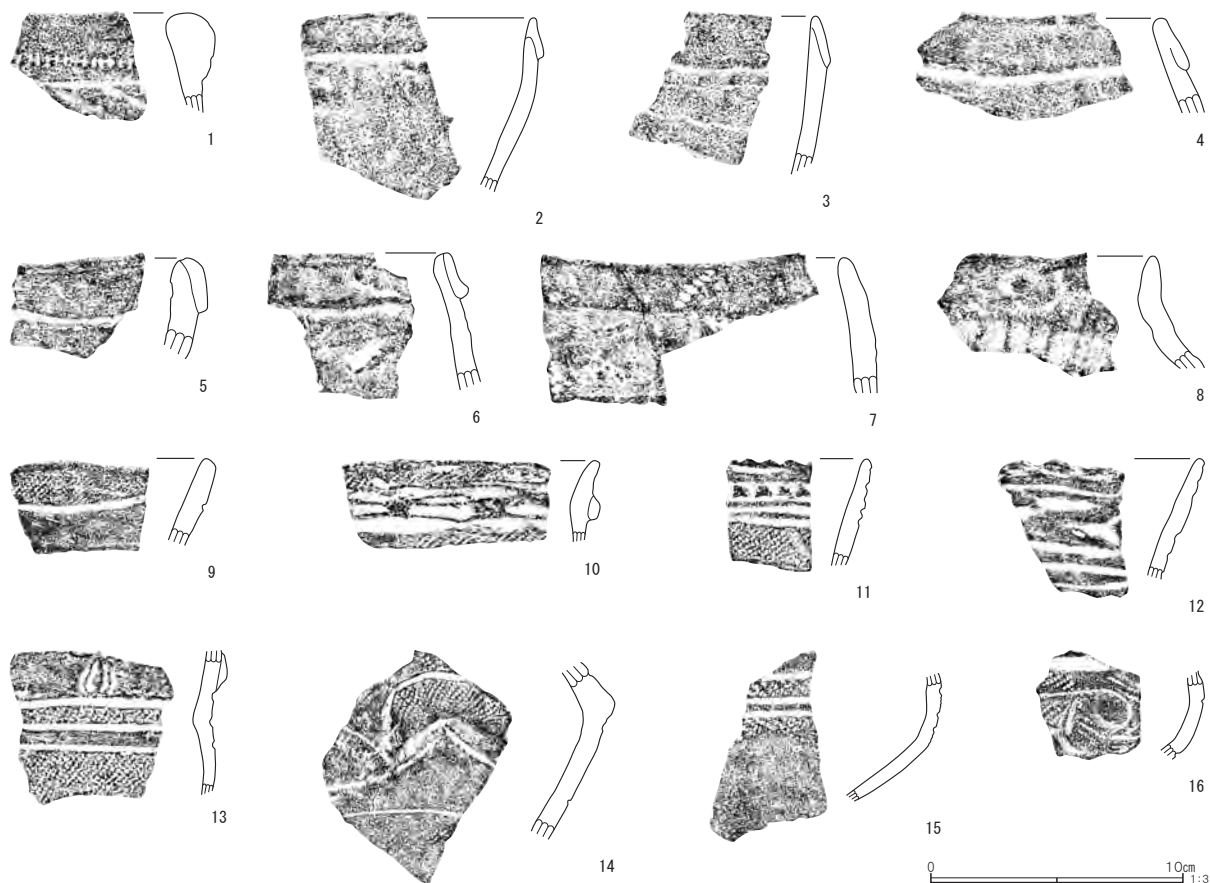
**D2P1・P2 V-V'**

1. にぶい黄褐 10YR-4/3(しまる 灰色土粒子少量含)
2. 灰黄褐 10YR-4/2(しまり強 炭化物粒子少量含 灰色土粒子微量含)

第18図 第7号竪穴建物跡・周辺ピット群



第 19 图 第 7 号竖穴建物跡出土土器 (1)



第20図 第7号竪穴建物跡出土土器（2）

(8) 第8号竪穴建物跡（第21～26図）

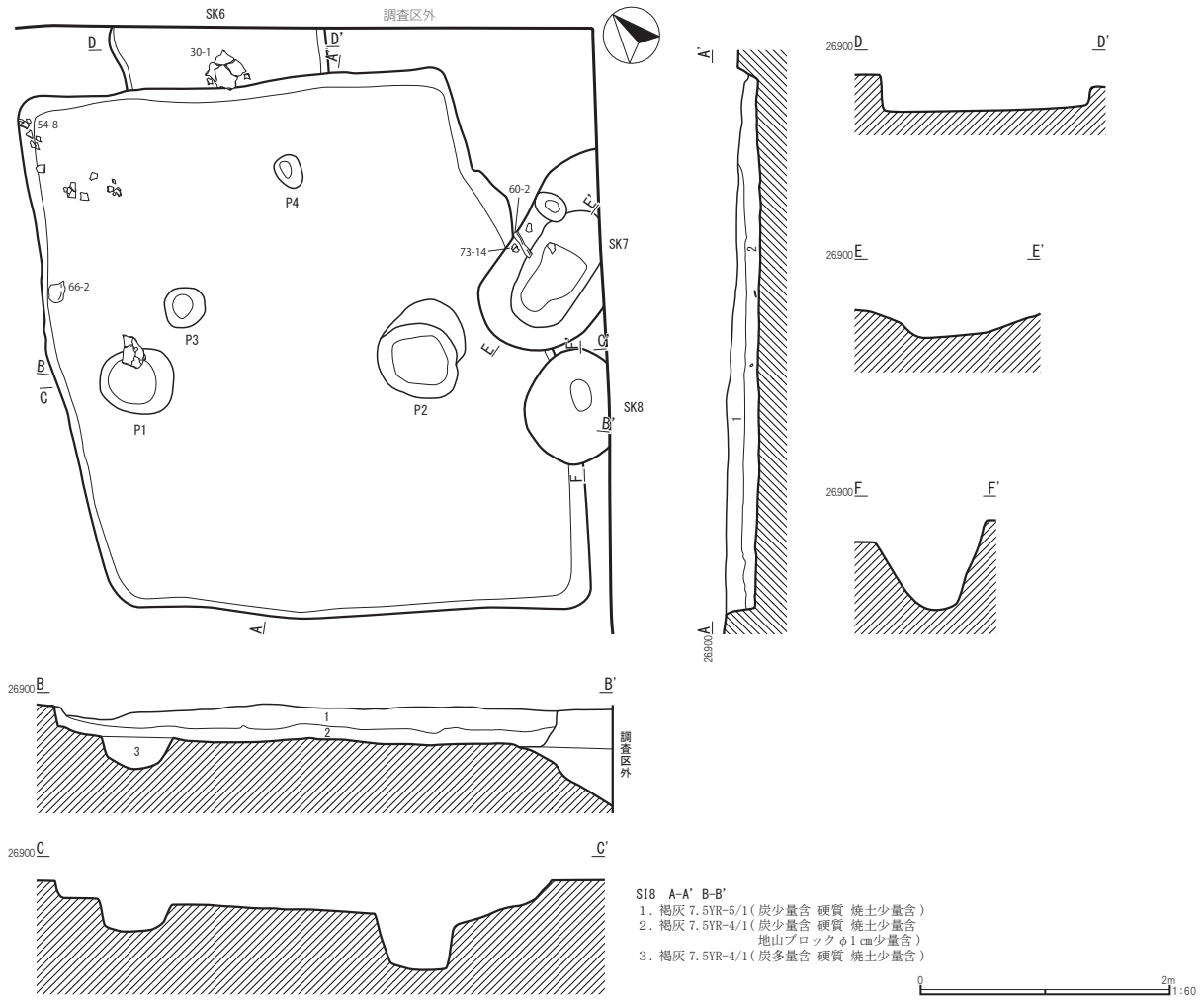
G3グリッドに所在する。平行四辺形に近い方形プランで、北東壁・南西壁間4.2m、北西壁・南東壁間0.36m、深さ0.3mの規模である。第6号土坑との新旧関係は不明であるが、第7・8号土坑よりも新しい。炉跡は認められず、径0.6mほどのP1・2の他、2基の小ピットがある。

遺物の出土状況を記録できなかったが、土器や石器が埋土中に投棄されたような状態で多量に出土したことが特筆される。

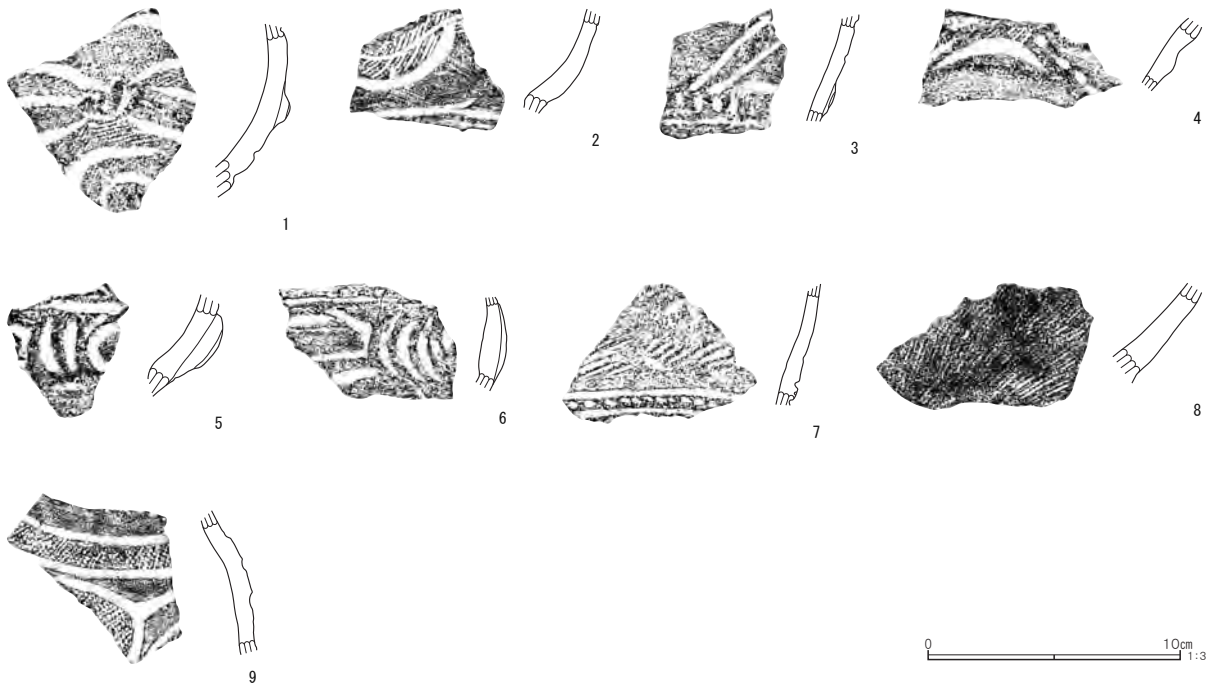
土器では、第23図4の安行3c式に似た杵状文をもつ深鉢や、第23図5の竹管による円形刺突文や弧状の貼付けに刺突を施し、後述の付編1の第1図1で紹介されている土器と同じ文様の天神原系土器がある。第23図7は凹凸を強調した頸部突帯が特徴的で、第4号土坑の第28図22と同一個体と見られる。第23図16は器肉が薄く条線文のある深鉢形土器の底部だが、この特徴をもつ土器は希少である。この他、小破片であるが第24図22の細密沈線文土器や第26図15の製塩土器がある。

石器では、大型打製石斧4点（第63図1～4）がまとめて出土した。また、石核・剥片の出土量も最多であり、本遺構が剥片石器等の製作工房として想定される（付編2参照）。

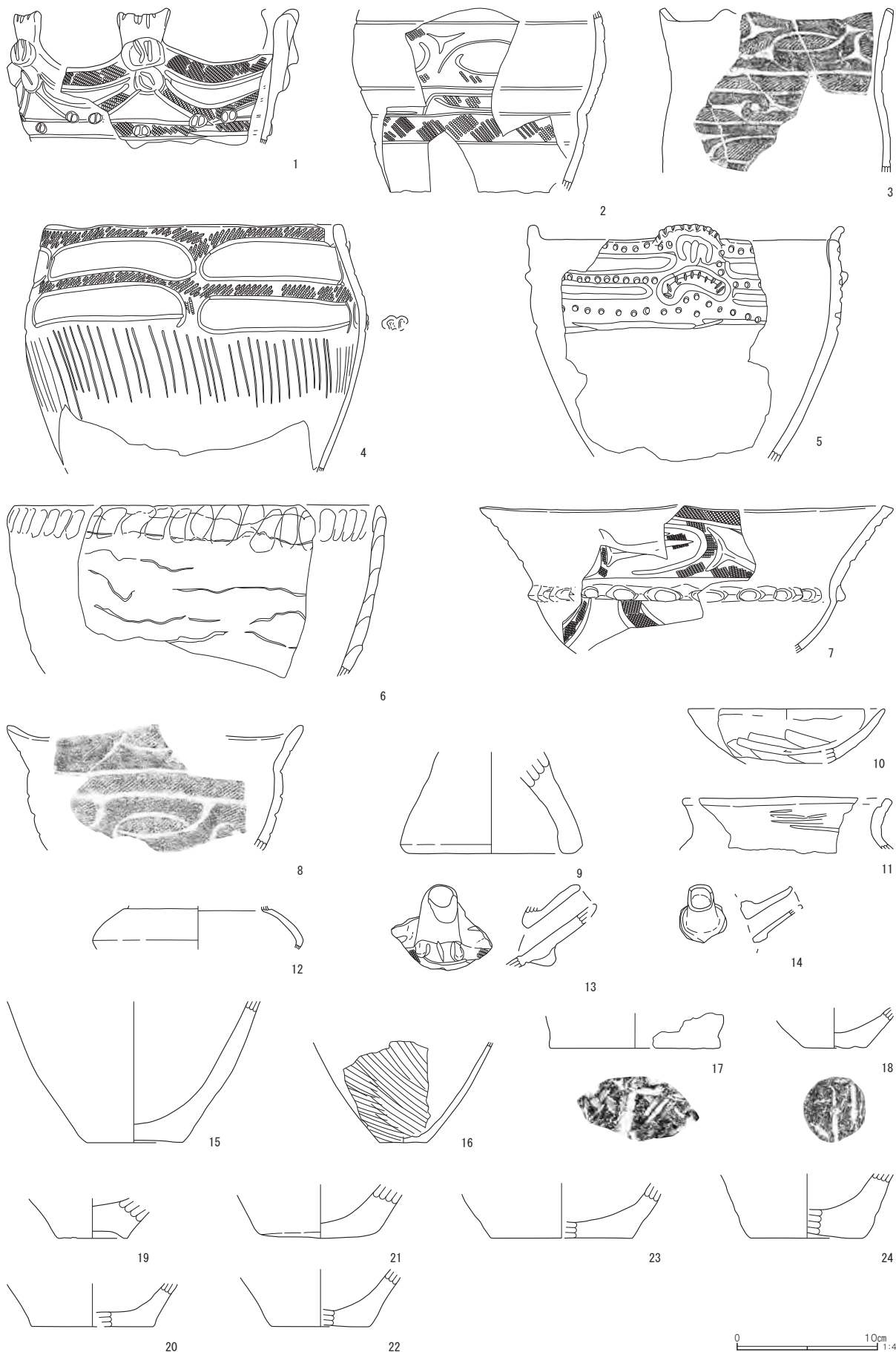
この他に、土製円板（第54図8・9）、耳飾り（第55図6・7・14・17・33、第56図1）、人面付き把手（第57図8）、骨角器（第57図20）、石剣未製品（第60図16）、石鏃類（第61図15～18）、磨製石斧（第64図13）、石皿（第65図4、第67図1）、磨石（第71図1～8）、石錘（第73図10・11）が出土した。



第 21 図 第 8 号竖穴建物跡・周辺土坑群

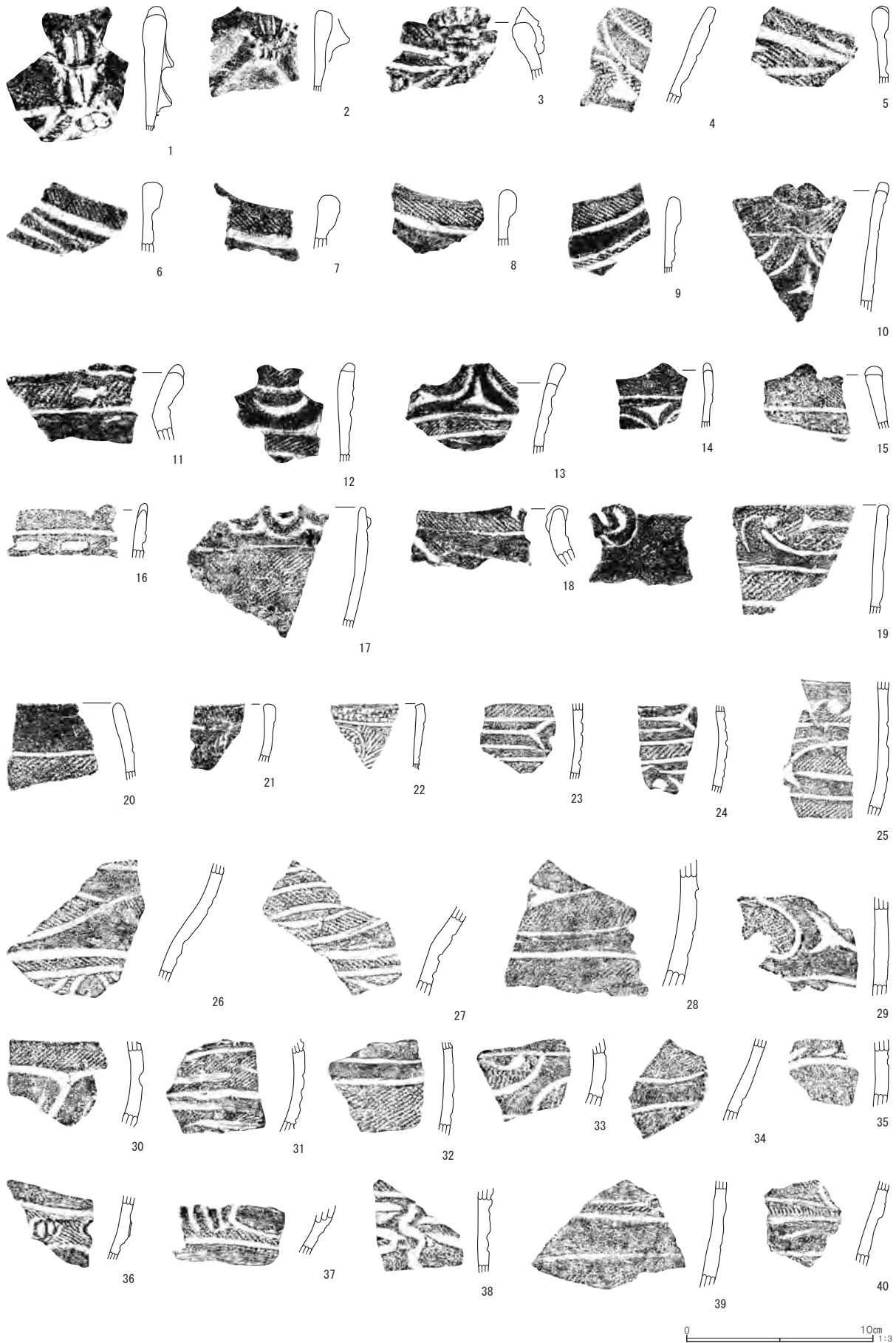


第 22 図 第 8 号竖穴建物跡出土土器 (1)

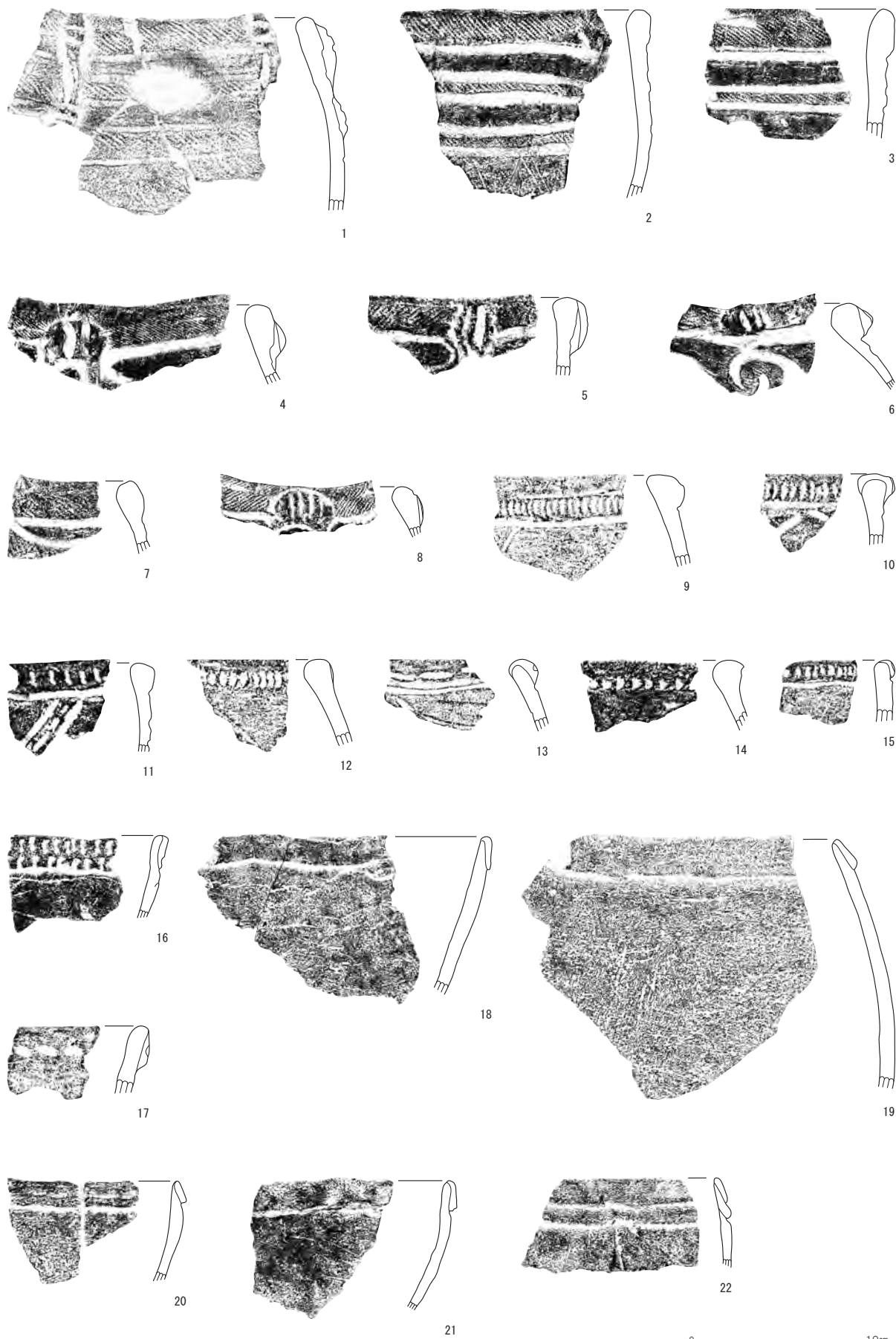


第 23 图 第 8 号竖穴建物迹出土土器 (2)

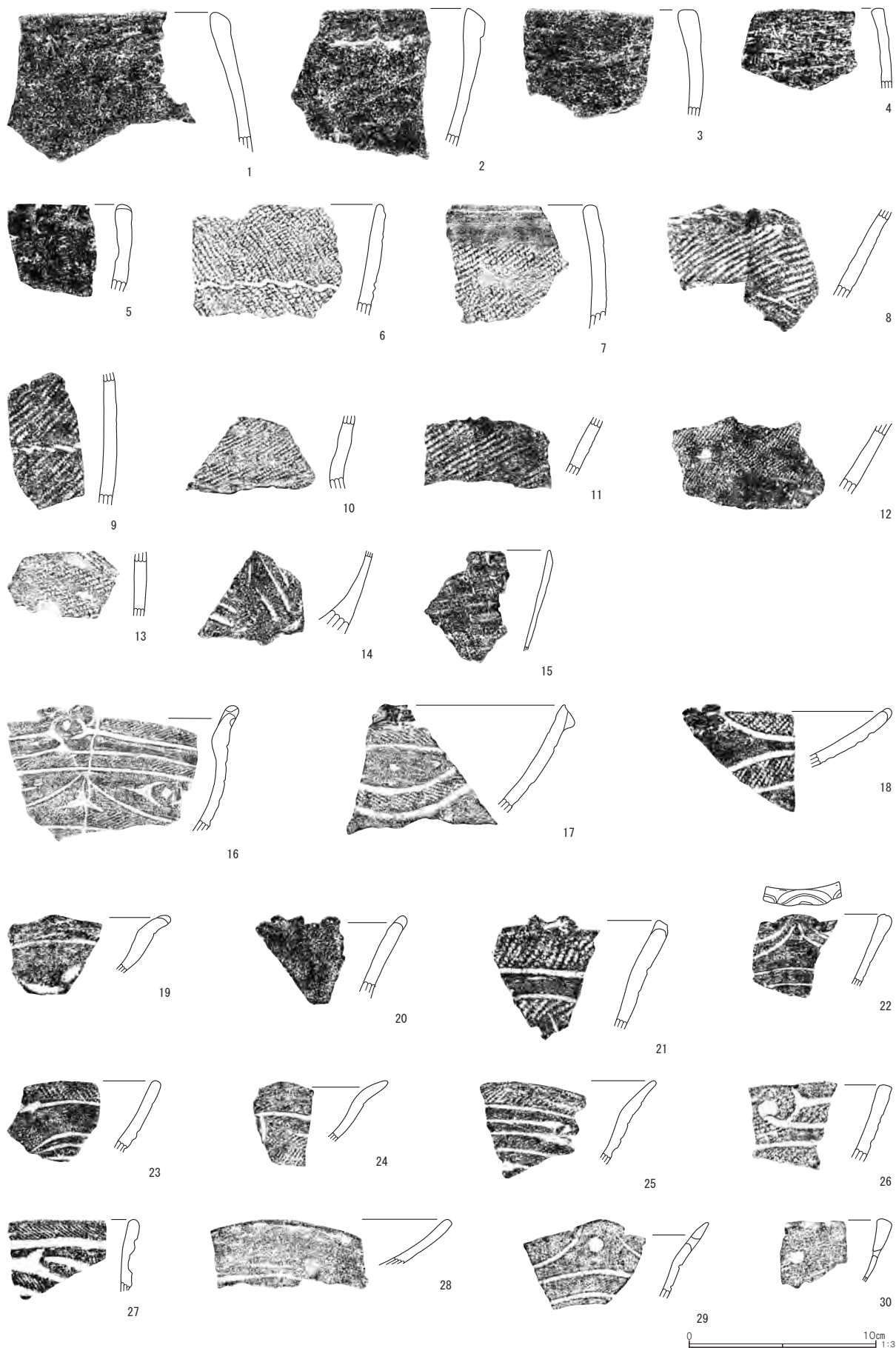




第 24 图 第 8 号竖穴建物跡出土土器 (3)

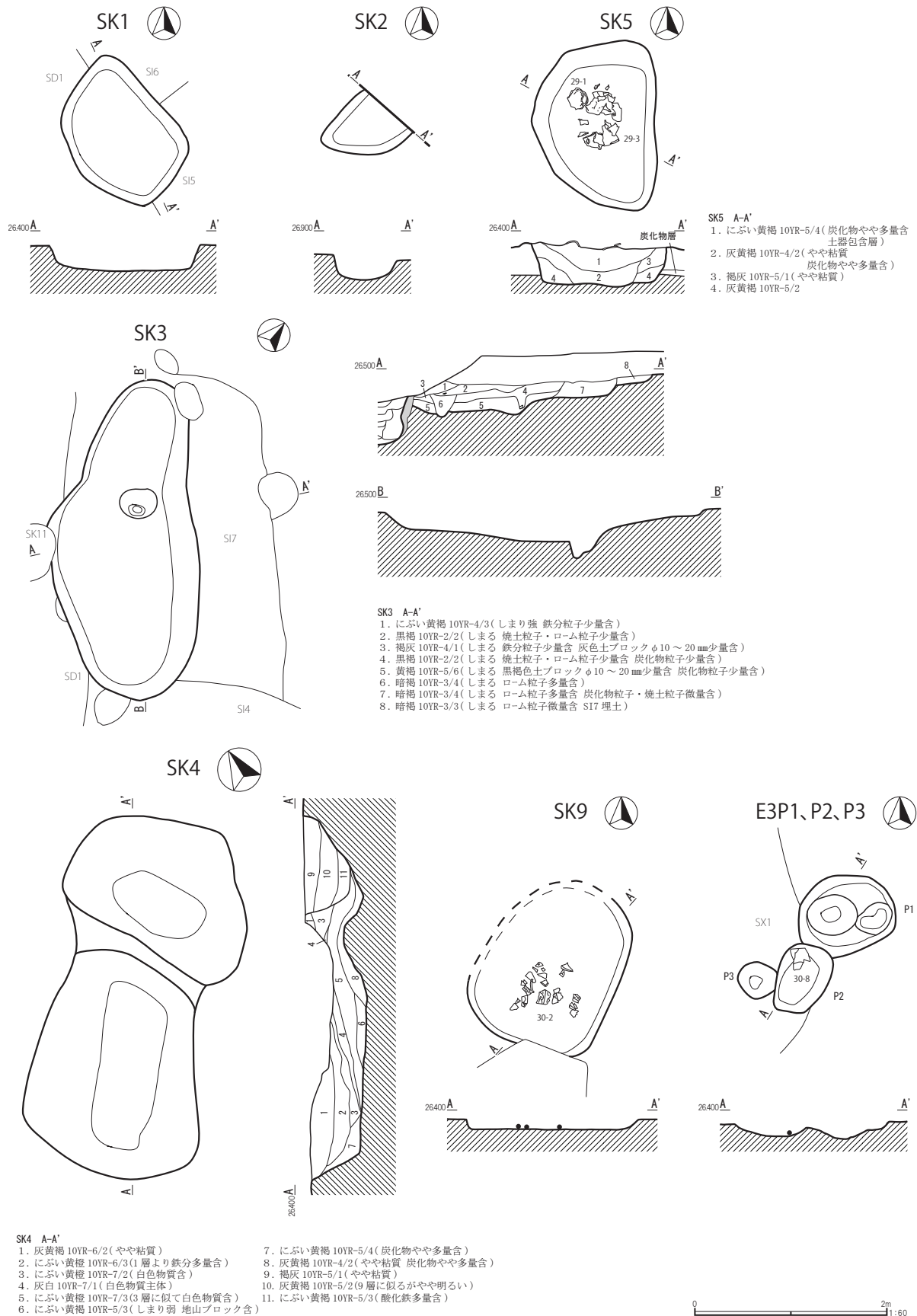


第 25 图 第 8 号竖穴建物跡出土土器 (4)



第 26 图 第 8 号竖穴建物迹出土土器 (5)

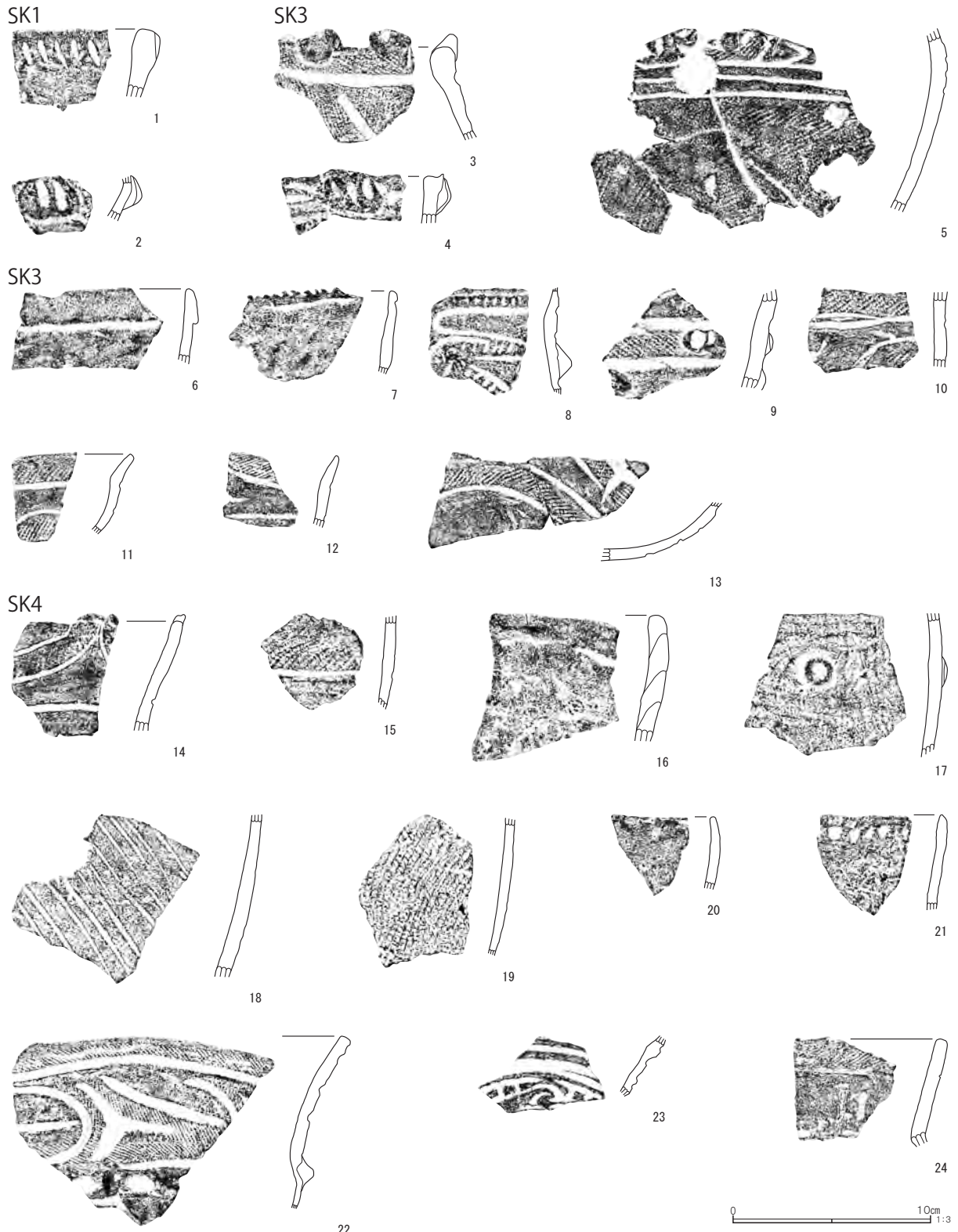
### 3 土坑・ピット



第27図 土坑・ピット

(1) 第1号土坑 (第27・28図)

F2グリッドに所在する。規模は、長径1.38m、短径1.08m、深さ0.24mである。第1号溝跡に壊されるが、第5・6号竪穴建物跡との新旧関係は不明である。土器片(第28図1・2)が出土した。



第28図 土坑・ピット出土土器(1)

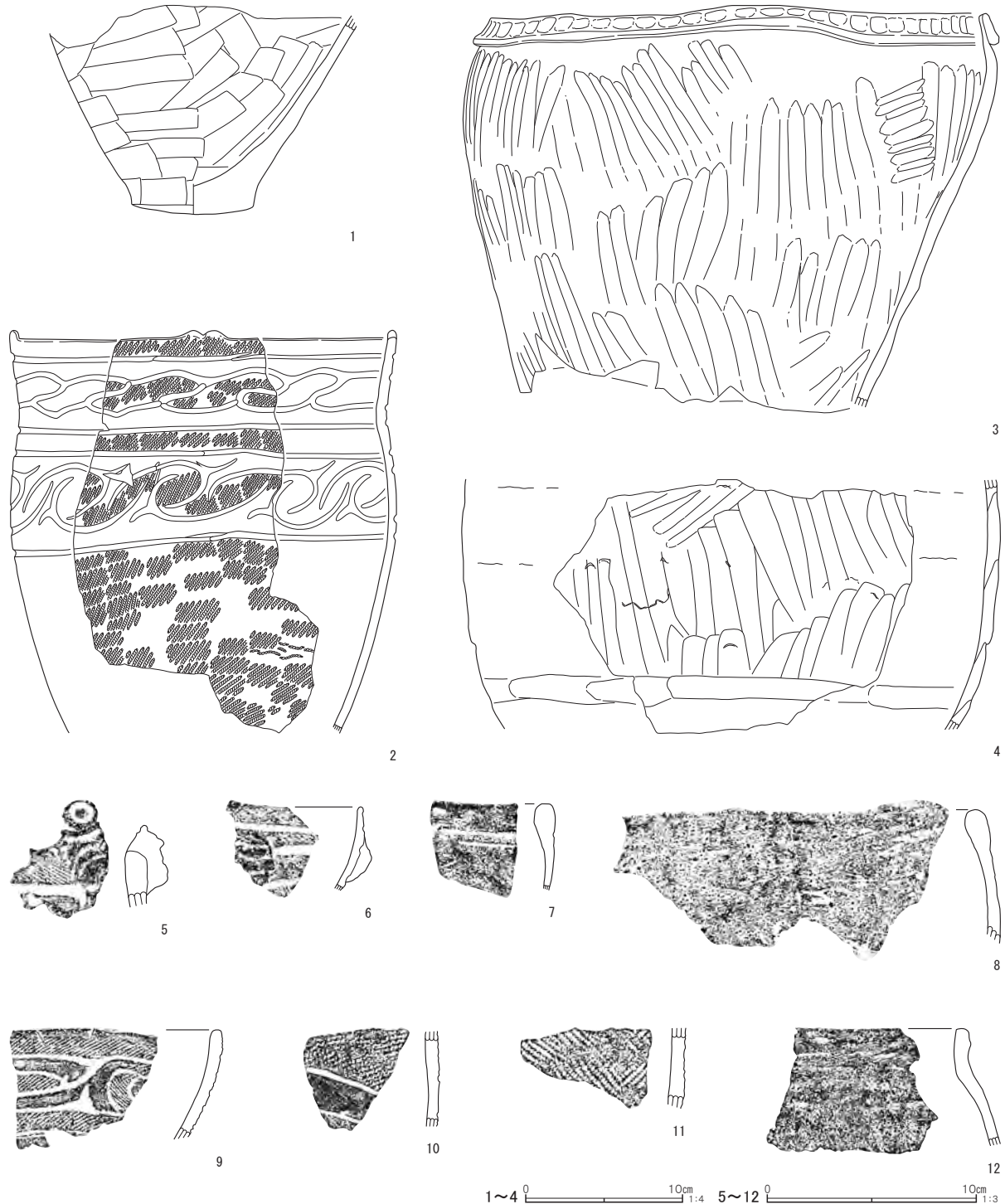
(2) 第2号土坑 (第27図)

G 2 グリッドに所在する。規模は、長径0.72 m以上、短径0.66 m、深さ0.24 mである。出土遺物は無い。

(3) 第3号土坑 (第27・28図)

E 1 グリッドに所在する。規模は、長径3.36 m、短径1.5 m、深さ0.3 mで、断面形は舟底状である。第7号竪穴建物跡を切り込む。土器片 (第28図3～13) 及びミニチュア土器 (第59図6) が出土した。

SK5

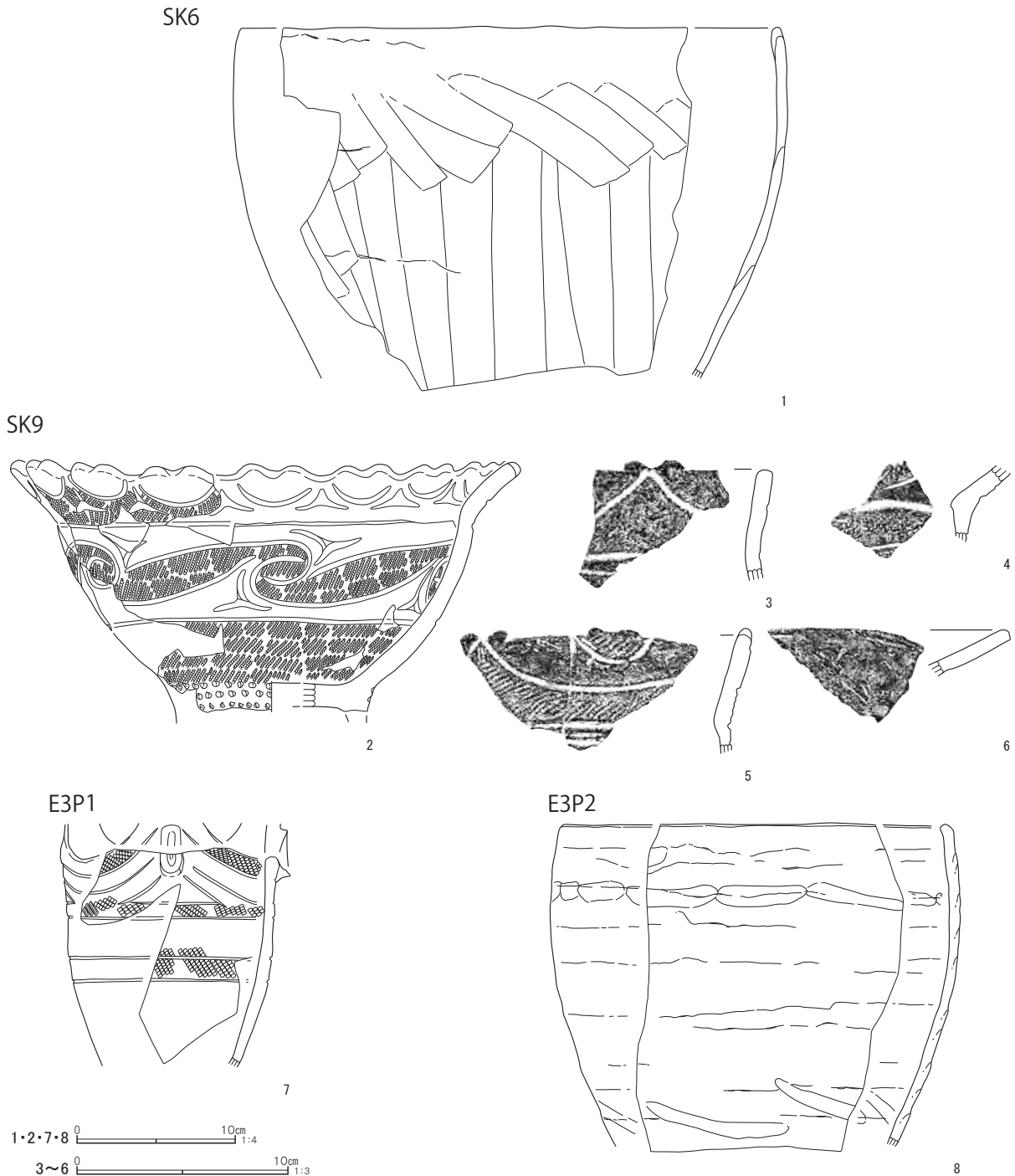


第29図 土坑・ピット出土土器 (2)

(4) 第4号土坑 (第27・28図)

F3グリッドに所在し、第1号溝跡の底面で検出した。全長3.72mで、2.16m×1.8m、深さ0.54mの土坑及び2.04m×1.38m、深さ0.6mの土坑の2つが連結した平面形状である。土層の状況からは2つは同時に存在したようだが、北東端が掘り返されている。第5号竪穴建物跡との新旧関係は不明である。第4層の白色物質が広がるのが本遺構の特徴である。

出土遺物は、土器片(第28図14~24)の他、土製円板(第54図10)、耳飾り(第56図11・21)、石剣(第60図14)、石錘(第73図12)が出土した。



第30図 土坑・ピット出土土器(3)

(5) 第5号土坑 (第27・29図)

F2グリッドに所在する。規模は、長径1.74m、短径1.26m、深さ0.42mである。第5号竪穴建物跡を切り込んでいる。埋土第1層上面から第29図1及び3、同層下面から同図2及び4が出土した。他に耳飾り(第55図39)と石錘(第73図13)が出土した。

(6) 第6号土坑 (第21・30図)

H2グリッドに所在する。第8号竪穴建物跡及び調査区壁に挟まれた径1.62m、深さ0.3mの狭長な部分を検出したが、新旧関係は不明である。粗製単純口縁の深鉢形土器片(第30図1)が出土した。

(7) 第7号土坑 (第21図)

H3グリッドに所在する。規模は、長径1.8m、短径0.9m、深さ0.18mである。第8号竪穴建物跡よりも古いと見られる。石剣(第60図2)、石錘(第73図14)が出土した。

(8) 第8号土坑 (第21図)

H3グリッドに所在する。規模は、径0.9m、深さ0.6mで、断面形は挿鉢状である。第8号竪穴建物跡よりも古いと見られる。

(9) 第9号土坑 (第27・30図)

E4グリッドに所在する。規模は、長径1.86m、短径1.38m、深さ0.1mである。台脚部を欠損した台付浅鉢形土器(第30図2)が出土した。

(10) ピット (第27・30図)

E3グリッドで、連結する3基のピットを検出した。いずれも深さ0.12mほどの断面形が皿状のもので、第1号ピットは長径1.02m、短径0.84m、第2号ピットは長径0.72m、短径0.54m、第3号ピットは径0.36mの規模で、第1号及び第2号ピットから深鉢形土器片(第30図7・8)が出土した。

## 4 性格不明遺構

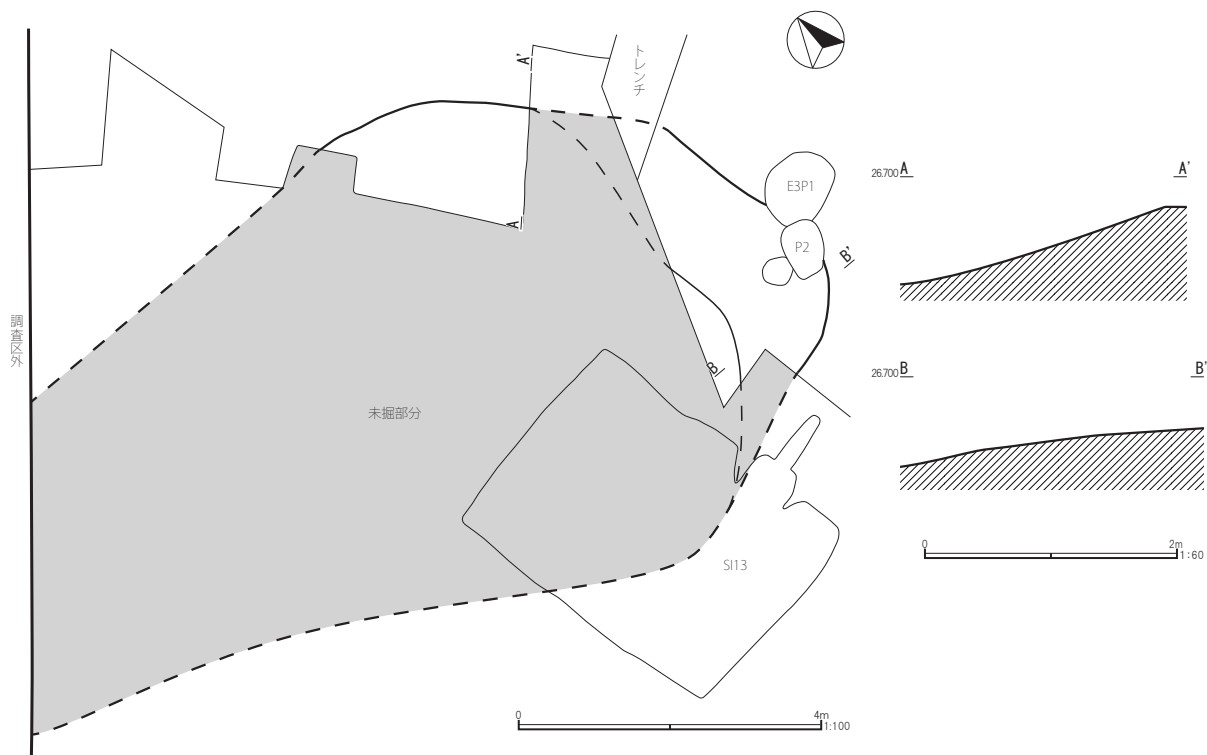
(1) 第1号性格不明遺構 (第31・32図)

遺物を包含する黒色土によって埋没し(図版5-6)、第13号竪穴建物跡の床面からC2グリッドに向けて延びていくこの落ち込みを、性格不明遺構とした。D2グリッドからE3にかけて傾斜を持って落ち込む、遺構である。検出した箇所は落ち込みの東端部にあたり、深さ約60cmを測る。

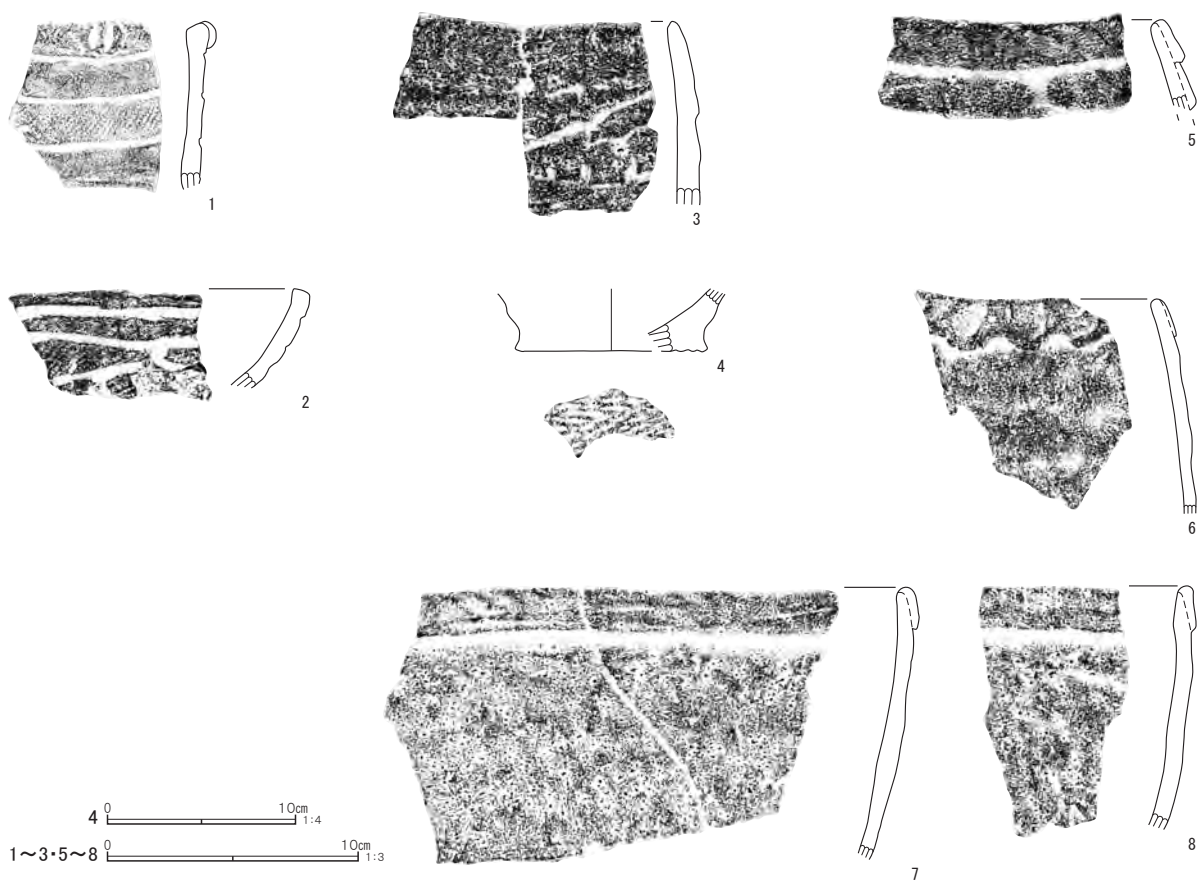
大部分が未掘となったが、地表面下2.7mまでの掘削段階における調査区壁面の土層観察により、北西壁においてこの遺構から続く落ち込みが確認できたので、第31図に示すようにしゃもじ形の平面プランを復元した。調査区内に存在したのは長さ約11mの範囲であり、東端で最大幅約7m、調査区北西壁付近での最小幅約4mを測る。この最小幅部分で確認した断面形は、底面の広い逆台形で、掘り込みの深さも約60cmであるため、東端から深さを変えずに続くと考えられる。

出土遺物は、第32図の土器の他に、大型の石皿(第66図1・3)やヒスイに似る色調の角礫(図版17-6最下段左)等がある。調査後には本遺構内に相当する地点で、大型の深鉢形土器(付編1第1図1)や、大型の石皿(付編1第1図3)が採取された(付編1参照)。今回の調査で検出した他の竪穴建物跡等では見られない遺物が包含されていたことが特筆される。





第 31 図 第 1 号性格不明遺構



第 32 図 第 1 号性格不明遺構出土土器

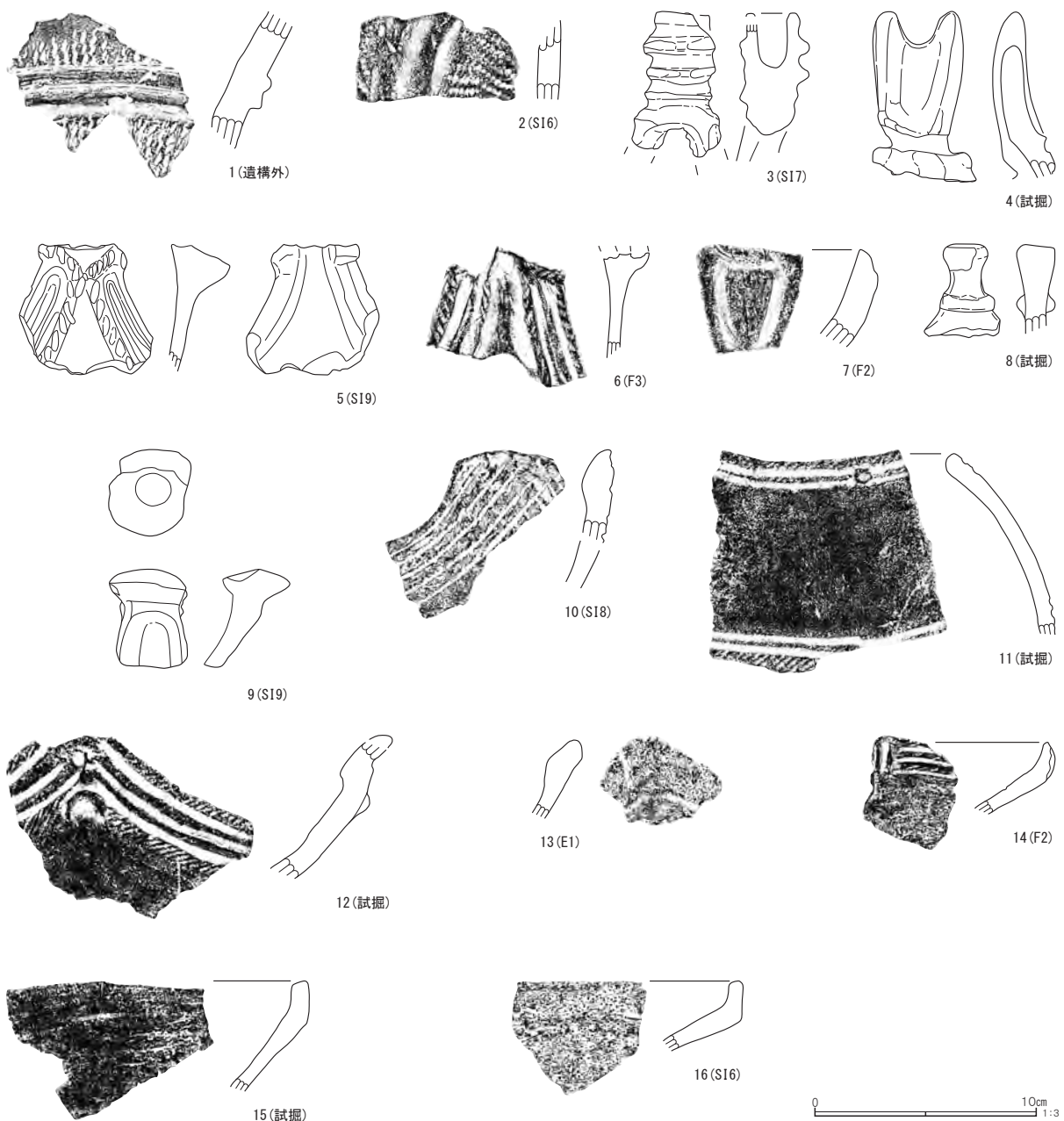
## 5 各種遺物

前節までは、各遺構に伴う土器を、遺構図に合わせて示してきたが、本節では、それ以外の土器、土製品、石器、石製品等を(1)~(12)に項に分けて集成する。

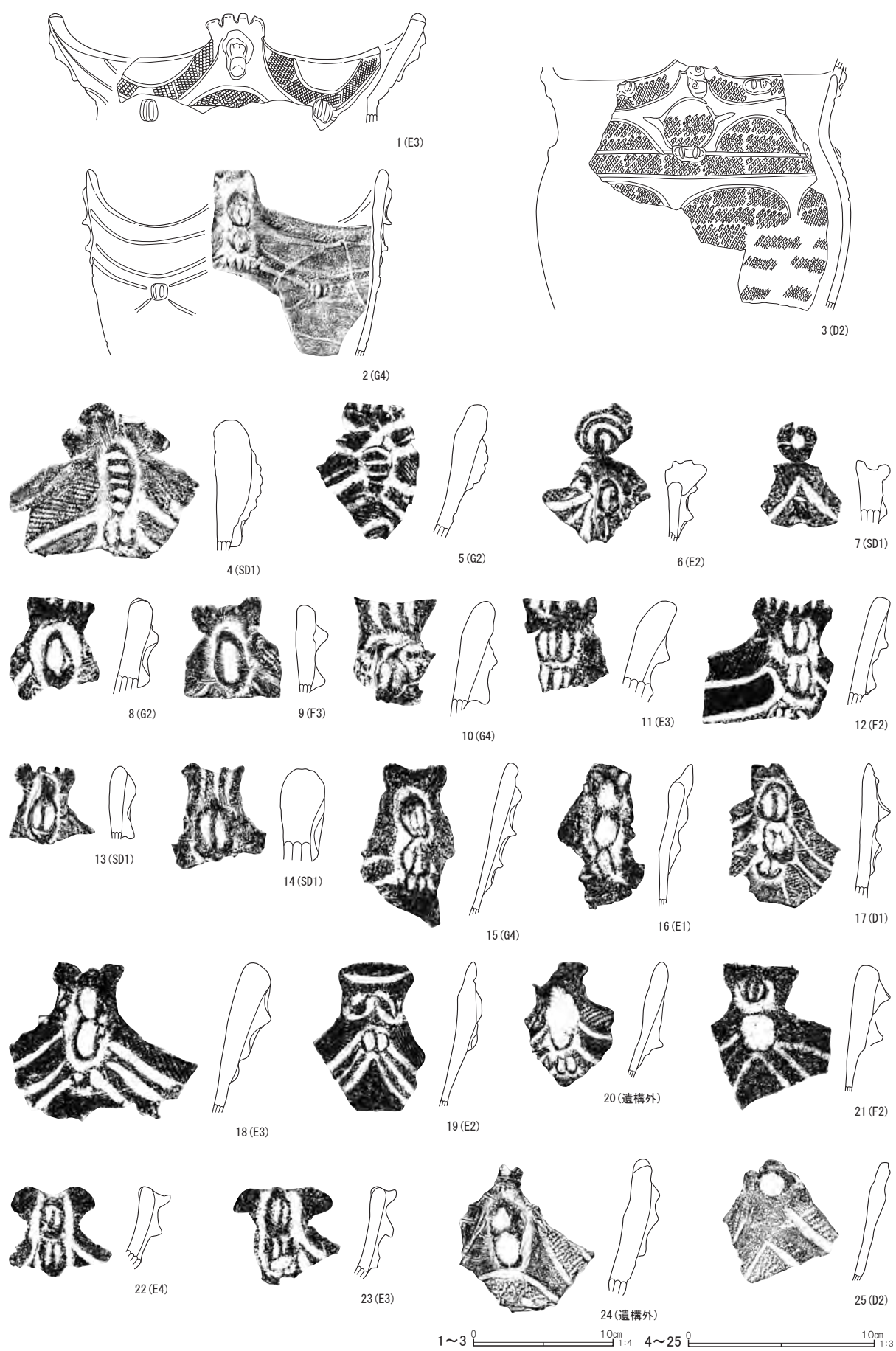
(1)では、グリッドや縄文時代以外の遺構からの出土土器、試掘調査や遺構外での採取土器を、器種ごとに分類して示し、出土位置を付記する。

(2)~(11)では、土器以外の遺物を種類ごとにまとめるが、ここには、遺構からの出土遺物も含め、第3~7表によって情報を集約する。このため、本文中の出土地点や計測値等の詳細な記述は省略する。

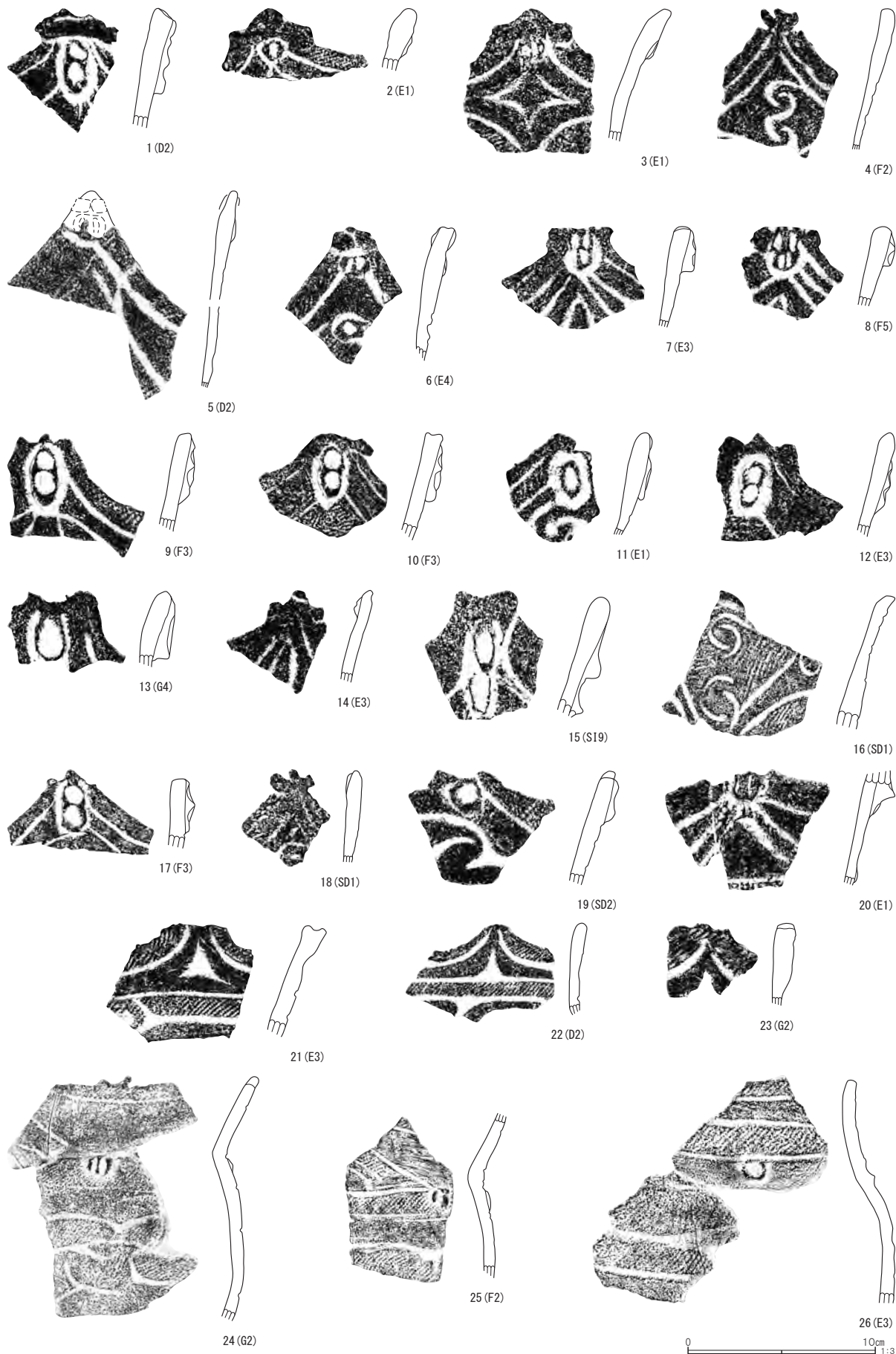
(12)では、通常の実測図では掲載できない特殊な遺物を「その他」とし、専門家による分析やコメントを用いて特性を示す（分析鑑定報告書等は付編2・3に掲載する）。



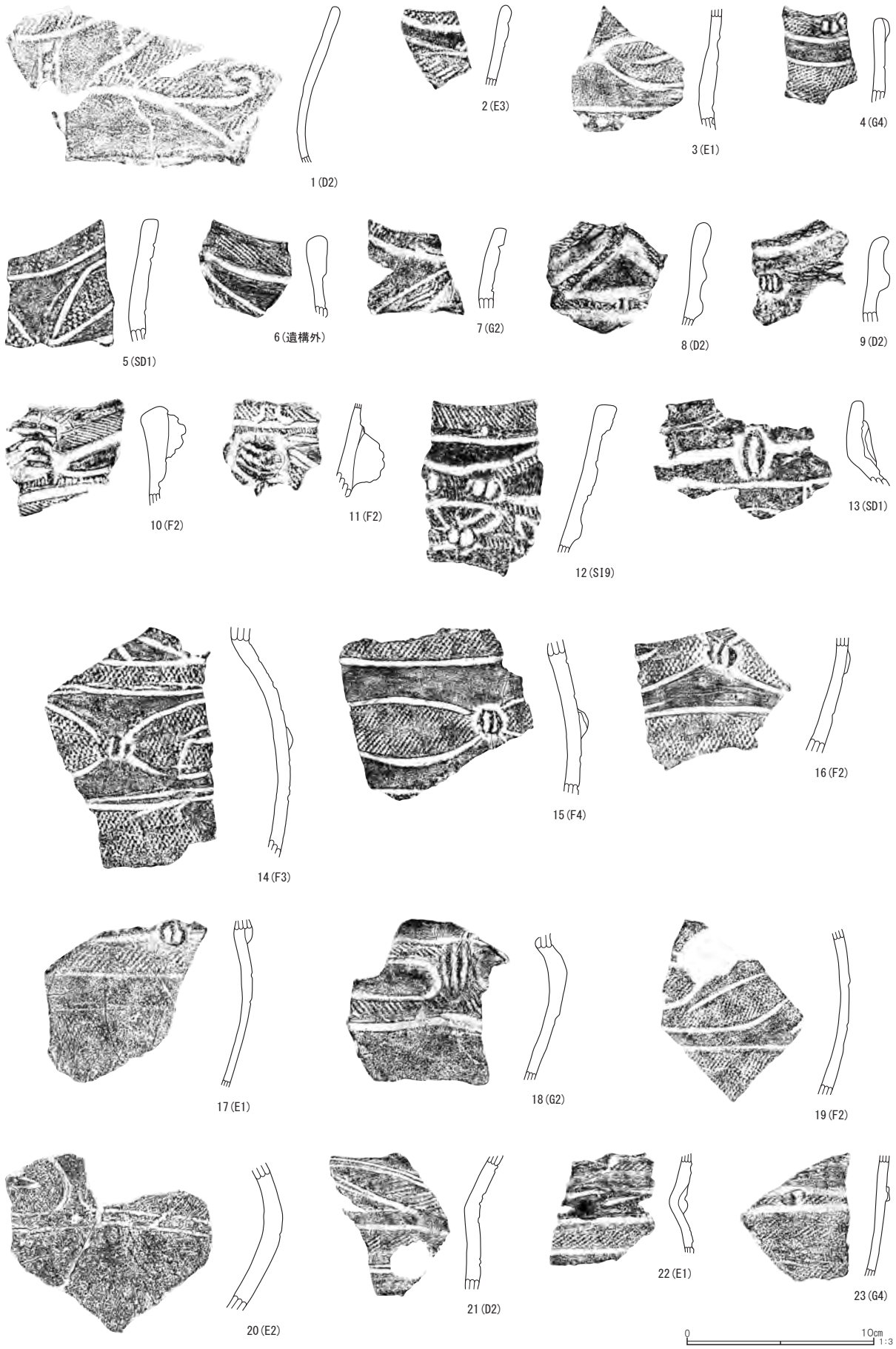
第33図 包含層等出土土器（1）



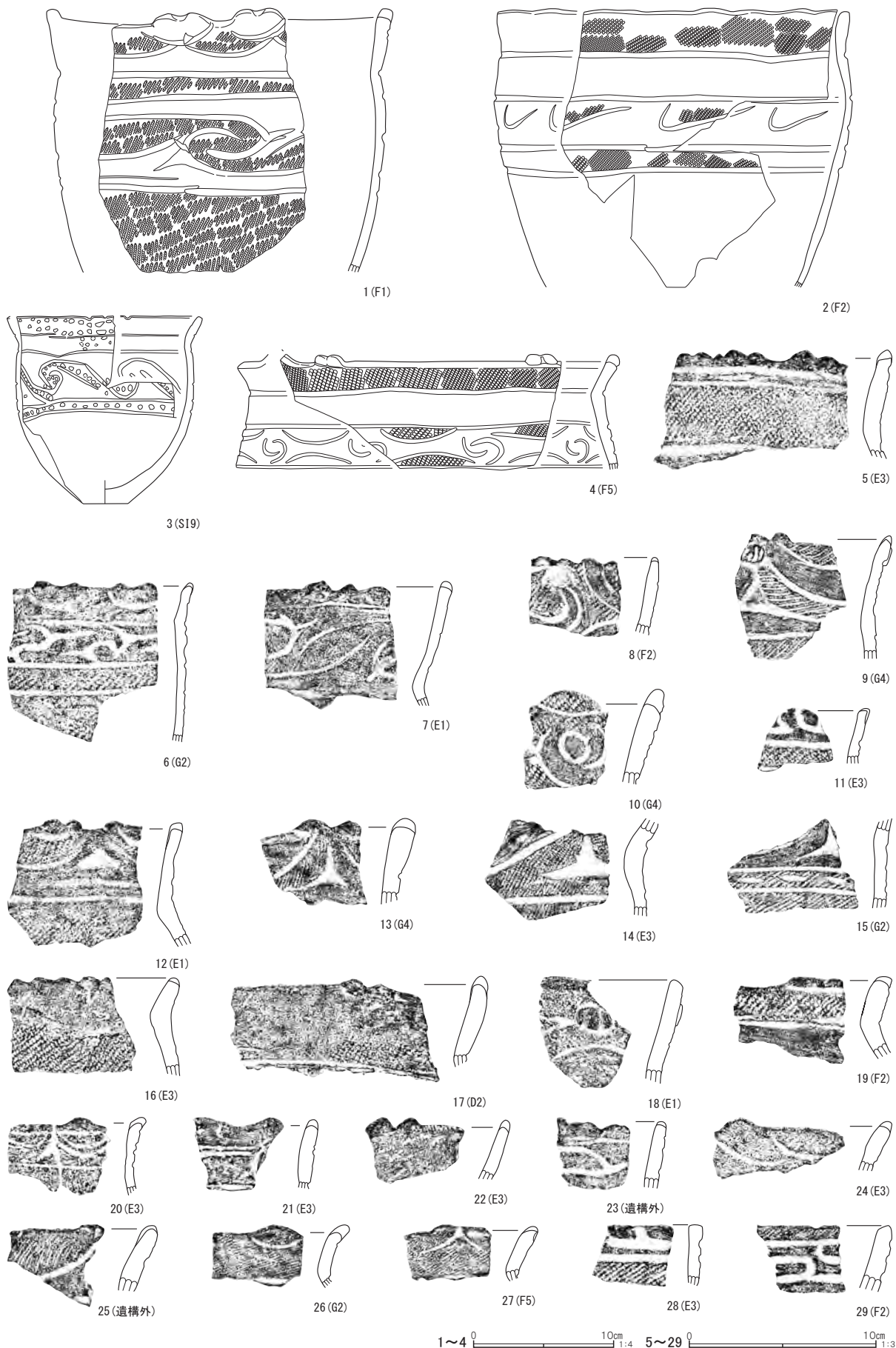
第 34 图 包含層等出土土器 (2)



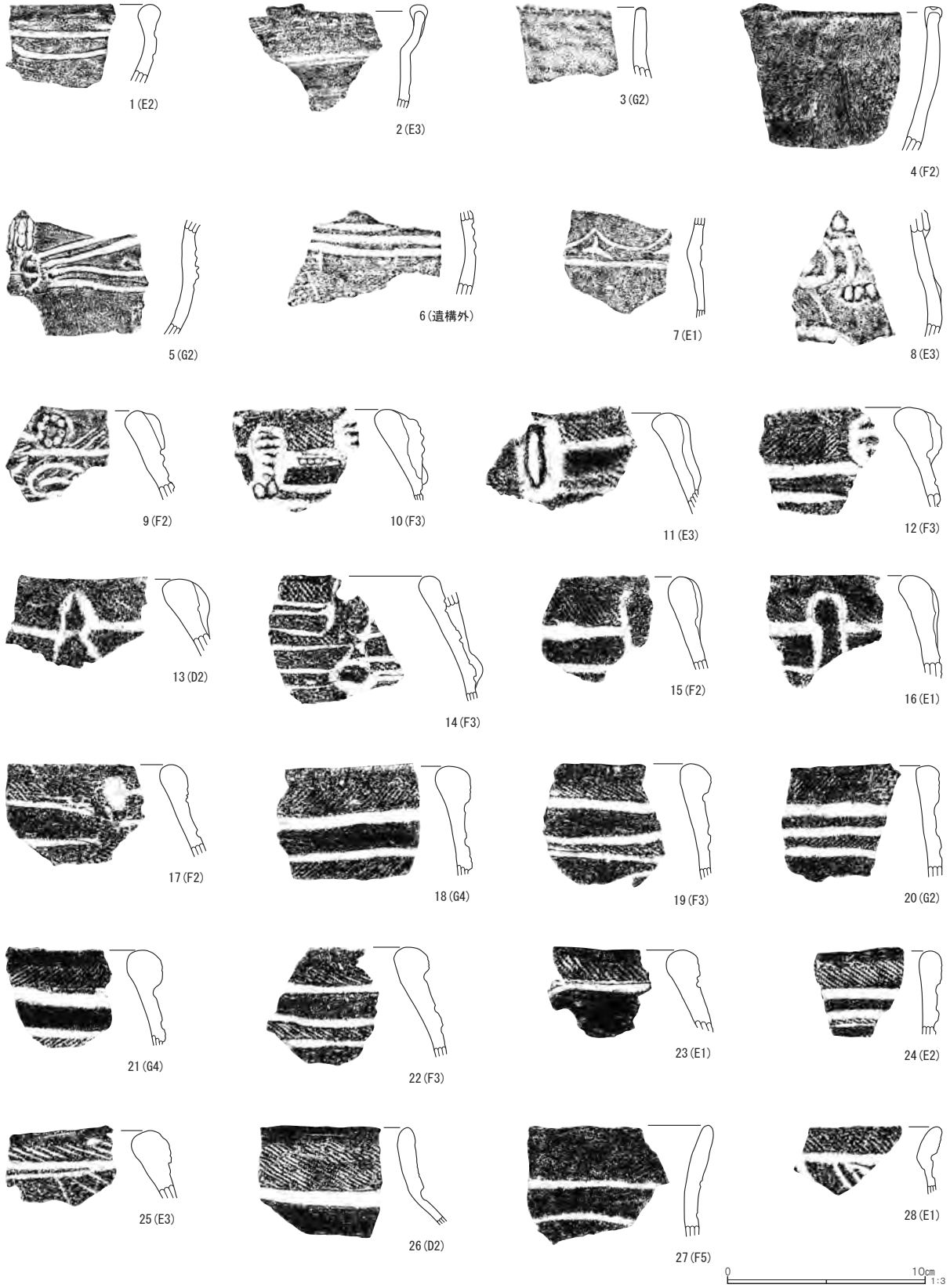
第 35 图 包含層等出土土器 (3)



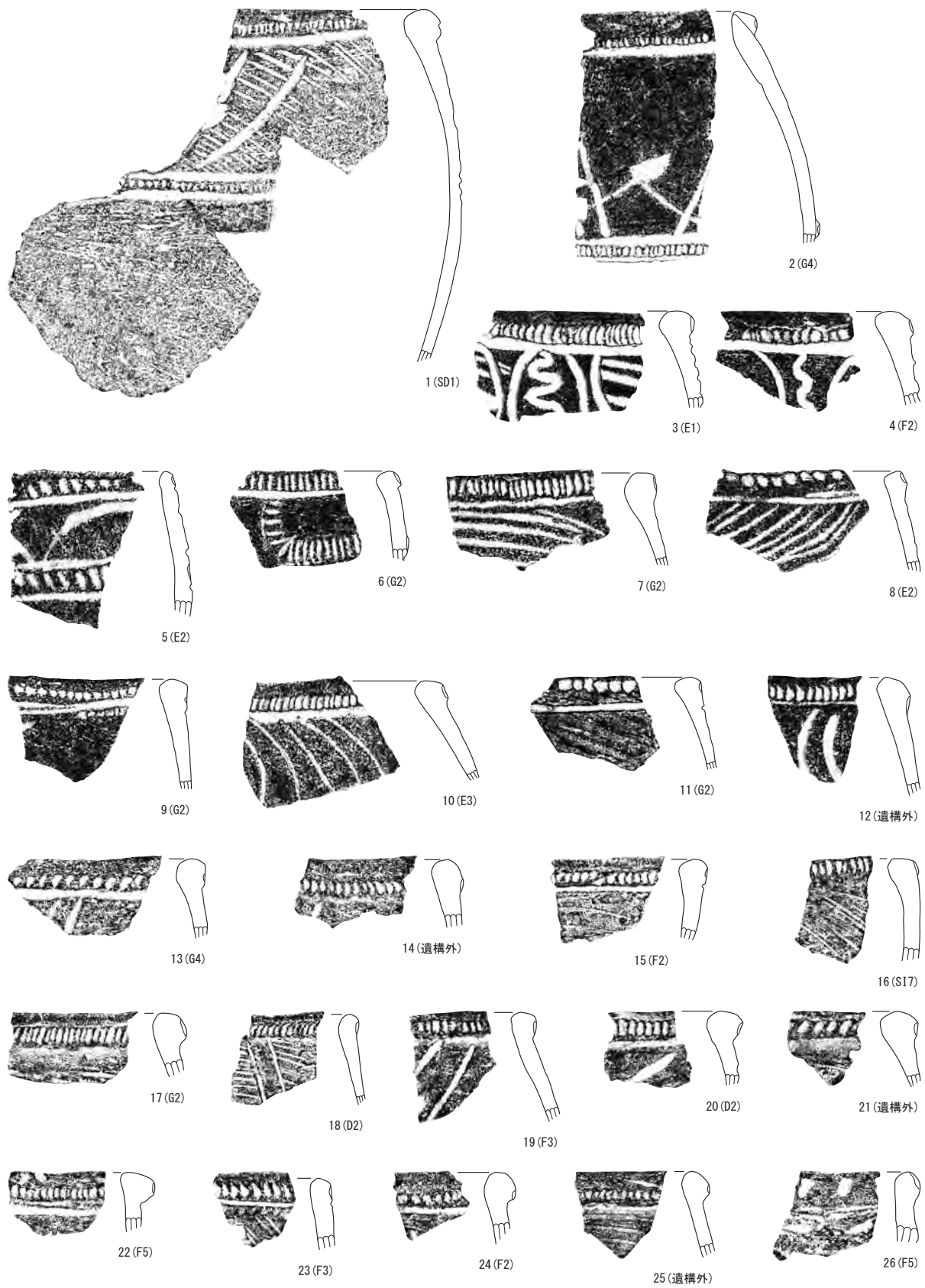
第 36 图 包含層等出土土器 (4)



第 37 图 包含層等出土土器 (5)



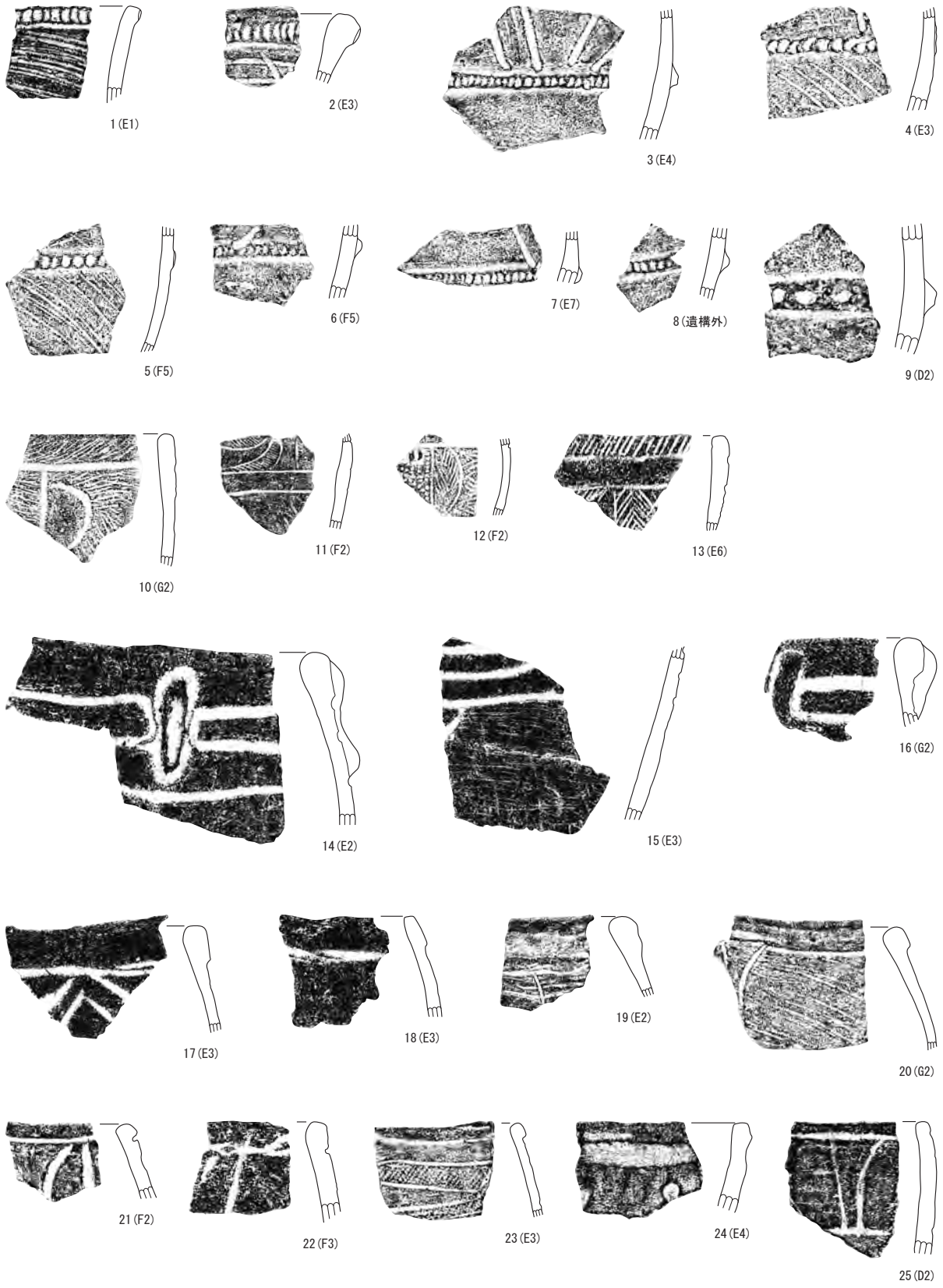
第 38 図 包含層等出土土器 (6)



0 10cm 1:3

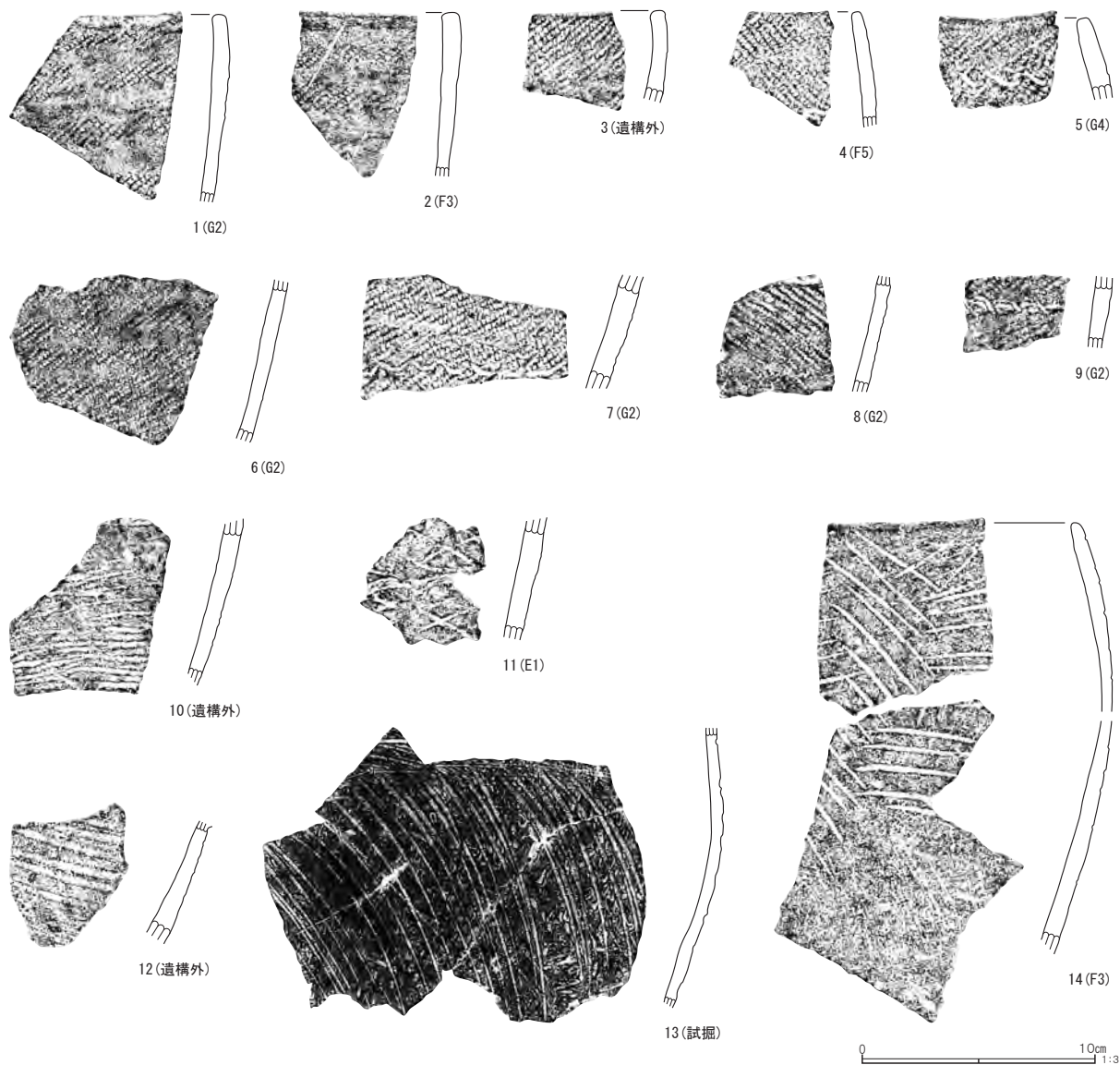
第 39 図 包含層等出土土器 (7)





0 10cm 1:3

第 40 図 包含層等出土土器 ( 8 )



第 41 図 包含層等出土土器（9）

(1) 土器（第 33 ～ 53 図）

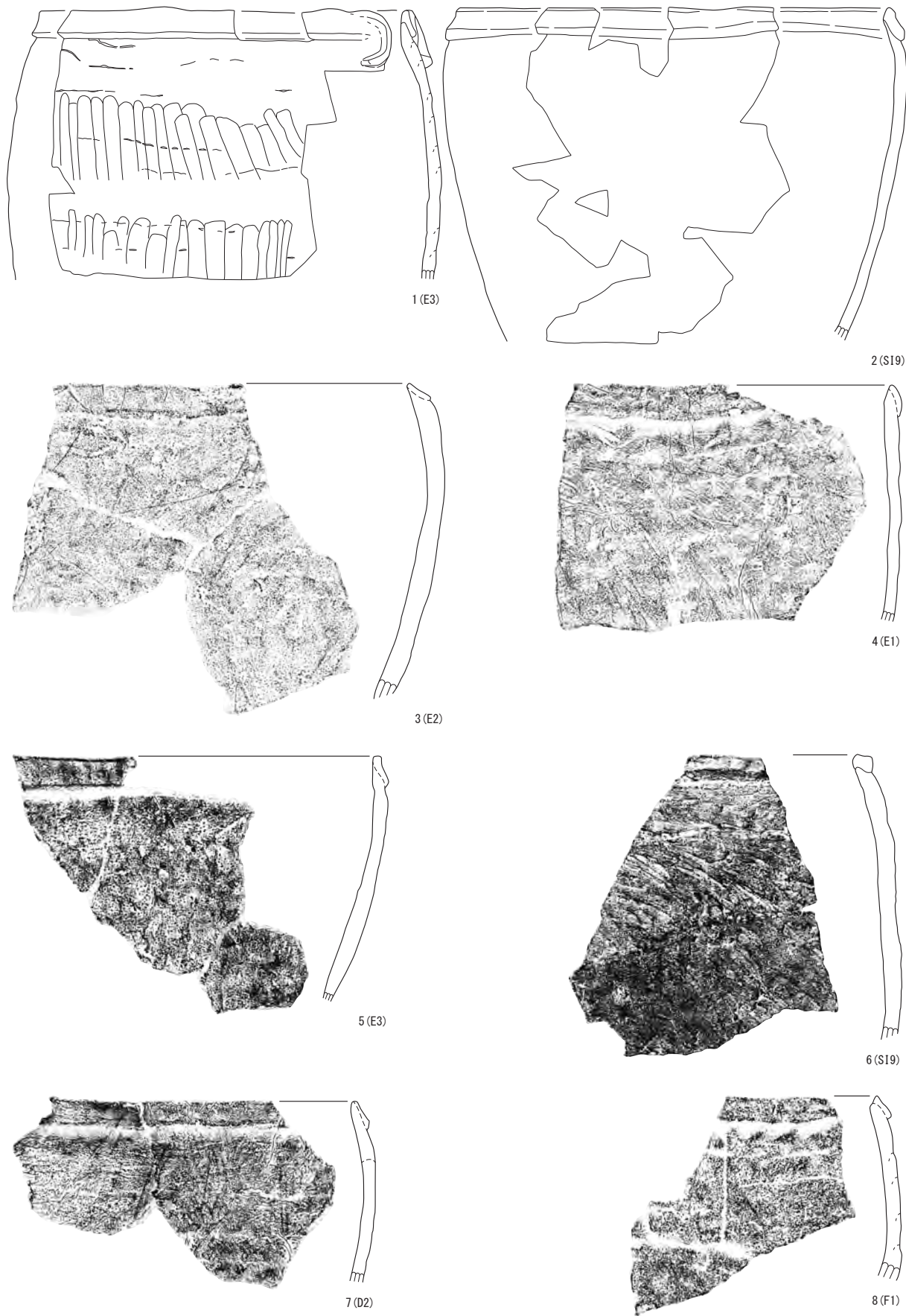
ここでは、前節までの縄文時代の遺構以外から出土した土器を、種類ごとに集成する。

第 33 図は、縄文時代晩期よりも古い段階の土器である。1・2 は加曾利 E 式で下層の遺構面に起因するものだろう。3 ～ 16 は曾谷・高井東式だが、今回の調査でこの時期の遺構は確認されていない。

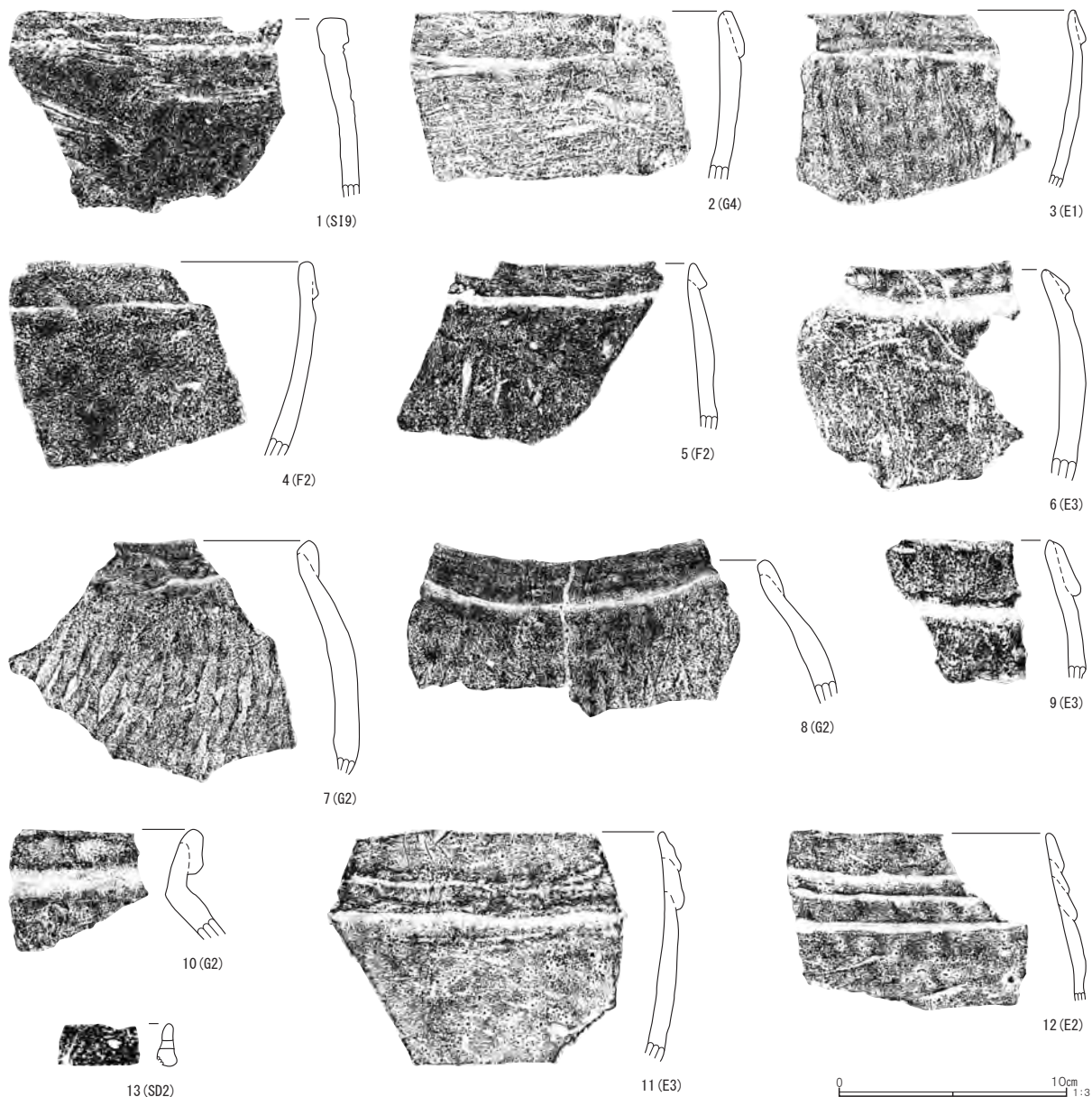
第 34 ～ 36 図は、大波状口縁の深鉢形土器である。第 34 図は安行 3 a・3 b 式が中心である。第 35 図は姥山式が中心で、波頂部の鉢巻き状貼付文、入組み弧線文が特徴的である。

第 37 ～ 40 図は、文様が施される平口縁深鉢形土器だが、文様によって分類した。第 37 図は、口縁端部に B 突起を持つ物である。第 37 図 3 は、安行 3 c 式である。第 38 図 9 ～ 28 は、口辺部の隆帯に帯縄文を持つものである。第 39 図 ～ 40 図 9 は、紐線文を持つものである。第 40 図 10 ～ 13 は、細密沈線文土器である。第 40 図 14 ～ 25 は、口辺部に無文の隆帯を持つものである。

第 41 図 1 ～ 9 は、口縁部以下に縄文を施すのみで、沈線や隆帯等による加飾はなく、大洞系と見られる。10・11 は撚糸文、12 ～ 14 は条線文が施されている。



第 42 图 包含層等出土土器 (10)

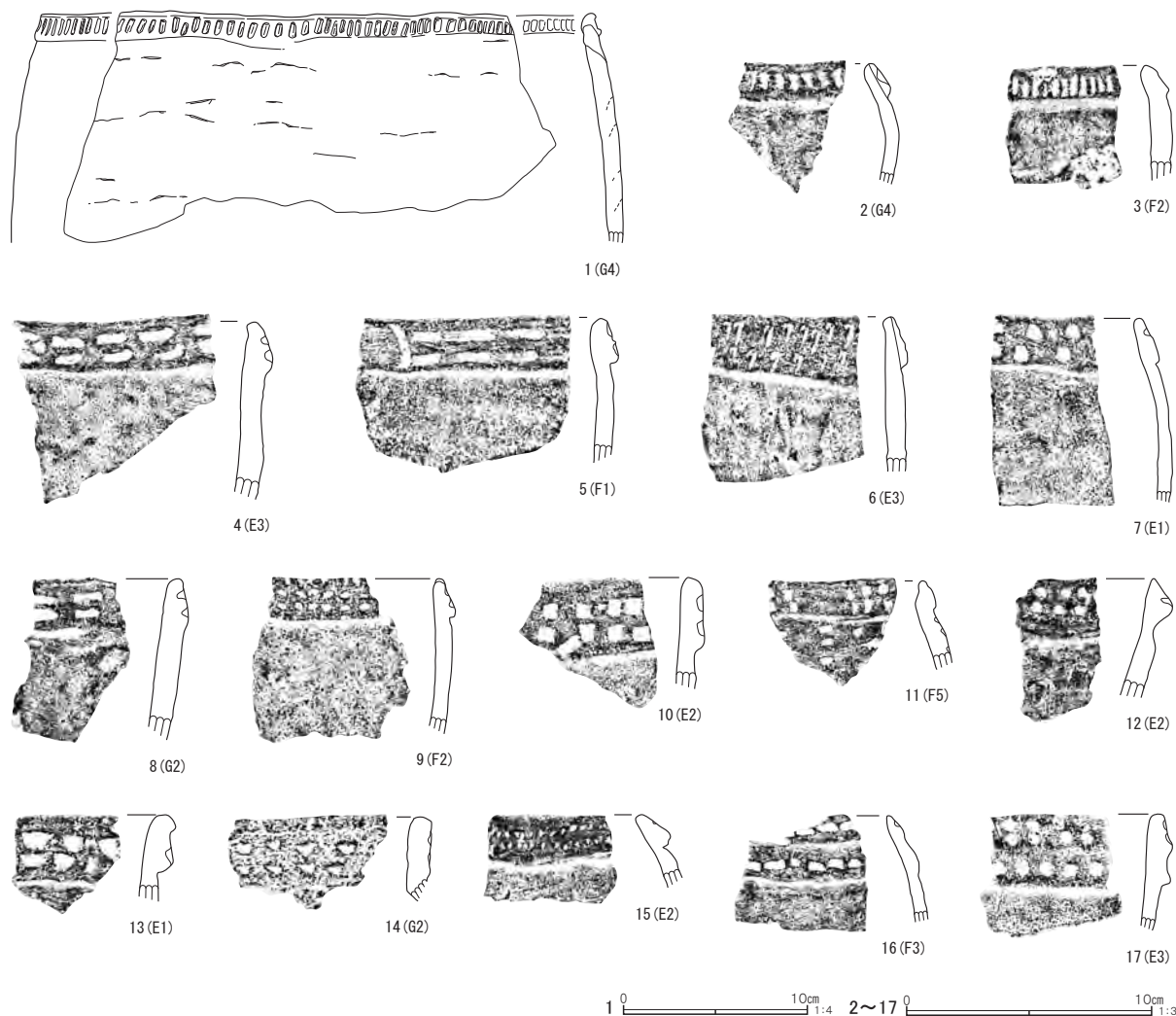


第 43 図 包含層等出土土器 (11)

第 42 ～ 46 図は粗製の深鉢形土器だが、口縁部の特徴によって分類した。第 42 ・ 43 図は、口縁部に粘土帯を貼った有段口縁のものである。第 42 図 1 は、さらに粘土紐による装飾を持つ。第 43 図 10 は、短い頸部を持つ。13 は粘土帯外面に縄文を施し、小孔を穿っている。ほとんどの有段口縁が 1 段の中にあって、11 は 2 段、12 は 3 段を作り出している。第 44 図は、粘土帯に刺突文を施すものである。第 45 ・ 46 図は、無文のものである。第 45 図 2 及び第 46 図 15 は、波状口縁である。第 45 図 4 及び第 46 図 11 ～ 14 は、屈曲した頸部を持つ。第 46 図 9 ・ 10 は、口縁内面に粘土紐を貼り付けて隆帯を作っている。第 46 図 16 は、円形の貼付文を持つ。第 46 図 17 ～ 25 は、器肉が薄く、被熱による器面の剥離が著したため、製塩土器と考えられる。

第 47 図は深鉢形土器の底部だが、1 ～ 8 の底径が小さいものは胎土や成形が精緻である。11 ・ 12 は、上げ底である。底面に編み物や木葉の敷物痕が有るものは拓影図を載せた。

第 48 ～ 51 図は、浅鉢形土器である。安行 3 a ・ 3 b 式のものを中心と見られるが、第 48 図 9 ～ 22 は、



第44図 包含層等出土土器 (12)

羊歯状文を有する大洞式のものである。

第51図12～28は台付鉢形土器の台脚部で、全容の判るものは無いが浅鉢に付く可能性が大きい。22～28は精緻な文様を持つ小片で、壺形土器の口縁部のように見えるが、透かし孔を持っている。

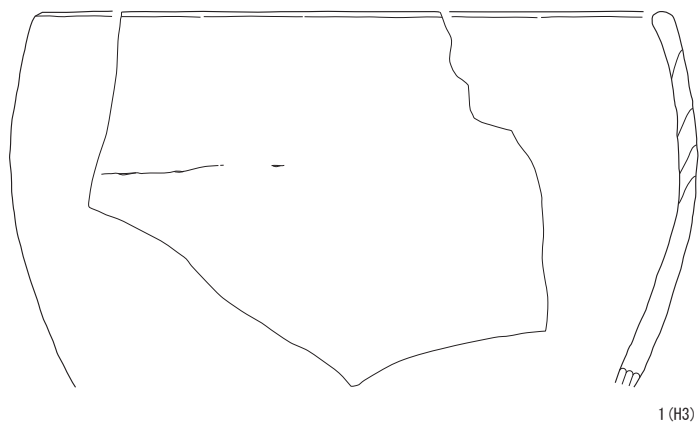
第52図は、1～20が壺形土器、21～36が注口土器である。11～13は、柑状の小型壺である。

第53図には、少数ながら特色ある文様の土器を掲載した。1～16は、列点文・刺突文が施された土器であるが、11～16は沈線文や円形貼付文に刺突文を合わせる天神原式と見られる。また、17・18は同一個体の浅鉢形土器だが、縦位の入組み弧線文から姥山式と見られる。

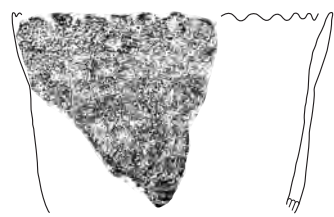
第33図以外は、晩期前葉の安行3a・3b式期を中心とする時期のものだが、晩期安行式土器以外の姥山式土器、天神原式土器、大洞式土器について、器種分類によって分散して掲載したものを集約する。

姥山式土器では、波頂部の鉢巻き状貼付文や入組み弧線文等を特徴とする大波状口縁深鉢（第34図25、第35図1～18、第36図1）や浅鉢（第53図17・18）、細密沈線文土器（第40図10～13）が認められる。

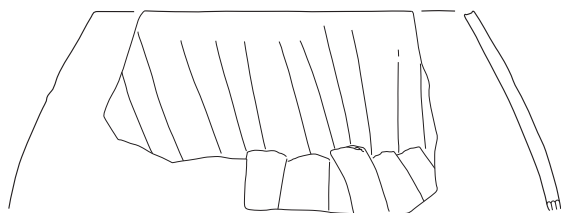
天神原式土器では、粗製の有段口縁深鉢の存在が顕著で、無文粘土帯のもの（第42図1～8、第43図1～12）が主流だが、粘土帯に刺突文を施すもの（第44図1～17）も目立つ。胴部に文様を施すも



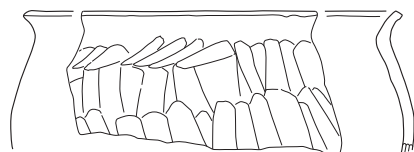
1 (H3)



2 (E6)



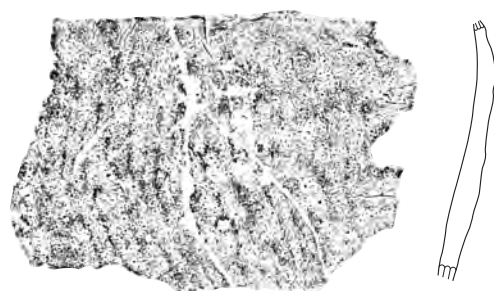
3 (E2)



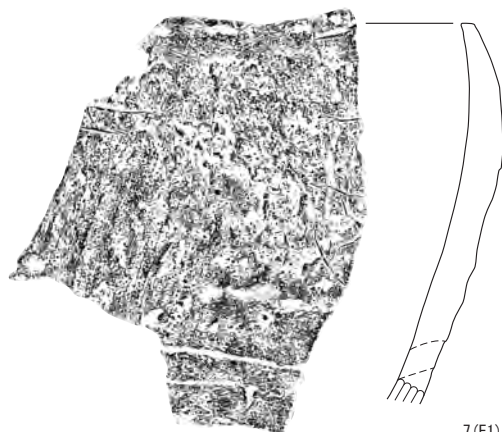
4 (D2)



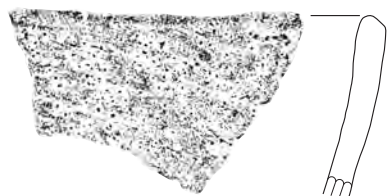
5 (F3)



6 (D2)



7 (E1)



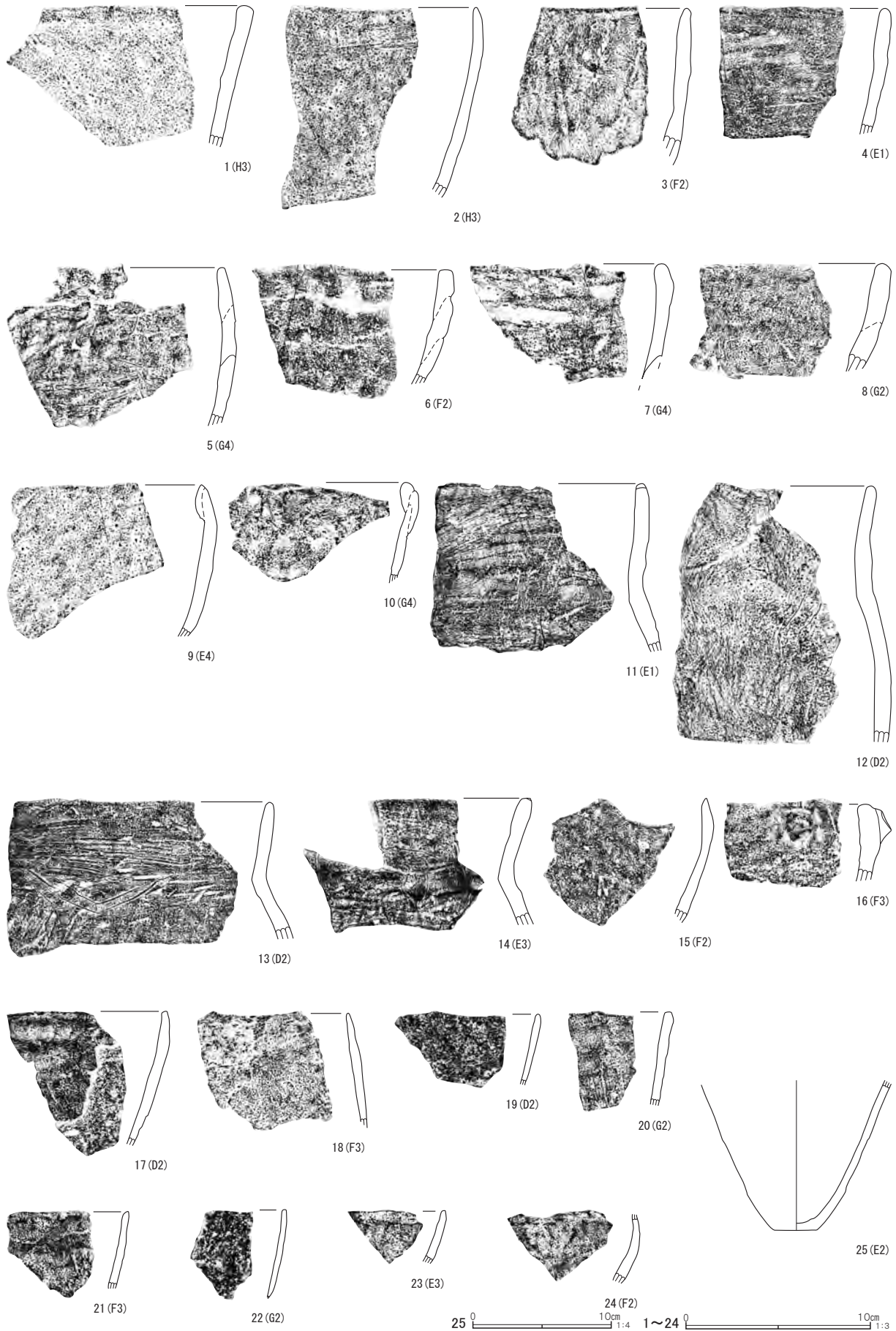
8 (G4)



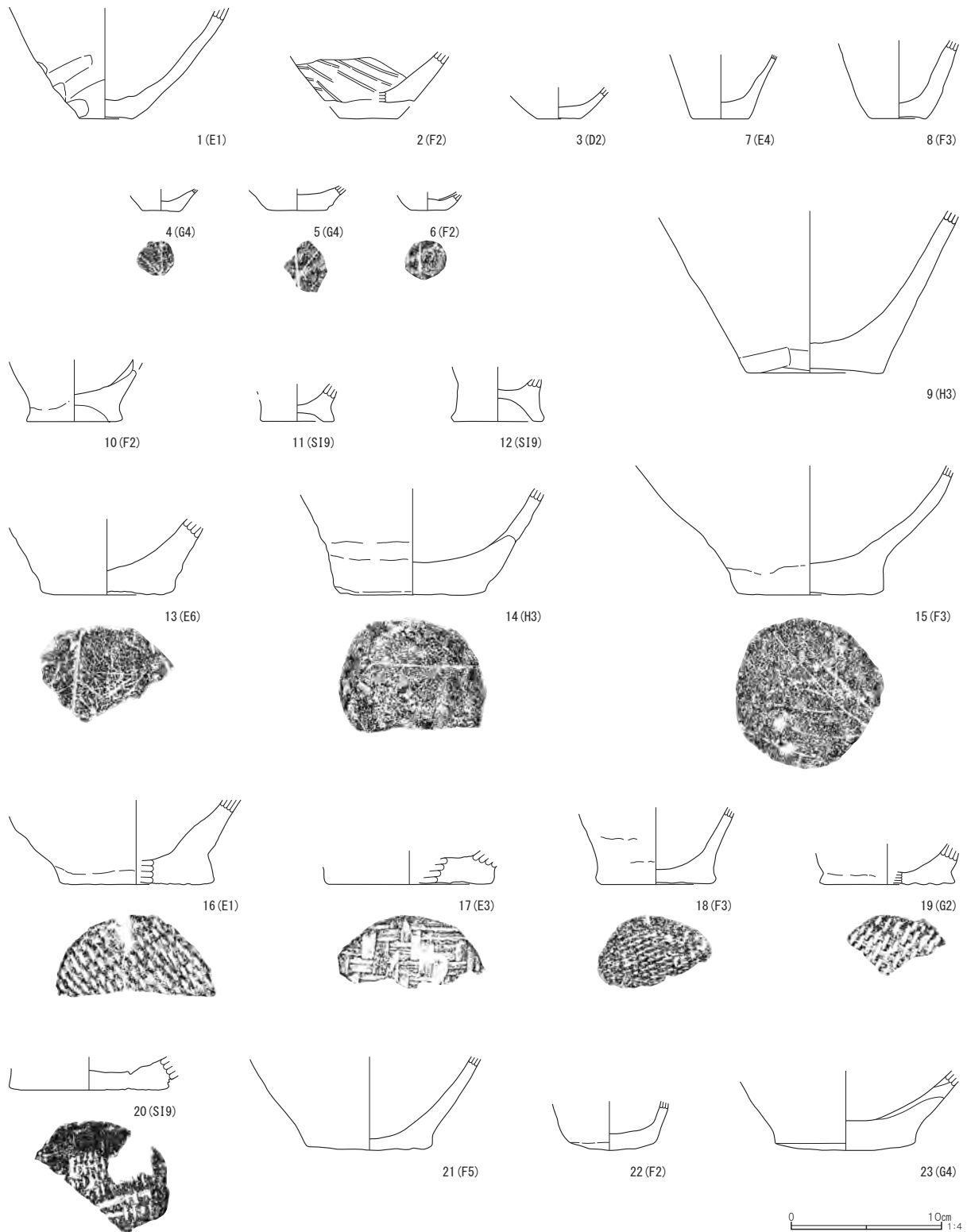
9 (E4)

1~4 0 10cm 1:4 5~9 0 10cm 1:3

第 45 图 包含層等出土土器 (13)



第 46 图 包含層等出土土器 (14)

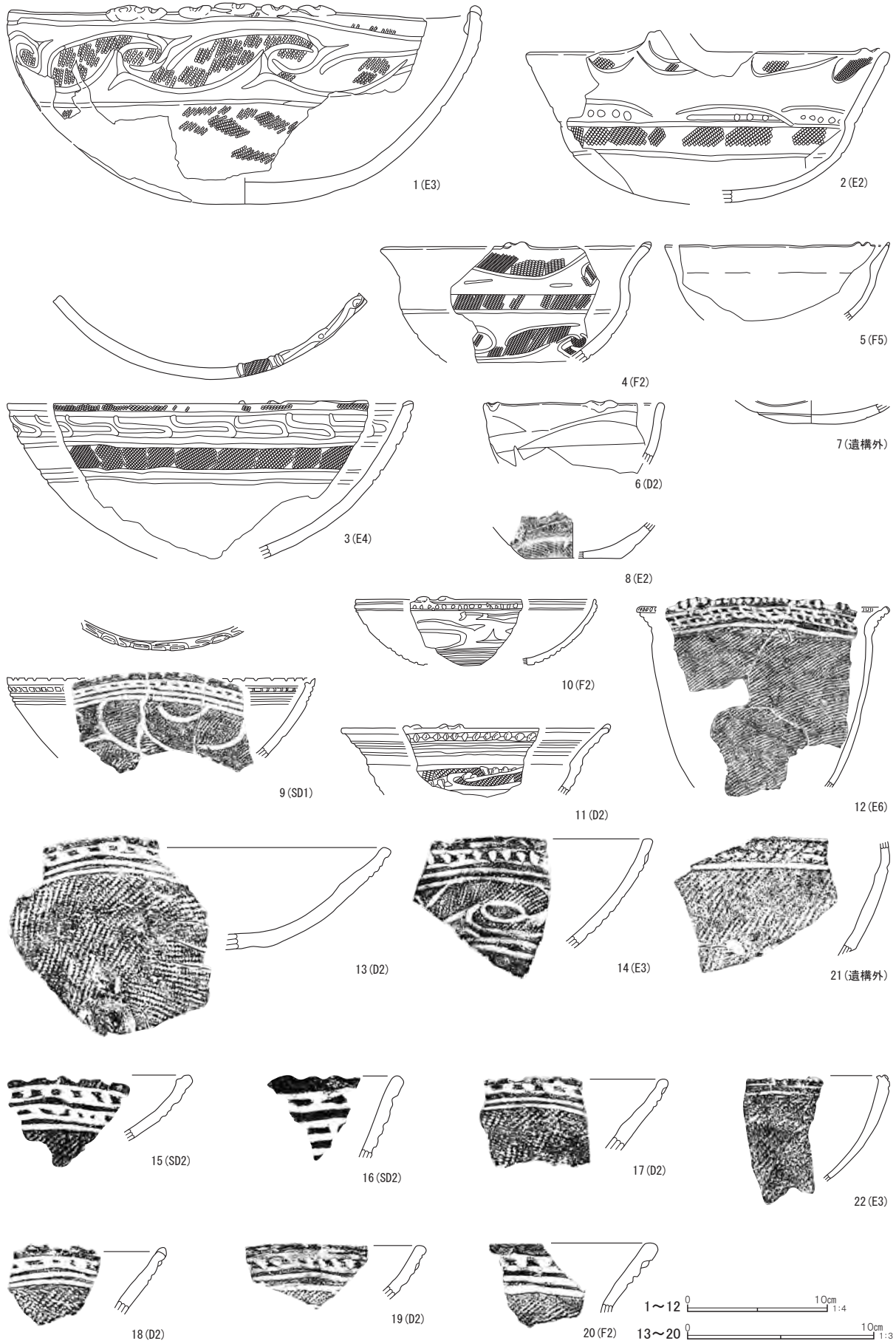


第 47 図 包含層等出土土器 (15)

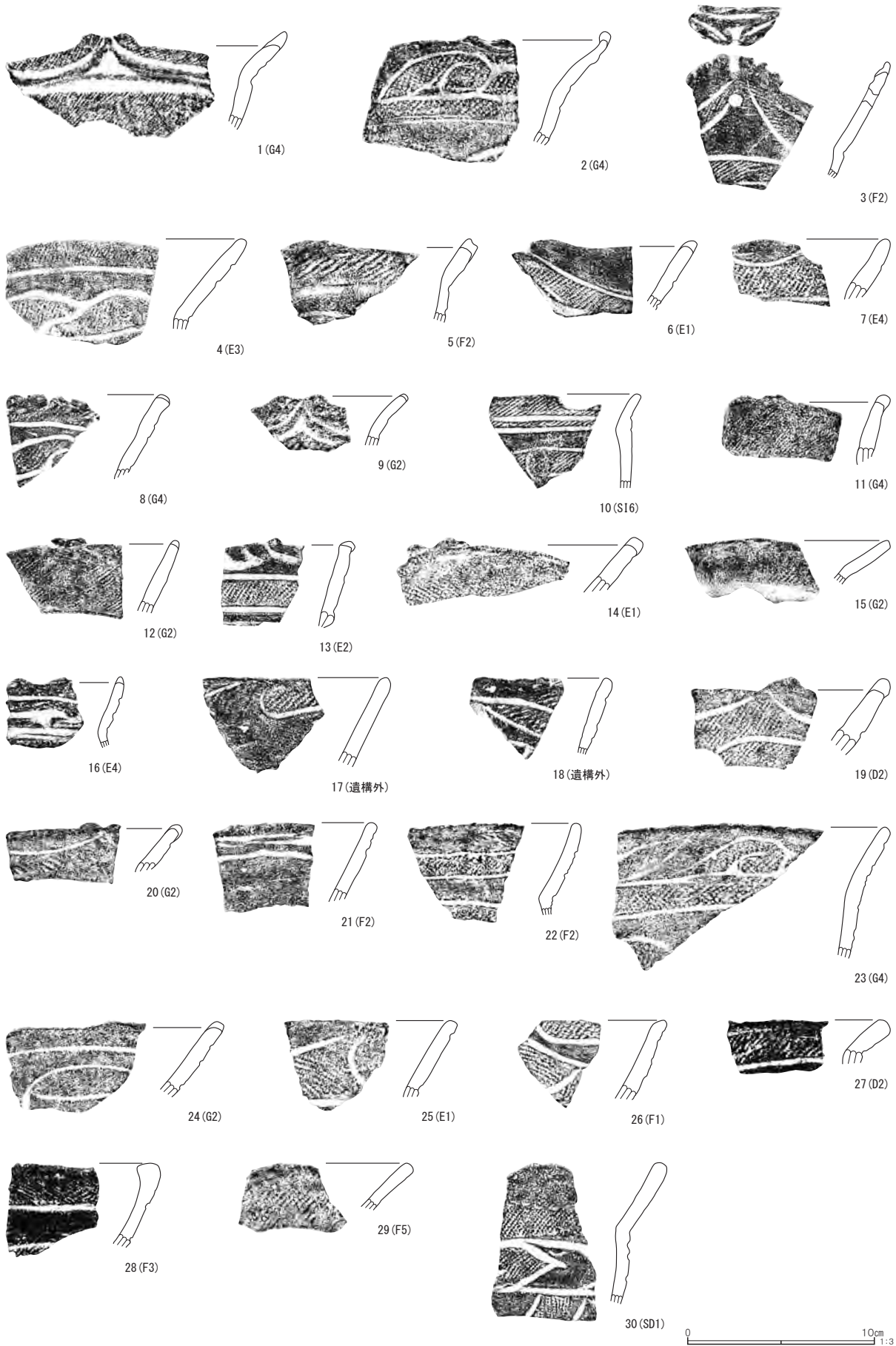
のは少ないが、付編 1 の第 1 図 1 の土器をはじめとして、沈線文、貼付文、刺突文を組み合わせた文様をもつ破片が数点認められる (第 38 図 5、第 53 図 11 ~ 16)。

大洞式土器は、羊歯状文が施される浅鉢 (第 48 図 9 ~ 20) の他、単節縄文のみが施文された深鉢 (第 41 図 1 ~ 9) もある。これらは、安行式土器との共伴から大洞 B 1 ~ B C 式と見られる。

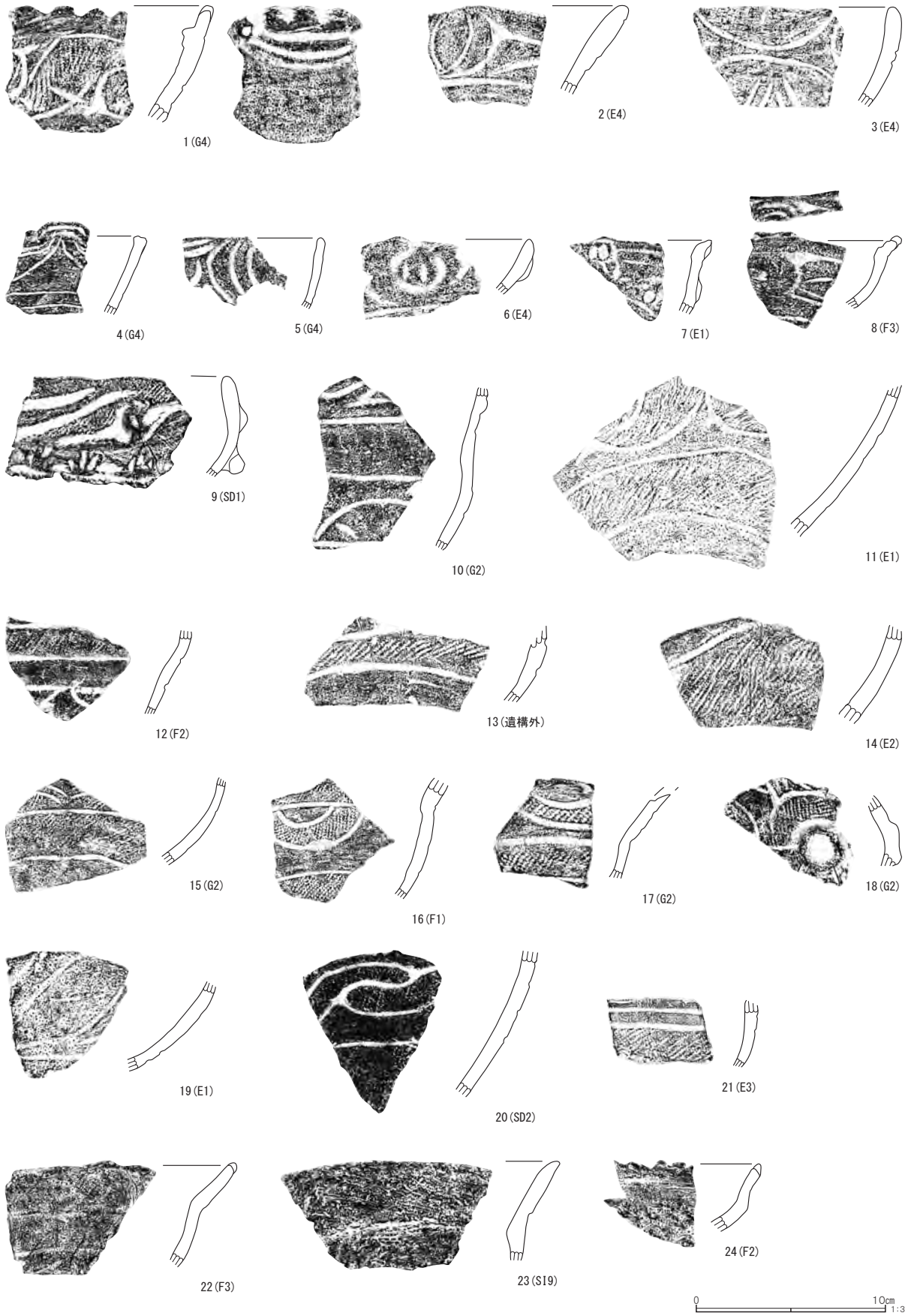




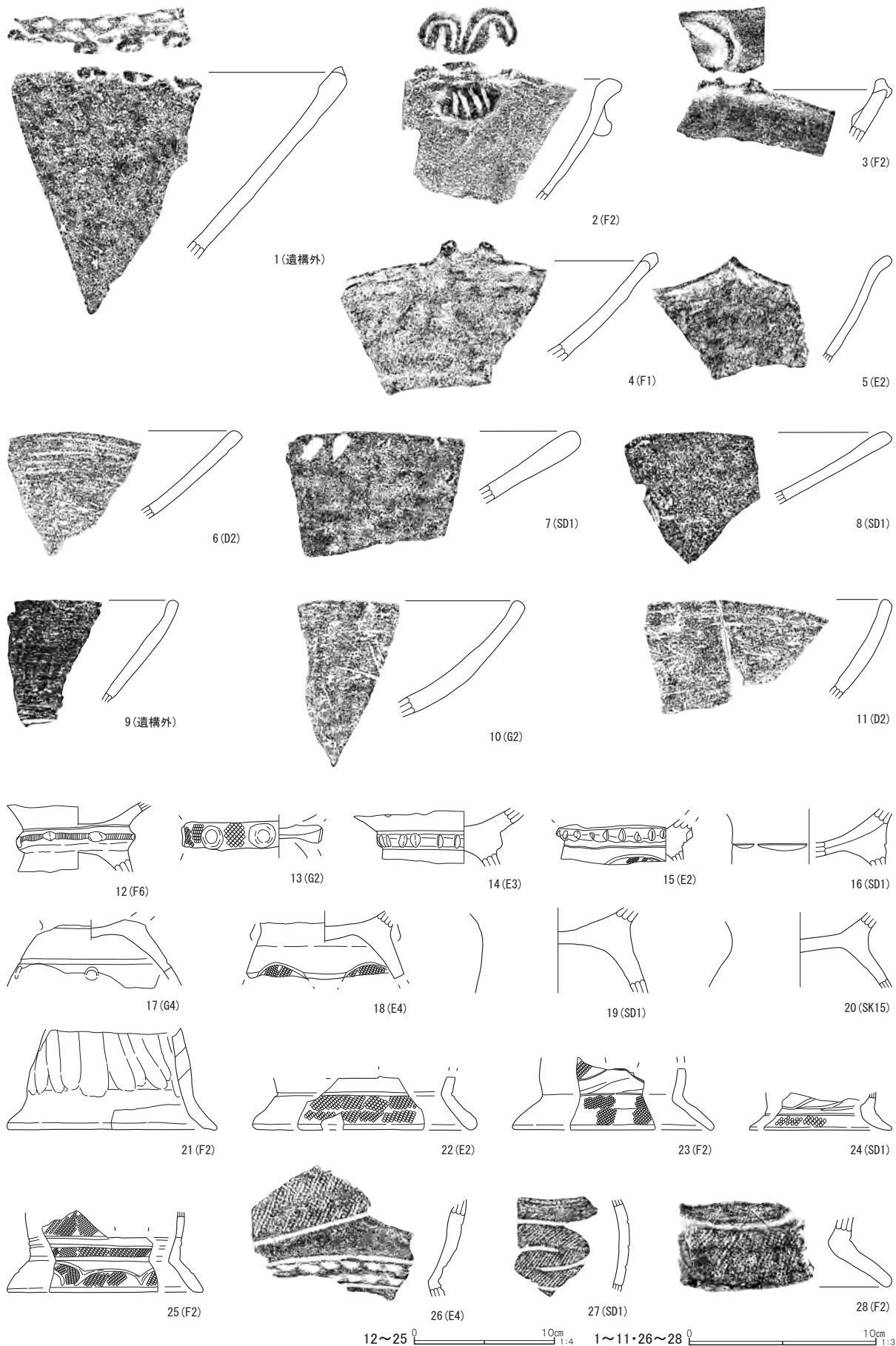
第 48 图 包含層等出土土器 (16)



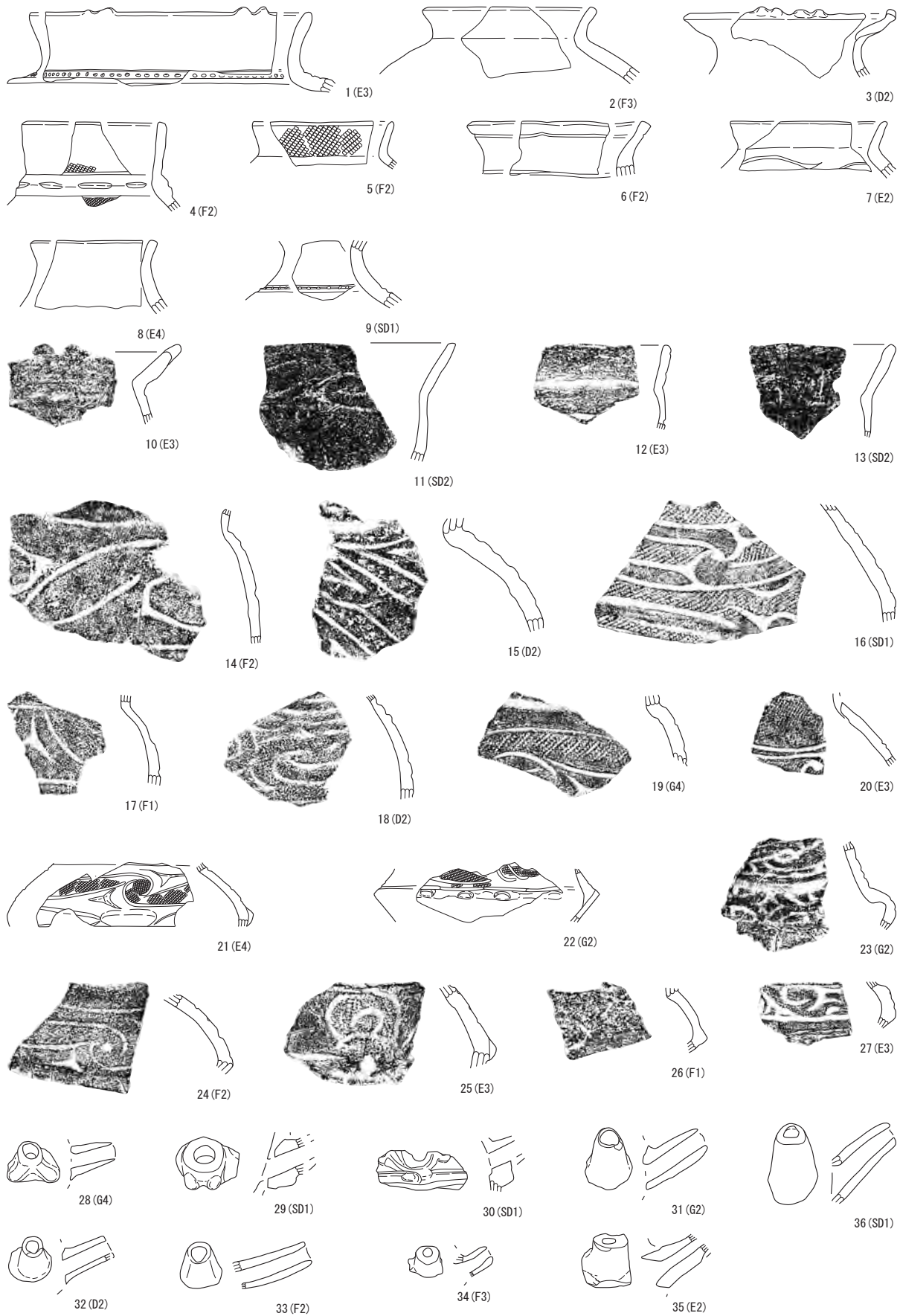
第 49 图 包含層等出土土器 (17)



第 50 図 包含層等出土土器 (18)

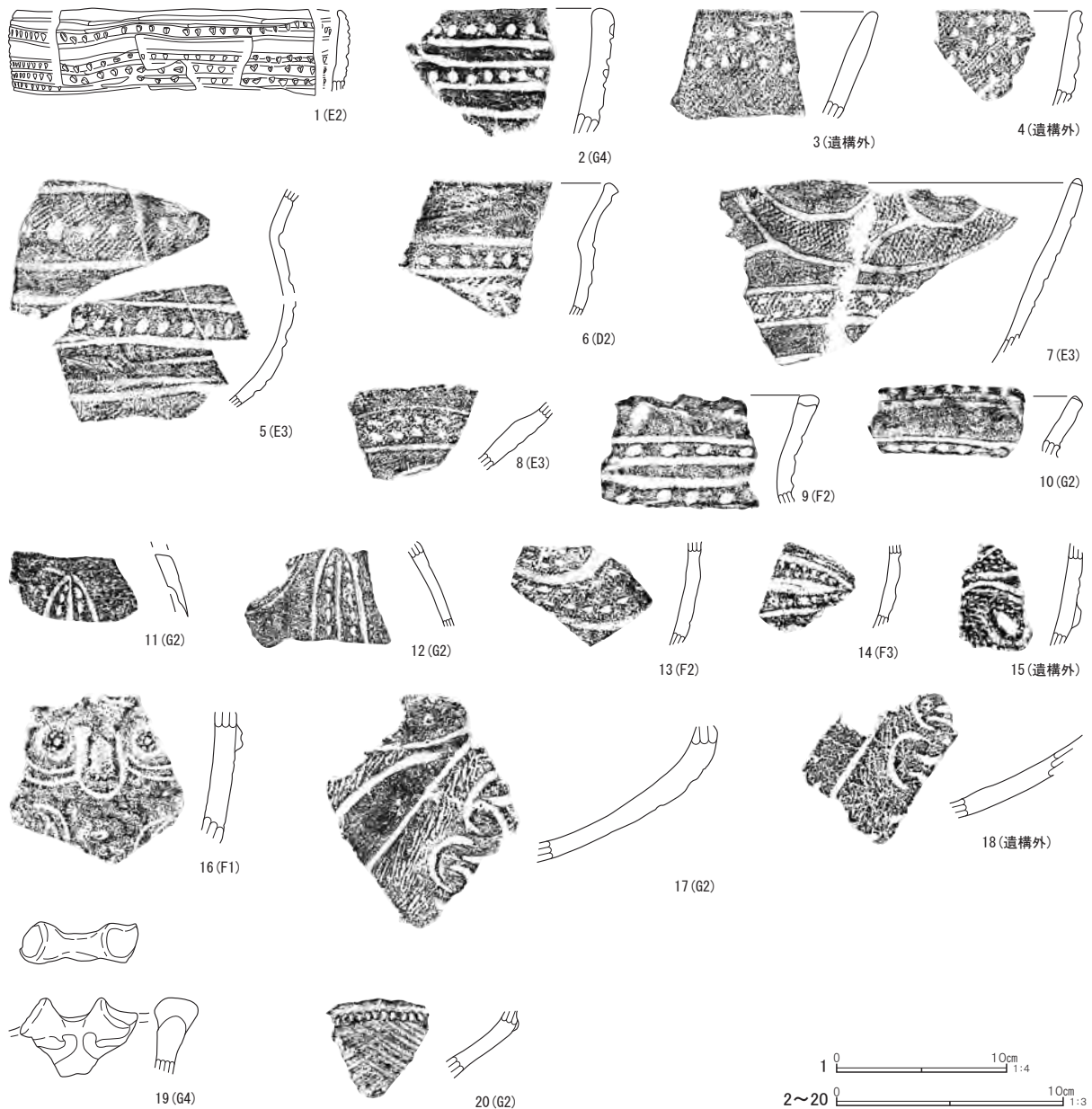


第 51 図 包含層等出土土器 (19)



1~9·21·22·28~36 0 10cm 1:4 10~20·23~27 0 10cm 1:3

第 52 图 包含層等出土土器 (20)



第 53 図 包含層等出土土器 (21)

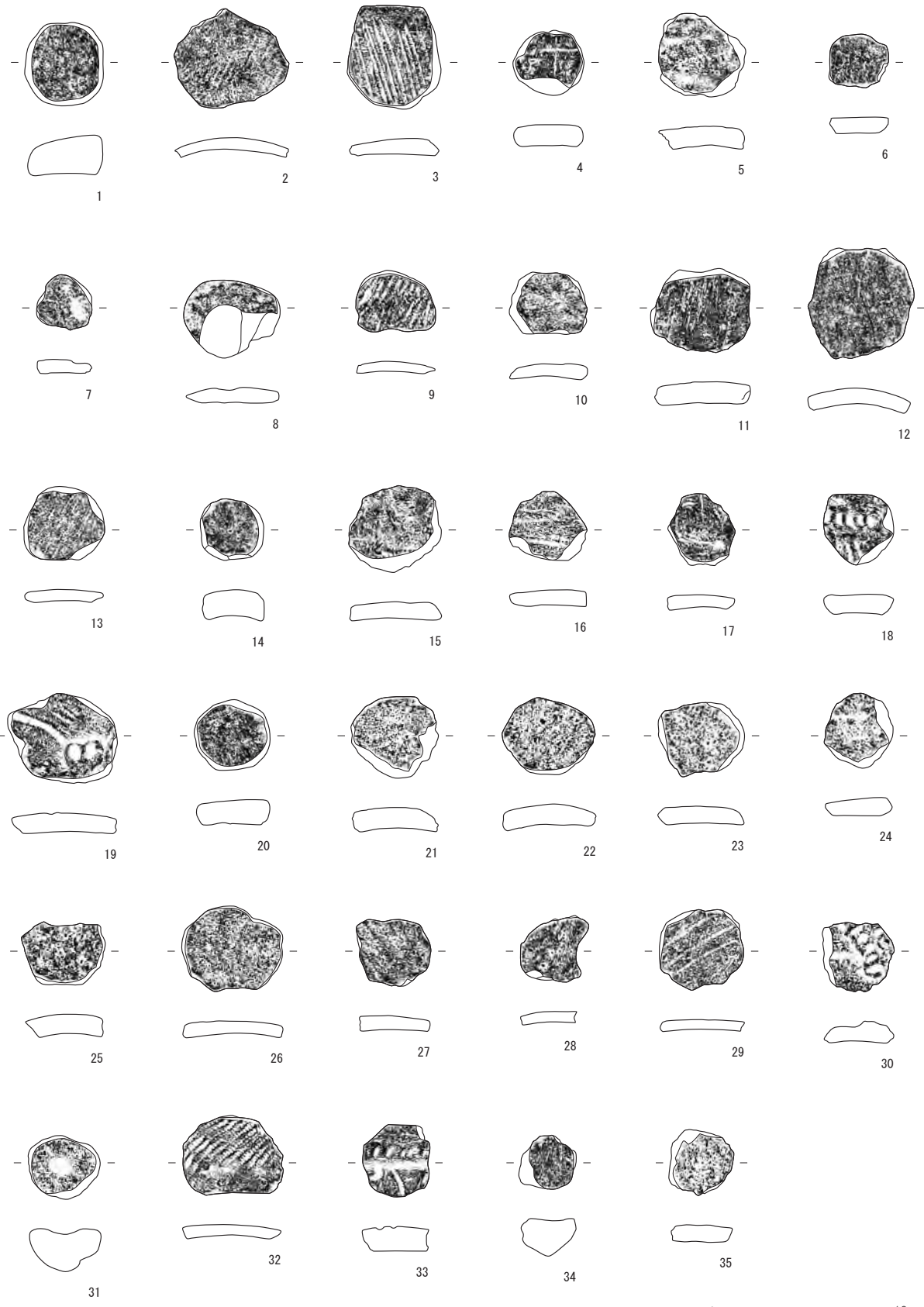
(2) 土製円板 (第 54 図、第 3 表)

土器片を円形に加工した土製円板は、35 点検出できた。第 6 号竪穴建物跡及び F 2 グリッドから合計 12 点が出土し、この付近に集中する傾向がある。

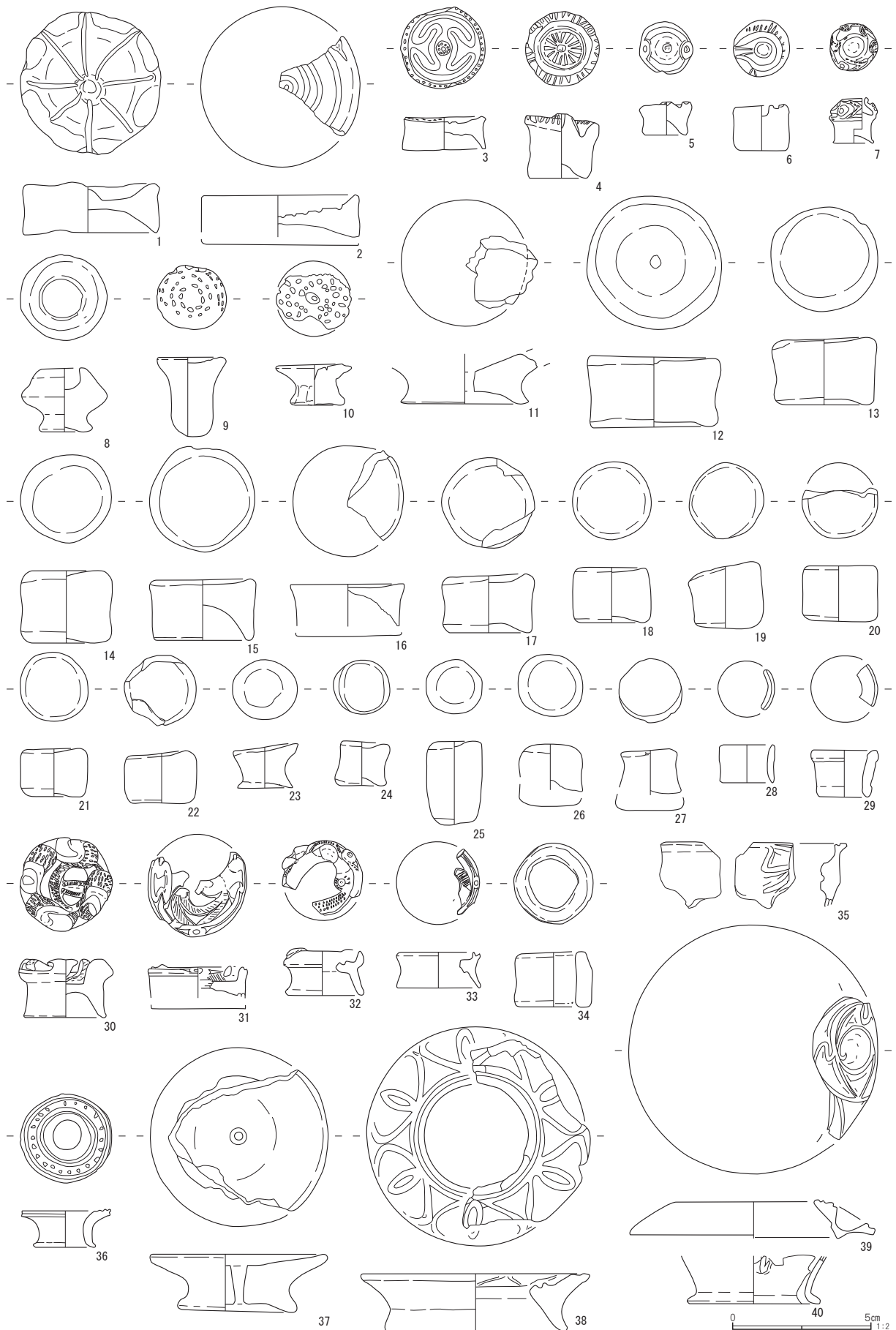
(3) 耳飾り (第 55・56 図、第 4 表)

上面に文様を持つもの (第 55 図 1～10)、無文の臼形 (同 12～27)、小環状 (同 28・29・34)、透かし文付きの台形 (同 30～31)、漏斗状 (同 36～40)、滑車状 (第 56 図 1～6)、環状 (同 7～23) に分けたが、臼形と環状が多い。第 55 図 2・30・32・36・39、第 56 図 7・8・11・12 には、赤彩の痕跡が残る。第 55 図 39・40 は大型漏斗状透彫付耳飾りだが、肉薄、精緻で、胎土及び焼成も良好である。

出土集中地点としては、合計 18 点が出土した第 5 号竪穴建物跡を中心とした F 3・G 2 グリッド付近及び合計 13 点が出土した第 8 号竪穴建物跡と上部に造られた第 9 号竪穴建物跡を中心とした G 4 グリッド付近の 2 か所がある。

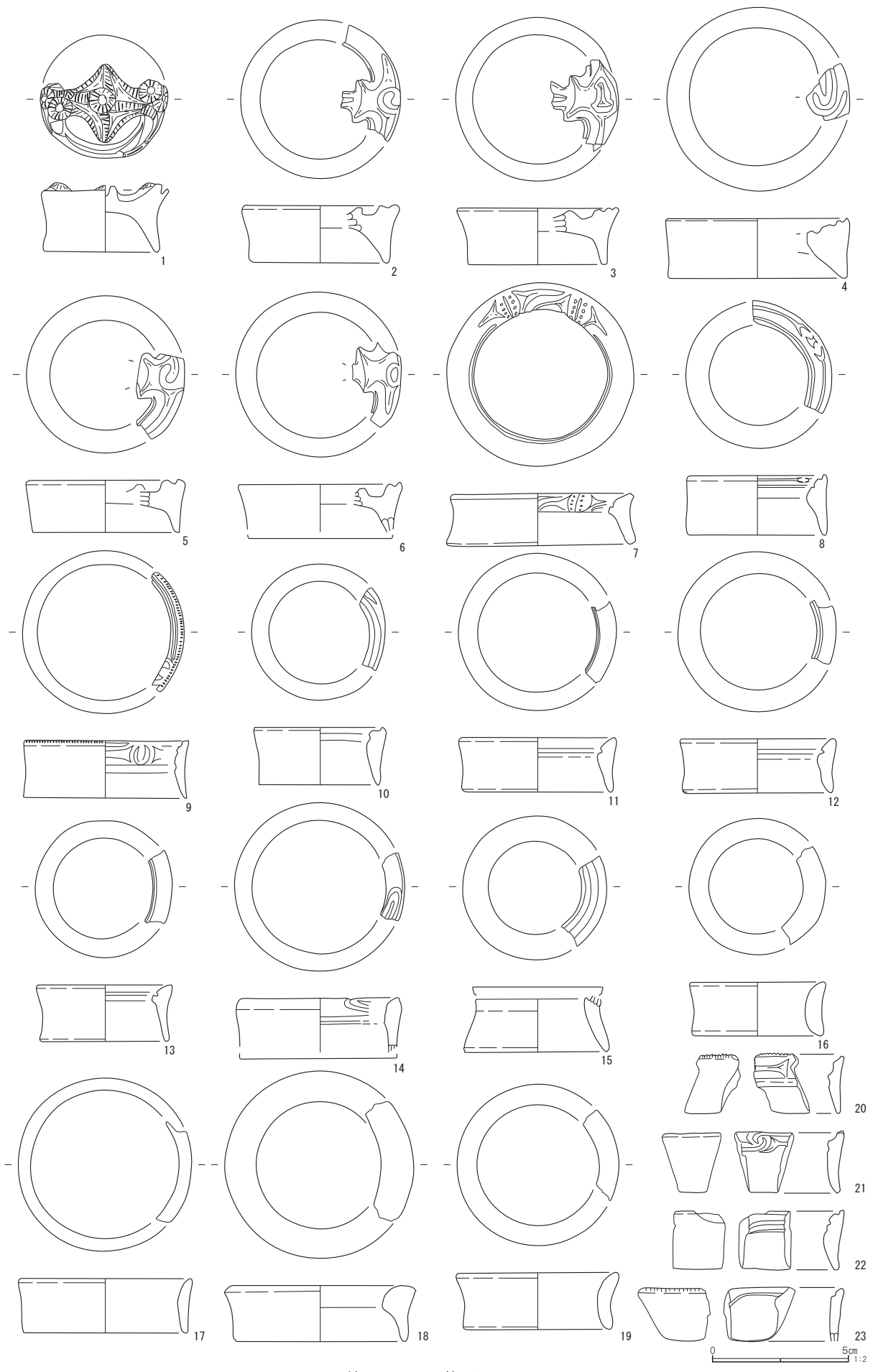


第 54 図 土製円板



第 55 図 耳飾り (1)





第 56 図 耳飾り (2)

#### (4) 特殊製品 (第 57 ~ 60 図)

##### ① 土偶 (第 57 図、第 5 表)

土偶と認識できるものは 6 点で、原形を推定できるものは 3 の遮光器系土偶及び 4 の木菟土偶のみである。6 は動物形土製品の可能性もある。

##### ② 土版・装飾把手 (第 57 図、第 5 表)

7 の土版は、渦巻文が左右に展開する文様構成と見られるが、裏面には文様がなく、ナデのみの平板である。この面が剥離面かどうかの判定は難しい。8 は人面を施した鉢形土器の環状把手で、熊谷市中廓遺跡に類例がある。9 も同様の環状把手だが、入り組み三叉文と小円柱状の貼付文で装飾されている。

##### ③ 垂飾品 (第 57 図、第 5 表)

10・11 は石製で、薄い小礫を使っている。12 ~ 16 は土製である。

##### ④ 骨角器 (第 57 図、第 5 表)

第 6・7 号竪穴建物跡等から焼けた獣骨片が多量に出土したが、製品としての加工痕が認められたのは 4 点のみで、いずれも鹿角製である。17 は本来 2 つの突起を持ち、分岐部に上下から穿った貫通孔のある製品と見られる。18 は、根元から折れた小突起である。19 は、丸棒状製品の破片である。20 は直線的な棒の上端に切り込みがあり、下端は直線の擦り切り溝を入れたうえで意図的に折られている。

##### ⑤ 岩版 (第 58 図、第 5 表)

1 は泥岩製で、全体の 3 分の 1 ほどを欠失しているが、復元長約 20 cm、復元幅約 14 cm、厚さ 3.0 cm の大きさである。第 2 号溝跡の底面から出土した。

図の左側は文様の彫り込みがやや深く、曲面的であるため、この面を正面と捉え、これとは反対に、文様の彫り込みが浅く、平面的な右側を背面と捉える。図の上部に両面を貫通する小孔が 1 つあるが、本来は欠損部にもあって一対であったと思われる。

正面は、上下 2 段の文様構成で、各段に縦方向に対向する三叉文が 2 組ずつ彫り込まれている。下段の三叉文は大きく、中央には横長楕円形の彫り込みがある。下端の文様は横長の I 字文になると考えられる。背面も上下 2 段構成で、上段は線刻で一対の渦巻文が施され、上部には貫通しない小穴がある。下段には縦方向に対向する三叉文が 3 組彫り込まれている。この他、両面には線刻状の直線や曲線が数本認められる。

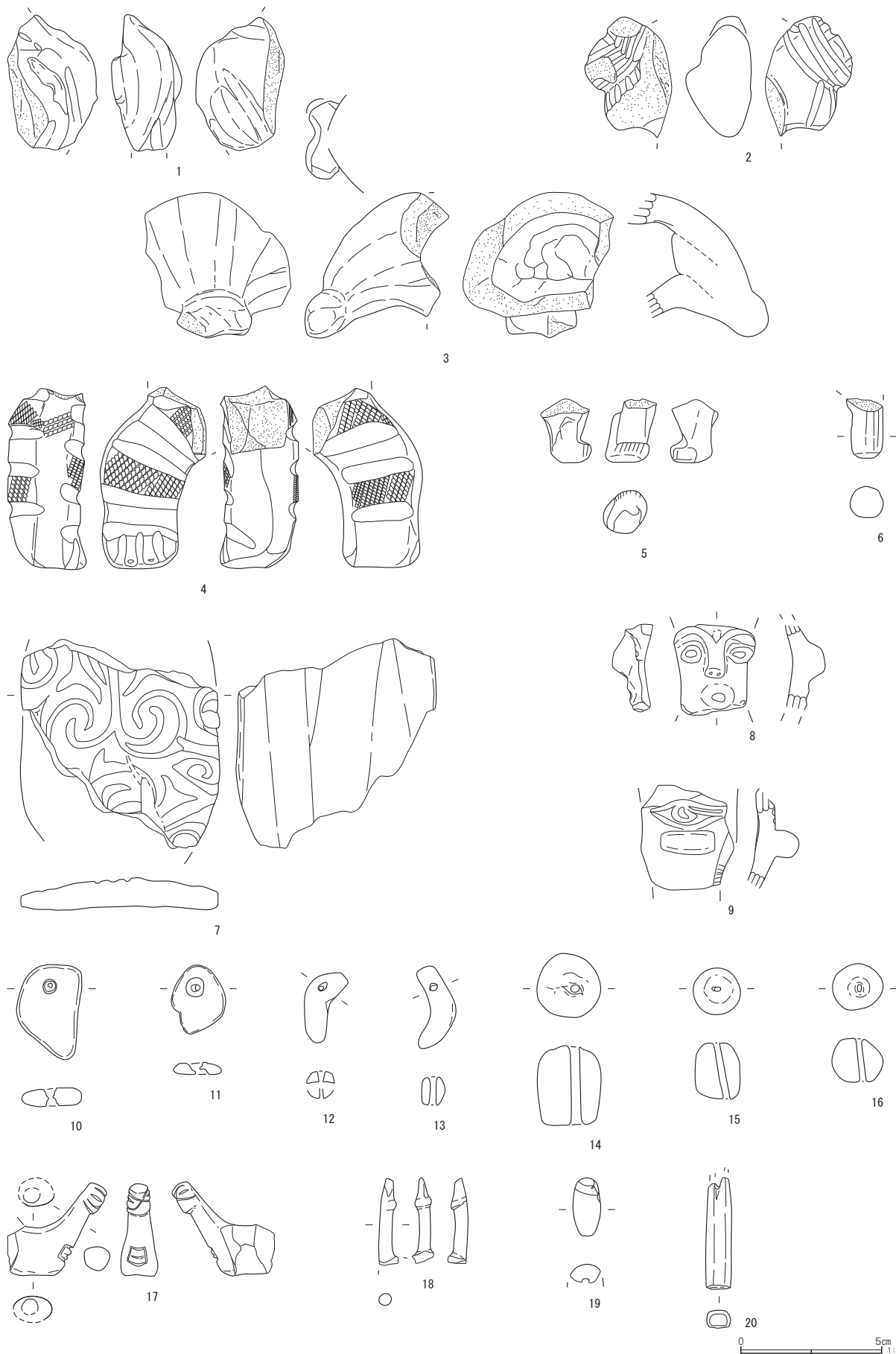
2 ~ 6 も泥岩片だが、加工面や沈線による文様が認められるため、本来は 1 と同様の岩版であると考えられる。1 以外は火を受けている。

##### ⑥ 石製品 (第 58 図、第 5 表)

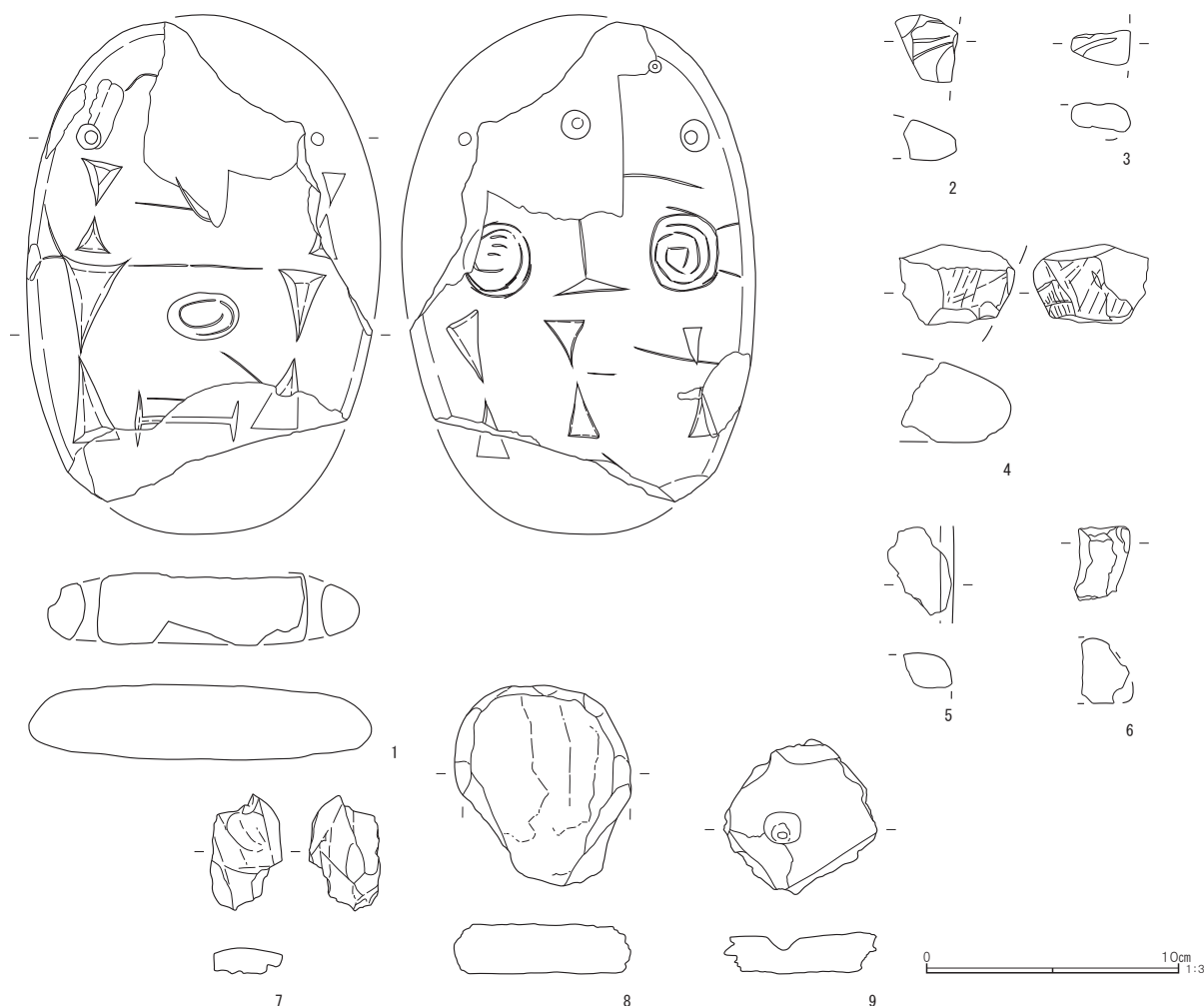
7 ~ 9 は用途不明の石製品である。7 は不定形で、明瞭な凹凸稜線を持って多面的に磨かれているが、割れ口は無く完結している。8 は板石縁辺を丁寧に弧状に成形し、9 は窪みを持つ板石片の縁辺を荒く打ち欠いている。

##### ⑦ ミニチュア土器・土製品 (第 59 図、第 5 表)

1 ~ 17 をミニチュア土器とし、18 ~ 24 を土製品とした。2 ~ 5 は筒形部分と考えられる。11 ~ 15 は通常の文様で円窓を持つが、台付鉢の脚部よりも薄手で径が小さい。18・19 は原形を復元できるが、それ以外は不明である。19 は胎土・成形とも粗く、耳飾りではない。25・26 は薄く伸ばした粘土を不規則に折りたたんで焼成したものである。



第 57 图 特殊製品 (1)



第58図 特殊製品(2)

⑧独鈷石・石剣・石棒(第60図、第5表)

1の独鈷石は完形であるが、第1号溝跡から出土した。9は、曲面の度合から石棒と判断したが、それ以外は石剣とした。6は、折れた石剣の柄部付近を転用しており、側縁部や割れ口は敲打されている。11は、上端部に擦り切り込みを入れたうえで折られている。12～20は石剣の未製品で、12～14は敲打整形段階の廃棄、15～20は粗割り段階の廃棄と見られる。

これまでの①～⑧の特殊製品は、呪術・祭祀的な性格が強い遺物と考えられるが、それらの集中する地点が3か所ある。1つ目は、第6号竪穴建物跡及びG2グリッドで、土偶2点、土版1点が出土した。2つ目は、第7号竪穴建物跡及びE1グリッドで、土偶2点、石製垂飾品1点、骨角器1点、環状土製品1点、不明土製品1点が出土した。3つ目は、第1号性格不明遺構の周縁にあたるD2・E2・E3グリッドで、石製垂飾品1点、土製勾玉1点、骨角器2点、ミニチュア土器及び土製品計7点、石剣3点が出土した。この3地点を合わせてひとつの集中域とすることができるかもしれない。

石剣は、第5号竪穴建物跡、第4号土坑及びG2グリッドから計6点が出土したが、このうち4点は未製品であり、祭祀的意味合いよりも製作に関わる意味合いの方が大きい。岩版の分布は分散的で、集中する地点が認められなかった。耳飾りは、特殊製品とはしなかったが、その集中地点は、上記3地点とは重ならないため、別の性格を持つと考えられる。



第 59 图 特殊製品 (3)



第 60 图 独鈷石・石劍・石棒

(5) 石鏃・石錐・スクレイパー (第 61・62 図、第 6 表)

小型の打製石器を集成する。打製石鏃 48 点の他、スクレイパー 3 点、石錐 2 点がある。

使用石材は、53 点中、頁岩系が 20 点、チャートが 18 点、黒曜石が 9 点、鉄石英が 3 点、ホルンフェルスが 2 点、メノウが 1 点である。

出土地点の分布は、第 5・6 号竪穴建物跡及びこの周辺の F 2・F 3・G 2 グリッドに集中しており、24 点ある。また、頁岩系以外の石材製品がこれと同じ範囲に集中しているのに対して、頁岩系の石器は調査区内で偏り無く出土している。製品の他に、石核や剥片も多量に出土しており、付編 2 に石器製作の考察を掲載した。

(6) 打製石斧 (第 63 図、第 6 表)

全体像が捉えられる打製石斧は多くないが、撥形の大型石斧が第 8 号竪穴建物跡から 4 点、E 3 グリッドで 1 点出土したことが特筆される。1・2 が特に大きく、長さ 22 cm 以上、重さ 1000 g 以上、3～5 も長さ 17 cm 以上、重さ 580 g 以上あり、大きさ及び重さから「石鏃」の要素が強い。付編 1 の採取遺物の中にも同様の大型石斧 1 点ある (付編 1 第 5 図 7)。

(7) 磨製石器 (第 64 図、第 6 表)

全体像が捉えられる磨製石斧は多くないが、長さ 20 cm、重さ 1000 g を超える大型品 (1) と、長さ 10 cm 未満の小型品 (9～13)、その中間の中型品 (2～8) に分けられる。1 は、完形だったものが被熱して割れている。12 は変質岩製、13 は軟玉製で、丁寧に製作され定角で光沢を持つ。

14・15 は、幅 4.5 cm、厚さ 0.6～0.8 cm の石材を横長に使い、長辺に刃部を持つ横刃型石器である。14 は両面が平滑に磨かれ、短辺部も直線的に仕上げられている。2 つとも刃部に使用擦痕が認められ、「穂摘具」ように使われたことが考えられる。

(8) 石皿 (第 65～67 図、第 6 表)

第 65 図 1～4 は、緑泥石片岩製品である。1・2 は大型で形が似るが、1 が岩塊から剥がされて周縁部が割られたままなのに対して、2 は周縁部が丸まり、両面に凹み穴も多数作られている。

第 65 図 5～9 は、安山岩製品である。5 は、整った形に仕上げられ、挟り込んだ窪みも作り出されていて、磨石又は小型の臼と見られる。第 66 図 1 は、第 1 号性格不明遺構から出土した円形皿状の大型品である。凹面側は平滑な皿状だが、凸面側は平滑な周辺部及び凹み穴が多数作られている中央部からなり、2 つの用途に使用されたと見られる。破損後も使用され、割れ口が摩耗している。

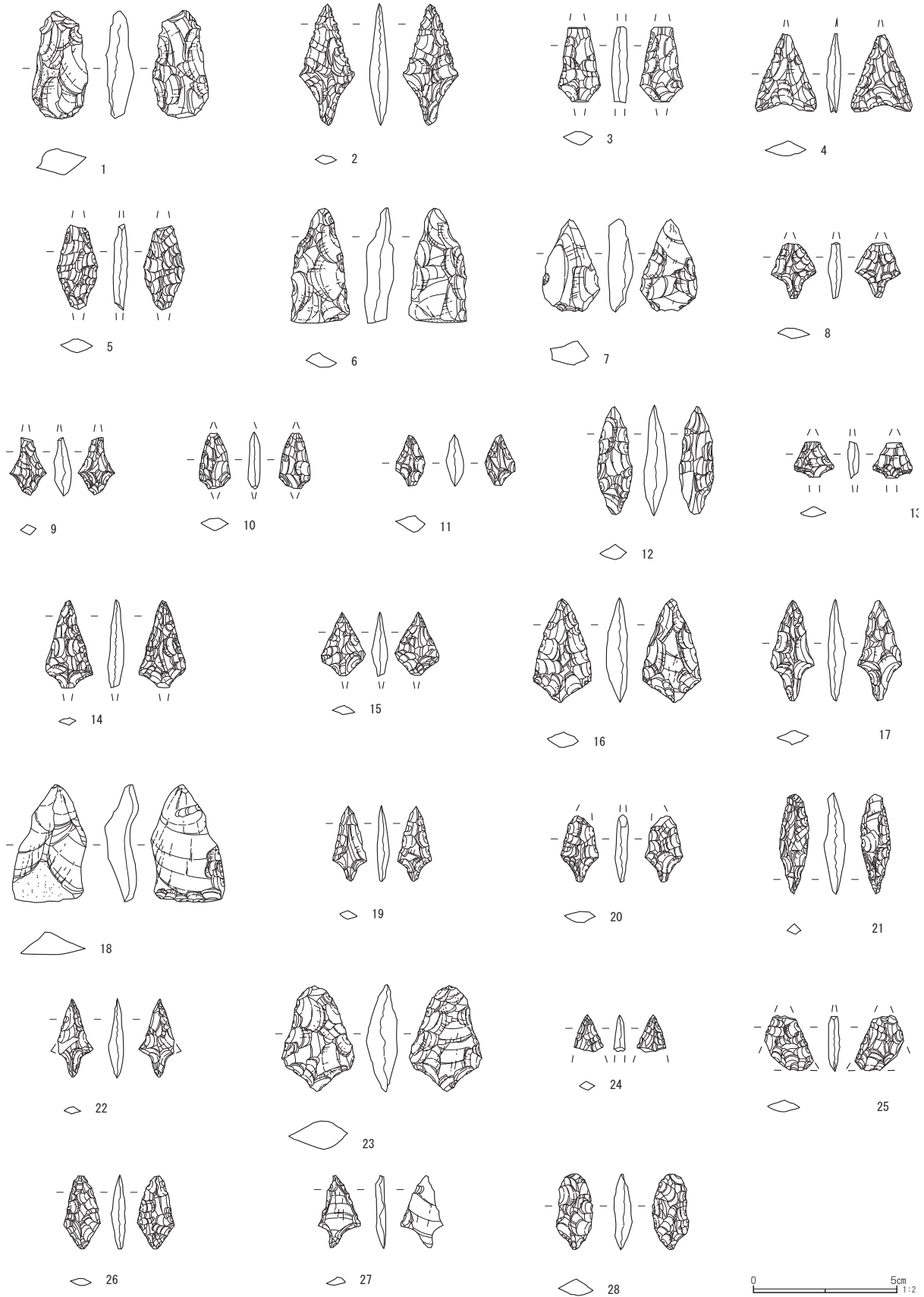
第 66 図 3・4 は閃緑岩製品で、3 はやや大型である。第 66 図 5・6 及び第 67 図 1～5 は砂岩及び安山岩の平板礫を使用したものである。第 66 図 5・6 は、材質が第 68 図の砥石に類似するため、砥石の可能性もある。

第 65 図 1 及び第 66 図 1・3 に、付編 1 の第 1 図 3 を加えた大型品 4 点が、第 1 号性格不明遺構 (D 2・D 3 グリッド) から出土した。付編 1 に載せた石皿は、ほぼ切り出し時のままの大型品で、長径 59.6 cm、短径 28.2 cm、重さ 9,750 g を測り、両面には使用による平滑面が認められる。

(9) 砥石 (第 68 図、第 6 表)

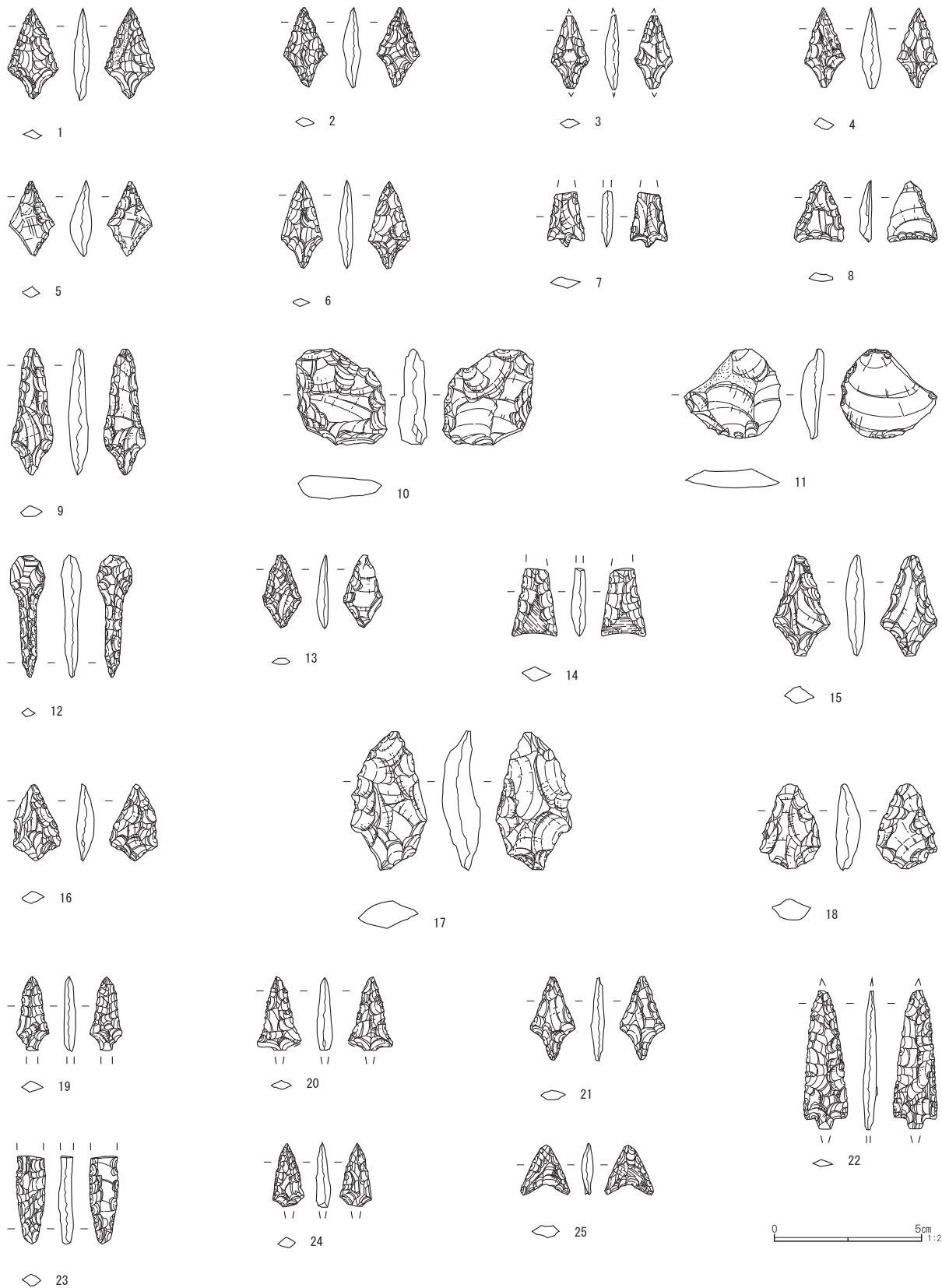
すべて砂岩製であり、形態別に分類したが、具体的な使用方法は不明である。

1～6 は多面不整形で、多方面から使い込まれた曲面を持つ。7・8 は舟形で断面 U 字形の直線的な

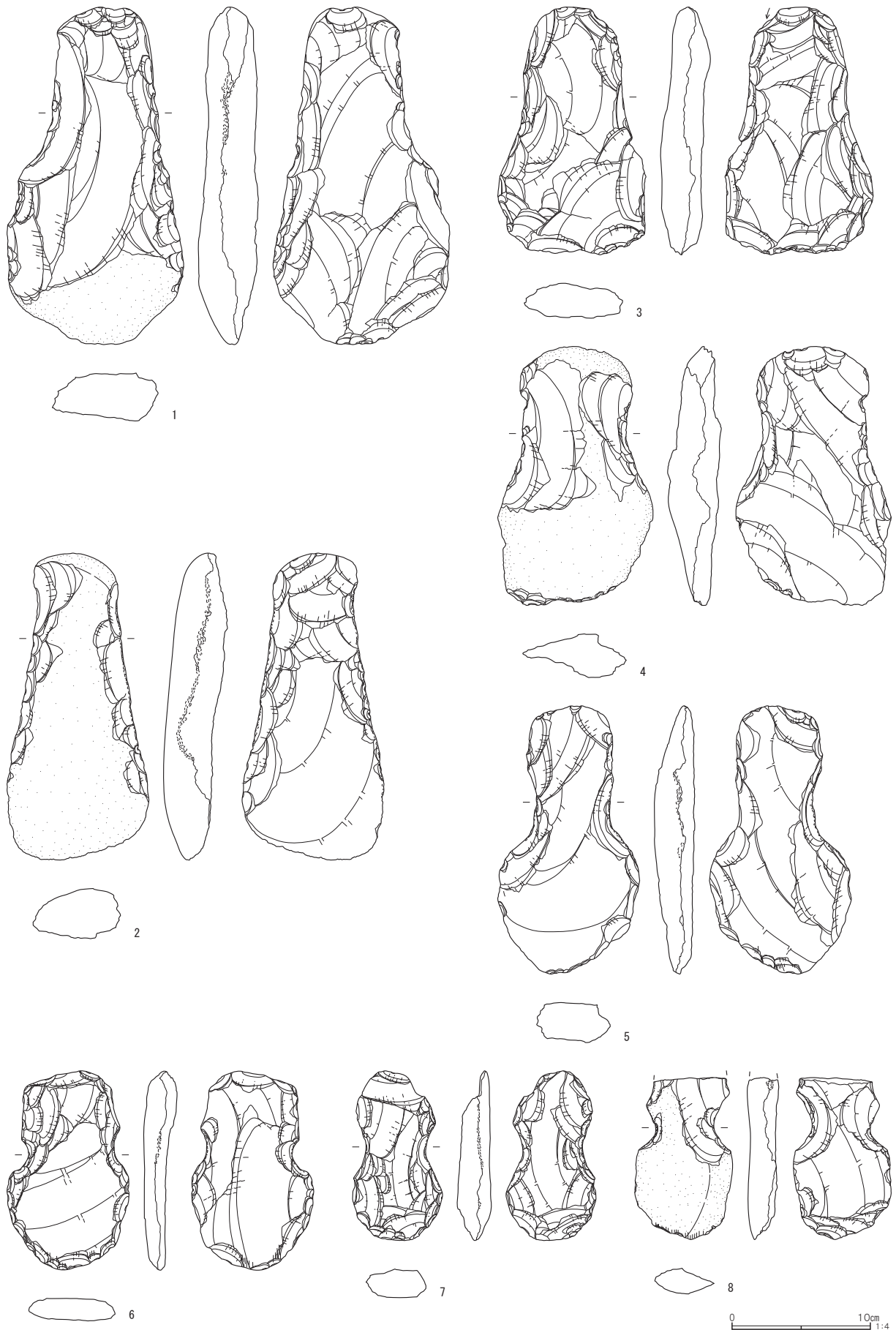


第 61 図 石鏃・石錐・スクレイパー（1）

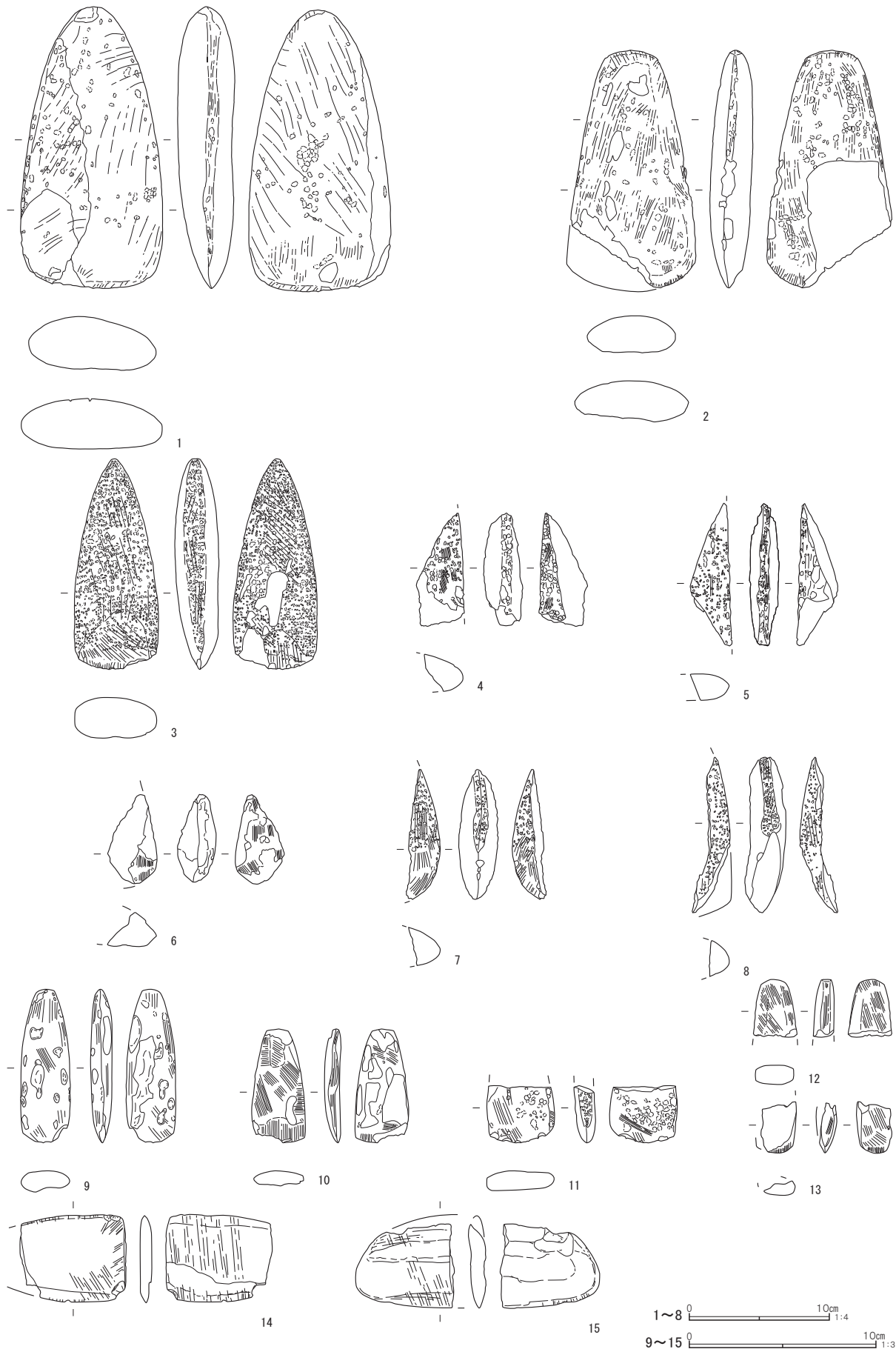




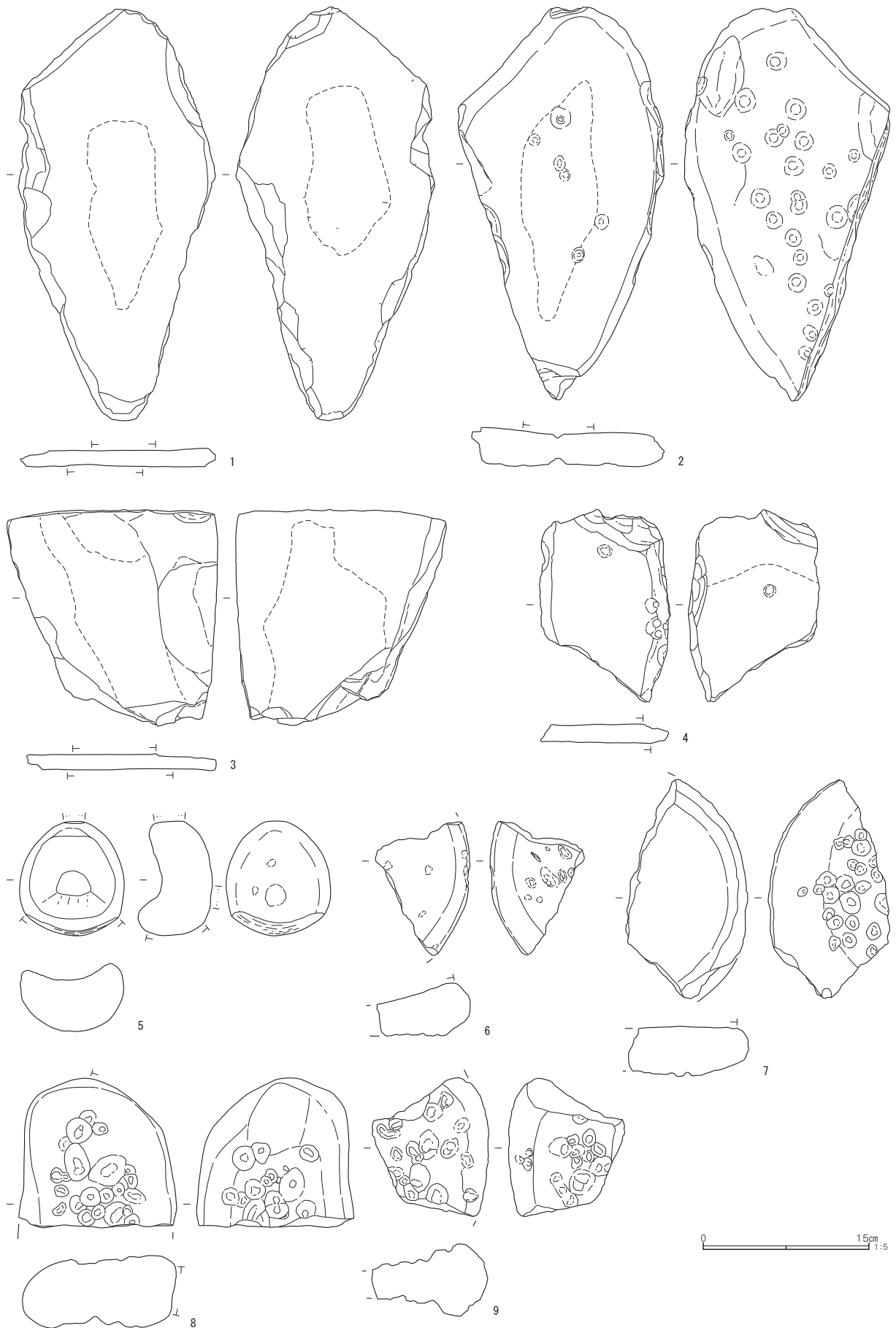
第 62 図 石鏃・石錐・スクレイパー (2)



第 63 图 打製石斧



第 64 图 磨製石器



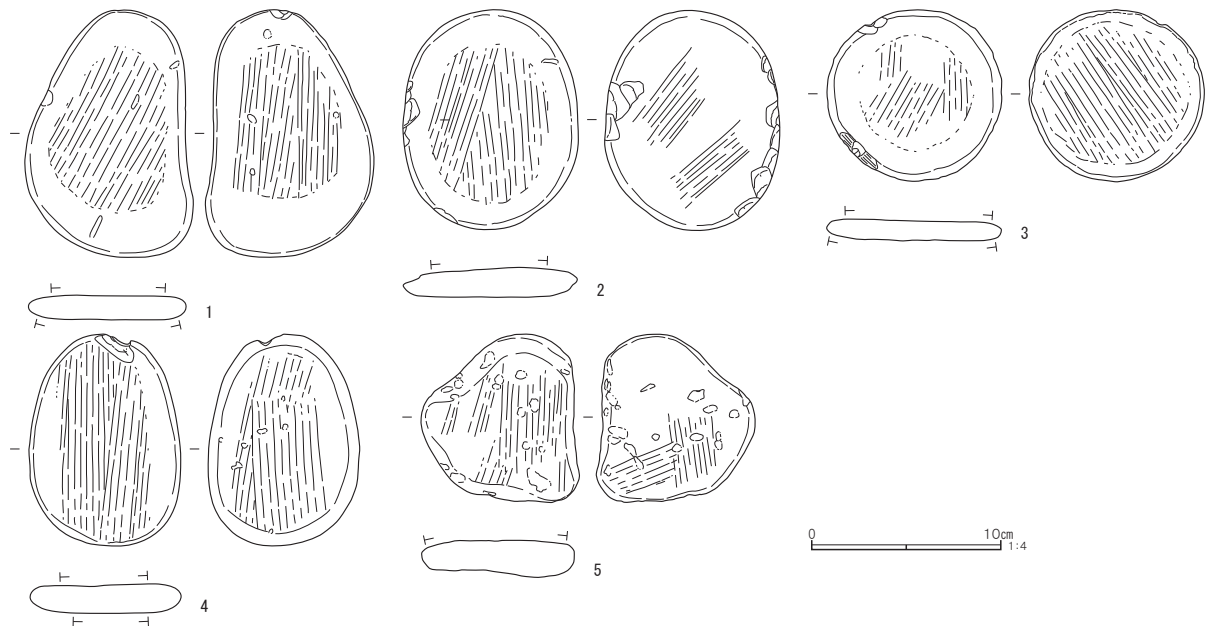
第 65 图 石皿・台石・凹石 (1)



第66図 石皿・台石・凹石（2）

使用面を持つ。9～13は平板形で、平板石の平面をそのまま使う。14～20は剣形で、断面が両刃形である。17以外は石剣に似るが、ここでは砂岩製のものを砥石と考えた。

出土地点の分布は、第4号竪穴建物跡に1～3・16の4点が集中し、第66図5の砂岩製石皿も加わる。また、第6号竪穴建物跡から多面不整形の小型品の6が出土したが、この小型品は同建物跡から獣骨角が出土していることと合わせて、骨角器製作のためのものと考えられる。5も同様である。



第 67 図 石皿・台石・凹石（3）

(10) 磨石（第 69～72 図、第 6 表）

破損品も含めて調査区全体で多量に出土したが、ここでは縄文時代遺構出土のものを中心に、包含層出土品の中で特徴的なものを加えて掲載した。

出土点数が最も多いのは第 4 号竪穴建物跡で 11 点あるが、このうち第 69 図 3～8 には赤色顔料が付着している。関連資料として、同建物跡から出土し赤色顔料が付着している石皿と台石を合わせて掲載した。赤色顔料が付着する磨石は、第 4 号竪穴建物跡に隣接する第 6 号竪穴建物跡出土の 3 点、第 7 号竪穴建物跡出土の 4 点の他に、この 3 軒に関わる D 1・D 2・E 1・E 3・F 1・F 2・G 1 グリッドから計 11 点が出土した。これらの赤色顔料付着磨石の中には、手のひらからはみ出し、場合によっては両手での使用が必要な大きさである、10 cm 以上、重さ 900g 以上のものが 10 点認められる。さらに、E 1 グリッドからは、3.2g の赤色顔料小塊も出土している。

(11) 石錘（第 73・74 図、第 7 表）

46 点のうち、安山岩製が 26 点、砂岩製が 8 点、片岩製が 6 点、頁岩製が 5 点である。紐を巻くための擦り切り線刻を持つものが 8 点あるが、このうち頁岩製が 4 点、片岩製が 2 点である。

出土地点は、第 8 号竪穴建物跡並びに隣接する第 7 号土坑及び G 4・H 3 グリッド、そしてそれらを掘り込む第 9 号竪穴建物跡からの出土が多く、計 9 点が出土した。

(12) その他

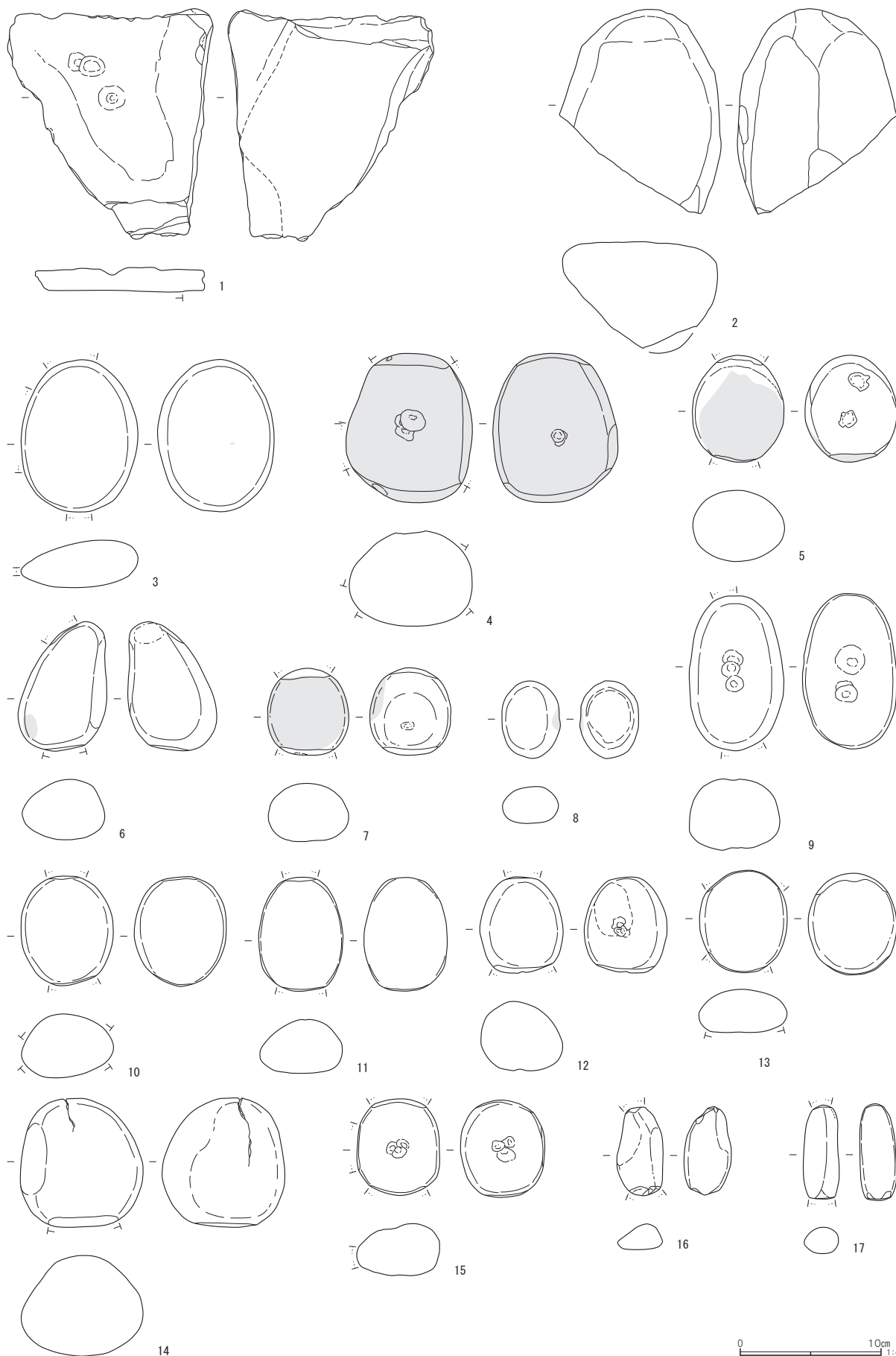
① 石器剥片・石核（付編 2 参照）

石器製作に関わると見られる、チャート、頁岩、黒曜石の石核や剥片 300 点以上の分析を田部井功氏に依頼した。分析結果は付編 2 として掲載したので、ここでは出土位置の要点のみを記述する。

これらの遺物の出土集中地点は、第 5・6 号竪穴建物跡及びこの周辺の E 3・F 2・F 3・G 2 グリッドであるが、これらは既に述べた石鏃・石錐・スクレイパーの集中地点と重なり、製作痕跡と完成品の存在がつながる。一方、第 8 号竪穴建物跡でも多量の石核や剥片が出土しているが、こちらでは完成品の比率が小さいのが対照的である。

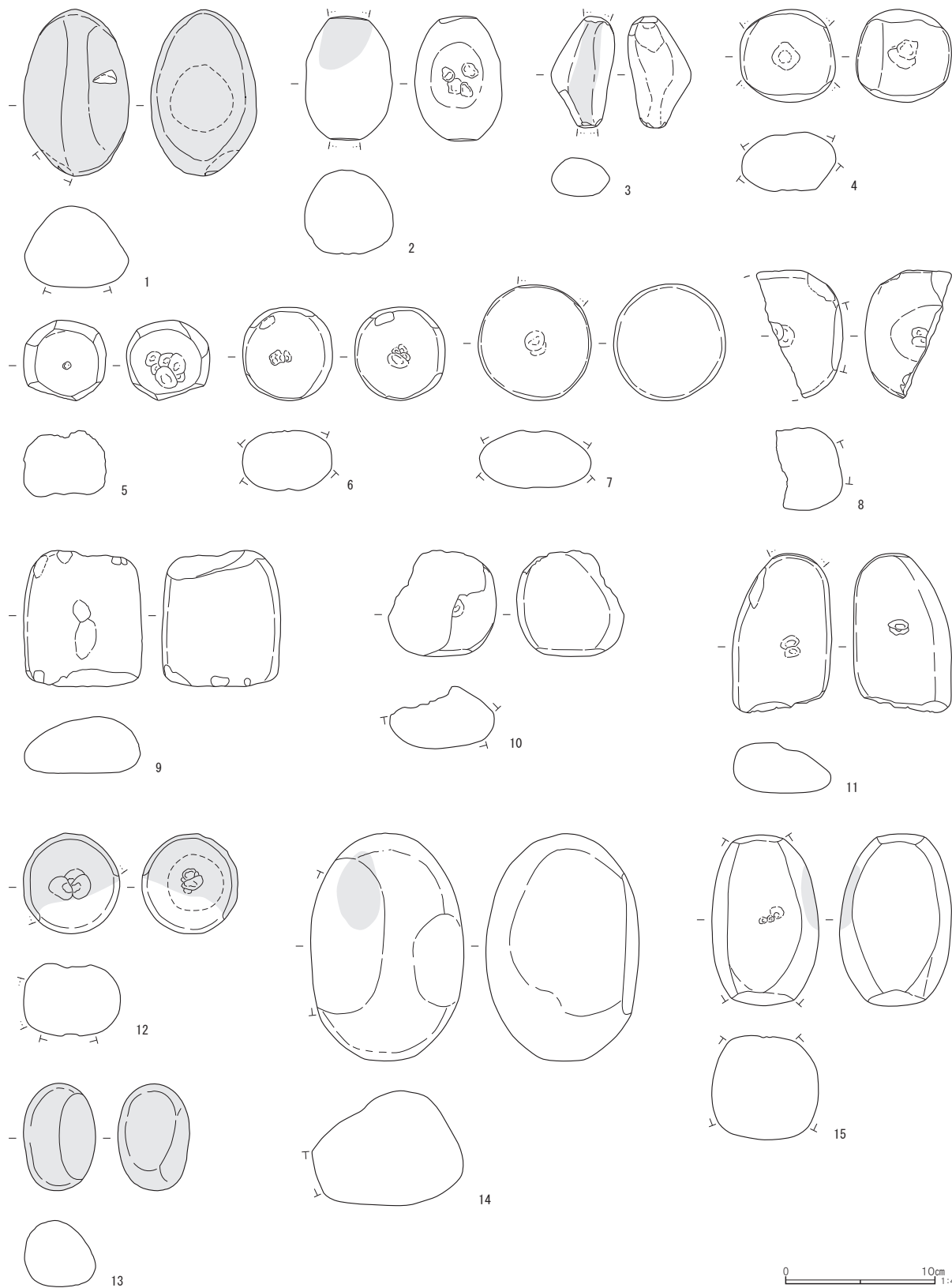


第 68 图 砾石

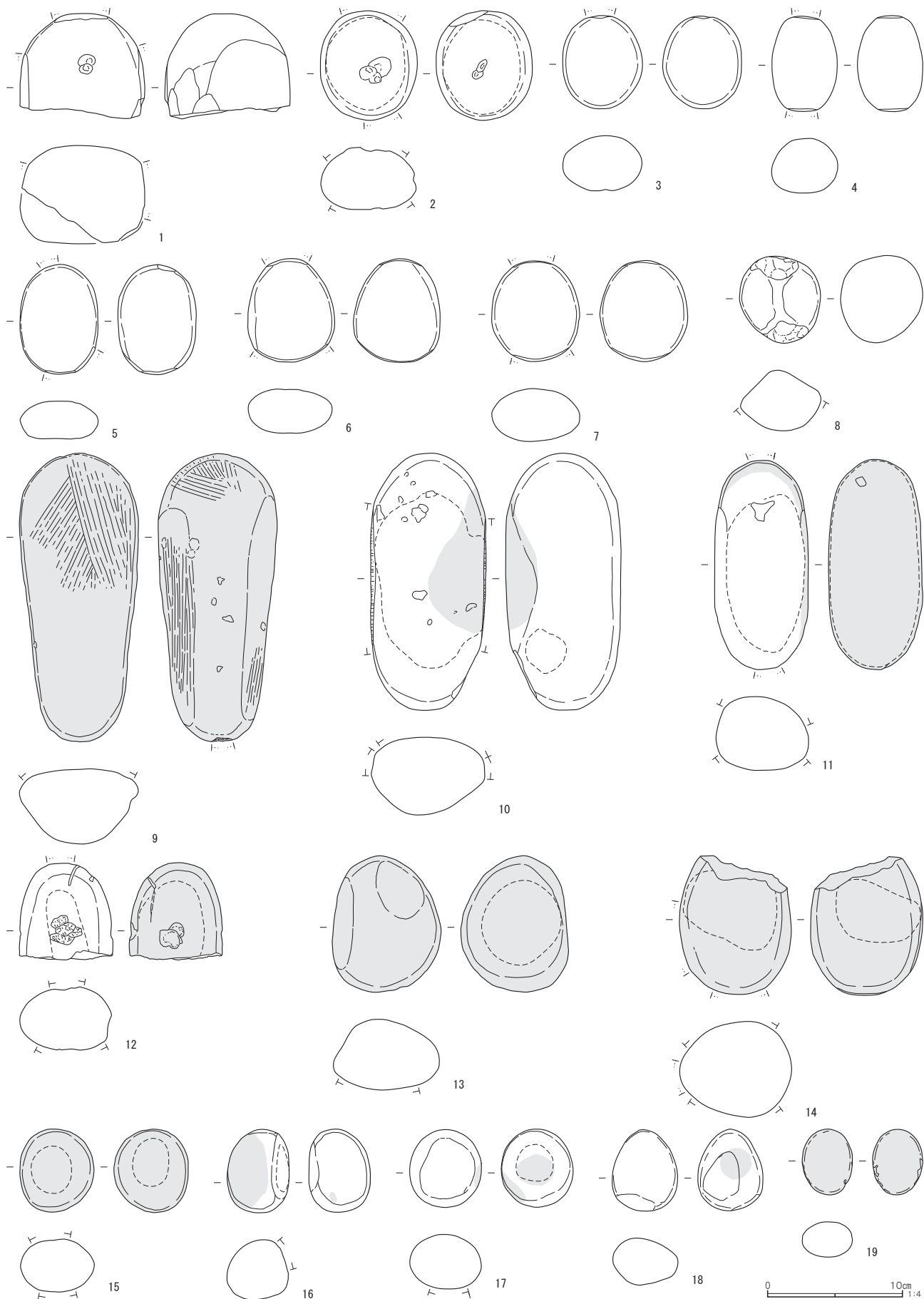


第 69 图 磨石 (1)

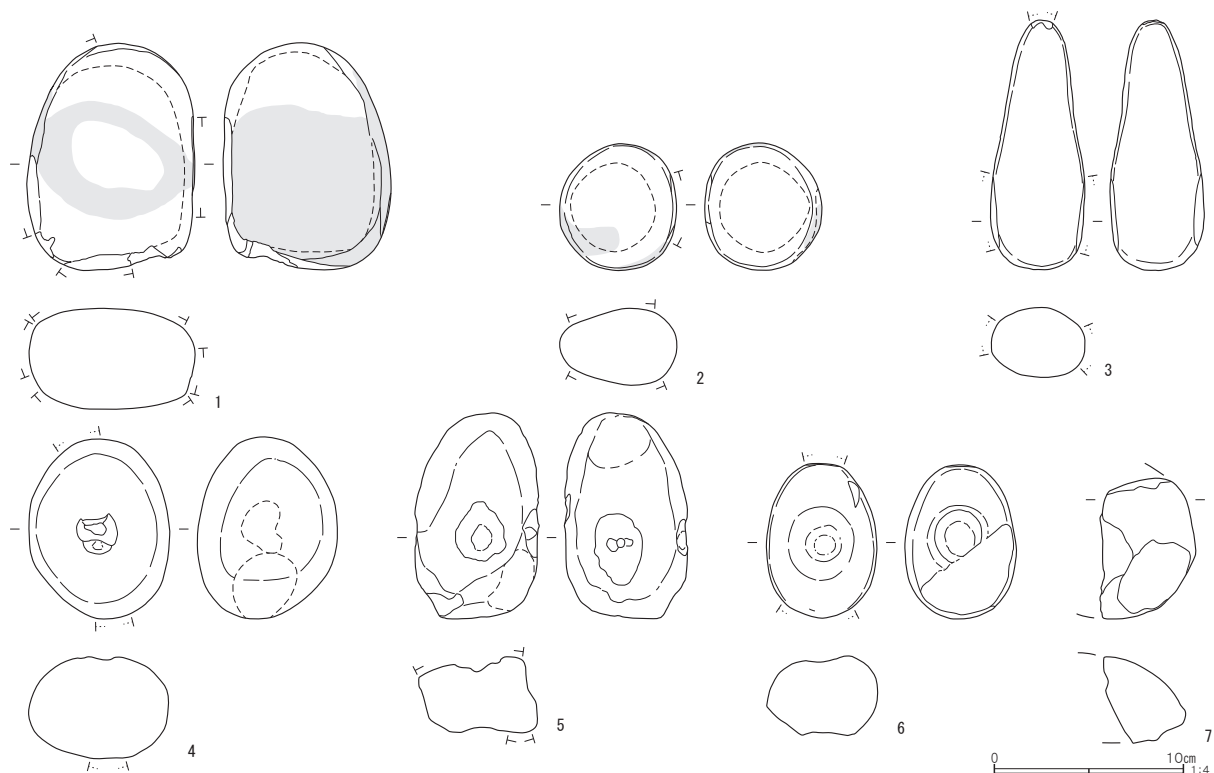




第70図 磨石(2)



第71图 磨石(3)



第72図 磨石（4）

② 獣骨（付編3参照）

600点以上の獣骨片が出土し、茂原信生氏らに自然分析を依頼した。このうち遺存状態の良好な83点が分析され、その鑑定報告を付編3として掲載したので、ここでは概略を記述する。

83点のうち、イノシシが54点、ニホンジカが26点、トリが3点で、トリ以外はすべて焼かれている。

出土地点は、第6号竪穴建物跡及びこれに重なるF2グリッド、そして第7号竪穴建物跡に集中する。第6号竪穴建物跡で硬化焼土床周辺に獣骨が集中して、骨角器製作用と見られる砥石が出土したことや、第7号竪穴建物跡の南西壁際ピット群周辺に獣骨が集中して、骨角器や加工痕のある鹿角が出土したことに関係すると考えられる。

③ 小礫（図版14-4）

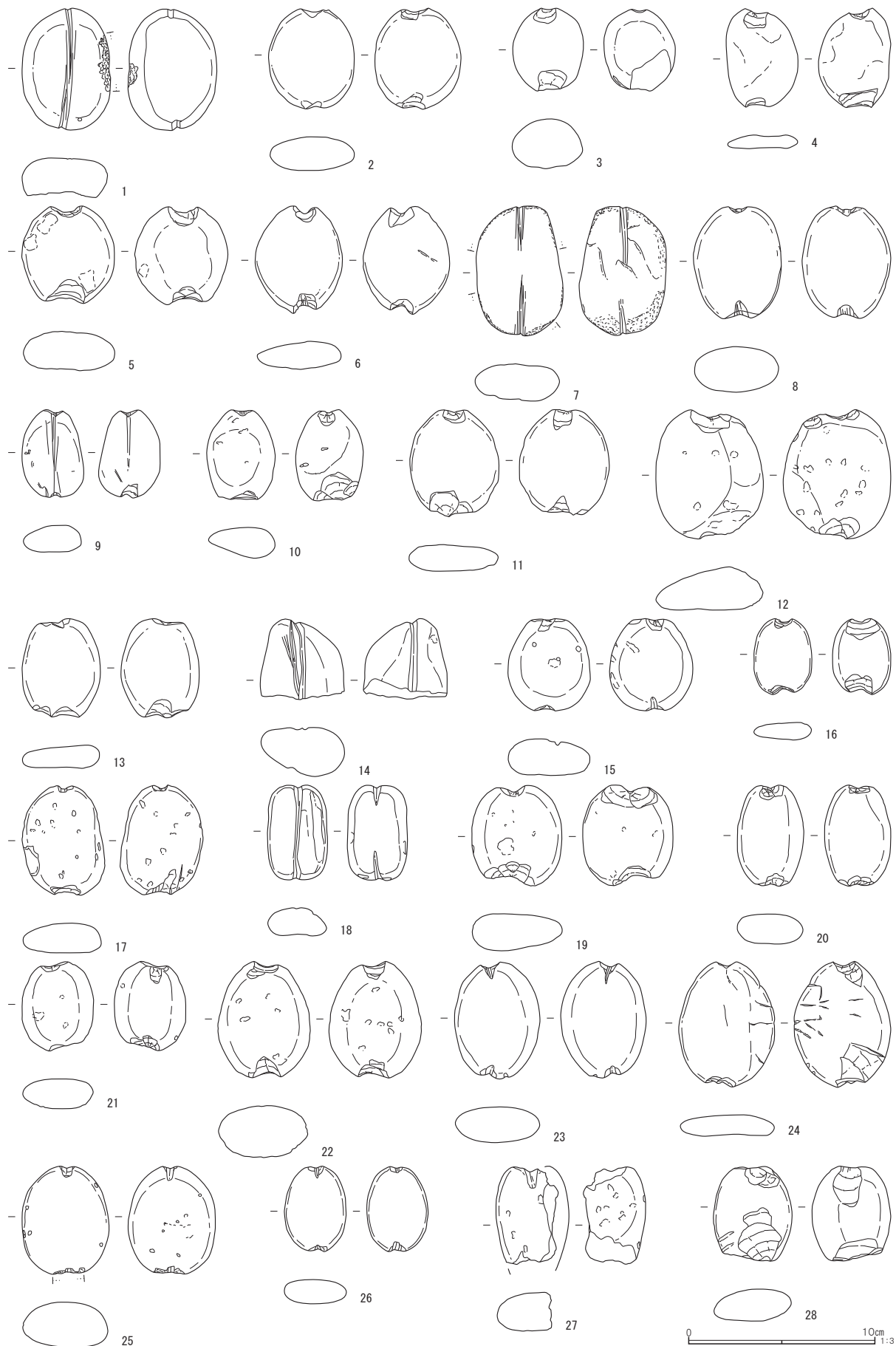
特徴的な小礫について、埼玉県立自然の博物館学芸員小林まさ代氏に実物を観てもらい所見を得た。

- ・最上段の6点は、熱水によって酸化した赤色部分を持つ変質岩である。ベンガラ原料になる。
- ・3段目の3点は、メノウであり、茨城県久慈産である。
- ・最下段左端は、ヒスイに似る鉱物で、純粋なヒスイに比べて結晶が荒く、光沢が弱い。
- ・その他は、佐渡の赤玉及び日本海佐渡地域産の緑色変質岩である。

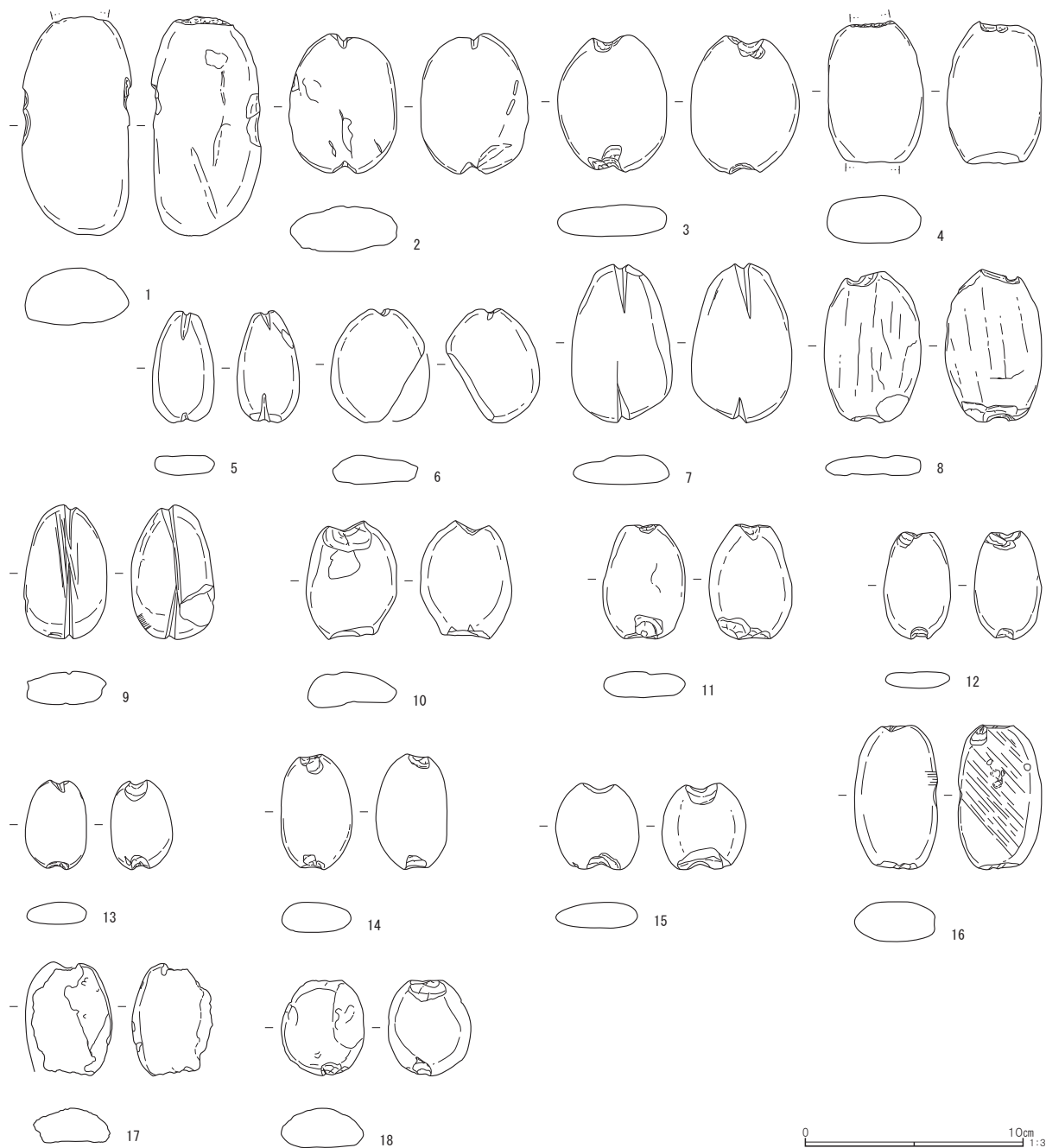
これらの所見から、赤色の変質岩は、群馬方面から赤色顔料製造のために、また、メノウやヒスイに似る鉱物、佐渡の赤玉、緑色変質岩等は、玉類や打製石器の原料として他の地域から持ち込まれたものと見られる。

④ 第4土坑第4層白色物質（図版14-5）

土坑の埋土中層で、面的に広がっていた物質である。毛状（針状）の物質が同一方向の層状に重なり、乾燥すると軽量で脆い。同様の物質は、本遺跡と同時期の足利市あがた駅南遺跡でも検出され、化学分



第73図 石錘(1)



第74図 石錘（2）

析によって、植物の灰に由来する可能性が報告されているが、白色の度合や毛状物質の重なる状況は、通常の植物灰との差異が大きい。

⑤ ドロバチの巣（図版14-6）

ドロバチの巣が焼けて土製品化したものが、第5・6号竪穴建物跡及びF2グリッドから計5点出土した。埼玉県立自然の博物館学芸員半田宏伸氏に写真を観てもらい、キゴシジガバチもしくは、モンキジガバチの巣であるとの所見を得、さらに縄文時代中期の千葉県四街道市八木原貝塚からも同様のものが出土しているとの教示を受けた（小西ほか2022）。長さ21～24mm、径7～9mmほどの長卵形の筒が並列連結している。焼成が、偶然なのか意図的なものなのかは不明である。

第3表 土製円板観察表 (第54図)

図版No.	出土地点	大きさ (cm)	図版No.	出土地点	大きさ (cm)	図版No.	出土地点	大きさ (cm)
1	SI2	長4.3、幅4.0、厚2.0	13	E1グリッド	長3.7、幅4.1、厚0.6	25	F2グリッド	長3.8、幅3.5、厚0.8
2	SI3	長5.6、幅5.9、厚0.6	14	E2グリッド	長3.1、幅3.2、厚1.2	26	F3グリッド	長4.3、幅5.2、厚0.6
3	SI5	長5.3、幅4.8、厚0.9	15	E3グリッド	長4.5、幅4.7、厚0.8	27	F3グリッド	長3.4、幅3.5、厚0.5
4	SI6	長3.3、幅3.6、厚1.0	16	E3グリッド	長3.6、幅3.4、厚0.6	28	F3グリッド	長3.4、幅3.8、厚0.7
5	SI6	長4.3、幅4.5、厚1.0	17	E3グリッド	長3.5、幅4.0、厚0.8	29	G2グリッド	長4.1、幅4.3、厚0.5
6	SI6	長2.7、幅3.1、厚0.8	18	F2グリッド	長3.6、幅3.6、厚0.9	30	G2グリッド	長3.6、幅3.7、厚1.0
7	SI6	長2.8、幅2.8、厚0.7	19	F2グリッド	長4.6、幅5.5、厚0.9	31	G4グリッド	長3.3、幅3.7、厚2.0
8	SI8	長4.0、幅4.9、厚0.8	20	F2グリッド	長3.6、幅3.9、厚1.2	32	SI9	長4.0、幅5.1、厚0.5
9	SI8	長3.2、幅4.0、厚0.5	21	F2グリッド	長4.2、幅4.5、厚1.0	33	SD1	長3.7、幅3.4、厚1.2
10	SK4	長3.2、幅4.0、厚0.7	22	F2グリッド	長3.9、幅4.7、厚0.9	34	SD1	長2.7、幅2.9、厚1.8
11	D2グリッド	長4.3、幅5.1、厚1.1	23	F2グリッド	長3.3、幅4.4、厚0.8	35	遺構外	長3.4、幅3.3、厚0.8
12	E1グリッド	長5.7、幅5.4、厚0.8	24	F2グリッド	長3.2、幅4.3、厚1.0			

第4表 耳飾り観察表 (第55・56図)

図版No.	出土地点	大きさ (cm)	備考	図版No.	出土地点	大きさ (cm)	備考
第55図1	E2グリッド	外径5.0、厚1.9		第55図33	SI8	外径(3.0)、厚1.2	
第55図2	F3グリッド	外径(5.8)、厚1.4	赤彩痕有り	第55図34	G2グリッド	外径2.8、厚2.0	
第55図3	G2グリッド	外径2.8、厚1.3		第55図35	F3グリッド	厚2.3	
第55図4	F2グリッド	外径2.7、厚2.3		第55図36	SD1	外径3.2、厚1.3	赤彩痕有り
第55図5	F3グリッド	外径1.9、厚1.2		第55図37	SI7	外径(6.4)、厚2.1	
第55図6	SI8	外径2.0、厚1.6		第55図38	E6グリッド	外径(8.0)、厚2.3	
第55図7	SI8	外径1.7、厚1.6		第55図39	SK5	外径(9.0)、厚1.3	赤彩痕有り
第55図8	SI6	外径3.1、厚2.3	粗製	第55図40	SI13	外径(4.8)、厚1.7	
第55図9	E4グリッド	外径2.5、厚2.8		第56図1	SI8	外径4.7、厚2.6	
第55図10	SI7	外径2.7、厚1.5	粗製	第56図2	E2グリッド	外径(5.8)、厚2.1	
第55図11	SI7	外径(5.2)、厚1.8		第56図3	SD1	外径(6.0)、厚2.1	
第55図12	F3グリッド	外径4.8、厚2.6		第56図4	SI5	外径(6.8)、厚1.6	
第55図13	SI9	外径3.8、厚2.4		第56図5	G4グリッド	外径(5.8)、厚1.9	
第55図14	SI8	外径3.3、厚2.6		第56図6	E3グリッド	外径(6.0)、厚1.8	
第55図15	SI9	外径3.8、厚2.2		第56図7	SI5	外径6.6、厚2.0	赤彩痕有り
第55図16	SD1	外径(4.0)、厚1.5		第56図8	SI5	外径(5.2)、厚2.2	赤彩痕有り
第55図17	SI8	外径3.4、厚2.1		第56図9	SK1	外径(6.0)、厚2.1	
第55図18	SI6	外径2.9、厚2.0		第56図10	SI5	外径(4.9)、厚2.1	
第55図19	G4グリッド	外径2.7、厚2.4		第56図11	SK4	外径(5.8)、厚2.0	赤彩痕有り
第55図20	G2グリッド	外径2.7、厚2.0		第56図12	SK9	外径(5.7)、厚2.0	赤彩痕有り
第55図21	SI9	外径2.4、厚1.7		第56図13	F3グリッド	外径(5.0)、厚2.1	
第55図22	F3グリッド	外径2.7、厚1.8		第56図14	SI9	外径(6.2)、厚2.0	
第55図23	SI6	外径2.3、厚1.6		第56図15	SD1	外径(5.3)、厚2.1	
第55図24	SX3	外径2.0、厚1.6		第56図16	G2グリッド	外径(6.0)、厚2.1	
第55図25	SD1	外径2.0、厚3.0		第56図17	SI5	外径(6.4)、厚2.0	
第55図26	SI4	外径2.3、厚1.7		第56図18	D2グリッド	外径(6.9)、厚2.1	
第55図27	SD1	外径2.2、厚1.5		第56図19	E3グリッド	外径(5.0)、厚2.0	
第55図28	SX3	外径(2.0)、厚1.3		第56図20	SI5	厚2.1	
第55図29	E3グリッド	外径(2.4)、厚1.7		第56図21	SK4	厚2.3	
第55図30	SI4	外径3.4、厚2.1	赤彩痕有り	第56図22	SI5	厚2.2	
第55図31	SI9	外径(3.6)、厚1.2		第56図23	SI5	厚2.0	
第55図32	SD1	外径2.9、厚1.6	赤彩痕有り				

第5表 特殊製品観察表 (第57～60図)

図版No.	器種	出土地点	大きさ (cm)	重さ (g)	備考
第57図1	土偶	G2グリッド	高4.8、幅3.0、厚2.2		中実、頭部左半
第57図2	土偶	G4グリッド	高4.3、幅3.0、厚2.3		中実、木菟土偶、頭部
第57図3	土偶	SI7	高5.1、幅5.0、厚5.3		中空、遮光器系土偶、右腕
第57図4	土偶	SI6	高6.4、幅3.7、厚2.7		中実、木菟土偶、右脚
第57図5	土偶	E4グリッド	高2.2、幅1.3、厚1.7		中実、右脚
第57図6	土偶	SI7	高2.1、幅1.3、厚1.1		中実、人形または動物形の脚部
第57図7	土版	SI6	長7.3、幅7.0、厚1.0		裏面ナデ整形
第57図8	人面装飾把手	SI8	長3.2、幅2.9		
第57図9	装飾把手	F5グリッド	長3.8、幅3.4		
第57図10	石製垂飾品	E2グリッド	長3.3、幅2.2、厚0.6	5.7	砂岩、勾玉状
第57図11	石製垂飾品	E1 P6	長3.3、幅2.2、厚0.6	5.7	変成岩、勾玉状
第57図12	土製勾玉	D2グリッド	長2.6、幅1.0、厚1.0		
第57図13	土製勾玉	SE2	長2.9、幅1.0、厚1.0		
第57図14	土玉	SI4	径2.2、厚2.8		
第57図15	土玉	D2グリッド	径1.7、厚2.0		

図版No.	器種	出土地点	大きさ (cm)		重さ (g)	備考
第57図16	土玉	遺構外	径 1.8、厚 1.6			
第57図17	骨角器	SI7	長 3.3、幅 3.5、厚 1.3			鹿角、線刻文有り
第57図18	骨角器	D2グリッド	長 3.1、幅 0.6、厚 0.8			鹿角、本体から離れた突起部
第57図19	骨角器	D2グリッド	長 2.1、幅 1.0、厚 0.7			鹿角、筒状製品の破片
第57図20	骨角器	SI8	長 4.0、幅 0.9、厚 0.6			鹿角、両端を加工された棒状製品
第58図 1	岩版	SD2	長 19.0、幅 14.0、厚 3.0		770	泥岩、両面に線刻文及び陰刻文
第58図 2	岩版片	SI5	幅 2.6、厚 1.6		7.0	泥岩、文様の沈線 3 条、被熱
第58図 3	岩版片	SD1	幅 2.3、厚 1.1		2.3	泥岩、文様の沈線 1 条、被熱
第58図 4	岩版片	D6グリッド	幅 4.5、厚 3.1		36.3	泥岩、表面に整形擦痕、被熱
第58図 5	岩版片	SD1	幅 3.4、厚 1.4		7.4	泥岩、板状加工、被熱
第58図 6	岩版片	D2グリッド	幅 2.6、厚 2.6		4.1	泥岩、板状加工、被熱
第58図 7	不明石製品	F2グリッド	長 4.3、幅 2.7、厚 1.0		17.0	凝灰岩、多面的に磨かれている
第58図 8	石製円板	E3グリッド	長 7.8、幅 7.0、厚 1.9		164.8	緑泥石片岩、縁部を曲線状に成形
第58図 9	石製円板	SD1	長 5.8、幅 6.1、厚 1.4		70.5	緑泥石片岩、円形を意識した粗割
第59図 1	ミニチュア土器	D2グリッド	口径 9.2、高 3.5			口縁部
第59図 2	筒形土製品	F3グリッド	径 6.0、高 4.1			粗製
第59図 3	筒形土製品	遺構外	径 5.2、高 3.9			粗製、円孔 2 有り
第59図 4	筒形土製品	SI2	径 3.6、高 2.3			粗製、内面輪積痕
第59図 5	筒形土製品	G4グリッド	径 5.2、高 2.8			粗製、内面輪積痕
第59図 6	ミニチュア土器	SK3	底径 5.8、高 2.7			台脚部
第59図 7	ミニチュア土器	E3グリッド				口縁部
第59図 8	ミニチュア土器	遺構外				口縁裝飾部
第59図 9	ミニチュア土器	遺構外				口縁裝飾部
第59図10	ミニチュア土器	G2グリッド				口縁裝飾部
第59図11	ミニチュア土器	G2グリッド				台脚部、円孔有り
第59図12	ミニチュア土器	E2グリッド				台脚部、円孔有り
第59図13	ミニチュア土器	E3グリッド				台脚部、円孔有り
第59図14	ミニチュア土器	F2グリッド				台脚部、円孔有り
第59図15	ミニチュア土器	E3グリッド				台脚部、円孔有り
第59図16	ミニチュア土器	E2グリッド	径 3.9、高 2.1			粗製
第59図17	ミニチュア土器	F2グリッド	底径 4.0、高 4.4			外面ナデ
第59図18	舟形土製品	E2グリッド	長 5.5、幅 2.9、厚 2.7			粗製
第59図19	環状土製品	E1グリッド	径 5.3、高 2.8			粗製
第59図20	裝飾土器	D1 P2				内面未調整
第59図21	不明土製品	E4グリッド	幅 3.2、厚 1.0			ボタン状隆起
第59図22	不明土製品	SD1	長 4.8、幅 2.8、厚 1.5			沈線 1 条
第59図23	不明土製品	SI7	幅 5.2、厚 1.9			環状隆起の中央に円孔
第59図24	不明土製品	SD1	長 2.7、幅 4.7、厚 1.4			沈線による裝飾
第59図25	焼成粘土塊	SI7	長 3.7、幅 2.7、厚 1.6			薄伸した粘土を畳んで焼成
第59図26	焼成粘土塊	SX3	幅 3.5、厚 0.6			薄伸した粘土を畳んで焼成
第60図 1	独鈷石	SD1	長 16.5、幅 5.4、厚 2.8		360	緑泥石片岩
第60図 2	石剣	SK7	長 22.3、幅 4.5、厚 1.8		320	緑泥石片岩
第60図 3	石剣	SI5	長 12.7、幅 3.0、厚 2.0		113.6	緑泥石片岩
第60図 4	石剣	E3グリッド	長 6.7、幅 3.4、厚 0.9		33.7	緑泥石片岩
第60図 5	石剣	SD1	長 5.2、幅 3.0、厚 0.6		17.0	緑泥石片岩
第60図 6	石剣	E3グリッド	長 15.7、幅 4.0、厚 2.4		210	緑泥石片岩、刃部と折れ口を潰す
第60図 7	石剣	D2グリッド	長 14.3、幅 3.4、厚 2.1		156.9	緑泥石片岩
第60図 8	石剣	SI5	長 9.9、幅 3.3、厚 2.0		93.6	緑泥石片岩
第60図 9	石棒	SD1	長 13.1、幅 3.1、厚 0.9		73.2	緑泥石片岩
第60図10	石剣	G3グリッド	長 5.6、幅 4.2、厚 1.8		84.0	緑泥石片岩
第60図11	札状石製品	SD2	長 6.2、幅 3.6、厚 1.1		58.1	緑泥石片岩、石剣からの転用品
第60図12	石剣未製品	SD1	長 6.7、幅 3.2、厚 0.7		28.9	緑泥石片岩、敲打成形段階
第60図13	石剣未製品	SI7	長 11.5、幅 4.9、厚 3.0		195	緑泥石片岩、敲打成形段階
第60図14	石剣未製品	SK4	長 14.6、幅 4.6、厚 1.6		160	緑泥石片岩、敲打成形段階
第60図15	石剣未製品	SD1	長 24.0、幅 7.3、厚 4.0		1000	緑泥石片岩、粗割成形段階
第60図16	石剣未製品	SI8	長 21.1、幅 4.8、厚 2.3		425	緑泥石片岩、粗割成形段階
第60図17	石剣未製品	SI5	長 13.0、幅 5.6、厚 1.0		122.6	緑泥石片岩、粗割成形段階
第60図18	石剣未製品	SI5	長 10.1、幅 4.9、厚 0.8		59.6	緑泥石片岩、粗割成形段階
第60図19	石剣未製品	G2グリッド	長 19.4、幅 3.9、厚 1.0		87.0	緑泥石片岩、粗割成形段階
第60図20	石剣未製品	SD1	長 9.9、幅 3.6、厚 1.0		56.8	緑泥石片岩、粗割成形段階

第 6 表 石器観察表 (第 61 ~ 72 図)

図版No.	器種	出土地点	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	石材	備考
第61図 1	石鏃	SI3	3.8	1.9	0.9	5.8	黒色頁岩	粗雑な加工
第61図 2	石鏃	SI4	4.2	1.9	0.7	3.1	黒色頁岩	凸基有茎鏃、後谷型

図版No.	器種	出土地点	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	石材	備考
第61図3	石鏃	SI5	2.6	1.5	0.6	2.3	チャート	凸基有茎鏃
第61図4	石鏃	SI5	2.7	2.2	0.5	1.9	チャート	凹基無茎鏃
第61図5	石鏃	SI5	2.9	1.4	0.5	1.9	チャート	凸基有茎鏃
第61図6	石鏃	SI5	3.9	2.1	0.9	6.3	黒色頁岩	粗雑な加工
第61図7	石鏃	SI5	3.2	1.9	0.9	4.6	頁岩	
第61図8	石鏃	SI6	2.1	1.6	0.5	1.1	チャート	凸基有茎鏃
第61図9	石鏃	SI6	2.1	1.3	0.6	0.9	チャート	凸基有茎鏃か石錐
第61図10	石鏃	SI6	2.1	1.1	0.4	0.9	黒色頁岩	凸基有茎鏃
第61図11	石鏃	SI6	1.8	1.1	0.6	0.8	チャート	小型
第61図12	石鏃	SI7	3.8	1.2	0.8	2.8	黒色頁岩	凸基有茎鏃
第61図13	石鏃	SI7	1.2	1.4	0.4	0.6	チャート	平基有茎鏃
第61図14	石鏃	SI7	3.1	1.7	0.6	1.8	珪質頁岩	凸基有茎鏃
第61図15	石鏃	SI8	2.2	1.5	0.5	1.3	チャート	凸基有茎鏃
第61図16	石鏃	SI8	3.6	2.1	0.8	4.3	黒色頁岩	凸基有茎鏃
第61図17	石鏃	SI8	3.5	1.5	0.6	2.1	チャート	凸基有茎鏃
第61図18	スクレイパー	SI8	4.1	2.6	1.2	7.8	黒色頁岩	
第61図19	石鏃	D2グリッド	2.6	1.2	0.5	0.8	珪質頁岩	凸基有茎鏃、被熱発泡
第61図20	石鏃	E1グリッド	2.3	1.3	0.5	1.1	頁岩	凸基有茎鏃
第61図21	石錐	E1グリッド	3.5	0.9	0.8	1.8	チャート	
第61図22	石鏃	E3 P1	2.7	1.3	0.5	0.9	黒色頁岩	凸基有茎鏃
第61図23	石鏃	E3グリッド	3.7	2.5	1.1	7.3	黒色頁岩	
第61図24	石鏃	E4グリッド	1.3	1.1	0.4	0.3	黒曜石	
第61図25	石鏃	E4グリッド	1.9	1.7	0.4	1.1	黒曜石	平基無茎鏃
第61図26	石鏃	F2グリッド	2.6	1.3	0.5	1.2	チャート	凸基有茎鏃、粗雑な加工
第61図27	石鏃	F2グリッド	2.5	1.4	0.4	0.9	鉄石英	凸基有茎鏃
第61図28	石鏃	F2グリッド	2.6	1.3	0.7	1.6	黒曜石	凸基有茎鏃
第62図1	石鏃	F3グリッド	3.1	1.7	0.5	1.5	黒曜石	凸基有茎鏃、鋸歯縁状
第62図2	石鏃	F3グリッド	2.7	1.5	0.6	1.1	黒曜石	凸基有茎鏃、鋸歯縁状
第62図3	石鏃	F3グリッド	2.5	1.3	0.5	1.1	黒曜石	凸基有茎鏃
第62図4	石鏃	F3グリッド	2.7	1.4	0.7	1.5	黒色頁岩	凸基有茎鏃
第62図5	石鏃	F3グリッド	2.5	1.5	0.7	0.9	黒曜石	凸基有茎鏃、被熱発泡
第62図6	石鏃	G2グリッド	2.9	1.4	0.5	1.2	メノウ	凸基有茎鏃、
第62図7	石鏃	G2グリッド	1.9	1.3	0.4	0.7	ホルンフェルス	凹基有茎鏃
第62図8	石鏃	G2グリッド	2.1	1.7	0.5	1.3	チャート	平基無茎鏃
第62図9	石鏃	G2グリッド	4.3	1.4	0.7	3.4	ホルンフェルス	凸基有茎鏃
第62図10	スクレイパー	G2グリッド	3.3	3.1	0.7	10.1	鉄石英	
第62図11	スクレイパー	G2グリッド	3.1	3.3	0.8	6.2	鉄石英	
第62図12	石錐	G2グリッド	4.2	1.2	0.7	2.1	チャート	
第62図13	石鏃	G4グリッド	2.5	1.3	0.4	0.9	チャート	凸基有茎鏃
第62図14	石鏃	SI9	2.3	1.6	0.5	0.8	チャート	平基無茎鏃、局部磨製
第62図15	石鏃	SK15	3.4	1.9	0.6	3.3	チャート	凸基有茎鏃
第62図16	石鏃	SI13	2.6	1.6	0.6	1.9	黒色頁岩	凸基有茎鏃
第62図17	石鏃	SI13	4.7	2.6	1.4	11.4	黒色頁岩	
第62図18	石鏃	SI13	2.9	2.1	0.9	4.1	黒色頁岩	
第62図19	石鏃	SD1	2.5	1.1	0.4	1.1	チャート	凸基有茎鏃
第62図20	石鏃	SD1	2.5	1.5	0.5	1.2	黒色頁岩	平基有茎鏃
第62図21	石鏃	SD1	2.8	1.5	0.5	1.2	黒色頁岩	凸基有茎鏃
第62図22	石鏃	SD1	4.7	1.5	0.5	2.8	黒色頁岩	大型長身鏃
第62図23	石錐	SD2	2.9	1.1	0.5	1.6	チャート	
第62図24	石鏃	遺構外	2.1	1.1	0.5	0.8	黒曜石	凸基有茎鏃
第62図25	石鏃	遺構外	1.7	1.7	0.4	0.6	黒曜石	凹基無茎鏃、局部磨製
第63図1	打製石斧	SI8	24.4	12.8	4.4	1460	安山岩	大型
第63図2	打製石斧	SI8	22.2	10.3	4.6	1015	安山岩	大型
第63図3	打製石斧	SI8	17.9	10.7	3.6	630	頁岩	大型
第63図4	打製石斧	SI8	18.7	11.2	3.8	680	頁岩	大型
第63図5	打製石斧	E3グリッド	19.3	10.3	2.9	580	ホルンフェルス	大型
第63図6	打製石斧	SD1	14.4	8.8	2.4	295	結晶片岩	
第63図7	打製石斧	遺構外	12.2	6.5	2.5	215	ホルンフェルス	
第63図8	打製石斧	SI9	11.7	7.1	2.3	205	砂岩	
第64図1	磨製石斧	SI7	20.1	10.2	4.1	1170	蛇紋岩	
第64図2	磨製石斧	SD1	17.1	8.9	2.8	600	蛇紋岩	
第64図3	磨製石斧	SI5	14.9	5.9	3.1	434	蛇紋岩	
第64図4	磨製石斧	SD1	8.1	3.4	2.6	72.3	蛇紋岩	
第64図5	磨製石斧	F1グリッド	10.1	2.8	2.1	53	蛇紋岩	
第64図6	磨製石斧	SI5	6.3	3.5	2.7	45.6	蛇紋岩	
第64図7	磨製石斧	F2グリッド	9.2	2.3	2.8	57.3	蛇紋岩	
第64図8	磨製石斧	遺構外	11.1	2.5	2.7	55.4	蛇紋岩	



図版No.	器種	出土地点	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	石材	備考
第64図9	磨製石斧	G4グリッド	8.2	2.6	1.1	41.9	緑色変質岩	小型
第64図10	磨製石斧	F2グリッド	6.1	2.8	0.8	23.1	蛇紋岩	小型
第64図11	磨製石斧	F2グリッド	3.1	3.6	1.1	21.6	蛇紋岩	小型
第64図12	磨製石斧	SD1	3.1	2.3	1.1	13.2	変質岩	小型
第64図13	磨製石斧	SI8	2.7	1.8	0.9	4.1	軟玉	小型
第64図14	磨製横刃型石器	SD1	4.6	5.2	0.6	24.4	砂岩	穂摘具か
第64図15	磨製横刃型石器	G2グリッド	4.5	5.3	0.8	23.2	砂岩	穂摘具か
第65図1	石皿	D2グリッド	37.4	17.8	1.5	1740	緑泥石片岩	
第65図2	石皿	E1グリッド	35.7	17.6	3.3	3360	緑泥石片岩	
第65図3	石皿	SD1	19.5	17.1	1.4	1090	緑泥石片岩	
第65図4	石皿	SI8	16.3	11.6	1.6	620	緑泥石片岩	
第65図5	磨石	SI6	10.4	9.4	4.5	560	安山岩	
第65図6	石皿	SI7	19.4	10.6	4.5	1090	安山岩	
第65図7	石皿	E3グリッド	12.5	8.5	4.5	520	安山岩	
第65図8	石皿	SD1	12.5	9.6	6.5	720	安山岩	
第65図9	石皿	D2グリッド	13.5	14.3	6.6	1280	安山岩	
第66図1	石皿	D2グリッド	22.8	28.7	6.1	5880	安山岩	
第66図2	石皿	SI7	16.5	14.5	9.3	1300	安山岩	
第66図3	石皿	D3グリッド	20.5	17.1	7.3	4020	閃緑岩	
第66図4	石皿	E2グリッド	19.8	9.7	4.9	1380	閃緑岩	
第66図5	石皿	SI4	20.1	9.1	2.6	780	砂岩	
第66図6	石皿	D2グリッド	7.5	7.2	1.9	200	砂岩	
第67図1	石皿	SI8	13.1	8.3	1.2	280	砂岩	
第67図2	石皿	G2グリッド	11.5	9.2	1.5	280	砂岩	
第67図3	石皿	F2グリッド	9.1	9.2	1.1	136.1	安山岩	
第67図4	石皿	SD1	11.2	8.1	1.5	1922	安山岩	
第67図5	石皿	SI6	8.7	8.1	1.8	166	安山岩	
第68図1	砥石	SI4	11.1	6.8	2.5	187.1	砂岩	多面不定形
第68図2	砥石	SI4	5.4	6.3	4.6	121.1	砂岩	多面不定形
第68図3	砥石	SI4	5.1	3.5	2.6	35	砂岩	多面不定形
第68図4	砥石	SD1	3.8	3.7	2.7	33.4	砂岩	多面不定形
第68図5	砥石	SD1	3.1	2.1	1.3	10.3	砂岩	多面不定形
第68図6	砥石	SI6	3.9	2.8	1.8	23.6	砂岩	多面不定形
第68図7	砥石	SI5	10.1	6.6	2.1	193.9	砂岩	舟形
第68図8	砥石	G4グリッド	6.1	4.4	2.4	77.6	砂岩	舟形
第68図9	砥石	SD1	3.9	3.6	0.7	16.6	砂岩	平板形
第68図10	砥石	SD1	4.3	5.2	1.2	34.2	砂岩	平板形
第68図11	砥石	SI7	8.3	5.7	0.9	71.7	砂岩	平板形
第68図12	砥石	SD1	9.2	6.6	1.1	95.3	砂岩	平板形
第68図13	砥石	F2グリッド	10.1	4.6	1.8	108.9	砂岩	平板形
第68図14	砥石	SD1	4.8	3.7	0.9	24.9	砂岩	剣形
第68図15	砥石	SD1	3.7	4.2	0.9	25.4	砂岩	剣形
第68図16	砥石	SI4	3.5	4.9	1.3	29.3	砂岩	剣形
第68図17	砥石	F5グリッド	3.4	3.3	0.8	10.5	砂岩	剣形
第68図18	砥石	F2グリッド	3.4	4.8	1.1	18.6	砂岩	剣形
第68図19	砥石	G4グリッド	3.3	3.5	1.2	9.1	砂岩	剣形
第68図20	砥石	F4グリッド	2.2	2.2	0.8	7.4	砂岩	剣形
第69図1	石皿	SI4	16.1	14.2	1.8	620	緑泥石片岩	赤色顔料付着
第69図2	台石	SI4	12.6	11.1	7.4	1420	安山岩	赤色顔料付着
第69図3	磨石	SI4	10.7	8.2	3.2	360	安山岩	赤色顔料付着
第69図4	磨石	SI4	10.1	8.7	6.6	980	安山岩	赤色顔料付着
第69図5	磨石	SI4	7.5	6.5	5.1	310	安山岩	赤色顔料付着
第69図6	磨石	SI4	10.2	6.3	4.3	370	砂岩	石柱状、赤色顔料付着
第69図7	磨石	SI4	6.1	5.7	4.1	220	安山岩	赤色顔料付着
第69図8	磨石	SI4	5.5	4.1	2.6	80.1	安山岩	赤色顔料付着
第69図9	磨石	SI4	10.9	6.5	4.5	490	安山岩	
第69図10	磨石	SI4	7.6	6.3	4.6	300	安山岩	
第69図11	磨石	SI4	8.1	6.1	3.8	260	安山岩	
第69図12	磨石	SI4	6.8	5.9	4.9	280	安山岩	
第69図13	磨石	SI4	7.1	6.2	3.1	187.9	安山岩	
第69図14	磨石	SI1	9.1	8.6	7.1	700	安山岩	
第69図15	磨石	SI5	6.6	5.9	3.6	193.9	安山岩	
第69図16	敲石	SI5	6.2	3.2	1.8	48.1	砂岩	
第69図17	敲石	SI5	6.7	2.6	1.8	56.3	砂岩	
第70図1	磨石	SI6	11.3	7.1	5.5	590	安山岩	赤色顔料付着
第70図2	磨石	SI6	8.3	5.7	5.8	340	安山岩	赤色顔料付着

図版No.	器種	出土地点	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	石材	備考
第70図3	敲石	SI6	6.9	3.9	2.5	95.4	砂岩	赤色顔料付着
第70図4	磨石	SI6	6.2	6.3	3.9	230	安山岩	
第70図5	磨石	SI6	5.2	5.3	4.3	102.5	安山岩	
第70図6	磨石	SI6	6.2	6.1	3.8	210	安山岩	
第70図7	磨石	SI6	7.8	7.5	3.9	300	安山岩	
第70図8	磨石	SI6	8.5	4.4	5.5	245	安山岩	
第70図9	磨石	SI6	9.1	7.9	3.8	420	砂岩	
第70図10	磨石	SI6	7.1	7.1	4.1	240	安山岩	
第70図11	磨石	SI7	10.3	6.6	3.3	420	緑泥石片岩	
第70図12	磨石	SI7	6.7	6.4	4.8	300	安山岩	赤色顔料付着
第70図13	磨石	SI7	7.1	4.8	4.4	220	安山岩	赤色顔料付着
第70図14	磨石	SI7	15.3	10.2	7.6	1490	石灰岩	赤色顔料付着
第70図15	磨石	SI7	11.2	7.1	6.9	880	安山岩	赤色顔料付着
第71図1	磨石	SI8	7.2	8.8	7.3	540	安山岩	
第71図2	磨石	SI8	8.2	7.1	4.6	380	安山岩	
第71図3	磨石	SI8	7.1	5.9	4.1	134.8	安山岩	
第71図4	磨石	SI8	7.2	4.9	4.1	200	安山岩	
第71図5	磨石	SI8	7.9	5.8	2.8	200	安山岩	
第71図6	磨石	SI8	7.3	6.1	3.3	220	安山岩	
第71図7	磨石	SI8	7.5	6.5	3.9	260	安山岩	
第71図8	磨石	SI8	6.9	6.8	4.4	210	砂岩	
第71図9	磨石	F3グリッド	21.3	8.7	5.5	1420	安山岩	大型、赤色顔料付着
第71図10	磨石	F2グリッド	19.1	8.5	5.7	1360	閃緑岩	大型、赤色顔料付着
第71図11	磨石	D2グリッド	15.7	6.9	5.4	960	安山岩	赤色顔料付着
第71図12	磨石	F2グリッド	7.2	6.9	4.7	320	閃緑岩	赤色顔料付着
第71図13	磨石	E1グリッド	10.1	7.9	5.1	495	安山岩	赤色顔料付着
第71図14	磨石	G2グリッド	10.4	8.3	7.1	865	安山岩	赤色顔料付着
第71図15	磨石	D1グリッド	6.1	5.4	3.8	180.4	安山岩	赤色顔料付着
第71図16	磨石	E3グリッド	6.2	4.6	4.4	159.5	安山岩	赤色顔料付着
第71図17	磨石	E1グリッド	5.8	5.3	4.1	171.5	安山岩	赤色顔料付着
第71図18	磨石	F1グリッド	6.1	4.8	3.4	145.8	安山岩	赤色顔料付着
第71図19	磨石	E3グリッド	4.8	3.7	2.6	60.1	安山岩	赤色顔料付着
第72図1	磨石	SD2	11.9	8.8	5.3	940	安山岩	赤色顔料付着
第72図2	磨石	SD1	6.7	6.1	4.1	225	安山岩	赤色顔料付着
第72図3	敲石	SD1	13.3	4.9	3.7	340	安山岩	石杵状
第72図4	磨石	E1グリッド	9.5	7.5	5.5	525	安山岩	
第72図5	磨石	E1グリッド	10.9	6.4	4.2	260	安山岩	
第72図6	磨石	D1グリッド	8.1	5.8	3.5	182.4	泥岩	
第72図6	磨石	SD1	5.6	3.8	3.5	55.3	泥岩	被熱

第7表 石錘観察表 (第73・74図)

図版No.	出土地点	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	石材
第73図1	SI1	6.5	4.7	2.1	110.8	頁岩
第73図2	SI2	5.1	4.6	1.8	67.4	安山岩
第73図3	SI2	4.3	3.7	2.5	61.2	安山岩
第73図4	SI4	5.3	3.8	0.7	23.5	結晶片岩
第73図5	SI4	5.2	4.9	2	59.8	安山岩
第73図6	SI4	5.7	4.6	1.4	53.6	砂岩
第73図7	SI4	6.9	4.5	1.9	103.6	頁岩
第73図8	SI4	6	4.7	2.5	103.7	安山岩
第73図9	SI6	4.7	3.2	1.4	31.8	安山岩
第73図10	SI8	4.8	3.7	1.6	42.5	安山岩
第73図11	SI8	5.6	4.8	1.3	54.7	安山岩
第73図12	SK4	6.9	5.7	2.3	95	安山岩
第73図13	SK5	5.2	4.2	1.1	41.8	安山岩
第73図14	SK7	4.2	4.5	2.6	61.3	泥岩
第73図15	D2グリッド	4.9	4.2	2.3	61	安山岩
第73図16	D2グリッド	4.1	3.1	0.9	17.8	砂岩
第73図17	E2グリッド	5.9	4.2	1.6	56.6	安山岩
第73図18	F2グリッド	5.1	3.2	1.4	45.2	緑泥石片岩
第73図19	G2グリッド	5.4	4.8	2	73.9	安山岩
第73図20	G2グリッド	5.4	3.5	1.6	48.8	砂岩
第73図21	G4グリッド	4.5	3.8	1.5	38.3	安山岩
第73図22	G4グリッド	6.2	4.8	2.8	107.9	安山岩
第73図23	G4グリッド	6.2	4.6	1.9	77.1	安山岩

図版No.	出土地点	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	石材
第73図24	H3グリッド	6.7	5.1	1.1	59.5	砂岩
第73図25	SI9	5.8	4.6	2.4	86.5	砂岩
第73図26	SI9	4.6	3.3	1.3	30.1	砂岩
第73図27	SI13	5.2	3.3	2	46.7	安山岩
第73図28	SX3	5.1	4.2	1.2	42.6	安山岩
第74図1	SD1	10	5	2.7	166	安山岩
第74図2	SD1	6.3	4.8	1.9	87.9	結晶片岩
第74図3	SD1	6.4	4.4	2	91.3	安山岩
第74図4	SD1	6.1	5	1.3	55.9	安山岩
第74図5	SD1	5.1	2.8	0.8	23.1	緑泥石片岩
第74図6	SD1	5.2	3.9	1.3	34.8	安山岩
第74図7	SD1	7.2	4.5	1.3	72.3	頁岩
第74図8	SD1	6.9	4.4	0.8	48.8	変成岩
第74図9	SD1	6.1	3.7	1.5	54.9	頁岩
第74図10	SD1	5.2	4.1	1.5	44.8	頁岩
第74図11	SD1	5.1	3.7	1.2	35.1	安山岩
第74図12	SD1	4.9	3	0.8	19.7	砂岩
第74図13	SD1	4.1	2.9	1	17.2	砂岩
第74図14	SD1	5.2	3.2	1.4	38.4	安山岩
第74図15	SD1	4	3.8	1.2	29.3	変成岩
第74図16	遺構外	6.6	3.7	1.8	72.4	安山岩
第74図17	遺構外	5.1	3.5	1.5	29.2	安山岩
第74図18	遺構外	4.8	3.8	1.3	39.9	安山岩

## V 古墳時代～中世の遺構と遺物

### 1 竪穴建物跡

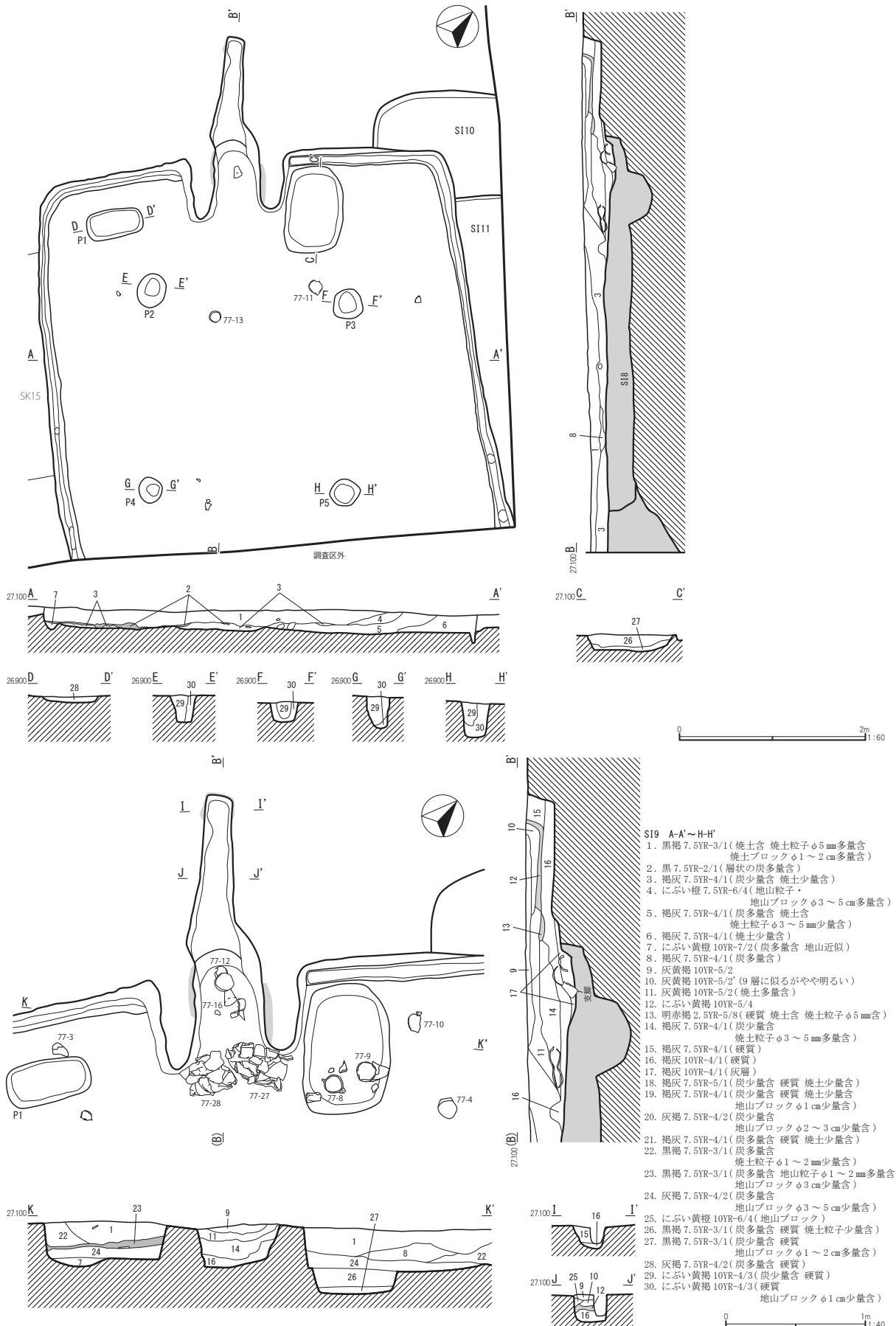
#### (1) 第9号竪穴建物跡（第76・77図、第8表）

G3グリッドに所在する。第10・11号竪穴建物跡及び第15号土坑を切り込む。カマドのある主軸方位を北西に取るが、カマドに対面する南東壁は調査区外で確認できなかった。壁溝は、検出された箇所では全周する。

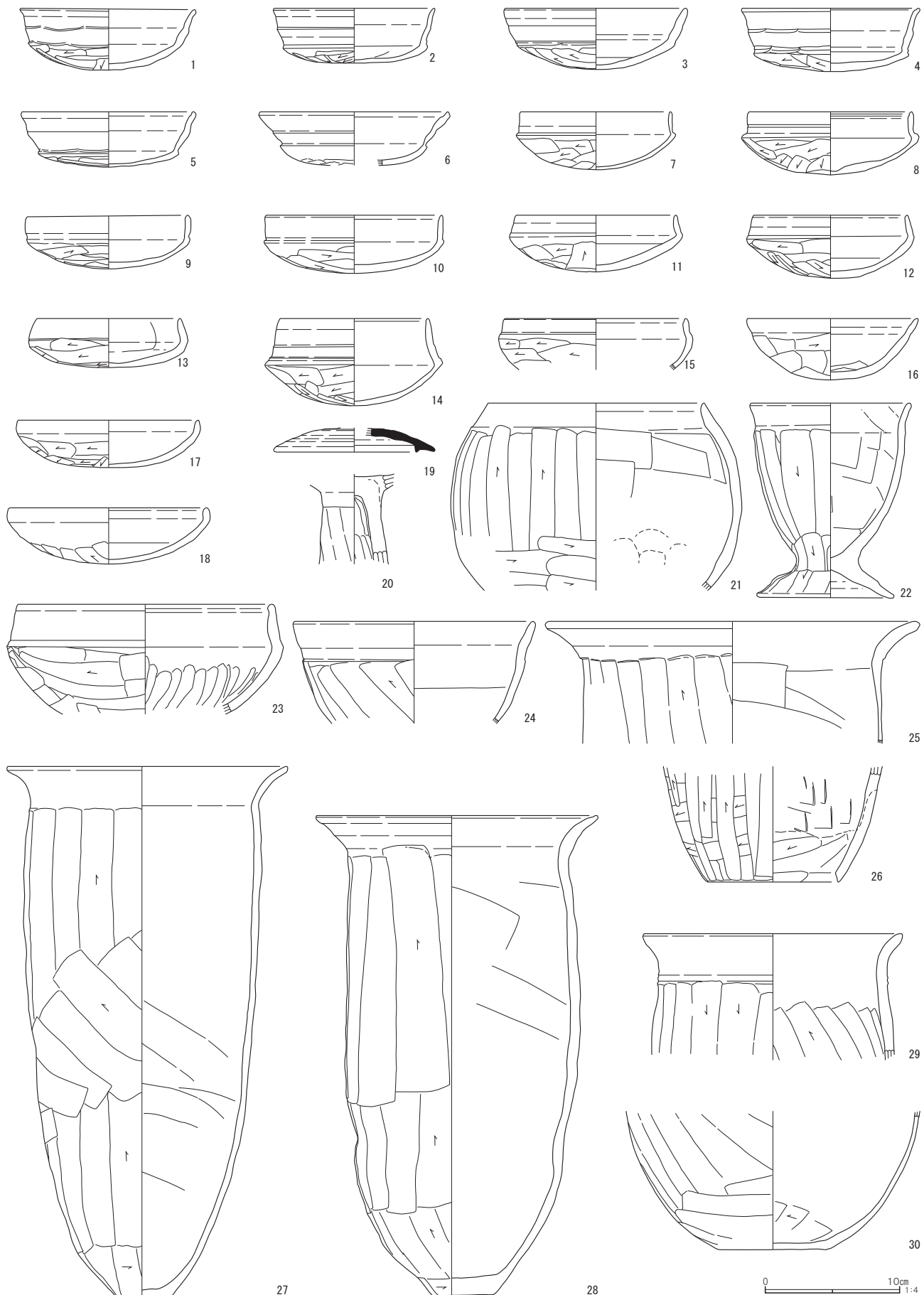
規模は、北東壁－南西壁間で4.67m、北東壁長の確認できた部分で4.20m、深さは確認面から0.25m



第75図 古墳時代～中世遺構全測図



第76図 第9・10・11号竪穴建物跡



第 77 图 第 9 号竖穴建物跡出土土器

第8表 第9号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第77図)

図版No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	土師器 坏	(13.0)	4.5		ABIJ	灰黄褐色 10YR4/2	B	90	
2	土師器 坏	11.9	4.1		AEIMN	浅黄橙色 7.5YR8/3	B	80	
3	土師器 坏	(13.4)	4.5		ABFIJK	橙色 7.5YR7/6	B	30	
4	土師器 坏	13.2	4.7		AEIM	にぶい黄橙色 10YR7/3	A	100	
5	土師器 坏	(12.6)	4.1		ABDJM	橙色 5YR6/6	B	30	
6	土師器 坏	(14.0)	3.9		ADJKM	灰褐色 7.5YR6/2	B	20	
7	土師器 坏	(11.4)	4.3		ABDK	橙色 5YR6/8	A	50	
8	土師器 坏	12.1	4.7		AEJM	灰白色 10YR8/2	B	90	
9	土師器 坏	11.9	3.9		ABDK	にぶい黄橙色 7.5YR7/3	B	90	
10	土師器 坏	(13.0)	4.3		ABDJ	灰褐色 7.5YR5/2	B	25	
11	土師器 坏	11.9	4.2		ABDJ	橙色 5YR6/6	B	90	
12	土師器 坏	11.4	4.7		AEIM	橙色 5YR7/6	B	95	
13	土師器 坏	10.6	3.6		AEIM	にぶい橙色 7.5YR7/4	A	100	
14	土師器 坏	11.1	6.5		AEIM	明赤褐色 2.5YR5/8	A	90	
15	土師器 坏	(13.4)	(3.8)		ABEIJM	にぶい褐色 7.5YR5/3	B	25	
16	土師器 坏	12.5	4.5		AJN	灰白色 2.5YR8/2	A	95	
17	土師器 坏	(13.4)	(3.5)		AIM	灰白色 2.5YR8/2	B	25	
18	土師器 坏	(14.6)	4.2		ABDJK	灰白色 10YR8/1	B	20	
19	須恵器 蓋	(12.0)	(1.8)		AGMN	灰色 N-6	B	20	天井部全面ヘラ削り
20	土師器 高坏		(6.4)		ABEJM	にぶい橙色 5YR7/4	A	60	
21	土師器 無頸壺	(16.0)	(14.9)		ABIKM	淡赤褐色 2.5YR7/4	B	30	丁寧な整形
22	土師器 台付甕	11.8	14.4	10.2	AEGJM	橙色 5YR6/6	A	95	
23	土師器 鉢	(18.8)	(8.2)		ABJ	褐灰色 10YR6/1	A	25	
24	土師器 鉢	(18.0)	(7.6)		ABDFGJ	橙色 5YR6/6	A	30	
25	土師器 甕	(27.8)	(9.1)		ABDJM	橙色 5YR7/6	B	15	
26	土師器 甕	(8.6)	(9.7)		AEGJM	灰白色 10YR8/2	A	25	
27	土師器 甕	20.7	39.4	4.3	AIJK	浅黄色 2.5YR7/3	A	90	
28	土師器 甕	20.8	35.6	4.5	AEGHKL	橙色 2.5YR7/8	B	80	底面に木葉痕有り
29	土師器 甕	(19.0)	(9.4)		ABDGHJ	灰褐色 5YR5/2	B	20	
30	土師器 甕		(10.3)	8.1	ABDghi	赤褐色 10R6/6	B	30	

である。柱穴は4基あり、深さは最も浅いP2で0.21m、最も深いP5で0.38mである。カマドの焚口右に貯蔵穴があり、0.94m×0.64m、深さ0.17mの規模である。

北西壁中央に設置されたカマドは、地山を削り出した袖を使い、水平な煙道を付設する。規模は、燃烧部幅0.47m、同奥行き0.72m、煙道幅0.21m、同長さ1.12mである。焚口上部には長胴甕2点を横位に架け、一方の口縁部に他方の底部を差し込んで連結している。燃烧部中央奥に粘土製の支脚を置き、その上に坏を伏せている。

カマド及び貯蔵穴周辺の床面直上から坏が多数出土したが、6世紀末のものである。また、埋土第1層は多量の焼土とともに縄文時代以降の遺物を多量に包含していたことから、廃棄後の凹地への7世紀代の投棄と考えられる。土器の他に、土錘片と貝巢穴痕泥岩が出土した。縄文時代の遺物は第33～74図に掲載した。

## (2) 第10号竪穴建物跡 (第76図)

G3グリッドに所在する。第9・11号竪穴建物跡と切り合うが、西隅部1.32m×1.14mの範囲を検出した。深さ19cmである。第9号竪穴建物跡より古いと見られるが、第11号竪穴建物跡との新旧関係は不明である。土師器小片が数点伴う。

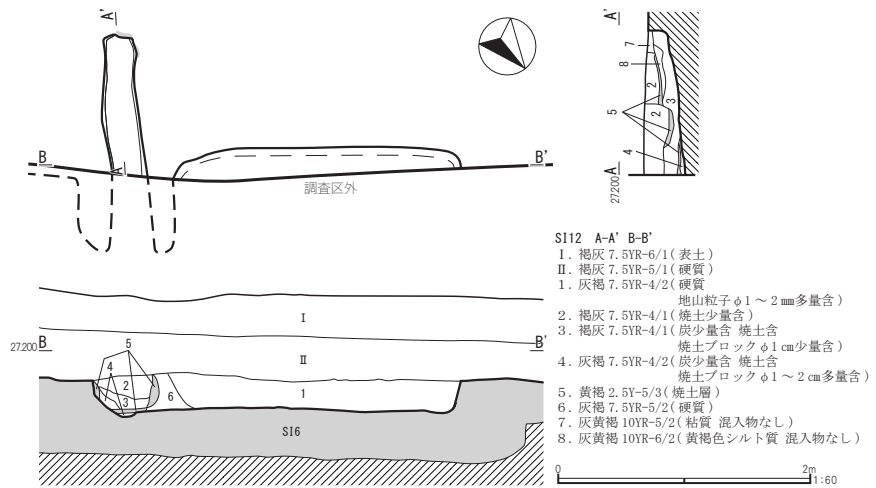
## (3) 第11号竪穴建物跡 (第76図)

H3グリッドに所在する。第9・10号竪穴建物跡と切り合うが、第10号竪穴建物跡の床面から約3cm低い床面を幅約0.3m、長さ3.12mの範囲で検出した。第9号竪穴建物跡より古いと見られるが、第10号竪穴建物跡との新旧関係は不明である。土師器小片が数点伴う。

(4) 第 12 号 竪穴建物跡

(第 78 図)

F 1 グリッドに所在する。南西壁の一部と、そこに設置されたカマドの煙道部を検出した。南西壁は半分相当で長さ 2.95 m、深さ 0.25 m、煙道部は幅 0.21 m、長さ 1.15 m ほぼ水平である。また、土層断面観察により幅 0.45 m



第 78 図 第 12 号 竪穴建物跡

の燃焼部及び粘土による袖も確認できた。

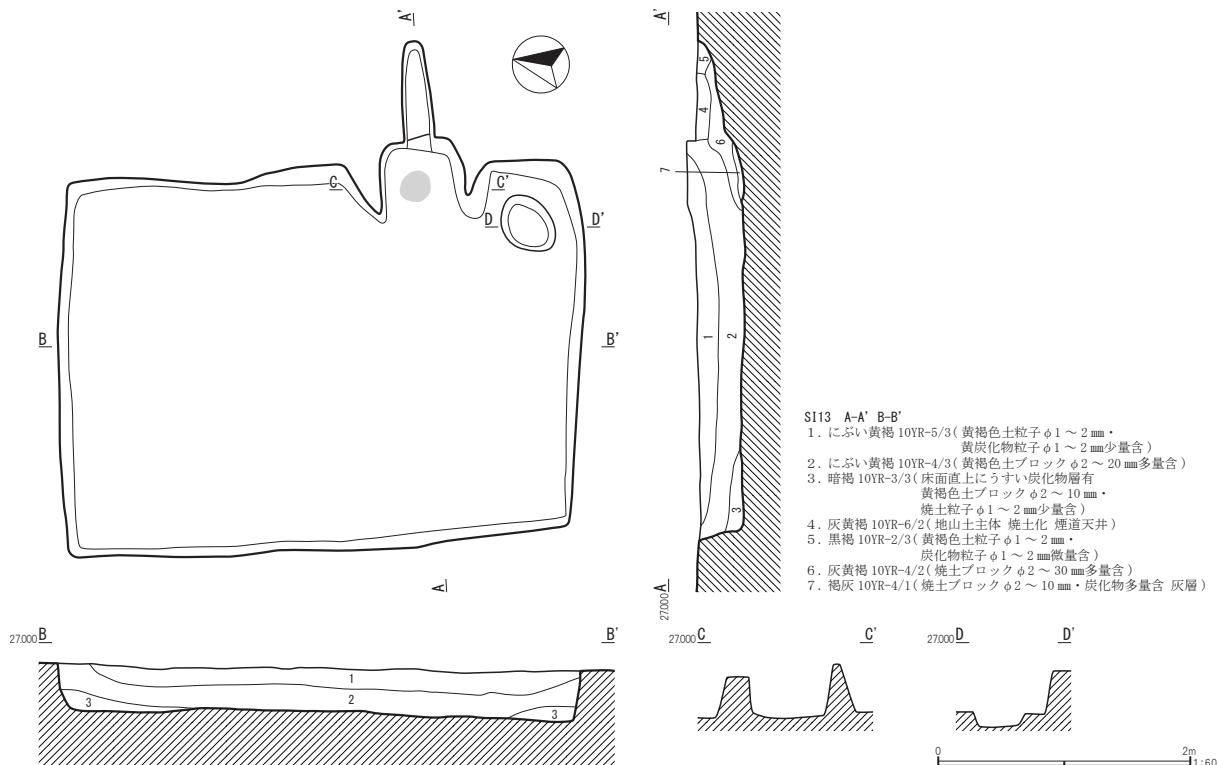
出土遺物は無いが、カマド煙道部の形態から、第 9 号 竪穴建物跡と同時期のものと考えられる。

(5) 第 13 号 竪穴建物跡 (第 79・80 図、第 9 表)

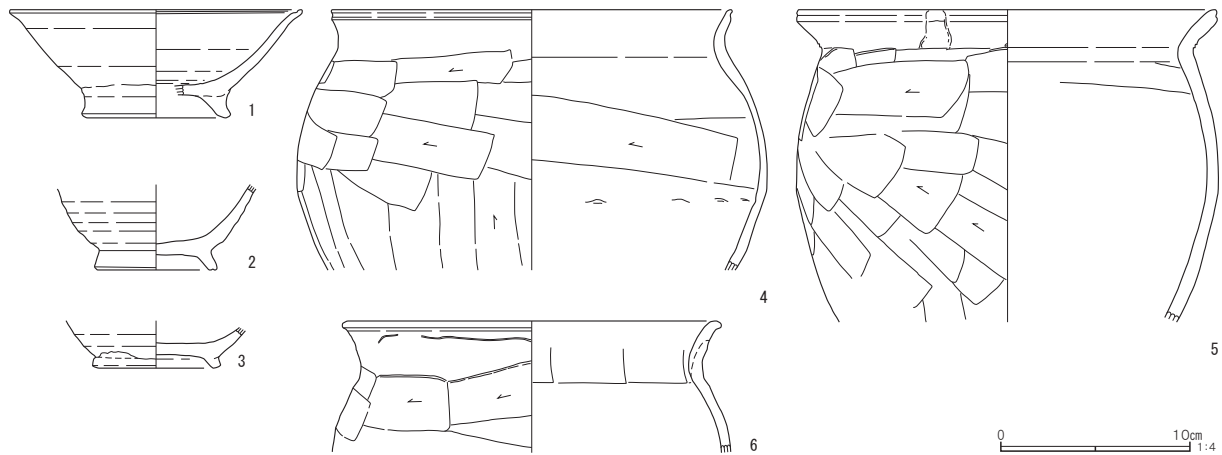
D 3 グリッドに所在する。規模は、長径 4.12 m、短径 2.98 m、深さ 0.38 m である。柱穴は確認できず、カマド右側の南東隅に、0.47 m × 0.38 m、深さ 0.11 m の貯蔵穴と見られるピットを検出した。

カマドは東壁の南寄りに設置され、袖は地山を削り出して造られていた。燃焼部は、幅 0.6 m、奥行き 0.55 m で、内壁は良く焼けていた。煙道部は、幅 0.21 m、長さ 0.77 m で傾斜している。

出土遺物は、貯蔵穴から 1 及び 6、カマドから 2 及び 4 が出土したが、4 の甕は大きい破片が奥壁に貼り付けられた状態であった。いずれも 10 世紀前半のものと考えられる。



第 79 図 第 13 号 竪穴建物跡



第80図 第13号竪穴建物跡出土土器

第9表 第13号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第80図)

図版No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	須恵系土師質土器 壺	(15.4)	5.7	(7.8)	ADIKM	にぶい黄橙色 10YR7/3	B	25	ロクロ成形
2	須恵系土師質土器 壺		(4.5)	6.4	ABEHKM	橙色 7.5YR7/6	B	70	ロクロ成形
3	須恵系土師質土器 壺		(2.5)	7.1	AEKM	灰白色 2.5YR8/2	B	70	ロクロ成形
4	土師器 甕	(21.0)	(13.7)		ABDHKM	にぶい黄橙色 7.5YR7/3	B	40	
5	土師器 甕	(22.0)	(16.5)		AEIM	にぶい黄橙色 7.5YR7/4	B	30	
6	土師器 甕	(20.0)	(6.9)		ABEIM	にぶい橙色 5YR6/4	B	30	

## 2 井戸跡・土坑・ピット

### (1) 第1号井戸跡 (第81図)

E 2 グリッドに所在する。径 0.89 m の円形で、完全に埋没した第 1 号溝跡の埋土に垂直に掘り込まれており、確認面下 0.9 m まで掘り下げて調査した。出土遺物はなかったが、土壁が焼けたような面を持つ多量の焼土ブロックが、黒色の灰及び炭化物を主体とする土に包含され、人為的に埋められていた。

第 2 号溝跡と同時期の中世と考えられる。

### (2) 第2号井戸跡 (第81・83図、第10表)

C 3 グリッドに所在する。径 1.10 m の円形で、確認面下 0.85 m まで掘り下げて調査した。出土遺物は、石製品片 (第 83 図 1) のみであり、砂岩製の石造物の破片と考えられる。

時期は、第 2 号溝跡と同時期の中世と考えられる。

### (3) 第10号土坑 (第81・83図、第10表)

D 1 グリッドに所在する。規模は、0.65 m × 0.55 m、深さ 0.06 m である。底面が加熱されて変色し、この範囲を取り囲むように 3 点の大型礫が平面を内側に向けて配置されており、鍛冶・製鉄に関わる土坑と見られる。S 1 は平面を上に向けた台石と考えられ、S 3 は縄文時代の石皿からの転用であるが、表面に金属刃の痕跡が残る。

時期は、伴出した土器より、第 13 号竪穴建物跡と同じ 10 世紀前半と考えられる。

### (4) 第11号土坑 (第81・83図、第10表)

E 1 グリッドに所在する。規模は、0.60 m × 0.55 m、深さ 0.43 m で、壁面が固く焼土化している。第 1 号溝跡の底面で検出されたが、この溝跡の埋土を掘り込んだ可能性が高い。

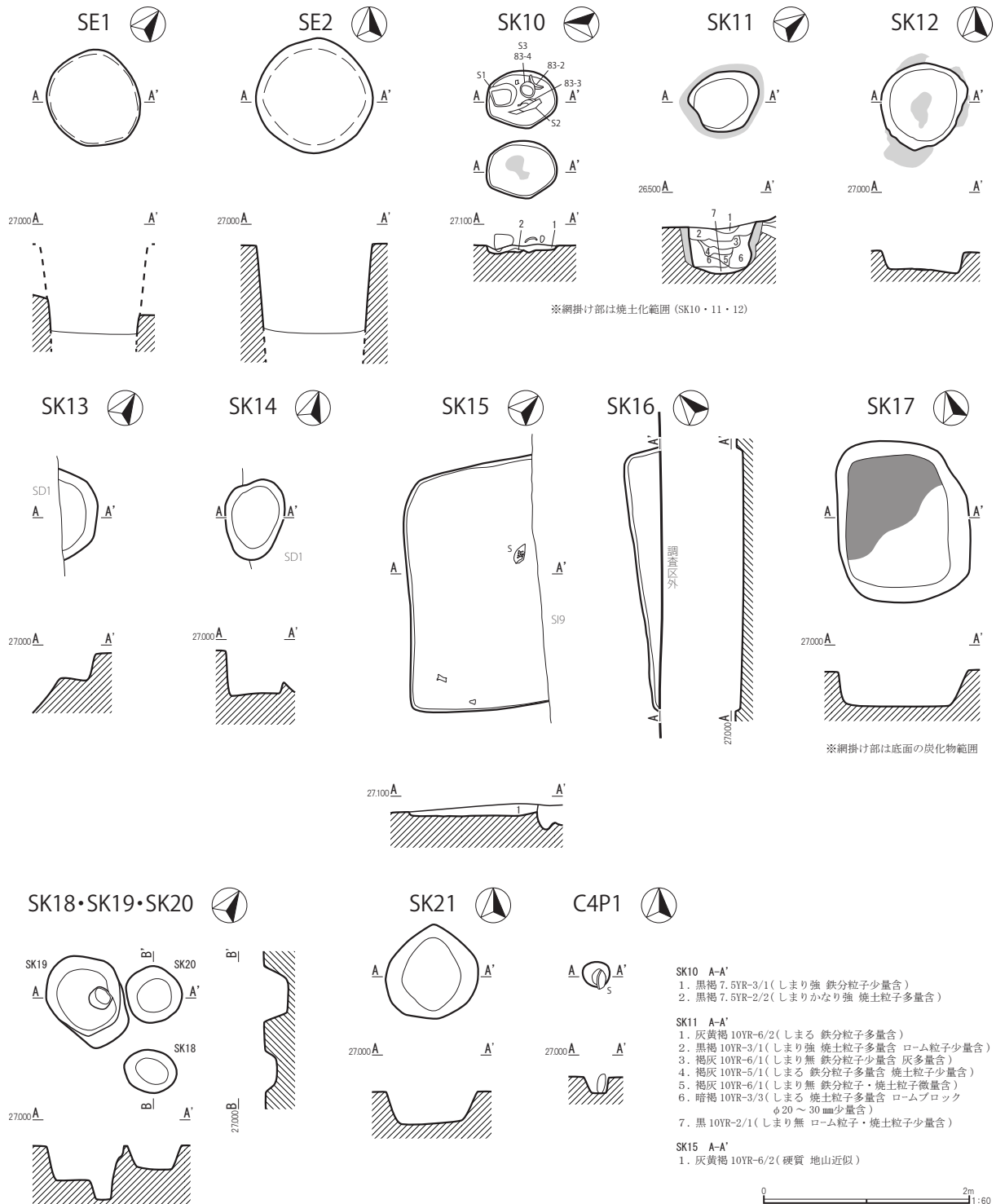
時期は、二次的な被熱をした須恵器壺の破片より、第 10 号土坑と同じ 10 世紀前半と考えられる。



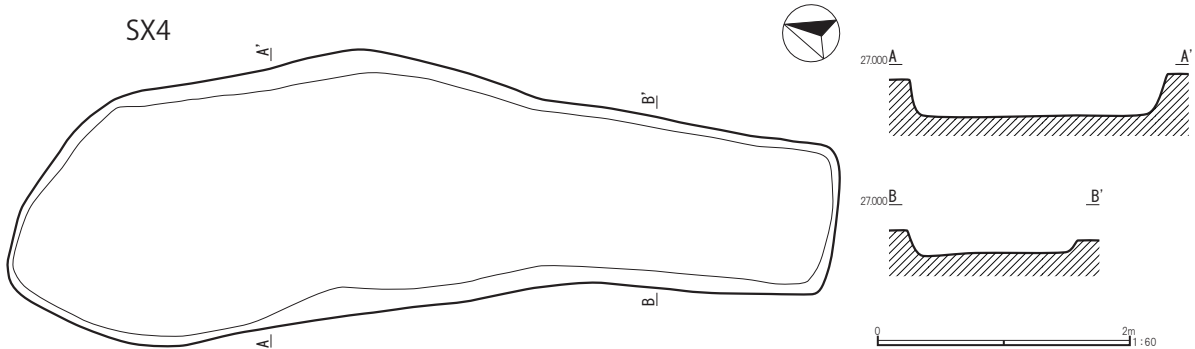
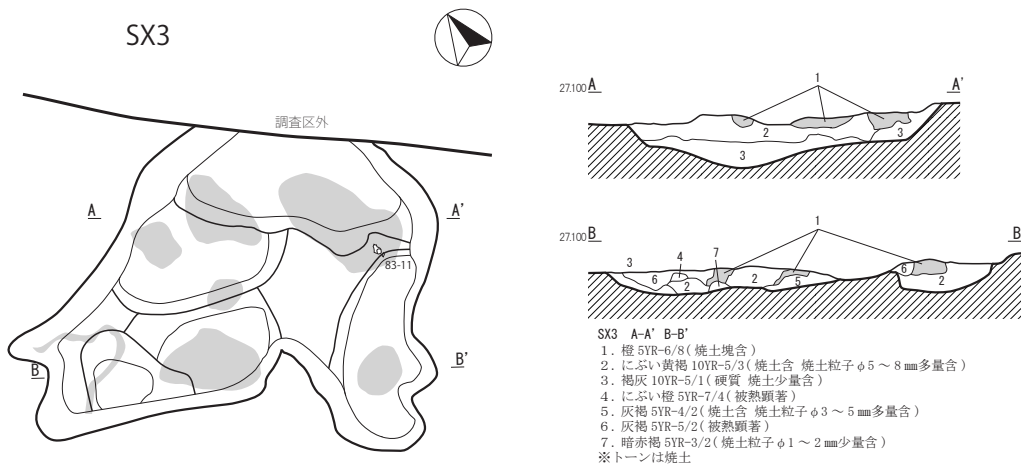
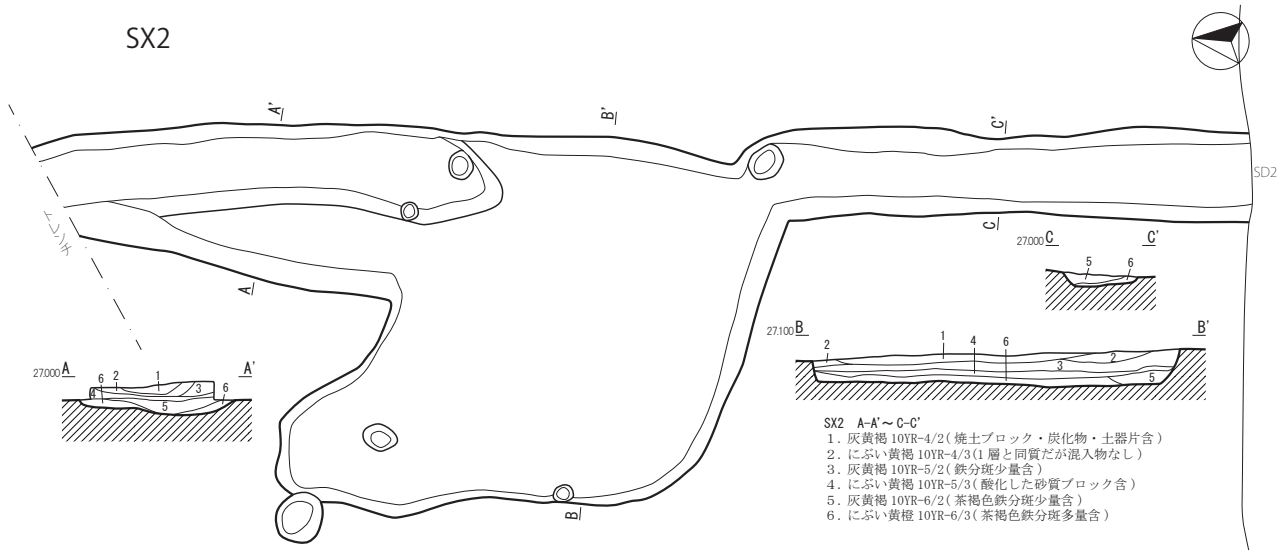
(5) 第12号土坑 (第81・83図)

F2グリッドに所在する。規模は、0.84 m × 0.78 m、深さ0.17 mで、壁面が固く焼土化し、底面も焼土化している。

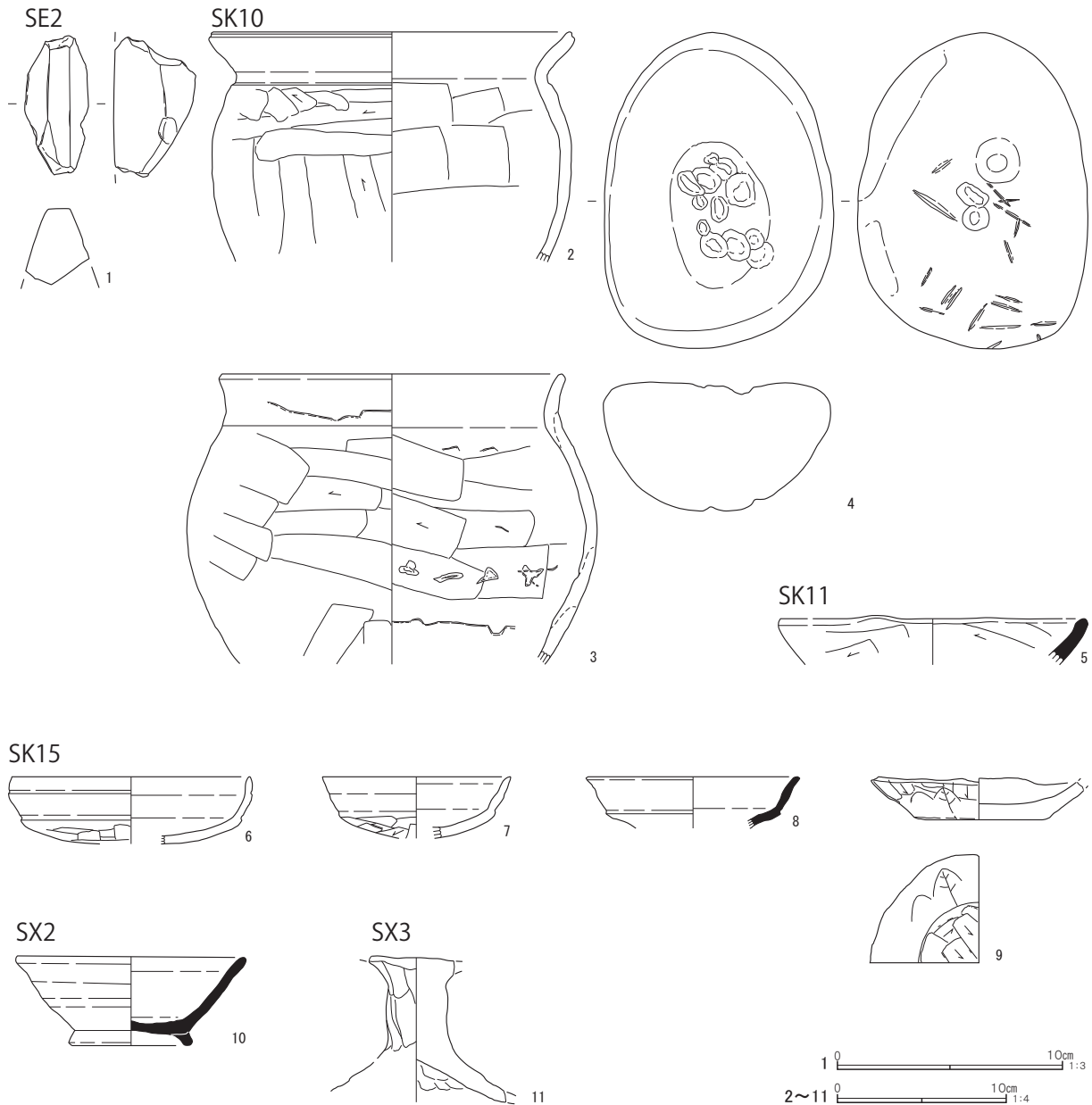
時期については、出土遺物は無いが、本遺構も被熱の類似性から第10・11号土坑と同時期の10世紀前半と考えられる。



第81図 井戸跡・土坑・ピット



第 82 図 第 2・3・4号性格不明遺構



第 83 図 井戸跡・土坑・性格不明遺構出土遺物

第 10 表 井戸跡・土坑・性格不明遺構出土遺物観察表 (第 83 図)

図版No.	器種	出土地点	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	石製品	SE2	長 6.2、幅 3.7・重 624				砂岩、石造物破片			
2	土師器 甕	SK10	(21.0)	(13.6)		ABDJ	にぶい橙色 7.5YR7/3	B	20	
3	土師器 甕	SK10	(20.0)	(17.1)		AEIKM	灰白色 10YR8/1	B	20	
4	台石	SK10	長 18.8、幅 8.5、厚 8.5・重 1950			安山岩	安山岩、縄文時代石皿の転用、金属刃の痕跡有り			
5	須恵器 埴	SK11	(18.0)	(2.7)		ABIM	にぶい黄橙色 10YR7/3	C	15	二次被熱
6	土師器 坏	SK15	(14.0)	4.1		ABKM	橙色 5YR7/6	B	20	
7	土師器 坏	SK15	(11.0)	(3.7)		ABKM	灰褐色 10YR6/2	B	25	
8	須恵器 埴	SK15	(12.4)	(3.0)		ABIM	暗灰色 7.5Y3/1	A	20	
9	土師器 皿	SK15		2.6	8.2	ABKM	浅黄橙色 7.5YR8/3	B	100	壺底部転用、柏葉圧痕有り
10	須恵器 埴	SX2	13.4	5.3	7.2	ABEKM	灰白色 5Y7/1	C	60	
11	土師器 支脚	SX3		(8.4)		AEGHKL	橙色 7.5YR7/6	C	70	粗製高坏の転用

(6) 第13・14号土坑 (第81図)

いずれも第1号溝跡沿いに位置する。第13号土坑は、F2グリッドに所在し、径0.85m、深さ0.26m、第14号土坑は、E3グリッドに所在し、0.77m×0.55m、深さ0.42mの規模で、第14号土坑は、第1号溝より新しい。いずれも出土遺物は無いが、平安時代の可能性が高い。

(7) 第15・16号土坑 (第81・83図、第10表)

いずれも第9号竪穴建物跡周辺に位置し、G4グリッドに所在する。第15号土坑は、一辺2.38m、深さ0.09mの方形で、第9号竪穴建物跡に切られているが、第9号竪穴建物跡と同時期の土器が出土している。第16号土坑も一辺2.55m、深さ0.09mの方形になると見られる。

(8) 第17号土坑 (第81図)

B4グリッドに所在する。上端径1.57m×1.27m、深さ0.34mの長方形土坑だが、下端ラインはより直線的で、平らな底面の半分ほどに炭化物が広がっている。

時期については、出土遺物は無いが、炭化物層の顕著な広がりから第1号井戸跡と同じく中世と考えられる。

(9) 第18・19・20・21号土坑、C4グリッド第1号ピット (第81図)

土坑群としてB4・B5・C4グリッドに所在する。第18号土坑の規模は、0.51m×0.42m、深さ0.13m、第19号土坑の規模は、0.90m×0.72m、深さ0.34mで、小ピットの深さはさらに0.17m深い。第20号土坑の規模は、0.54m×0.51m、深さ0.21m、第21号土坑の規模は、0.89m×0.90m、深さ0.30mである。C4グリッド第1号ピットは、径0.25m、深さ0.17mであるが、拳大の円礫が陥入していた。

時期については、いずれも遺物は無いが、他の遺構との位置関係から平安時代である可能性が高い。

### 3 性格不明遺構

(1) 第2号性格不明遺構 (第82・83図、第10表)

E5グリッドに所在する。不整形の土坑及びそれに接続する2条の溝状遺構で構成される。土坑は、2.93m×2.80m、深さ0.26mの規模で、第1層から焼土ブロックや炭化物とともに坯(第83図10)が出土した。また、下層に酸化した砂質ブロックを多く含む第4層が広がっていることが特筆される。溝状遺構部分は幅0.68m、深さ0.13mで、南側は3.9mで南端を第2号溝跡に、北側は2.7mで北端を試掘トレンチに切られる。いずれも走行方向を南北に取り、土坑と同時に存在したと考えられる。

時期は、10世紀前半と考えられる。

(2) 第3号性格不明遺構 (第82・83図、第10表)

G2グリッドに所在する。東西3.74m、南北3.00m、深さ0.34mの不整形な落ち込みの中に、焼土ブロックが多量に入り込み、壁面も底面も確定が困難な状況であった。東壁沿いの中央で、据え置かれた土製支脚(第83図11)が出土した。

(3) 第4号性格不明遺構 (第82図)

D3グリッドに所在する。長径6.60m、幅1.19～2.13m、深さ0.21～0.30mの規模である。

時期決定に関わる出土遺物はないが、第13号竪穴建物跡の西壁に並行するため、両者は、同時期の関連遺構の可能性がある。

## 4 溝跡

### (1) 第1号溝跡 (第84～87図、第11表)

D1グリッドからF5グリッドにかけて、南北に弓形に延び、検出長は23.8mである。規模は、上端幅3.40m、下端幅1.45m、深さ0.9mで、断面逆台形である。特筆すべきは、底面に小礫や土器片が敷かれて、踏み締められていたことで、検出箇所全体に認められたが、一部を記録して第84図と写真図版8-3～5に示した。ここに使用されたものは土師器や須恵器の破片だけでなく、縄文時代の土器片・土製品・石器剥片等も多量に混在していた。本遺構は、自然堤防を横断し、集落の西縁を画する溝ではあるが、小礫や土器片を使った意図的な敷設から、用途については、排水や流水ではないと考えられる。

出土遺物は、底面に敷かれたものの他に埋土中からも多量に出土し、所属時期に分類して図示した。

第85・86図と第87図1～4が本遺構の時期に相当する6世紀末～7世紀代のものと考えられ、溝の東側に展開していた集落からの流入や投棄と考えられる。いずれも破片で、残存率は低い。

第85図1～24は、土師器である。1～4は有段の坏、5～19は北武蔵型坏及び暗文坏、20は有段の皿、21は砂粒を多く含む胎土による粗製の埴である。

第85図25～36は、須恵器の坏・鉢類である。25～27は高坏、25は蓋、26・27は無蓋の坏部である。28～30は底面全面へラ削りの坏である。36の鉢は、外面下部から底面にかけて手持ちへラ削りが施されており、底部内面に同心円叩き目が残る。

第86図1～11は、須恵器及び灰釉陶器の瓶類である。1・2・3は、横瓶である。4は、胎土やカキ目調整が1・2と類似するが、提瓶と考えられる。5・6は櫛歯状工具の刺突文が施されるが、5は長胴の平底瓶、6は扁平胴の提瓶となる可能性がある。12～16は壺・甕類で、12は径の小さい口縁部内面に自然釉がかかり、器肉が厚く歪んだ胴部には焼き台片が融着している。

第87図1～3は、須恵器大甕である。1・2は焼成良好で、1は頸部凸帯を持つ。これに対して、3は全体が酸化焰焼成となっている。4も口縁部に波状文をもつ大甕だが、酸化焰焼成で焼きが甘く、外面の平行叩き目が不明瞭であり、内面はナデのみのため、土師器との判別が難しい。

第87図5～12は、第13号竪穴建物跡及び第10号土坑と同じ10世紀前半のものである。

第87図13～15は、第2号溝跡と同じ13世紀中葉のもので、中世段階の混入と考えられる。

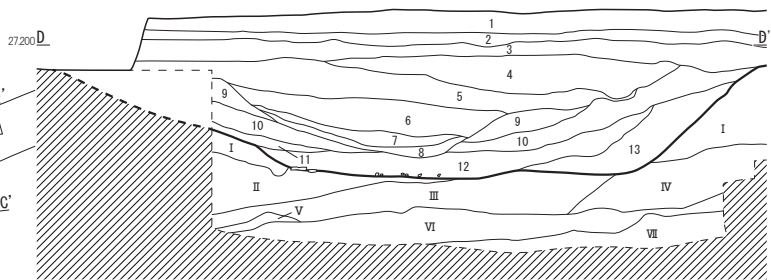
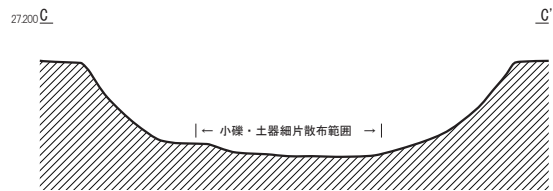
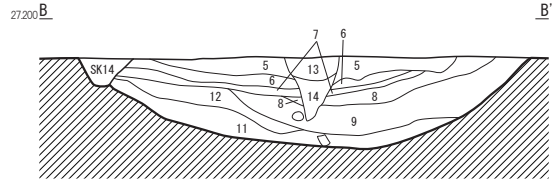
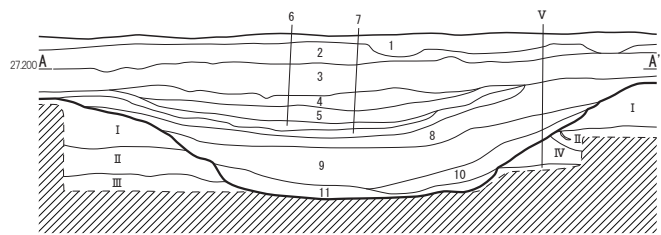
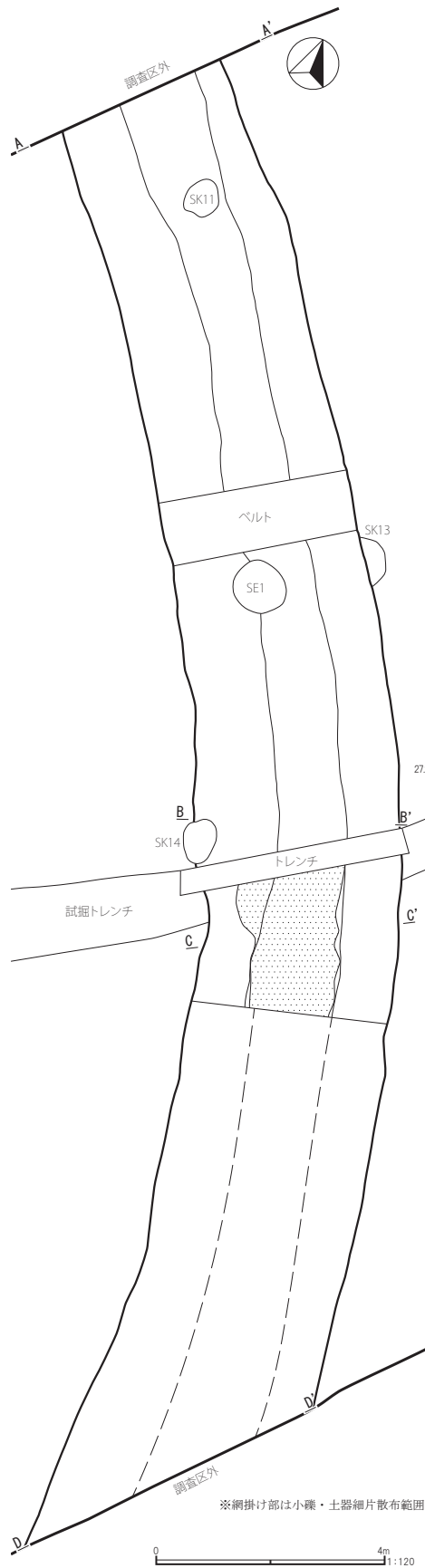
本遺構は、縄文時代の包含層を掘り抜いているため、埋土中にも多量の縄文時代の遺物を包含している。縄文時代の良好な資料は縄文時代の章の図版に掲載し、SD1と併記した。

### (2) 第2・3号溝跡 (第88・89図、第12表)

第2号溝跡は、B6からF6にかけて18mにわたって検出した。東西方向に走り、上端幅3.40～4.25m、下端幅1.45mの断面逆台形で、深さ0.85～1.06mの規模である。土層断面C-C'の第7・8層において、炭化物及び灰の層が認められるが、第1号井戸跡や第17号土坑との同時性が考えられる。

出土遺物は、白磁、青磁、常滑系陶器、瓦質土器、土師質土器、鉄製品、砥石であり(第89図)、13世紀中葉ごろと考えられる。また、西端寄りの溝底面から岩版(第58図1)が出土したが、溝開削時に投入されたと見られる。

第3号溝跡は、C7グリッドで第2号溝跡に直角に取り付く。プランを確認し一部を掘り下げたのみで、幅2.12m、深さ0.5mを測り、出土遺物は無かった。



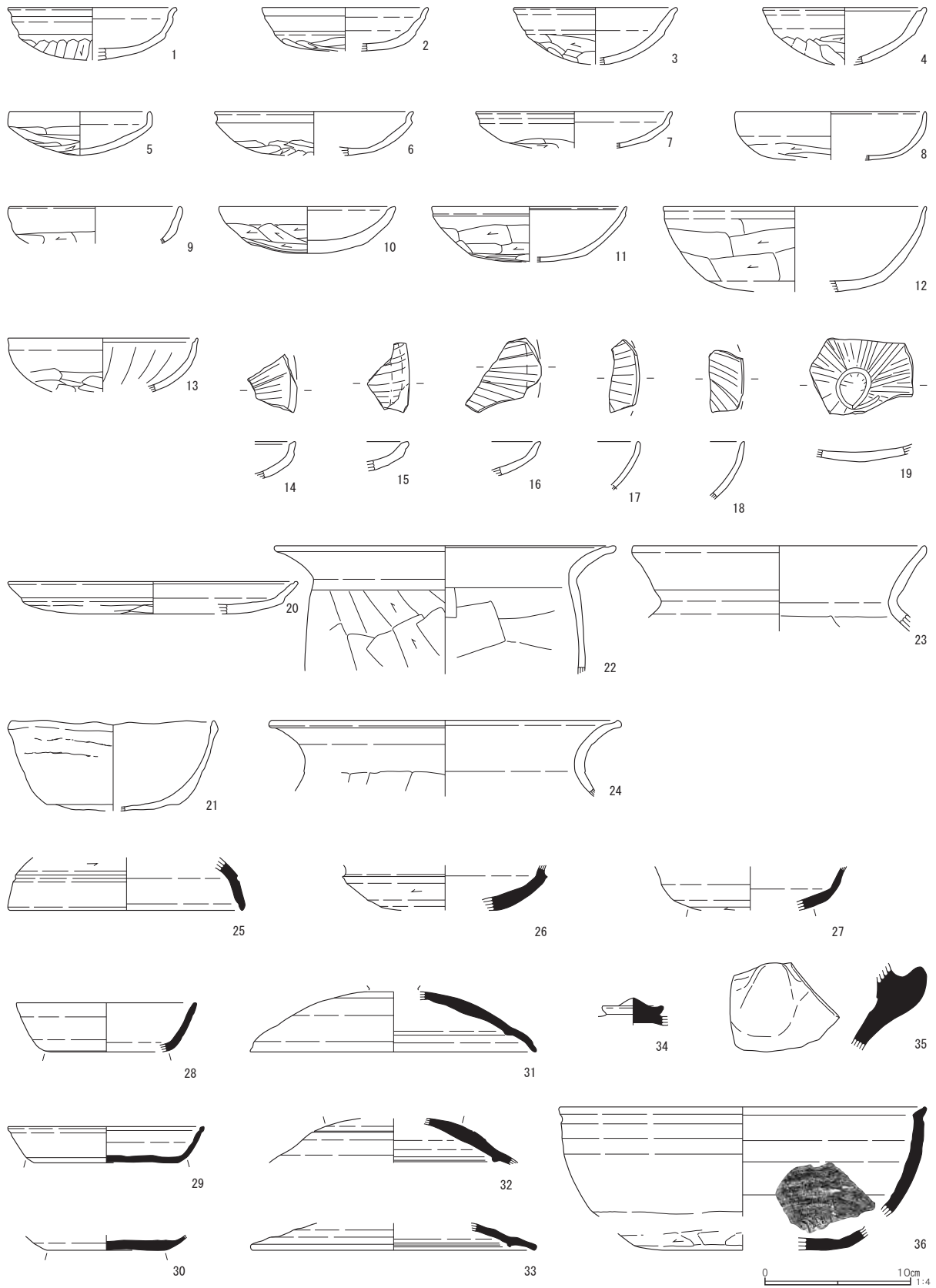
**SD1 A-A' B-B'**

1. 灰黄褐 10YR-6/2(しまり無 表土)
2. 褐灰 10YR-6/1(A 軽石含 陸田耕作土)
3. 灰黄褐 10YR-5/2(B 軽石少量含 土器片含)
4. 褐灰 10YR-4/1(B 軽石少量含 土器片・礫多量含)
5. 黒褐 10YR-3/1(B 軽石多量含 土器片・礫多量含)
6. 黒 10YR-2/1(土器片・礫多量含)
7. 黒褐 10YR-3/2(土器片・礫多量含)
8. 灰黄褐 10YR-4/2(しまる 土器片・礫少量含)
9. 灰黄褐 10YR-5/2(しまる 土器片・礫少量含)
10. 灰黄褐 10YR-5/3(しまる 混入物なし)
11. 灰黄褐 10YR-6/2(灰白色地山ブロック主体)
12. 褐灰 10YR-5/1(しまる 土器片・礫少量含)
13. 灰黄褐 10YR-6/2(しまる 粘土質 後世のピット)
14. 黒褐 10YR-3/2(しまり無 B 軽石少量含 後世のピット)
- I. にぶい黄橙 10YR-6/3(しまる 縄文土器片・石片少量含 縄文時代後の堆積層)
- II. 灰黄褐 10YR-6/2(しまる 縄文土器片多量含)
- III. 褐灰 10YR-4/1(有機物主体の遺物包含層)
- IV. 灰黄褐 10YR-5/2(焼土ブロック多量含 遺物含)
- V. にぶい黄橙 10YR-6/4(しまり強 地山土)

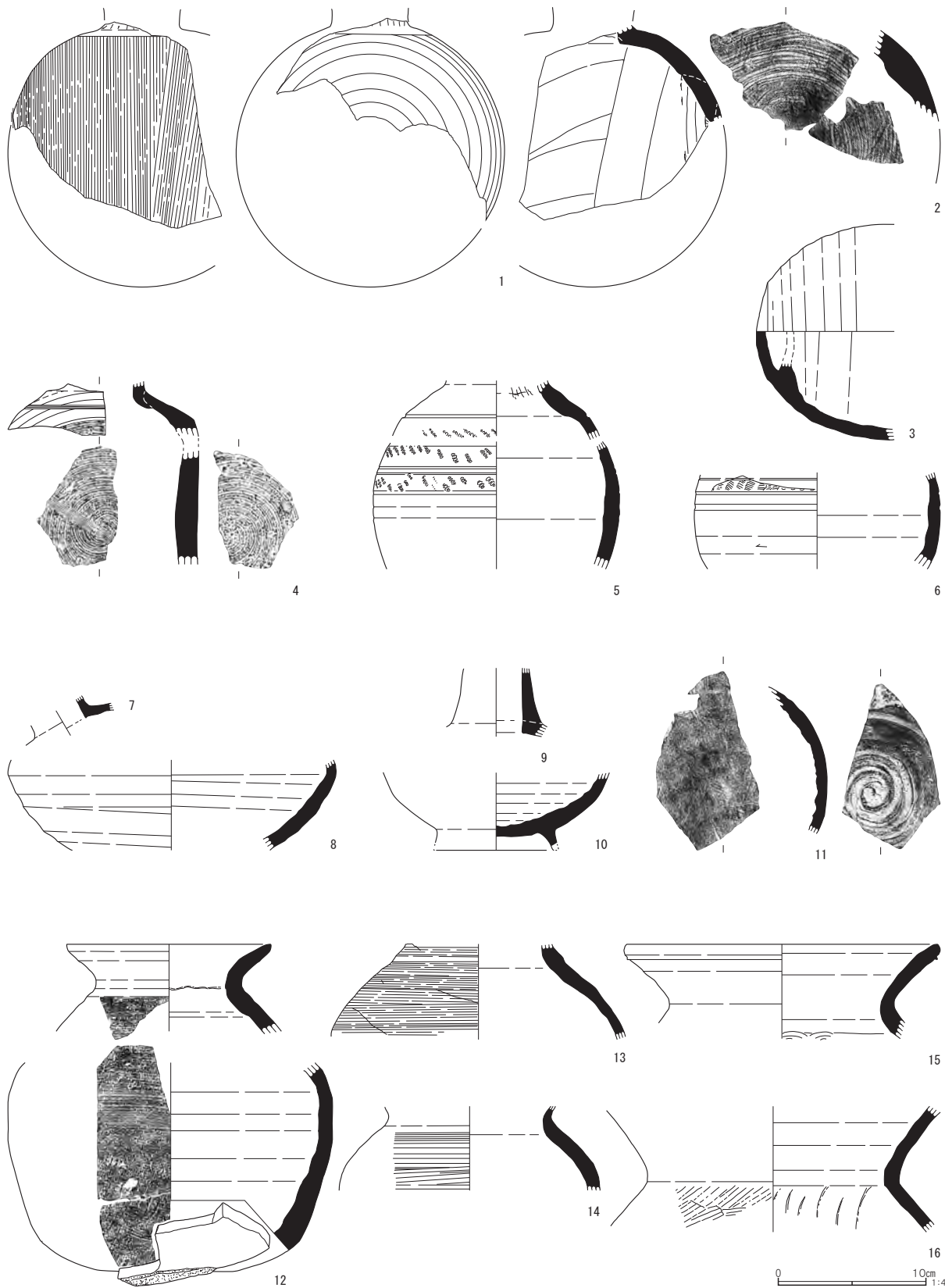
**SD1 D-D'**

1. ~3. A-A', B-B' の 1~3 と同一
4. にぶい黄橙 10YR-6/4(黄褐色土ブロック多量含 人為埋土)
5. 黒褐 10YR-3/1(B 軽石多量含)
6. 灰黄褐 10YR-4/2(焼土ブロック少量含)
7. 灰黄褐 10YR-5/2(焼土ブロック少量含)
8. 灰黄褐 10YR-5/2(炭化物主体 焼土含)
9. 灰黄褐 10YR-5/2(焼土ブロック含)
10. にぶい黄褐 10YR-5/3(焼土粒子少量含)
11. にぶい黄褐 10YR-4/3(10層に類似 やや暗い)
12. 灰黄褐 10YR-5/2(しまり弱)
13. にぶい黄橙 10YR-6/3(黄褐色土ブロック多量含)
- I. 灰黄褐 10YR-6/2(I~VIは縄文時代の堆積層)
- II. 明黄褐 10YR-7/6(上面しまり強 大きな土器片含)
- III. にぶい黄橙 10YR-6/4
- IV. にぶい黄橙 10YR-6/3(炭化物混入 大きな土器片含)
- V. にぶい黄褐 10YR-4/3
- VI. にぶい黄褐 10YR-5/4(炭化物と焼土の混合土)
- VII. にぶい黄橙 10YR-7/3(縄文時代における基盤層と考えられる)

第 84 図 第 1 号溝跡

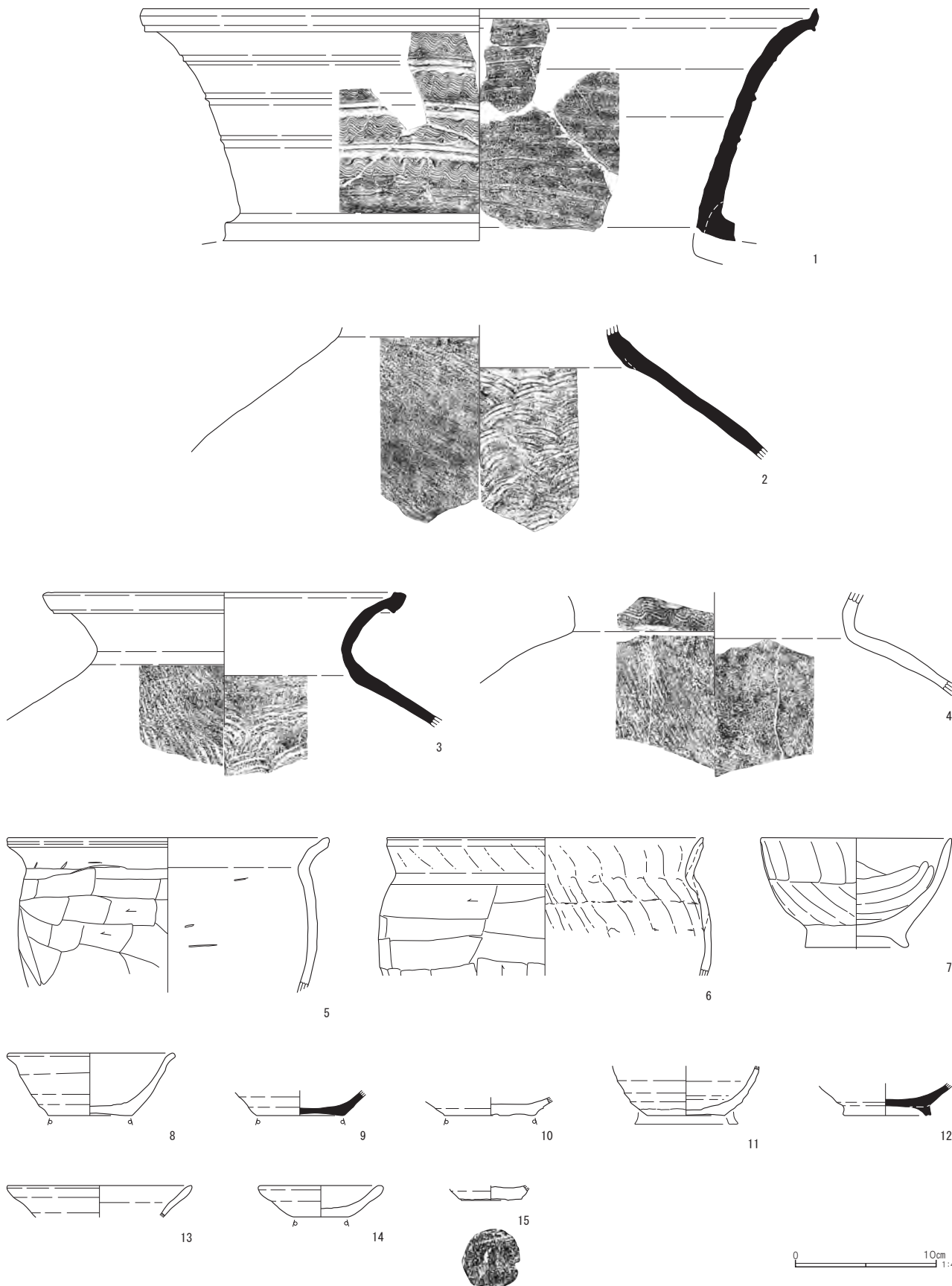


第 85 图 第 1 号沟迹出土土器 (1)



第 86 图 第 1 号沟迹出土土器 (2)



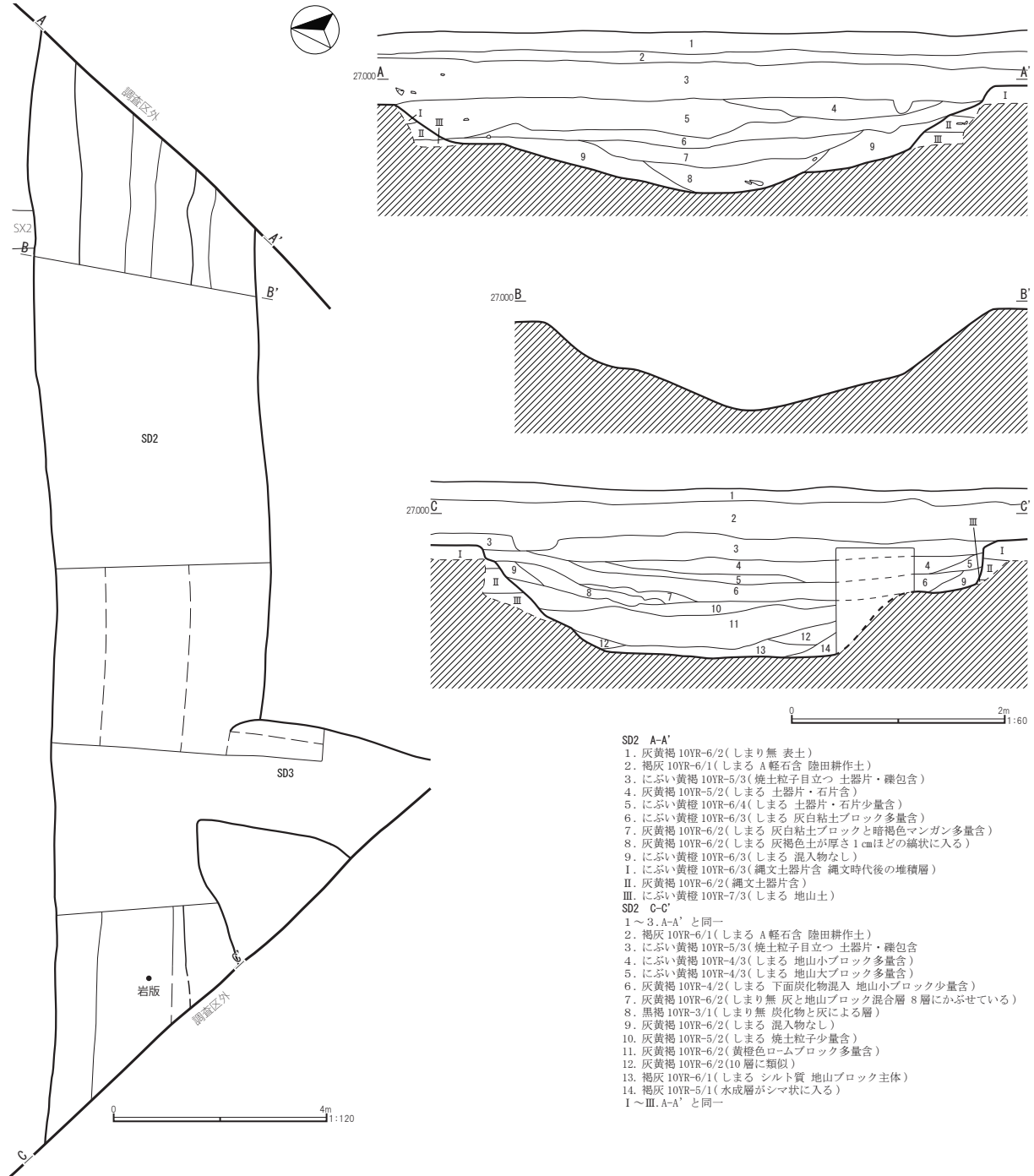


第 87 图 第 1 号沟迹出土土器 (3)

第11表 第1号溝跡出土遺物観察表 (第85～87図)

図版No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第85図1	土師器 坏	(11.6)	(3.0)		ABGHKM	明赤褐色 2.5YR5/6	B	25	
第85図2	土師器 坏	(11.2)	(3.0)		ABIJM	明赤褐色 5YR5/6	A	20	
第85図3	土師器 坏	(11.0)	(3.8)		ABDEJ	にぶい褐色 7.5YR5/3	B	20	
第85図4	土師器 坏	(11.0)	(3.9)		ABDIKM	明赤褐色 7.5YR5/3	B	20	
第85図5	土師器 坏	(9.6)	(2.2)		BHIKN	にぶい褐色 7.5YR6/3	B	25	
第85図6	土師器 坏	(13.6)	(2.9)		ABDKM	にぶい黄褐色 10YR5/3	B	25	
第85図7	土師器 坏	(13.4)	(2.5)		BHKM	浅黄褐色 7.5YR8/4	B	15	
第85図8	土師器 坏	(13.0)	(3.4)		ABDGHK	橙色 2.5YR6/8	B	15	
第85図9	土師器 坏	(12.0)	(3.0)		ABIJKM	橙色 5YR6/8	B	25	
第85図10	土師器 坏	(12.0)	3.2		AEM	橙色 5YR6/6	B	25	
第85図11	土師器 坏	(13.4)	(3.8)		AEKM	浅黄褐色 10YR8/3	A	30	
第85図12	土師器 坏	(18.0)	(5.8)		HIJKM	橙色 5YR6/6	B	20	
第85図13	土師器 坏	(13.0)	(3.7)		ABJM	橙色 5YR6/8	B	20	
第85図14	土師器 坏				ABEIKM	橙色 5YR6/6	B		
第85図15	土師器 坏				ABIJKM	黄灰色 2.5Y5/1	B		
第85図16	土師器 坏				ABDJ	橙色 2.5YR6/6	B		
第85図17	土師器 坏				AHKM	橙色 2.5YR6/8	A		
第85図18	土師器 坏				AKLM	橙色 2.5YR6/8	B		内面黒色処理
第85図19	土師器 坏				ABDJMN	橙色 5YR7/6	B		施文後に指頭で円
第85図20	土師器 皿	(20.0)	(2.2)		ABCEIJ	明褐色 5YR5/8	B	15	
第85図21	土師器 坏	(13.9)	(6.2)		ABDGHJ	にぶい黄褐色 10YR6/4	B	25	粗製、砂粒の多い胎土
第85図22	須恵器 甕	(23.4)	(8.9)		ABDJ	にぶい橙色 7.5YR7/3	A	25	
第85図23	須恵器 甕	(20.0)	(5.9)		ABGKLM	橙色 5YR7/6	A	20	
第85図24	須恵器 甕	(24.0)	(5.3)		ABDJM	にぶい橙色 5YR7/4	B	15	
第85図25	須恵器 蓋	(16.0)	(3.7)		ABM	灰色 5Y6/1	B	10	
第85図26	須恵器 坏		(3.0)		ABGM	灰色 10Y5/1	B	15	
第85図27	須恵器 坏		(3.0)		AGMN	灰色 N5	B	20	
第85図28	須恵器 坏	(12.2)	3.3		ABMN	黄灰色 2.5Y6/1	A	15	
第85図29	須恵器 坏	(13.4)	2.5	(9.8)	ABM	灰色 N6	A	30	
第85図30	須恵器 坏		(1.1)	(8.6)	ABJM	灰白色 10Y7/1	B	30	
第85図31	須恵器 蓋	(19.6)	(4.1)		ABGIJM	褐灰色 10YR6/1	B	20	
第85図32	須恵器 蓋		(3.1)		ABGM	灰白色 10Y7/1	B	15	
第85図33	須恵器 蓋	(19.6)	(1.9)		ABGM	灰色 5Y6/1	B	15	
第85図34	須恵器 蓋		(1.9)		ABGKM	灰黄褐色 10YR6/2	B	100	
第85図35	須恵器 把手付鉢				ABEGHL	灰色 5Y7/1	B		把手
第85図36	須恵器 鉢	(25.0)	(9.8)	(14.5)	ABDG	灰色 N6	A	15	内面底部に同心円叩き目
第86図1	須恵器 横瓶		(13.5)		AGIM	灰色 N5	A	25	
第86図2	須恵器 横瓶				AIM	灰色 N5	A		
第86図3	灰釉陶器 横瓶		(14.6)		AM	灰色 5Y6/1	A	20	
第86図4	須恵器 提瓶				ACGMN	灰色 N5	A		内外面に同心円カキ目
第86図5	須恵器 平底瓶		(10.6)		ABGM	灰色 N6	B	25	
第86図6	須恵器 提瓶		(6.5)		ABM	灰色 5Y6/1	A	20	
第86図7	灰釉陶器 平瓶				AM	灰色 N6	A	25	
第86図8	灰釉陶器 平瓶				ABM	灰白色 2.5Y7/1	B	15	
第86図9	須恵器 長頸瓶		(4.7)		ABHIMN	灰白色 5Y7/1	B	30	
第86図10	須恵器 長頸瓶		(5.1)	(8.0)	ABMN	灰色 N5	B	50	
第86図11	須恵器 フラスコ瓶				ABEM	灰色 5Y5/1	A		
第86図12	須恵器 壺	(13.8)	(22.0)	(17.2)	AGIM	灰色 N4	A	15	焼歪み、焼き台土器片融着
第86図13	須恵器 壺		(6.0)		AGM	灰色 N5	A	20	
第86図14	須恵器 壺		(6.7)		ABIJM	灰色 N6	A	15	
第86図15	須恵器 甕	(21.0)	(6.3)		ABM	黄灰色 2.5Y6/1	B	15	
第86図16	須恵器 甕	(22.5)	(8.5)		ABDG	オリーブ黒色 10Y3/1	A	20	
第87図1	須恵器 甕	(48.0)	(16.5)		ABGM	灰赤色 2.5YR5/2	A	10	頸部突帯
第87図2	須恵器 甕		(9.5)		ABMN	灰色 N5	A	15	肩部に自然釉
第87図3	須恵器 甕	(25.2)	(9.7)		ABDGHK	にぶい橙色 5YR6/4	C	20	酸化焰焼成
第87図4	土師質 甕		(7.0)		ABJKM	にぶい橙色 7.5YR6/4	C	25	酸化焰焼成、内面ナデ
第87図5	土師器 甕	(22.6)	(11.0)		AEI	にぶい橙色 7.5YR7/4	B	25	
第87図6	土師器 甕	(22.4)	(10.0)		ABEKMN	浅黄褐色 10YR8/3	B	25	
第87図7	土師器 埴	13.4	7.7	7.4	ABJM	にぶい黄褐色 10YR6/3	B	60	内面黒色処理
第87図8	須恵系土師質土器 坏	12.1	4.4	6.1	ABDJM	にぶい赤褐色 5YR5/3	B	70	ロクロ成形
第87図9	須恵器 坏		(1.8)	6.2	ABHKM	灰白色 7.5Y7/1	C	70	末野窯
第87図10	須恵系土師質土器 坏		(1.2)	6.5	ADI	にぶい橙色 7.5YR7/3	B	100	ロクロ成形

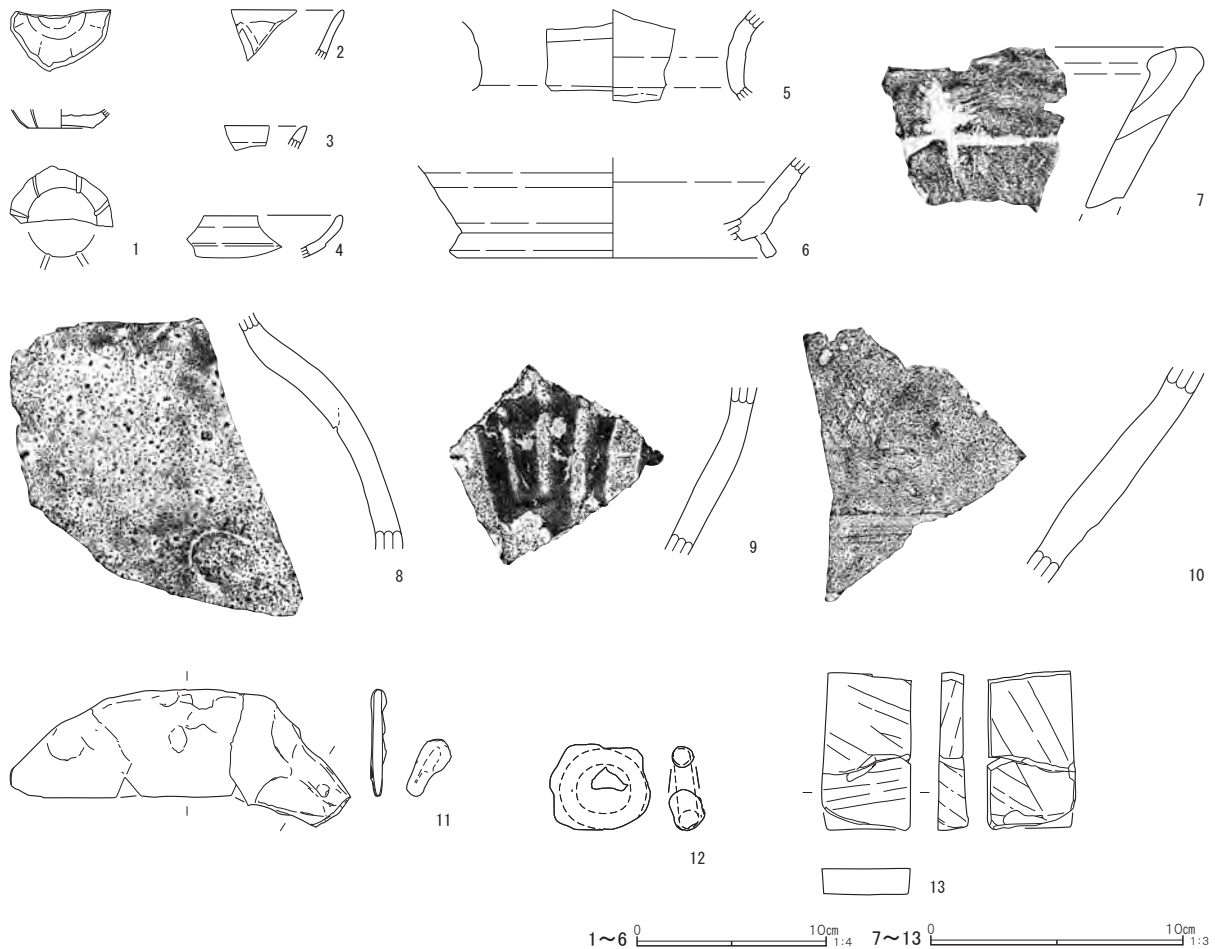
図版No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第87図11	須恵系土師質土器 埴		(3.6)	(5.4)	ABKM	浅黄橙色 7.5YR8/4	B	25	ロクロ成形
第87図12	須恵器 埴		(2.3)	5.9	ABGHIJ	にぶい褐色 7.5YR6/3	C	60	末野窯
第87図13	土師質土器 皿	(13.0)	(2.3)		ABDJ	にぶい橙色 5YR7/4	B	20	
第87図14	土師質土器 坏	(8.6)	2.3	(4.0)	BDIM	にぶい橙色 7.5YR8/4	B	25	
第87図15	土師質土器 坏			4.5	BIJ	にぶい橙色 7.5YR6/4	B	100	底部に板目状圧痕有り



第88図 第2・3号溝跡

(3) 第4号溝跡 (第90図)

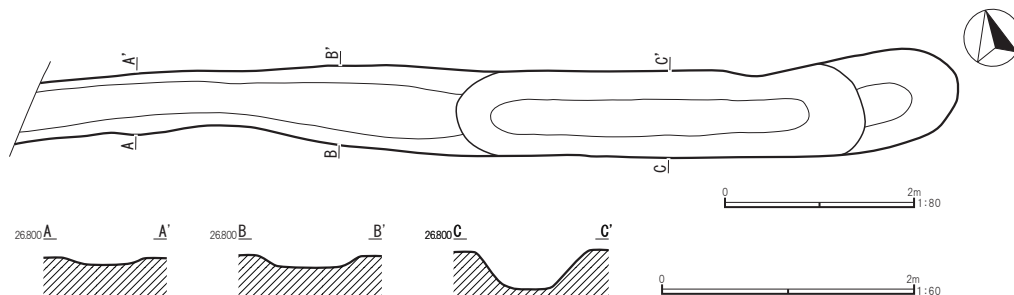
A5グリッドからC6グリッドにかけて9.78mにわたって検出した。規模は、幅0.64~0.98m、深さ0.08~0.3mである。轆羽口片(第91図21)が出土しており、第10号土坑等との同時性が考えられる。



第 89 図 第 2 号溝跡出土遺物

第 12 表 第 2 号溝跡出土遺物観察表 (第 89 図)

図版No.	器種	大きさ (cm)・残存率・色調	形状等
1	磁器 白磁皿	底径 3.4、50%残存	白磁輪花皿、外面のへらによる縦方向の強い押さえと内面の指頭による押さえで輪花風の仕上げ
2	磁器 青磁碗		龍泉窯系青磁蓮弁文碗、外面に片切彫りの蓮弁文
3	磁器 白磁碗		
4	土師質土器 坏	にぶい橙色 7.5YR7/3	手捏成形、体部下方から内湾気味に立ち上がり口唇部でほぼ直立
5	磁器 玉縁壺	頸部径 (14.0)、10%残存	常滑系陶器、常滑第 5・6a 型式(1220~75年)、口縁部内面と頸部外面に自然釉
6	陶器 片口鉢	底径 (17.2)、15%残存 灰白色 10Y7/1	常滑系陶器、常滑第 5・6a 型式(1220~75年)、常滑山茶碗系の片口鉢 (I 類) 貼り付け高台、外面下方に二段へら削り、内面は使用により磨れる
7	瓦質土器 火鉢	にぶい黄橙色 10YR6/3	円形火鉢、口唇部は平らで内側が突出
8	陶器 広口壺		常滑系陶器、常滑第 5 型式(1220~50年代)、外面に線刻文と自然釉、内面に指頭痕と輪積み痕
9	陶器 甕		常滑系陶器、底部に近い部分の破片、外面に自然釉が垂れる
10	陶器 甕		常滑系陶器、体部下方の破片、外面に菱形の叩き目
11	鉄鎌	長 13.5、刃幅 4.2	基部の両側縁を折り込んで補強
12	環状鉄製品	外径 3.2、鉄材径 0.6	
13	砥石	長 6.2、幅 3.5、厚 1.0、重 46	凝灰岩製



第 90 図 第 4 号溝跡

## 5 各種遺物

古墳時代から古代までの出土遺物は、各遺構から出土した土器の図を遺構図とともに掲載し、土器以外の出土遺物は、文章の記述にとどめてきた。ここでは、遺構及びグリッドからの出土、遺構外での採取、試掘調査により得られた土器以外の出土遺物を種類別にまとめて概観する。

### (1) 土錘 (第 91 図、第 13 表)

出土地点は、第 1 号溝跡北半に集中し、図示した 19 点中 14 点がこれに当たる。この溝が機能した時期の流入と見られる。幅(太さ) 4 cm を超える太型(3～6・8)と 1.5 cm 前後の細型(9～15)の 2 つのタイプが目立つが、太型のほとんどは破片である。

### (2) 鍛冶・製鉄関連遺物 (第 91 図、第 13 表)

20～22 の鞆羽口片はいずれも先端部付近のもので、変色・変質している。21 は太型の土錘に似るが、孔径と外面の変色で区別した。23 は発泡化が著しい土器の小片だが、取鍋として使用された須恵器杯の破片と見られる。

図示した 6 点以外にも鉄滓等が 12 点(複数の小片も合わせて 1 点とする)出土しているが、これらを合わせて出土地点の分布状況を見ると、次のように 5 つの地点にまとまる。

- ① 第 10・11 号土坑周辺(D 2・E 1 グリッド): 2 点(25 他、図示外 1 点)
- ② 第 3 号性格不明遺構及び第 12 号土坑周辺(S X 3、F 1・F 2・G 2 グリッド): 7 点(図示外 7 点)
- ③ 第 3 号性格不明遺構及び第 13 号竪穴建物跡との中間(E 2・E 3 グリッド): 5 点(23・24 他、図示外 3 点)
- ④ 第 2 号性格不明遺構及び第 13 号竪穴建物跡周辺(D 4 グリッド): 1 点(22)
- ⑤ 第 4 号溝跡周辺(第 2 号溝跡埋土を含む): 3 点(20・21 他、図示外 1 点)

以上の中で②の第 3 号性格不明遺構の鉄滓 1 点及び、⑤の第 4 号溝跡の鞆羽口 1 点(21)以外は、遺構に直接伴わず、グリッド出土や後代の遺構埋土出土の扱いである。焼土化した部分を持つ第 3 号性格不明遺構や第 10・11・12 号土坑及び、出土土器により、それらと同時に存在したと考えられる第 13 号竪穴建物跡や第 2 号性格不明遺構からは、直接的に鍛冶・製鉄に関連する遺物は出土していないが、①～④の状況からこれらの遺構の性格を推定することができる。第 4 号溝跡もこれらの遺構群の一つと考えられ、これに隣接する第 2 号溝跡埋土中からの 22 もこの地点で包含されていたものの流れ込みと見られる。

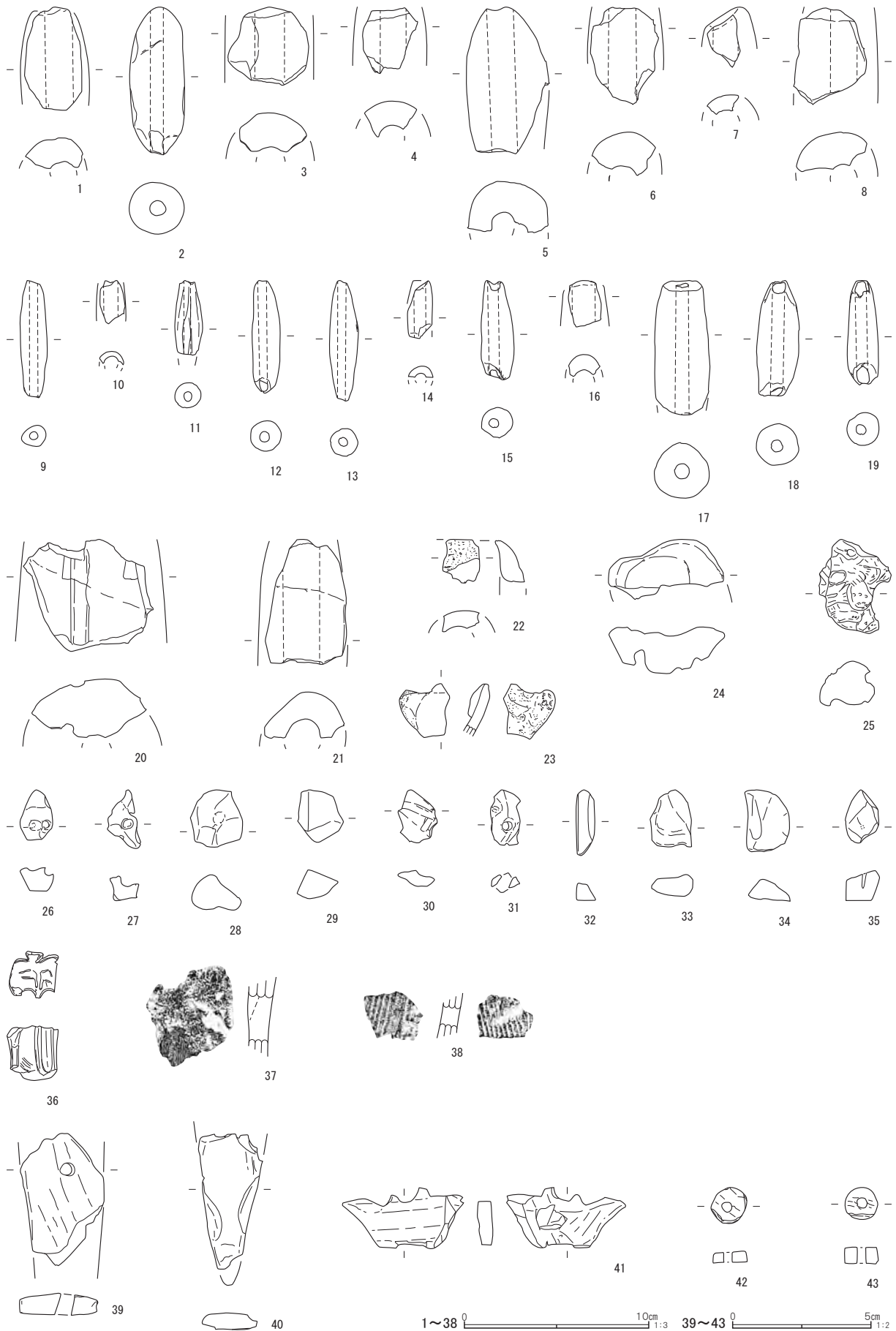
### (3) 穿孔貝巢穴痕跡軟質泥岩 (第 91 図、第 13 表)

図示した 10 点(26～35)は、穿孔貝による巢穴痕跡が認められるものと、巢穴痕跡がなくても長径が概ね 3 cm を超えるものである。これら以外にも、第 9 号竪穴建物跡、第 1 号溝跡、第 15 号土坑、第 3 号性格不明遺構及び周辺から 28 点、計 38 点が出土した。

当該遺物は、妻沼低地では、古墳時代前期以降の遺跡から検出例が報告されているため、本遺跡のものは第 9 号竪穴建物跡、第 1 号溝跡の時期である 6 世紀末～7 世紀のものと考えられる。また、第 1 号溝跡内及びその東側に集中するため、集落側から廃棄されたと考えられる。

### (4) 石製模造品 (第 91 図、第 13 表)

いずれも第 9 号竪穴建物跡と同時期の 6 世紀末～7 世紀初頭のものと考えられる。41 は欠損が無い完形品であり、逆台形の上辺に 3 か所、下辺に 1 か所の抉り込みを入れて対称形を作り出している。粗製



第91図 土製品・石製品・鍛冶製鉄関連等遺物

第13表 土製品・石製品・鍛冶製鉄関連等遺物観察表（第91図）

図版No.	種別	出土地点	大きさ (cm)・重さ (g)・色調・形状等
1	土錘	SI9	幅 (3.7)、孔径 (1.3)、明赤褐色 5YR5/8
2	土錘	SD1	長 80、幅 30、孔径 0.7、重 69.5、灰白色 7.5YR8/2
3	土錘	SD1	幅 (4.8)、孔径 (1.6)、明赤褐色 5YR5/8
4	土錘	SD1	幅 (4.0)、孔径 (1.4)、明赤褐色 5YR5/8
5	土錘	SD1	長 7.9、幅 4.5、孔径 1.4、重 68.3、明赤褐色 5YR5/8
6	土錘	SD1	幅 (4.1)、孔径 (1.5)、明赤褐色 5YR5/8
7	土錘	SD1	幅 (3.0)、孔径 (1.3)、にぶい橙色 7.5YR6/4
8	土錘	SD1	幅 (4.6)、孔径 (1.4)、明赤褐色 5YR5/8
9	土錘	SD1	長 6.8、幅 1.4、孔径 0.5、重 9.8、褐色 7.5YR4/3
10	土錘	SD1	幅 (1.6)、孔径 (0.7)、にぶい赤褐色 5YR5/3
11	土錘	SD1	長 4.0、幅 1.5、孔径 0.4、重 8.2、赤褐色 5YR4/6
12	土錘	SD1	長 6.1、幅 1.5、孔径 0.4、重 17.0、灰白色 7.5YR8/1
13	土錘	SD1	長 6.5、幅 1.5、孔径 0.4、重 14.2、にぶい橙色 7.5YR7/3
14	土錘	SD1	幅 (1.3)、孔径 (0.6)、明褐色 7.5YR7/2
15	土錘	SD1	長 5.3、幅 1.7、孔径 0.5、重 15.0、にぶい橙色 7.5YR7/3
16	土錘	SD1	幅 (2.5)、孔径 (1.2)、明赤褐色 5YR5/8
17	土錘	SD2	長 7.2、幅 3.0、孔径 0.7、重 59.5、灰白色 7.5YR8/2
18	土錘	SD2	長 6.3、幅 2.3、孔径 0.7、重 31.3、明赤褐色 5YR5/6
19	土錘	SX4	長 6.6、幅 1.7、孔径 0.6、重 17.2、明褐色 7.5YR7/2
20	鞆羽口	SD2	幅 (8.0)、被熱して表面黒色硬化
21	鞆羽口	SD4	幅 (4.7)、孔径 (2.0)、明赤褐色 5YR5/6、被熱して表面赤褐色化
22	鞆羽口	D4グリッド	幅 (3.7)、被熱して表面発泡
23	取鍋	SD1	須恵器坏片、外面にぶい橙色 5YR6/3、内面全体発泡
24	椀型滓	E3グリッド	幅 5.2、厚 2.2、重 48.7
25	鉄滓	E1グリッド	長 5.2、幅 2.8、重 25.4
26	穿孔貝巢穴痕跡軟質泥岩	SI9	長 2.7、幅 1.8、厚 1.3、重 2.5
27	穿孔貝巢穴痕跡軟質泥岩	SI9	長 3.2、幅 1.8、厚 1.3、重 1.8
28	穿孔貝巢穴痕跡軟質泥岩	SD1	長 3.1、幅 2.8、厚 1.9、重 7.4
29	穿孔貝巢穴痕跡軟質泥岩	SD1	長 2.9、幅 2.5、厚 1.6、重 4.6
30	穿孔貝巢穴痕跡軟質泥岩	SD1	長 2.9、幅 2.1、厚 0.8、重 1.5
31	穿孔貝巢穴痕跡軟質泥岩	SD1	長 3.0、幅 1.6、厚 1.0、重 2.1
32	穿孔貝巢穴痕跡軟質泥岩	SD1	長 3.6、幅 1.0、厚 1.0、重 1.8
33	穿孔貝巢穴痕跡軟質泥岩	D2グリッド	長 3.0、幅 2.2、厚 1.2、重 3.6
34	穿孔貝巢穴痕跡軟質泥岩	E3グリッド	長 3.4、幅 2.4、厚 1.0、重 4.0
35	穿孔貝巢穴痕跡軟質泥岩	試掘	長 2.8、幅 1.8、厚 0.6、重 4.8
36	馬歯	SD1	歯冠長 28.85 mm、歯冠幅 24.90 mm、中心長 25.00 mm、右上顎第4前臼歯、15歳程度
37	埴輪	SX2	にぶい褐色 7.5YR6/3
38	埴輪	遺構外	明赤褐色 5YR5/6
39	石製模造品	SI9	剣形、滑石、長 4.7、幅 3.0、厚 0.7、孔径 0.6、重 14.8
40	石製模造品	遺構外	剣形、粘板岩、長 5.5、幅 2.3、厚 0.6、重 8.4
41	石製模造品	試掘	形態不明、滑石、横長 4.4、縦幅 2.2、厚 0.5、重 6.8
42	白玉	SD1	滑石、径 1.2、厚 0.4、孔径 0.3、重 0.7
43	白玉	遺構外	滑石、径 1.2、厚 0.6、孔径 0.3、重 1.3

であり、類例が無く何を模倣したものか判断が難しい。突起数から見て、琴柱形石製品に似るが、これが盛行する時期が違い、鞍を付けた馬形のようにも見えるが、馬を表すための象徴的なバランスに欠ける。

(5) その他（第91図、第13表）

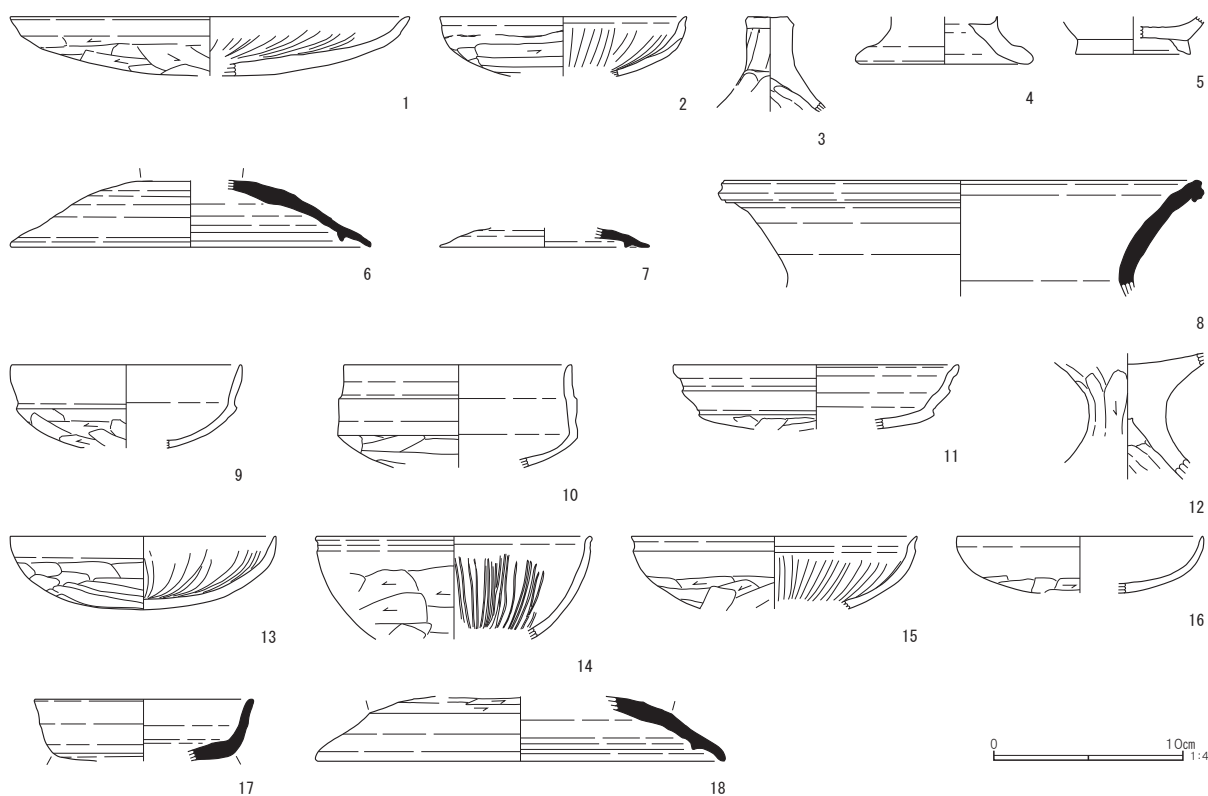
36の馬歯は、第1号溝跡の溝底に敷かれた小礫・土器片に混じって出土した7世紀代のものと考えられる。15歳程度の老齢馬の上顎臼歯である。

37・38は埴輪小片である。2点のみだが、調査区内には古墳はなく、近隣に埴輪を有する古墳の存在も知られていないため、流れ込みや客土に伴う移動が考えられるが、福川に沿った自然堤防上にあり埴輪を有する上江袋古墳群や乙鶴森古墳群の例から考えると、6世紀代の未知の古墳が存在する可能性がある。

## 6 遺構外・試掘採取遺物

遺構に伴わずに包含層や排出土中から採取した遺物（第92図1～8）や、令和2年度に調査区の東南で実施した試掘調査の際の出土遺物（同9～18）を掲載する。土器以外の出土遺物は、前節の各種遺物に組み込んだ。

3の高坏は古墳時代前期～中期に遡るかもしれない。また、試掘調査の出土遺物は、第9号竪穴建物跡、第1号溝跡、第13号竪穴建物跡の時期に重なるものだが、今回調査した集落が第3図に示したとおり、さらに南東の自然堤防上に展開することが予想される。



第92図 遺構外・試掘調査採取土器

第14表 遺構外・試掘調査採取遺物観察表（第92図）

図版No.	器種	出土地点	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	土師器 盤	E3	(21.0)	(3.1)		ABJM	灰黄褐色 10YR6/2	B	20	
2	土師器 坏	E3	(13.0)	(3.2)		ABDIKM	橙色 5YR7/6	B	25	
3	土師器 高坏	遺構外		(5.0)		ABDJKM	にぶい褐色 7.5YR5/3	B	90	
4	土師器 高坏	遺構外		(2.5)	(8.9)	ABEJ	橙色 5YR7/6	A	25	
5	須恵系土師質土器 埴	E3		(1.7)	(6.0)	ABHK	にぶい橙色 7.5YR7/3	B	30	ロクロ成形
6	須恵器 蓋	遺構外	(19.0)	(3.5)		AM	灰色 N5	A	10	
7	須恵器 蓋	遺構外	(11.0)	(1.0)		ABIK	黄灰色 2.5Y5/1	B	15	
8	須恵器 甕	E3	(25.0)	(6.2)		AMN	褐灰色 5YR4/1	B	20	
9	土師器 坏	試掘	(12.0)	(4.5)		ABDJKN	褐灰色 10YR5/1	B	15	
10	土師器 坏	試掘	(12.0)	(5.4)		ABJK	明褐色 7.5YR7/2	B	25	
11	土師器 坏	試掘	(15.0)	(3.4)		ABDJM	にぶい橙色 7.5YR6/4	B	15	
12	土師器 高坏	試掘		(6.7)		AHIJM	明赤褐色 5YR5/8	B	80	
13	土師器 坏	試掘	14.1	3.9		ABDJKM	明褐灰色 7.5YR7/2	B	100	
14	土師器 坏	試掘	(14.4)	(5.4)		ABDIJM	にぶい赤褐色 2.5YR5/4	B	15	
15	土師器 坏	試掘	(15.0)	(3.8)		ABJKM	橙色 5YR7/6	B	20	
16	土師器 坏	試掘	(13.0)	(3.0)		ABJM	にぶい橙色 5YR6/4	B	20	
17	須恵器 坏	試掘	(11.4)	(3.2)		ABFG	灰白色 N7	B	15	末野窯
18	須恵器 蓋	試掘	(21.5)	(3.4)		ABFGM	灰白色 2.5Y8/1	B	25	南比企窯



## VI 調査のまとめ

### 1 縄文時代の妻沼低地における上北浦遺跡

#### (1) 集落の動向

上北浦遺跡は、蛇行していた福川の自然堤防上に営まれた晩期前葉の安行3 a・3 b段階に最盛期をもつ集落跡で、その前身は下層において確認された中期後半～後期初頭段階から始まったと考えられる。福川流域を中心とする妻沼低地では、これまで後期から晩期にかけての遺跡が多く調査されているが、これらの動向を概観して上北浦遺跡の特性を捉えてみたい（第93図参照）。

縄文時代後期～晩期の遺跡の特性を概観するため、遺跡の分布状況や地形から、A福川上流域、B福川中流域西部、C福川中流域東部、D福川下流域、E新期荒川扇状地東部の5つの小地域を設定する。

時期の表記は、土器型式名を省略して後期初頭から晩期中葉までを次のように6区分で表す。

後期：初頭（称名寺式）／前葉（堀之内式）／中葉（加曾利B式）／後葉（曾谷式・高井東式・安行1式・安行2式）// 晩期：前葉（安行3 a式・安行3 b式）／中葉（安行3 c式・3 d式）

**A 福川上流域** 福川の起点を中心に深谷市四十坂から同市伊勢方に至る約4 kmの区間で、福川は台地崖線近くを流れ、遺跡の分布もこれに沿う。

台地縁辺から緩やかに続く微高地に形成された深谷市堀東遺跡では、後期初頭から後期後葉に及ぶ竪穴建物跡や土坑による遺構群が5ブロックに分かれる。また、台地下の同市砂田前遺跡では後期前葉の竪穴建物跡及び遺物集中区が検出されたが、いずれも晩期には継続しない。これに対して最上流部に位置する同市原ヶ谷戸遺跡では、台地緩斜面に営まれた後期中葉から晩期前葉までの集落跡及び後期中葉から晩期中葉にいたる台地下湿地の包含層が調査された。

この地域では、基本的には台地上に集落を形成すると考えられるが、後期集落の堀東遺跡や砂田前遺跡に対して、原ヶ谷戸遺跡が晩期中葉まで存続した。

**B 福川中流域西部** 深谷市上敷免から同市上増田に至る約3 kmの区間で、遺跡の分布は台地から0.6～0.8 km離れる。現福川からは離れるが、埋没旧河道に沿うことが調査により明らかになっている。

この地域の下流側で検出された深谷市明戸東遺跡・原遺跡では、後期初頭から後期中葉までの竪穴建物跡、土坑、集積遺構が検出されているが、晩期には継続しない。一方、上流側には同市新屋敷東遺跡・本郷東遺跡・上敷免遺跡・上敷免北遺跡が隣接する後期～晩期の遺跡群があり、後期初頭ないしは前葉



第93図 妻沼低地の縄文時代後期～晩期の遺跡

から晩期にわたる時期の遺構・遺物が検出されている。新屋敷東遺跡では晩期前葉の竪穴建物跡が、また上敷免遺跡では晩期末葉にまで及ぶ土器が包含層から出土した。

この地域では、後期初頭から集落の広がりが見られるが、晩期に至って新屋敷東遺跡や上敷免遺跡付近に

集落が集約される。

**C 福川中流域東部** 櫛挽台地下の別府沼を水源とする河川が北東約2 km先の熊谷市上江袋付近で福川に合流するが、この河川に沿って遺跡が分布する。

台地縁辺部の熊谷市寺東遺跡、別府沼畔の同市横間栗遺跡、福川沿いの同市入川遺跡・道ヶ谷戸条里遺跡で後期中葉の遺構や土器が検出されたが、晩期のもは認められない。寺東遺跡及び道ヶ谷戸条里遺跡では、遡って中期後半の土器も出土している。

この地域には、晩期の集落跡は認められないが、櫛挽台地縁辺部にあたる寺東遺跡は前述の深谷市堀東遺跡に、また福川に近い入川遺跡や道ヶ谷戸条里遺跡は、深谷市明戸東遺跡・原遺跡の様相に類似する。

**D 福川下流域** 熊谷市西野から同市上須戸に至る約3 kmの区間で、櫛挽台地から約3 km、新期荒川扇状地から1.5 km離れる。現状では上須戸から約5 km下流の同市俵瀬で福川は利根川に合流するが、縄文時代の利根川の流路を考えると、もっと上流の上須戸の近くで合流していたと思われる。

熊谷市西城切通遺跡は、上北浦遺跡の南方1.5 kmにあり、後期中葉から後期後葉にかけての集落跡が調査され、多量の遺物が出土したが晩期のもはない。同市場違ヶ谷戸遺跡では石剣が、同市上葛和田遺跡では後期前葉の土器が採取されているが、詳細は不明である。これら4遺跡の位置から、蛇行していた福川の流路を想定することができ、各集落は蛇行屈曲部の頂点外側に立地していたと考えられる。

ただし、それらは同時期の存在ではなく、後期後葉の西城切通遺跡から晩期前葉の上北浦遺跡へ拠点が移動したと考えることができる。

**E 新期荒川扇状地東部** 扇状地扇端部に位置し、扇状地から流出する星川及び忍川に挟まれた地域である。約3 kmにわたり後期～晩期の遺跡が存在する。

熊谷市池上遺跡は、後期中葉の土器集積遺構が検出されているが、晩期に継続しない。同市中西遺跡は、後期中葉から出現した集落跡で、後期後葉以降に減少しながら晩期中葉へと継続する。同市諏訪木遺跡も、後期中葉から出現した集落跡であるが、中西遺跡と違って晩期前葉に最盛期を迎えて晩期中葉に終息する。同市古宮遺跡の包含層では後期の遺物はなく、晩期前葉～中葉の土器が出土した。

後期から晩期へ継続しないものと継続するものがあり、晩期前葉においては、諏訪木遺跡の集落が中心的な存在となって集約していく様相は、福川流域と同様であるが、古宮遺跡のように後期の土器が認められない上に晩期中葉が中心になるケースは注目される。

妻沼低地への縄文時代集落の進出は、後期初頭から顕著になる。後期の範囲で終息する集落がある中で、晩期に継続していく集落は限定され、上流域では原ヶ谷戸遺跡、中流域では新屋敷東遺跡や上敷免遺跡、下流域では上北浦遺跡、新期荒川扇状地東部地域では諏訪木遺跡がこれに当たる。この状況は、小地域ごとに集約されて中心的な集落が成立していったと捉えられるが、それらは分布図上では約7 kmの等距離をとっているように見える。

## (2) 土器相

ここでは晩期前葉を中心とする集落からの出土の土器をとおして、2点の特性を挙げておく。

**天神原式土器** 有段口縁（折返口縁）の粗製深鉢形土器の存在が目立つ。かつて原ヶ谷戸遺跡の報告者は、晩期前葉に属する粗製土器は、紐線文系土器も存在するが、全体に占める割合は少なく、それに比して多くを占めるのが有段口縁の粗製深鉢であるとして、大宮台地周辺との差異を指摘した。上北浦遺跡をはじめとする、原ヶ谷戸遺跡の報告以降に調査・報告された晩期前葉の各遺跡においても、有段

口縁粗製深鉢の存在感は同様である。群馬県に分布の中心をもつ天神原式土器の特徴と見られ、上北浦遺跡ではそれに加飾された大型深鉢形土器も出土し、古宮遺跡では安行3c式段階で多数出土し、天神原式新段階の典型例とされている。また、北関東西部系の土器であり、これと隣接する埼玉県北部での出土も多くなる。同様の立地条件である加須市長竹遺跡や大宮台地北方に位置する鴻巣市赤城遺跡でも認められるが、大宮台地北部寄りの久喜市小林八束1遺跡、桶川市後谷遺跡、蓮田市雅楽谷遺跡・久台遺跡等では、この土器はあまり見られなくなる。

**姥山式土器** 東関東系の姥山式土器も存在する。上北浦遺跡では、大波状口縁深鉢形土器の波頂部の鉢巻き状貼付文、菱形区画や入組み弧線文等の特徴的な文様構成をもつ姥山式土器が確認できた。この土器を他遺跡に探すと、東関東圏に接し館林・大宮台地に位置する長竹遺跡、赤城遺跡、後谷遺跡等で認められた。一方、上北浦遺跡と動向を一にする福川流域及び新期荒川扇状地東部の同時期の集落で、この土器はほとんど認められない。上北浦遺跡は福川下流に存在し、館林・大宮台地及び東関東地域と対峙する位置にあるが、それだけでこのような差異が生じるかは今後の検討課題である。

## 2 他地域との交流

### (1) 搬入

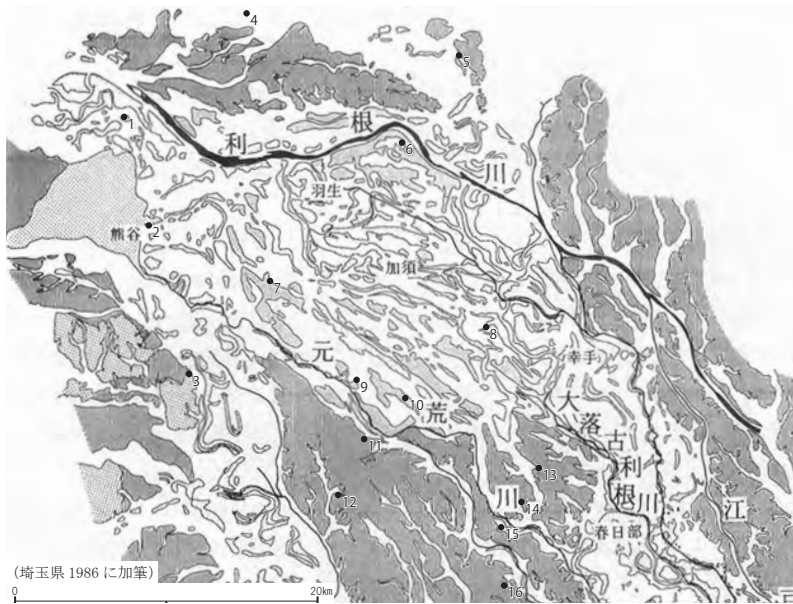
**製塩土器** 上北浦遺跡では、製塩土器と考えられる土器片の存在が確認された（第46図17～25）。この土器は、埼玉県内でも大宮台地を中心にして久台遺跡、雅楽谷遺跡、後谷遺跡等の多数の遺跡で検出されている。上北浦遺跡周辺では、諏訪木遺跡、長竹遺跡、さらに北方の足利市あがた駅南遺跡でも確認されているため、後期～晩期においては、塩とともに内陸部にも広く持ちこまれたと考えられ、搬入ルートは東京湾側から当時の利根川を遡上するルートや霞ヶ浦方面から西進したルート等が想定できる。ただし、福川流域の他の遺跡では製塩土器の出土は報告されていない。

**鉱物** 図版14-4に、通常の石器の材料に使用される以外の色や材質が目立つ鉱物・小礫を掲載した。また、肉眼観察ではあるが、小林まさ代氏のコメントを付したが、いずれも手近では採取できないものである。赤色部分をもつ変質岩は、熱水による作用によるもので、群馬の火山地域から赤色顔料の原料として持ちこまれた可能性がある。赤色の石英は、色調から佐渡の赤玉と見られ、新潟県から持ちこまれ、第62図10・11のような石器や赤色顔料の材料としても使われた可能性がある。また、緑色変質岩も同じく新潟から持ちこまれたと見られる。メノウは茨城県久慈地域産だが、第62図6のような石器の材料として使われたと考えられる。

**耳飾り** 後期～晩期の遺跡において、耳飾りが多数出土することは多く、上北浦遺跡でも耳飾りを多数検出した。この中に、破片ではあるが千網谷戸型の大型漏斗状透彫付耳飾り（第55図39・40）が存在する。胎土や技巧が精緻で、他の耳飾りとは違い、製作した痕跡が明らかな桐生市千網谷戸遺跡で作られたものが持ちこまれたものと考えられる。この耳飾りは、利根川以南では長竹遺跡、赤城遺跡、久喜市地獄田遺跡、さらに大宮台地北部の後谷遺跡、白岡市清左衛門遺跡付近から台地南端の川口市宮合貝塚遺跡まで認められる。妻沼低地では本報告以外確認されていない。

### (2) 生産

**石剣・石棒** 研磨の完了した完成品や研磨未了の未製品を出土する遺跡は多いが、上北浦遺跡では、基本的なサイズを決めた第一次的な粗割材（第60図15）や、先端部や幅（太さ）を決めた後に厚みを



第 94 図 館林・大宮台地の縄文時代後期～晩期の主な遺跡

第 15 表 岩版集成表

遺跡名	長さcm	幅cm	備考
1 上北浦	19+	14	他に小片 5 点
2 諏訪木	11	8.9	他に 1 点 系統が異なる
千網谷戸	10+	17.2	
石之塔	12.5+	17.3	他に 6 点
4 あがた駅南	20	15	他に 4 点
5 藤岡神社	9.7	9.4	他に 1 点
北米岡	26.2	16.6	
6 長竹	9+	11+	他に 8 点
7 赤城	8.3+	6.2+	
8 道合	16+	14.4	
10 小林八束 1	12+	12.3+	他に 1 点
11 後谷	12.5+	14.4+	他に 1 1 点
12 高井東	12.5+	12	土版として報告
15 久台	6.4+	8.7	他に小片 1 点
16 小深作			報告書に文章記述のみ
宮合貝塚	5.6+	5.6+	破片転用石製品
石神貝塚	6.0+	5.3+	

※最大個体の大きさと、欠損の場合+を付した

1 上北浦(熊谷)	9 地獄田(久喜)	千網谷戸(桐生)
2 諏訪木(熊谷)	10 小林八束 1(久喜)	石之塔(太田)
3 中廓(熊谷)	11 後谷(桶川)	北米岡(伊勢崎)
4 あがた駅南(足利)	12 高井東(桶川)	宮合貝塚(川口)
5 藤岡神社(栃木)	13 清左衛門(白岡)	石神貝塚(川口)
6 長竹(加須)	14 雅楽谷(蓮田)	
7 赤城(鴻巣)	15 久台(蓮田)	
8 道合(久喜)	16 小深作(さいたま)	

調整するために剥がした剥離片(第 60 図 17～20)が認められ、生産が行われていたと推測される。

福川最上流部の原ヶ谷戸遺跡でも未製品が多数出土しており、寄居町付近の荒川から緑泥石片岩の石材を搬入して加工し、東部へ搬出していたと考えられている(栗島 2012)。原ヶ谷戸遺跡と上北浦遺跡は同一地域で同時期に存在していたため、関連することは明らかである。石材採取推定地から遠い原ヶ谷戸遺跡よりもさらに離れた上北浦遺跡への石材の搬入経路や原ヶ谷戸遺跡との関係性については、今後の検討課題であるが、上北浦遺跡でも石剣・石棒を製作して他の集落へ配付していたと考えられる。

**赤色顔料** 赤色顔料が付着する磨石 27 点と石皿 1 点が出土し、第 69～71 図に集成のうえ出土状況の概要を 75 ページにまとめた。これらの存在により第 4・6・7 号竪穴建物跡を中心にした範囲で赤色顔料の精製が行われたことが明らかになった。ただし、赤色顔料が塗布された製品は、耳飾りや土器小片程度でその他には認められない。原料については、前述の赤色変質岩あるいは佐渡の赤玉石とされる鉄石英の可能性が考えられる。

同時期の他の遺跡でも赤色顔料関連遺物は検出されており、あがた駅南遺跡では、分析の結果、水銀朱が付着した石皿及びベンガラが付着した磨石の存在が明らかになっている。上北浦遺跡周辺では、諏訪木遺跡で赤色顔料が付着した磨石(凹石)、中西遺跡で辰砂礫と赤色顔料が付着したパレット状土器、長竹遺跡で赤色顔料塊や、赤色顔料が付着した石皿と磨石、後谷遺跡で原料石と赤色顔料付着磨石がそれぞれ出土している。上北浦遺における赤色顔料付着磨石の数の多さは、他と比べても顕著で、生産活動の規模の大きさと見ることもできる。

**骨角器** 千網谷戸遺跡やあがた駅南遺跡では多数出土しているが、埼玉県内では、長竹遺跡において多数出土した以外は極めて少ない。上北浦遺跡では 4 点の破片(第 57 図 17～20)の他、付編 3 の獣骨分析によって加工痕のある鹿角片 6 点の存在が明らかになった。長竹遺跡において、従来海岸部での貝輪製作に使われたとされているアメーバ形小型砥石と同様のものが報告されているが、上北浦遺跡でもこれに似た砥石が存在する(第 68 図 5・6)。この砥石が骨角器製作にも用いられたと考えるならば、長竹遺跡や上北浦遺跡において骨角器が製作された可能性がある。

**剥片石器** 各遺構ないしグリッド一括で採取した300点を超える小さな角礫類は、田部井功氏によって原石、石核、目的剥片、剥片石器未製品に分類・分析され、その結果は付編2にまとめられている。ここで、要点のみを抽出すると、搬入の視点からは、石核の96%を占めるチャートは、荒川中流域で良質の原石が選別採取されたのに対して、遠方からの黒曜石の原石は、少数なうえに小さく不良なものが多いということ、生産の視点からは、遺物の集中の度合いから剥片石器製作の工房跡を第8号竪穴建物跡に特定することができるということが挙げられる。

同様の特性をもつ遺跡は、田部井氏が報告した小鹿野町下平遺跡の他に知らないが、上北浦遺跡で剥片石器を製作していたことは明らかになった。

以上、石剣・石棒、赤色顔料、骨角器、剥片石器の4点について、上北浦遺跡での生産の痕跡についてまとめた。この中で、石剣・石棒は、原ヶ谷戸遺跡の例から、他へ送り出された可能性が大きい。他の3点については、自らの集落内で消費するだけなのか、他へ搬出する目的があったのか、判断が難しいが、他にはあまりない希少性から搬出（供給）目的が大きかった可能性を考えておきたい。

### (3) 祭祀

**岩版** 上北浦遺跡では、大型の岩版が出土した。後世の遺構からの出土で欠損部はあるものの、安行3a・3b式期の可能性が高く、大きさや文様構成を復元することができる。ここでは、地域における岩版の存在意義を考えるための基礎作業として、周辺の遺跡から出土した後期～晩期の岩版を集成し、分布に注目する（第15表）。なお、複数出土した遺跡の場合は、最大の個体の数値を示した。

多くのものが、泥岩を加工した長さ（タテ）20cm、幅（ヨコ）14～17cm程度の大型になることが予想される。関東平野では、渡良瀬川沿岸を北縁にして、かつての館林・大宮台地を南下して、現大宮台地南端の川口市宮合貝塚遺跡・石神貝塚遺跡まで岩版による祭祀が達している。桶川市高井東遺跡出土のものは土版と報告されているが、岩版であることを本報告編集者が熟覧して確認した。大宮台地南部には、後期～晩期の遺跡が多いにもかかわらず、岩版の報告例は少なく、利根川沿岸及び大宮台地北部との差異が認められる。

上北浦遺跡は、当時の利根川によって館林・大宮台地から分断されるが、対面する福川合流域に位置することで影響されることも多かったことが考えられる。福川流域の他の遺跡では、これまで岩版は確認されていないが、上敷免北遺跡では、上北浦遺跡の岩版に類似したモチーフの文様を持つ土版が出土している。諏訪木遺跡のものは、自然礫を使用し、形や文様は大型の岩版とは別系統のものと言える。

**獣骨** 第6・7号竪穴建物跡周辺から多数の獣骨片が出土し、第6号竪穴建物跡では、硬化焼土床面上から出土したのもあった。付編3掲載の分析報告によって、僅かに出土したトリ以外は焼かれたイノシシ及びニホンジカであることが判明した。同様の事例は、原ヶ谷戸遺跡でも検出され、この分析報告では、後谷遺跡、千網谷戸遺跡、太田市石之塔遺跡等の例も合わせて、「獣骨がすべて火を受けているのは火を介した送りの儀礼があったことを窺わせ、この種の類似性を持った遺跡は、関東甲信越地方、東北地方南部に広く分布しており、当地方の縄文後・晩期には送りの儀礼（狩猟儀礼）が一般化していた」と見ている。

これに上北浦遺跡や長竹遺跡、あがた駅南遺跡も加えることができるが、これらには骨角器が伴う。なお、骨角器も祭祀具と見ることができるので、焼骨片の存在と合わせて考える必要がある。

### 3 総括

これまで、観点別に上北浦遺跡の特性をまとめてきたが、全体的に見ると次の3点に集約できる。①縄文時代晩期前葉に妻沼低地に成立した拠点的な集落の一つである。②北関東の影響下にある。有段口縁粗製深鉢形土器、千網谷戸型の大型耳飾り、岩版、獣骨儀礼等から、利根川を挟んだ対岸の群馬県・栃木県側との共通点が認められる。③モノの搬入・生産・供給に関わる集落である。周辺の集落よりもその痕跡が顕著で、福川下流で利根川との合流地点付近に立地することが関係すると考えられる。

この他、比較資料に当たれずに言及できなかったが、石鍬に似る大型打製石斧6点や、穂摘具に似る磨製横刃型石器2点の存在が注目に値する。これらは、食物の生産につながる掘削や収穫活動に関わる道具である可能性が高いが、多数の大型打製石斧や薄刃の磨製石器が出土した遺跡は周辺にはないため、これらの存在も上北浦遺跡の特性と言える。

上北浦遺跡が、今後の妻沼低地における縄文時代後期～晩期の遺跡の調査に提起した課題は多い。

引用・参考文献 \*紙幅の都合で、表記を簡略化する。

○概報

山川守男 2022 「埼玉県熊谷市上北浦遺跡出土の岩版」『古代文化』74-1 (公財) 古代学協会

山川守男 2023 「熊谷市上北浦遺跡出土の岩版」『埼玉県内発掘調査情報』埼玉考古学会

○埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書及び埼玉県関係

1988 「赤城遺跡」74集、1989 「本郷前東遺跡」78集、1989 「新田裏・明戸東・原遺跡」85集、1990 「雅楽谷遺跡」93集

1992 「新屋敷東・本郷前東遺跡」111集、1993 「原ヶ谷戸・滝下遺跡」127集、1993 「上敷免遺跡」128集

1998 「砂田前遺跡」198集、2000 「堀東・城西Ⅱ」257集、2000 「上敷免北遺跡」248集、2002 「池上・諏訪木」283集

2004 「古宮・中条条里・上河原」298集、2005 「雅楽谷遺跡Ⅱ」307集、2007 「諏訪木遺跡Ⅱ」336集

2007 「久台遺跡Ⅲ」339集、2014 「長竹遺跡Ⅰ」413集、2015 「清左衛門遺跡」416集、2018 「長竹遺跡Ⅱ」440集

2018 「長竹遺跡Ⅲ」441集、2018 「小林八束1遺跡Ⅱ」442集、2019 「小林八束1遺跡Ⅲ」457集

2022 「小林八束1遺跡Ⅳ」476集、2022 「長竹遺跡Ⅳ」461集

埼玉県遺跡調査会 1974 「高井東遺跡」25集、埼玉県 1986 「新編埼玉県史 別編3 自然」

○熊谷市埋蔵文化財調査報告書並びに熊谷市及び旧妻沼町関係

1988 「寺東・八反田・東耕地・入川・深町遺跡」、1999 「横間栗遺跡」、2000 「寺東遺跡・別府氏館跡」

2010 「西城切通遺跡」6集、2018 「中西遺跡Ⅰ」27集、2019 「中西遺跡Ⅱ」34集

熊谷市 2015 「熊谷市史 資料編1」、妻沼町 1977 「妻沼町誌」、妻沼町教委 1981 「妻沼西南遺跡群Ⅰ」

○埼玉県内及び熊谷市以外の報告書等

桶川市教委 2004 「後谷遺跡1分冊」、2005 「後谷遺跡2分冊」、2007 「後谷遺跡3分冊」

久喜市遺跡調査会 2007 「道合遺跡2」、久喜市教委 2013 「地獄田遺跡」、大宮市教委 1971 「小深作遺跡」

川口市遺跡調査会 2023 「宮合貝塚遺跡」50集、川口市教委 2023 「縄文のナニコレ/コレミテ」(展示図録)

小鹿野町教委 2023 「秩父・合角ダム水没地域埋蔵文化財発掘調査報告書3 下平遺跡石器編」

栃木県埋蔵文化財調査報告 2001 「藤岡神社遺跡」197集、2020 「あがた駅南遺跡」396集

千網谷戸遺跡発掘調査会 1978 「千網谷戸遺跡発掘調査報告書」、太田市教委 2010 「石之塔遺跡」(解説資料)

石田典子 2017 「伊勢崎市北米岡遺跡出土の岩版」『群馬文化』332

○論文等

稲野彰子 1982 「関東地方における岩版・土版の文様」『史学』52-2 三田史学会

栗島義明 2012 「緑泥片岩製石棒に見る需給システム」『埼玉県立史跡の博物館紀要』6号

小林達雄編 2008 「総覧縄文土器」総覧縄文土器刊行委員会

小西和彦・阿部芳郎・佐々木由香・宮浦舞衣・小畑弘己 2022

「縄文時代の貝塚からはじめて発見されたドロジガバチ類の巣」『昆虫(ニューシリーズ)』25-3 日本昆虫学会

## 付編 1

### 上北浦遺跡における縄文時代未調査区域の遺物

菅谷 浩之（熊谷市文化財保護審議会会長）

小野美代子（熊谷市文化財保護審議会委員）

#### 1 未調査区域の出土遺物と採取遺物

##### (1) 採取に至る概要

熊谷市域における縄文時代後期～晩期の遺跡は、諏訪木遺跡を始めいくつか存在するが、この時期の性格や実態等をつかむ点では十分ではなかった。本遺跡が周辺地域にもたらす役割に期待を抱き、幾度となく上北浦遺跡に発掘調査の見学に訪れた。

調査では、後期～晩期の特有な包含層に苦勞する様子が見て取れた。調査の進展から、遺跡の性格や重要性は、門外漢であっても想定ができた。ただ、調査の進捗状況から、一部に未調査区域が出るように見られ、その中で南側の遺跡の広がりの確認が必要と考えていた。そこで、事業主体者の協力を受け、調査終了後の7月10日、2か所で遺構の確認を試した。その結果、共に床面と見られる位置から遺物が出土し、調査された地区の南側にも遺跡の広がりを確認した。

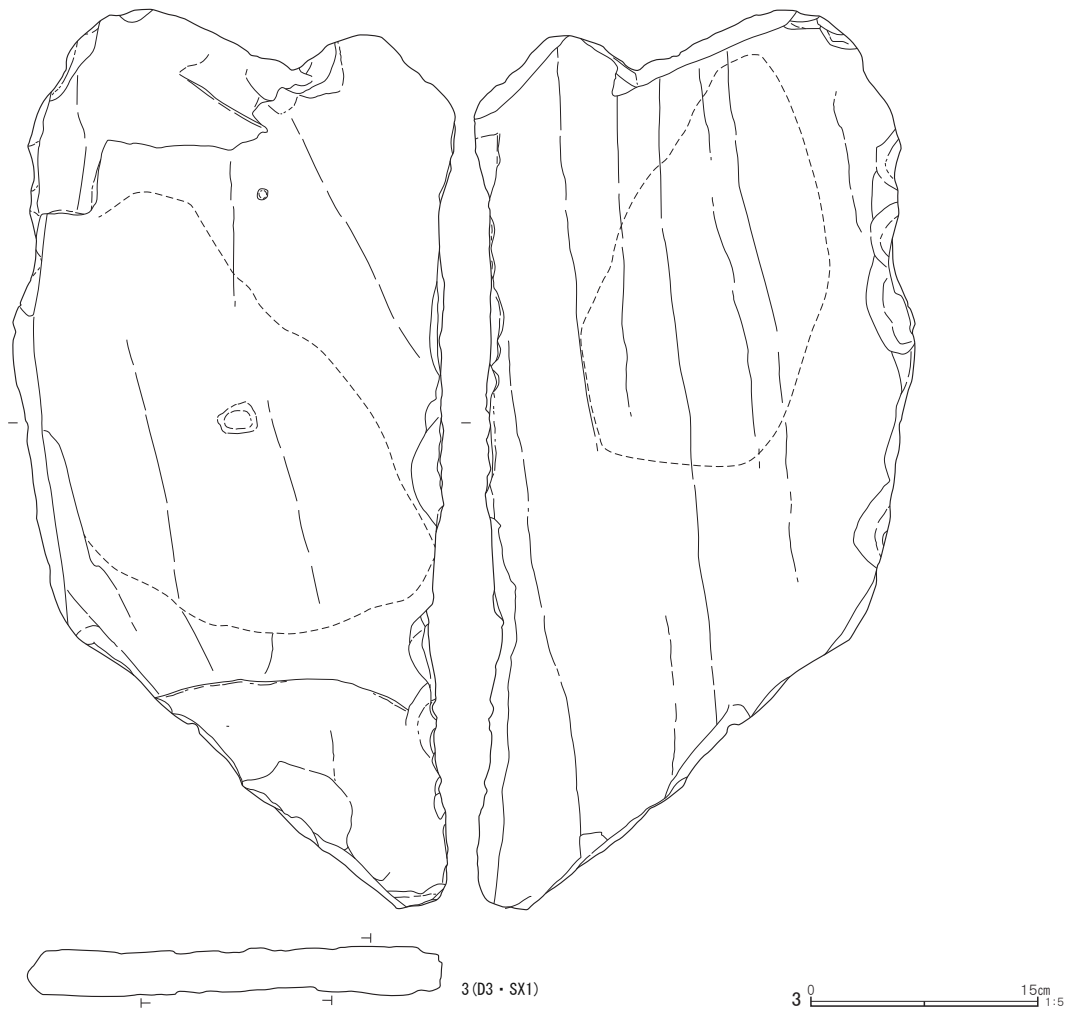
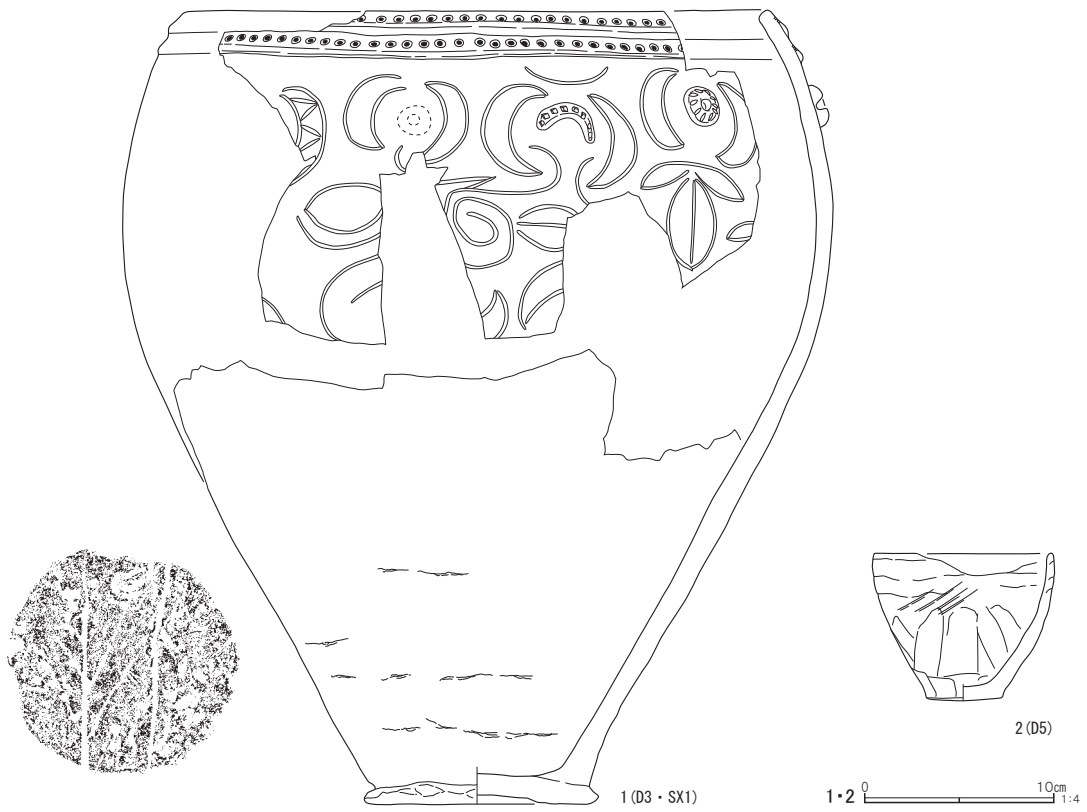
確認した遺跡の広がりから、排出土中に相当の遺物が含まれると想定され、文化財的にも損失が出る事は明らかであった。7・8月の猛暑の中、一点でも多くの遺物を採取し、遺跡の性格や埼玉県北部の後期～晩期の解明の補完となるように努めた次第である。幸い、本書の付編として遺物等の紹介が可能になり、土偶については小野美代子氏、土器と石器については熊谷市教育委員会の森田安彦氏と大野美知子氏にそれぞれにお願いすることになった。

##### (2) 出土遺物と状況

未調査区となるD5グリッドは、調査期間中に掘り下げを始めたが、遺構確認の前に、出水のため進行が困難となった。調査終了後の7月10日に、遺構内に溜まっていた水を排水し、掘り下げると土器に当たった。それは水没した中を手探り状態であったが、立ったままの土器を確認して掘り出した。これが第1図2の小型の深鉢形土器である。

D3グリッドに位置する平安時代の第13号竪穴建物跡は、早い段階に完掘されていた。この建物跡の北側壁面付近を掘ったところ、大型の深鉢形土器（第1図1）が平安時代の当建物跡の床面直下から、破片が重なる状態で1個体分出土した。これは、縄文時代遺構の床面からの出土と見られ（両床面の間は25cm程）、周辺に破片は見当たらなかった。

他の土器を探そうと周辺の確認を試みたところ、約0.5m程離れた同建物跡東壁付近で水平に横たわる板石を確認した。この板石は、横に掘り進めても動かない。建物跡外に食い込み、深い位置のため、自力ではタヌキ掘りしか方法はなかった。結果、長さ59.6cm、幅28.2cm、厚さ3.1cm程の緑泥石片岩（第1図3）であり、多数出土している片岩製の石製品の原石等を考えたが、両面の一部に平滑面が認められるため、石皿として使用された可能性がある。1の土器と3の片岩は同じレベルの出土で、掘りながら両遺物の出土面が縄文時代の建物跡の床面であると捉えた。



第1図 グリッド出土遺物



D5グリッドの遺構と共に、2か所の埋土とも、黒褐色ではなく黄褐色に近く、見分けが余りつかなかった。目測ではあるが2地点共に同じレベルを見た。

この日の夕方、予報どおり突然豪雨が襲い、遺跡は水没した。さらに確認したい箇所があったが不可能となり、工事でも排水作業等で数日間手がつかない状態になった。

### (3) 遺物の採取

工事の重機による掘削は、危険なため近づくことが出来ず、確認が無理であり、排出土による盛り土の中の遺物を探した。7月21日で掘削の工事は終了し、遺物を含む利用予定以外の残土は、市外に搬出されていた。工事により造られる施設は、雨水浸透の性格を持ち、施設の中の全面にパネルが幾重にも地山部まで積み重ねられ、また、その上部を緑地帯とするために土が必要で、周辺には削土された小山が幾つも築かれていた。

排出土は、瓦生産用の良質の粘土（荒木田土）のため、乾燥するとレンガ状になる。また、降雨後は粘性が強く苦勞した。しかし、シャベルを杖代わりにした際、先端に違和感を感じ掘り下げると、偶然ではあったが土偶（第2図1）が現れた。石剣（第2図6）は盛り土に刺さった状態で発見された。

緑地帯は、遺物を包含した小山状の盛り土の粘土を、約50cm程の厚さで全面に平らに均したもので、その上に芝生養生用の客土を入れていた。

遺物の多くは、盛り土を整地する際に採取したもので、その中に石器等が混入していたのである。石器の他に蛇紋岩やメノウ等の多様な石材の原石や、剥片も多く確認された。一方、珪質頁岩の石斧の素材（第5図1）は、粘土と同色で判別しづらいながらも、同一箇所を何度も歩いた結果発見したものであるが、山形県付近に多く見られるものである。

9月7日、採取の最後となった。この日、工場内全域を歩かせていただいた。その際、工場敷地東南隅の排出土の中から、加曽利E式期の大きめの土器破片を確認した。これは、中期の遺構の広がりを示す資料となった。

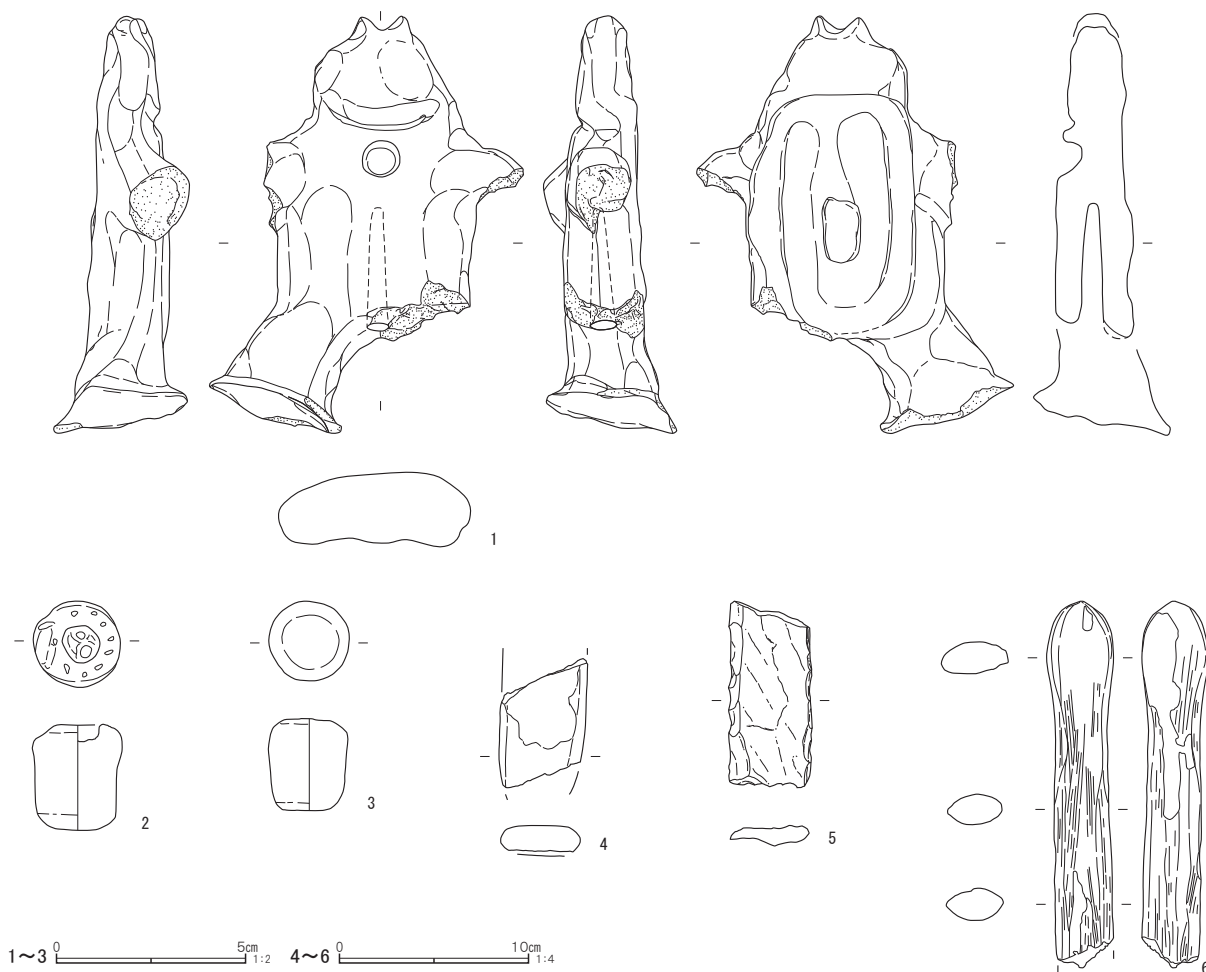
採取遺物から見た上北浦遺跡の未調査部は、黒色包含層を伴わず、多数の石器が出土したことなどから、当時の生活様式の解明が期待できた遺跡であったと見る事が出来る。また、石器に比し土器片の分布は少ないように見えた。なお、採取した遺物は、ごく一部にしか過ぎなかった事指摘しておく。訪問回数を重ねれば、さらに成果が上がったと思ったが残念であった。ただ、緑地帯の層の中には現在も縄文期の遺物が存在している。

このような遺物採取は、事業主体者の株式会社田部井建設、雨水浸透施設工事担当の増尾造園土木株式会社の協力をいただいた結果である。（菅谷）

## 2 土偶

土偶（第2図1）は、両腕と左脚を欠いている。全長は11.0cm、胴部中央の幅は、5.1cm、厚さは1.9cmと小型の中実土偶である。全体に橙色味が強い褐色を示しているが、背面には部分的に黒色味の強い部分が見られる。微小な砂粒も含まれるが、胎土は密で、焼成も良好である。無文で、手捏ねで整形されたと思われ、撫でた痕や指痕が観察できる。

頭頂部は、角状の小突起で表現され、顔面表現は見られず、後頭部も平坦である。顔面と頸部は、わ



第2図 採取遺物(1)

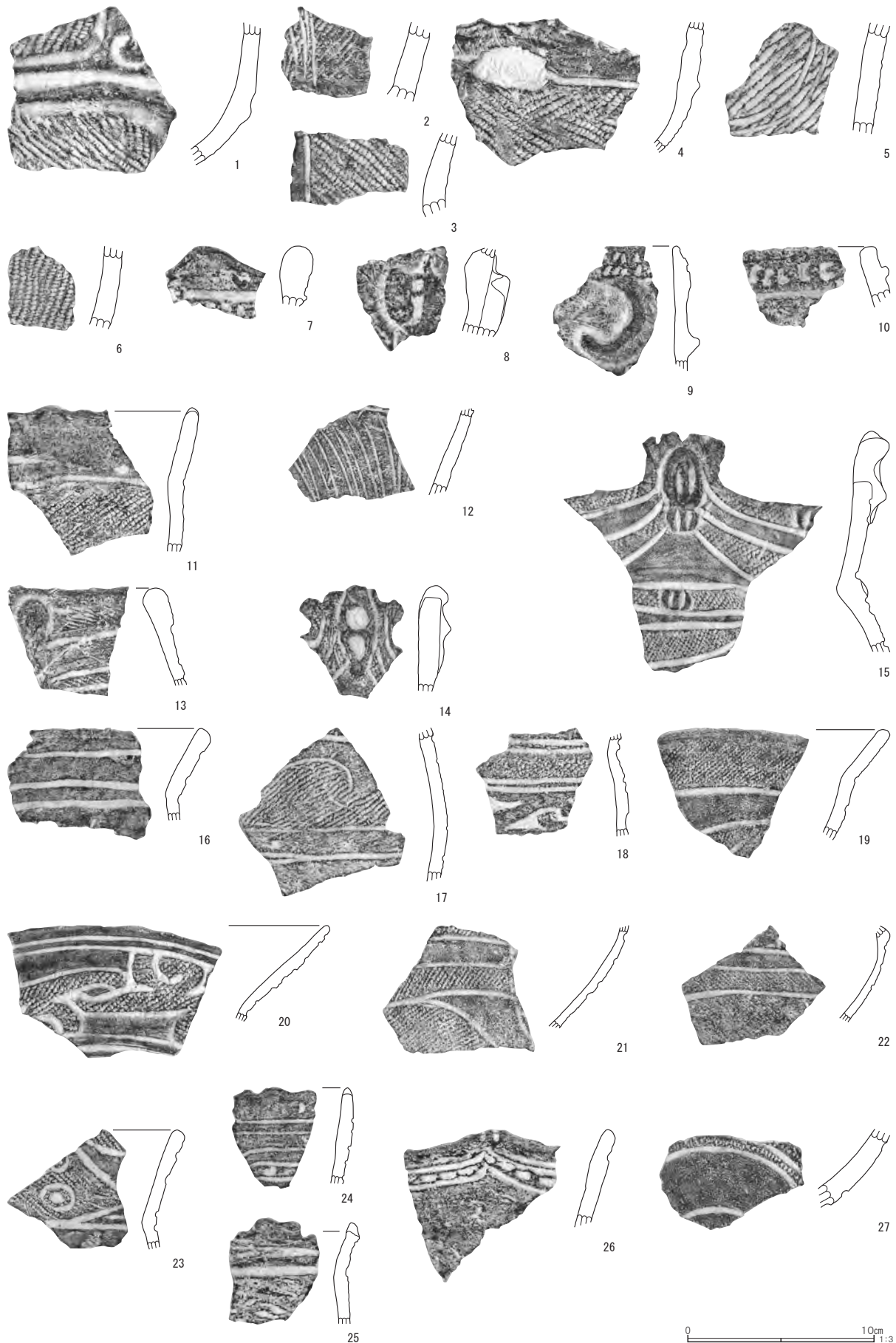
ずかな窪みで区分されている。胸部上半の中央には、径1.0 cm、深さ0.5 cmの円形の凹みが施されているが、乳房の表現や腹部の膨らみなどは見られない。背面の肩部から臀部にかけては、全体に窪み、周囲が畝状に膨らんでいる。背面の胴部中央にあたる部分には横1.0 cm×縦1.5 cmほどの膨らみが見られる。また、股間中央から胴部に向けて径0.65 cm、深さ3.0 cmの孔が施されている。脚部は外開きでどっしりとしており、足底は平たく作られているが、自立はしない。

頭頂部が角状の突起で表現されること、顔面表現が無いこと、背面に窪みが見られること、足底が平らで外開きになっていることなどから、東北南部の影響を受けた晩期の省略タイプの土偶と考えられる。また、胸部の凹みや背面の窪み、股間中央から胴部中央へ向けての孔などからは、関西方面との関連も考えられ、興味深い資料である。時期的には安行3 d式期の後半に比定できよう。(小野)

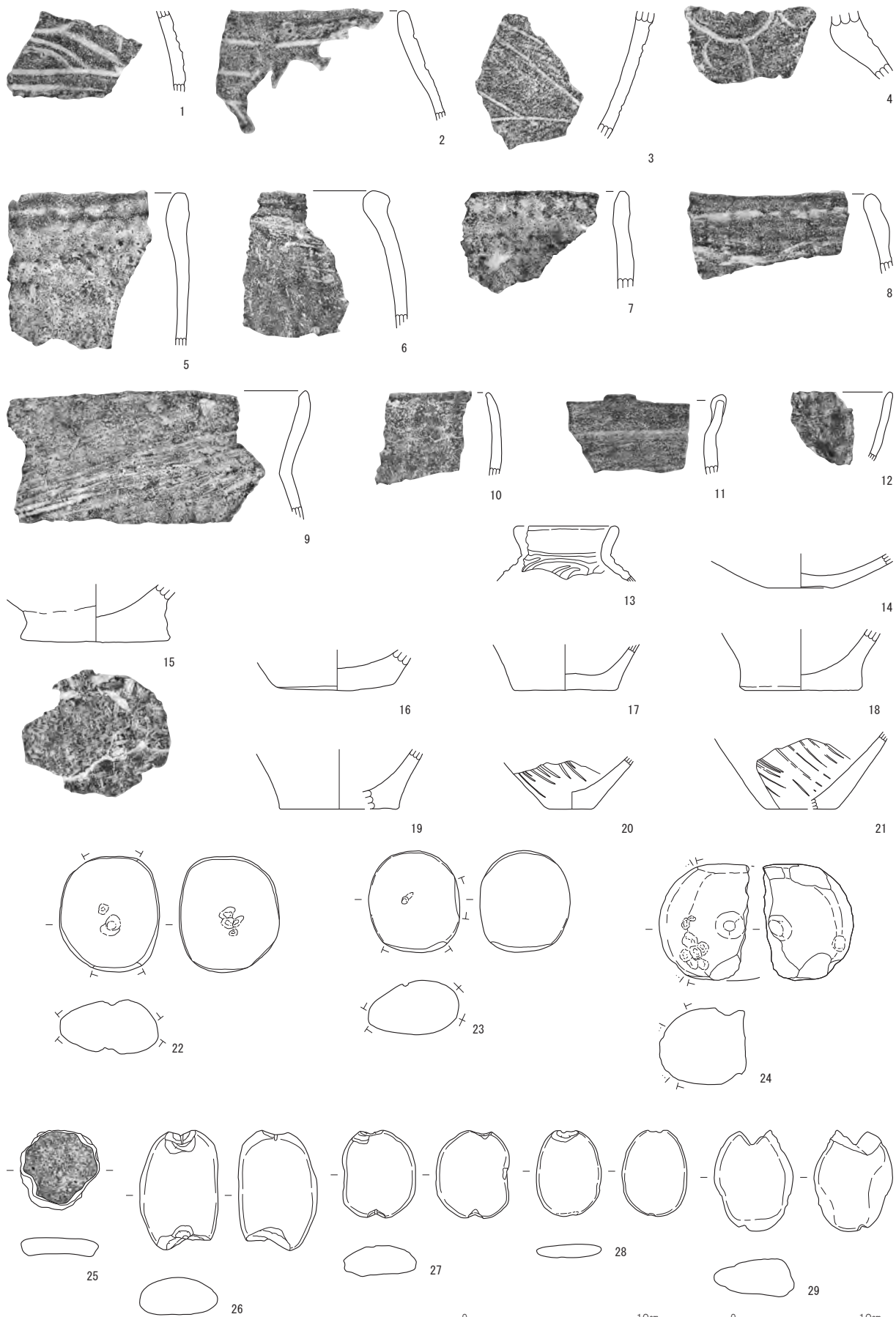
### 3 土器

第1図1は、有段口縁の深鉢形土器で、胴部上半に最大径をもつ、天神原式土器に比定される。口縁部の折り返しの部分に2列の連続刺突文を施し、胴部には沈線で、対弧状の三日月文、渦巻文等を施文している。

第3図1～7は中期の土器群である。1・2は加曾利E 2式、3は加曾利E 3式、4は加曾利E 4式、



第3図 採取遺物(2)



第4図 採取遺物(3)



第5図 採取遺物(4)

5は連弧文土器である。1は、頸部片で、口縁部の楕円区画内を縄文で充填し、胴部を太沈線で区画する。4は、波状口縁で、環状把手が剥離している。

第3図8～15は後期の土器群である。8は称名寺2式、9・10は堀之内1式と思われる口縁部、11・12は加曾利B3式、13は安行1式、14・15は安行2式である。9は、J字状貼付文を持ち、折り返し口縁上に2列の半裁竹管による刺突列が施される。10は、折り返し口縁上に半裁竹管による刺突列が施される。13は、横位隆帯上に縄文が施される。14は、瘤状貼付文に縦位円形刺突を施す波状口縁である。15は、波状口縁の先端が膨らんで刻みを持ち、豚鼻状突起が貼付され、三角区画が施される。

第3図16～27及び第4図1～4・13は、晩期の土器群である。第3図16～22は安行3a式、23は安行3b式、24～27は安行3c式である。17～18及び20・21には入り組み文が施されている。23は、波状口縁で、ひし形区画内に円形と刺突による円圏文が施されている。26は波状口縁で、2条の波状沈線間に連続刺突が施されている。第4図1～4・13は安行3d式である。5～10は、加曾利B式～

安行3 d式に伴う粗製土器である。5～8には、指頭による連続圧痕があり、8には、さらに爪の圧痕が残る。9は、刷毛目状工具で器面を調整している。13は小型壺である。口縁部は無文で、胴部に太い沈線文が施されている。(森田)

#### 4 石器

第5図1は二次加工のある剥片である。2は磨製石斧、3～7は打製石斧である。

1は、大型であり、先端が先鋭状である。法量は、長さ13.5 cm、幅7.1 cm、厚さ3.4 cm、重さ200.5 g、石材は珪質頁岩である。2は、断面が扁平型で、数度の刃部再生を行っている。法量は、長さ10.6 cm、幅6.2 cm、厚さ1.5 cm、重さ156.4 g、石材は緑色岩である。3は、元々磨製石斧の未製品であったが、打製石斧に転用したものと考えられる。法量は、長さ16.8 cm、幅8.5 cm、厚さ4.9 cm、重さ992.5 g、石材は緑色岩である。4は、分銅形で抉入状に近い、刃部に摩耗痕が見られる。法量は、長さ11.9 cm、幅8.3 cm、厚さ1.9 cm、重さ173.4 g、石材は頁岩である。5は、小形の凸型と呼ばれるものである。法量は、長さ6.8 cm、幅5.6 cm、厚さ1.1 cm、重さ55.2 g、石材は安山岩である。6は、分銅形だが、あまり抉りは顕著ではなく、摩耗痕もあまり見られなかった。法量は、長さ16.2 cm、幅10.2 cm、厚さ1.9 cm、重さ524.5 g、石材は砂岩で、上端部が欠損する。7は、大型で撥型に近く、全体的に摩耗痕が見られる。法量は、長さ23.7 cm、幅10.7 cm、厚さ6.5 cm、重さ1514 g、石材は頁岩である。(大野)

#### 参考文献

- 1996 『土偶とその情報』研究会 『東北・北海道の土偶Ⅱ ―亀ヶ岡文化の土偶―』
- 2011 『橿原遺跡出土品の研究』 橿原考古学研究所研究成果第11集 奈良県立橿原考古学研究所
- 2015 鈴木克彦『遮光器土偶の集成研究』 弘前学院出版会
- 2020 大工原豊 長田友也 建石徹編 『縄文石器提要』 株式会社ニューサイエンス社

## 付編 2

### 上北浦遺跡の剥片石器製作

#### －原石、石核、目的剥片、剥片石器未製品等－

田部井 功 ((公財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事)

縄文後晩期の遺構・遺物はD 1～D 3、E 1～E 4、F 2～F 5、G 2～G 4にかけて広がる。粘土質の埋土と遺構の切り合いが顕著で、竪穴建物跡や土坑の把握には大きな困難があった。調査では遺構を覆う埋土を掘り下げ、遺構の把握を行うとともに遺物の収納が行われた。遺構に帰属されない遺物についてはグリッド単位にとり上げられた。ここで報告する剥片石器等はグリッド単位で取り上げられたものが過半であることはこのためである。また、出土グリッドが不明な資料が存在することも予め断っておきたい。

#### 1 石核について (表 1)

出土石核は総数 178 個、内訳はチャート 170 個、頁岩 2 個、黒曜石 6 個で、チャート石核の割合が実に 96% を占める。表に記載された各項目について、概要及び凡例を記す。石核は、重さを基準にして大きく 3 つに大別した。大きさの分類は (田部井 2023) に拠る。大形 200 g 以上、中形 50 ～ 199 g、小形 50 g 未満である。中形のもの 5 個、他は全て小形である。小形の中でもこれ以上剥片をとることができないもの (15 g 以下を目安とする) を残核とした。チャート、頁岩は 111 個あり、その割合は 65% である。選別された原石から作られた石核は残核になるまで剥片が剥がされており、良質石材の使用について徹底した資源管理を行われていたことが分かる。

以下に、チャートの材質について、簡潔に要点を纏める。

○チャート主成分は $\text{SiO}_2$  (二酸化ケイ素)、非常に硬い石質である。

○チャートは、堆積して形成されるため、層状に形成される性質がある。チャートが作られる年数は、平均体積速度が 1000 年で 1 ミリ程度、これがチャート質が均一になりにくい要因である。石器作りには均一質の材が良質の材である。

○チャートには、石目 (白い筋) が見られる。石目は、他の部分に較べて結晶が粗くなっている。これは、石英が再結晶したもので、石目は加工する際にその箇所が割れやすい。

荒川流域では、チャート材は豊富であるが、剥片石器の石材としては、材質を十分に吟味する必要がある。原石が選別して採取された、と記述したのはこのことを意味する。

黒曜石では原石が小さく、これを加工した石核も小形のものが多い。黒曜石残核は、10 g 以下として記述した。チャート・黒曜石の石核当初は、塊状のものと板状ないし剥片状のものがある。塊状のものは質感があり、コロコロとしたもので、その形状は角柱状或いは角錐状である。一方、板状ないし剥片状としたものは板状の剥片石核をさす。ここでは、石核の形状から板状、角柱状、角錐状としたが、当初の石核と使用後の形状に差異があることは留意する必要がある。また、石材に加えられた加熱痕等について要点を記す。加熱処理は硬質の石材であるチャートや頁岩に行われたもので、剥離に関する性質を改善する方法として行なわれた加工技術である。石核や剥片に認められる独特な肌触り・色

調、そしてポットリッド状剥離痕は、加熱痕として把握することができる。178個の石核の中で特徴を有する石核について掲載された写真をもとに説明する（番号は表1に掲載された石核番号）。

図版18写真1：上段はD1・D3、下段はD2・D3グリッド出土の石核である。上段の左2つは加熱痕跡が見られ、左端の2番にはポットリッド状の剥離が認められる。下段右端は5番で、遺跡では最も大形の石核である。この石核については、作成の工程が読み取れる。原石は、荒川で採取された拳大の円礫で、周囲を石核調整して石核にしている。角柱状石核の上下面は表皮で、原石の厚さを図ることができる。打面は側面、上下面に複数認められ、幅1～2cmの小形剥片が剥がされた。上段右から2つ（6番）は大変良質の石材で、使用が進んだ石核である。剥離面は滑らかで光沢があり、これは加熱痕跡の特徴と認めることができる。下段中（9番）は、5番と同様に石核が作られた工程が分かる資料である。拳大の原石を板状ないし角柱状に分割、石核調整を行って石核に仕上げている。板状石核の現寸は、高さ4cm、幅5cm、厚さ2cmで、使用により幅と厚さが減少している。

図版18写真2：E1出土の石核である。上段は何れも使用が進んだ石核で、重さは10g以下で、これ以上剥片を剥がすことができない残核である。材質は、何れも大変良好である。下段右端（27番）は角柱状石核、比較的大形の原石を角柱状に分割して石核用材にしている。表皮は石核調整時に剥がされているが、それでも頭部に一部が残る。この石核は、縦長剥片をとるもので、角柱の高さは5.5cmである。

図版18写真3：F2出土の石核である。上段左端（57番）、下段左端（59番）は何れも角柱状の小形石核で、良質の石材である。57番は、側面に表皮が認められる。扁平な原石を分割し、石核調整を行っている。剥離面は滑らかで光沢があり、加熱痕跡と認めることができる。59番は、角柱状石核の上下面に表皮がある。石核を作る工程が観察できるもので、原石は、厚さ3cm前後の盤状である。この盤状原石を分割して石核が作られている。打面は表皮面に作られ、小形剥片が剥がされている。

図版18写真4：第8号竪穴建物跡（以下、S I 8と略す。）出土の石核である。この建物跡では、チャート石核が31個、黒曜石石核1個とともに、石核調整剥片等が多量に出土している。写真上段は、使用が進んだ石核で、全て残核である。中段は、20g前後の小形石核で使用が進んだものであるが、まだ剥片をとることができる。下段右端（132番）は剥片状石核で、原石から剥がされた大形剥片を石核としている。形を整えるために剥片は折断され、この折断面が打面にされている。下段右から2つ（133番）は角柱状石核、上下面が表皮である。原石から石核を作る過程が観察できる。石核の上下面が表皮であることから、原石は厚さ5cm前後の円礫で、これを分割して石核素材としている。打面は上下の表皮面で、使用が進むとともに石核は角柱状の形態になったものである。S I 8出土のチャート石核31個の中で、残核は21個、良質のチャート材は剥片がとれなくなるまで使用されている。良質石材の使用管理が徹底されていたことが分かる。

図版19写真5：S I 8出土の剥片で、剥片の形や大きさが様々である。剥片に原石の表皮が多数認められる。これは、多くが原石から石核を作る過程に生じた石核調整剥片であることが分かる。また小形で薄い剥片も見られる。これは石核から目的剥片をとる際に生じた失敗剥片、目的剥片の形を調整した折断片で、色々な剥片が混在して見られる。S I 8からは、多数の石核に加えて石核調整剥片、失敗剥片、折断破片等が出土しており、この遺構を中心に周囲のグリッドが、石器作りの工房として営まれたことを示している。



図版 19 写真 6 : 出土区は特定できないが、特徴を有する石核である。上段左 (166 番) は角柱状石核で、角柱上下面が表皮である。原石は厚さ 4 cm 前後で、これを分割して石核素材としている。角柱状石核の側面は、磨かれた痕跡がある。上段中 (168 番) は板状石核で、下面が表皮である。打面は両面に設けられ、残核になるまで使用されている。上段右 (170 番) は角柱状石核で、角柱上面が打面、使用が進み打面が失われている。下段中 (171 番) は材質が不良、使われずに遺棄されている。下段右 (172 番) は中形石核で、本遺跡では最も大きい石核である。原石が粗割された後、石核調整・打面調整が行われ角柱状石核にされている。しかし、この石核は使用された形跡がない。石材の質が特に悪いことはない。こうした使用されない石核は、新たな剥片石器生産のために貯蔵された可能性が高い。また、この中形石核から、目的剥片がどの位剥がされたのか想定することのできる資料である。石核から 3 g 前後の目的剥片 (石鏃・小形刃器用) を剥がし、これ以上剥がすことのできない残核を 15 g 前後とすると、約 100 g の中形石核から 30 枚程の剥片をとることができる。優れた剥片技術を有した縄文人であっても失敗剥片が生じ、また適宜打面調整も行われる。失敗剥片の割合を 2 割、そして打面調整を加えると、実際に剥がすことのできる目的剥片は、20 枚前後と推考される。遺跡での石器生産の規模を復元しようとする時、参考となる資料である

図版 19 写真 7 : 黒曜石石核は、本遺跡では 6 個である。調査では、黒曜石は残すことなく取り上げられており、点数の少なさは遺物の収納もれではない。石核は何れも小形で、173・175・176 番は残核である。175 番は、角柱側面に上北浦遺跡以前の剥離があり、ここに付いている汚れは水洗しても除くことができない。写真 7 は F 3 出土である。写真左 (177 番) は板状石核で、片面は上北浦遺跡以前の古い剥離で、ここを加工せずに石核面としている。このことは、177 番が特別な例ではなく、黒曜石石核を多く出土した小鹿野町下平遺跡においても同様の事例が報告されている。写真右 (178 番) は黒曜石の中では大きな石核である。柱状部上面を打面として繰り返し剥片がとられたため、極端な形状の石核となっている。

## 2 黒曜石原石について (表 2)

本遺跡で出土した黒曜石原石は、表 2 に掲載した 18 個である。この内 2・4・5・9・10・11・18 番は気泡や不純物の混入があり、材質不良のため使用されずに廃棄されたものである。また、10 g 以下の小形のものは 1・3・12・13・15 番で、何れも使用された痕跡はない。黒曜石は、遠方から交易によってもたらされた貴重な石材で、縄文人にとってはブランド材であった。しかし、黒曜石にこうした不良材や使用することの困難な小形材が含まれていることには注意が必要である。黒曜石の不良材や小形材については、石器作りの遺跡であった下平遺跡においても取り上げられている。これは、黒曜石の供給元と供給先との関係の反映であり、これを改めて捉え直す検討が行われている。

図版 19 写真 8 : 両者とも E 3 出土である。左 (6 番) は表皮が古い剥離面で、表皮の汚れはとることができない。右 (7 番) は拳大の大きさで、本遺跡で出土した中では最大である。両者とも質の良い原石であるが、消費されずに残された。

図版 19 写真 9 : 両者とも G 2 出土である。左 (13 番) は、前記したとおり使用には難しい小形のもので、表皮に割られた痕跡があるが、使用されずに廃棄されている。右 (14 番) は板状の原石で、厚

さは10 mm程である。この原石の折断面の汚れは、水洗しても落とすことができない。これは、採掘時に割られた痕跡で、何らかの事情で採掘時放棄されたものと認められるものである。しかし、縄文晩期に再び採掘された中にこの原石は含まれ、黒曜石流通網に乗せられて運ばれたものと考えられる。同様の事情は、8番の原石にも指摘できる。

18個の黒曜石原石には、小形で使用できないもの5個、材質不良で使用に耐えられないもの7個があり、合わせて12個となる。原石18個の中で65%強の割合である。黒曜石供給を巡る供給元との関係を考えるときに大きな課題が設定される。ブランド品である黒曜石を、上北浦縄文人は交易を通して入手した。入手に当たっては供給元との間に諸種の軋轢があった。12個の原石は、この軋轢を語るメッセージとして分析することができる。次に、残り6個は、使用が可能にもかかわらず使われずに遺された。特に7番の拳大のものは、原石としては大形であった。秩父市塚越向山遺跡の埋納黒曜石貯蔵資料等（小林 茂 1995）から、これら6個の原石は使用に備えて貯蔵されたものと捉えることができる。

### 3 目的剥片、剥片石器未製品等について

調査区での剥片については、全て収納されていないことを初めにお断りしておく。チャート石核が172個出土しており、剥片石器を作るための各工程を踏まえば膨大な量の剥片が生じる。石核を作るための石核調整剥片、石核から剥がされた目的剥片・失敗剥片、剥片の大きさを調整する折断破片、そして、目的剥片を加工する際に生じる調整剥片・チップ等である。剥片収納に限界があったことを踏まえて、ここでは収納された剥片を観察するとともに、これを用いて考察する。

目的剥片は、予めどのような剥片石器を作るのか、その目的に応じて大きさや形態を意識した剥片が剥がされる。剥片は、大きさによって大凡3種に分けることができる。大形剥片（10 g以上）、中形剥片（4～9 g）、小形剥片（3 g以下）の3種である。この3種を剥片石器に相関させると、大凡次のようになる。小形剥片：殆どは石鏃用として使用された。中形剥片：大形の石鏃用ないし中小形の刃器用材である。大形剥片：刃器、石錐、石槍等大形の剥片石器用である。そこで目的剥片と石核との関係について観察から得られた要点を記す。

- 目的剥片は、各種石核から製作する剥片石器の大きさや形を踏まえて剥がされたものである。これは、どのような目的剥片を剥がすのか、石核の品揃えがあったことを暗示させる。本遺跡においても、チャート石核は大きさ等種類が豊富でこのことを裏付ける。
- 目的剥片や剥片石器に転用された残核の形状は、剥片石器の形が写されている。どのような石器を作るのか、これを踏まえて目的剥片は石核から剥がされた。また、残核が刃器や石錐の素材となったものがある。これは、残核の形状に製作しようとする石器がトレースされたもので、資源管理が徹底されていることを示している。
- 剥片の大きさと厚さについて、大きいものは折断技法により調整が可能であるが、剥片の厚さは調整に困難があった。特に、石鏃については厚さの調整が大切で、厚さを意識した剥片選択が行われており、減じることができない剥片は放棄されている。
- 黒曜石は、原石そのものが小さく、剥がされる剥片は中形剥片以下である。このため、黒曜石が使用された剥片石器は石鏃、小形刃器に限られている。

### (1) 目的剥片、石鏃未製品、石槍未製品（表3-1）

ここでは、石鏃用目的剥片とこれを加工した未製品について、表と写真を用いて説明する。

図版19写真10：石鏃用目的剥片と下段右は石槍用剥片である。上段は3g以下の小形剥片、下段左3つは4～9gの中形剥片、折断して剥片の形が整えられている。何れも石材はチャートで、表3-1の10～15・19～21番である。下段右二つは、石槍用である。両者とも厚みのある剥片で、折断技法で形が整えられている。左が23番、右は22番で、両者とも石材は頁岩である。

図版19写真11：上段が石鏃用目的剥片、下段が石鏃未製品である。上段の左は3番、右は2番で何れもE1出土である。何れも折断痕が観察され、形が整えられている。下段は、石鏃の形態を認めることができるもので石鏃未製品である。左は1番、石鏃の大凡の形は認識できるが、体部と基部は未成形である。厚みも減じられておらず、製品までには数工程が必要である。中は6番、平基有茎石鏃として大凡の形態が作られる。右は4番、剥片は反りが大きく、製品とするには困難と判断されたのであろう。先端部の加工が行われたが廃棄された。

図版19写真12：何れも黒曜石の石鏃未製品である。左から表3-1の24・25・26・27番である。24番は有茎石鏃で、基部が長くとられている。25番は石鏃先端部で、体部が大きく欠損したため放棄された。26番は先端部が欠損しており、また、体部は器厚が厚く減じる必要がある。27番は薄い剥片を加工したもので、制作途中である。黒曜石石鏃未製品は、何れも小形で1g未満である。26番は重さがあるが、体部の厚さを減じれば軽減できる。何れの石鏃未製品も、小形の目的剥片から作られたものである。

### (2) 目的剥片、刃器、刃器未製品、石錐未製品（表3-2）

刃器用目的剥片は、100g近い大形の目的剥片を使用するものから4～9gの中形剥片を素材とするものまで幅がある。これは、刃器が多用途の剥片石器であり、各種大きさのものを揃える必要があったためである。刃器の中で注意されるのは、不定形刃器とした一群である。これは、鋭利な剥離面を刃部としたもので、特別に刃部が加工されて作られたものではない。刃部とされた剥離面には、使用痕が見られる。不定形刃器は、石核から目的剥片を剥がした際の失敗剥片も用いられている。使用は、長期にわたって使われるものではなく、刃こぼれや簡易的な使用が終わると廃棄された。不定形刃器の存在は、下平遺跡で注目され、使用痕と使用のあり方が詳細に観察されている。（深田芳行 2023）

図版20写真13：上段は石錐用目的剥片・石錐未製品、下段は刃器用目的剥片と刃器未製品である。上段は、左から53・55・57番で、55・57番が石錐未製品である。53番は、石錐用に意図して剥がされた目的剥片で、尖った剥離面を錐部の刃に使おうとしている。55番は、厚みのある剥片で、剥片のバルブが除かれて鋭い先端部が作り出される。製品にされるには細部の加工が必要である。57番は、大形の剥片が用いられ、先端部に剥離が行われて錐の刃が作られる。製品にするには細部の加工が必要である。石材は53・55番がチャート、57番は頁岩である。下段は左から52・35・37番で、52・35番が刃器用目的剥片、37番が不定形刃器である。刃器用目的剥片には大形剥片が使用され、35番は折断して形が整えられている。37番は、鋭利な剥離面を刃部としたもので、周囲は折断により形が整えられる。刃部は、使用により刃こぼれが見られる。不定形刃器とされるものは多くが簡易的なもので、使用して刃こぼれが目立つと廃棄される。石材は、何れも頁岩である。

図版 20 写真 14・15: 写真は、拳大の原石から大形の剥片が剥がされる過程を示したものである。1～5は表3-2の38～42番の大形の剥片で、何れも頁岩ある。最大は1の87.4g、最小は5の20.9gである。これら大形剥片は、刃器用目的剥片と捉えることができるもので、写真14で観察できるように、5から順番に剥がしている。何れの剥片も接合でき、写真14の1～3は接合された状態である。これら1～5を接合すると拳大の大きさとなる。原石の表皮は滑らかで、川によって運ばれた円礫であることを示している。原石は、石核調整されず、そのまま剥片供給材として使われている。目的剥片1は厚みのある剥片で、2～5の剥片が剥がされた後の残原石であるが、打面の対面が鋭利な剥離面である。この剥片も刃器用目的剥片として予定されている。2は左側が叩かれ、大きな剥片として取られている。3は薄手の縦長剥片で、打面左側に鋭利な剥離面が提供される。4は厚みのある縦長剥片で、打面左側と先端に鋭利な剥離面が提供される。5は最も早く剥がされた剥片で、打面左側と先端が鋭利な剥離面となる。これらの事例は原石の形状に大きな支障がなければ石核調整等は行われず、直接原石から大形剥片がとられたことを示すもので、大形剥片の供給について留意しなければならない事例である。1～5は2次加工等が行われずS I 8に残された。これは廃棄されたものではなく、再び使用することを意図されており、剥片貯蔵の意図を強く感じさせる。

図版 20 写真 16: 左は64番、右は66番で、両者とも頁岩製の不定形石器である。左は、角柱状の残核を再使用したもので、使用が終わった頁岩残核の側面に、横圧剥離によって刃がつけられている。刃部は、写真下の弧状の側面で、効果は削刃として有効である。右は、左と同一の用途で、大形の削器である。これは、拳大の円礫を原石とする。打面調整が行われた後、比較的厚みのある剥片として剥がされる。刃部は、打面对面の弧状の剥離面で、ここに横圧剥離で刃が付けられる。左右は素材を異にするが、削器として加工されたものである。

図版 20 写真 17: 両者とも石匙未製品で、左が59番、右は60番で、石材は左がチャート、右は頁岩である。両者とも柄部は折断によって作られる。59番は小形の石匙で、刃部は未加工である。60番も同様で、石匙形態までは作られているが、刃部は未加工である。多くの刃器目的剥片と同じく、両者とも貯蔵未製品としてストックされたものである。

図版 20 写真 18: 何れも黒曜石の目的剥片で、鋭い剥離面の一端に刃を作った不定形刃器である。左から表3-2の68～72番で、68番は小形目的剥片、69～72番は中形の目的剥片が使われている。68番は、鋭い剥離面の先端を刃部としたもので、使用痕を認めることができる。69番は、剥片の片面が表皮、他面が剥離面でバルブがある。鋭い剥離面が、刃部として使用されている。70番は、縦長剥片でバルブが認められる。剥片の鋭い先端部を刃部としたもので、使用痕が認められる。71・72番は打点と打点下のバルブが観察される。71は、剥片の先端と側縁を刃部としている。72は、鋭い剥離面の周囲を刃部とする。何れの刃器も、鋭い剥離面を刃部としたもので、刃部とするのに特別な加工は施されない。刃器の中には、69番のように剥片を折断して大きさの調整が行われたものがある。何れの刃器も使用痕が認められ、刃こぼれが目立つ。これらは長期にわたって使用されたものではなく、使用が進むと廃棄された不定形刃器である。

### (3) 各種剥片－石核調整剥片、失敗剥片、折断片、押圧剥離片 (表3-3)

石器製作時には、各種剥片が多量に生じる。本遺跡での剥片収納は、S I 8等遺構出土のものに限ら

れており、調査区全体には及んでいない。ここでは、限られた剥片資料を用いた分析である。剥片の中で注意されるのは、図版 20 写真 19 の加熱痕跡が認められる剥片である。加熱処理については、同図版写真 19 の説明で触れる。加熱処理は、硬質石材の加工を容易にするための技術で、御堂島正氏が取り上げて以来、その技術の痕跡が追求されている（御堂島正 1993）。ここでは、剥片石器製作の工程の中で加熱処理が行われたのは、石核製作前を想定している。石核として調整される前の粗割された素材は、加熱処理が行われるに相応しい階梯と考えられる。

図版 20 写真 19：E 1 出土のチャート剥片である。何れも、剥離面は滑らかで光沢がある。また、中の 2 つはリング等が不鮮明である。こうした剥片に見られる特徴は、加熱処理の痕跡と認められる。加熱処理とは、剥離に関する性質を改善する方法で、特に、硬質石材を加工する際に使われた技術である。「剥離の容易化は加工が困難であった石材による石器製作を可能又は容易にするとともに、微細な加工も可能になり、手の込んだ石器や石製品を生み出す技術的基盤となった」（御堂島正 2022）としている。ここでとりあげたチャート剥片は、加熱痕と認識できるもので、また、表 1 に掲載したチャート石核にも、加熱痕の認められるものが複数観察されている。硬質石材であるチャートを用いた石器製作には、加工の容易化は不可欠の技術であった。

#### 4 工房跡の復元と剥片石器の製作（表 4）

##### (1) 工房跡の復元

表 4 は、遺構とグリッド別の石核、原石、各種未製品、目的剥片等の出土個数である。S I 8 は、石核が 32 個（チャート 31 個、黒曜石 1 個）と集中する。また、この遺構からは多量の剥片が出土している。図版 19 写真 5 で説明したが、剥片には石核を作る過程で生じた石核調整剥片、石核から目的剥片をとる際に生じた失敗剥片、目的剥片の形を調整した折断破片等があり、この遺構が、工房跡の中心遺構であったと捉えられる。S I 8 が営まれた G 3・H 3 グリッド、これに隣接する F 2・G 2 グリッドから出土する石核総数は 85 個で、遺跡出土の 47.8% である。また、出土した黒曜石原石の内、これらのグリッドから 5 個出土している。S I 8 を中心に周囲のグリッドである F 2・F 3・G 2・G 3 グリッドが、工房跡であったと捉えられる。

次に、工房を営むに当たって必要な要件をあげて、工房跡復元の資料としたい。

○ S I 8 は柱穴を持った遺構であるが、これは住居遺構ではなく工房遺構として捉える必要がある。特に、(3) の製作工程で示す③と④は細かな作業工程であり、手元の明るさが不可欠である。それには、屋根や壁で塞いだ堅穴住居では作業に支障があり、上屋や壁面には外光を十分に取り入れる必要がある。

○ 工房では、種々の剥片が生じる。剥片には、先の尖ったもの、鋭利な剥離面があるものなど放っておくと思わぬ事故の原因となる。このため、剥片の整理・片付けは不可欠で、石器製作遺跡では剥片廃棄用の遺構が設けられる。178 個もの石核が出土した本遺跡では、工房跡近くにそうした施設が用意される必要がある。

○ 石器製作には、種々の道具が必要である。原石の粗割、剥片採取には大小のハンマー（石製）、目的剥片の加工には、諸種の加工具（鹿角や骨器）が必要である。工房跡では、こうした加工具が用意さ

れ、破損などに伴い適宜補充される必要があった。下平遺跡では、ハンマーの交換が用意周到で、破損したハンマーで石質の良いものは、チャート原石として再利用された事例が確認されている（田部井功 2023）。本遺跡では、原石の中にハンマーとして把握できる資料は把握されていない。

○硬質石材であるチャートや頁岩の剥離には加熱処理が行なわれたことが、石核や剥片の観察から確認されている。実験では、「比較的低温で加熱し、常温に戻った後に剥離すると、非加熱では剥離が困難であったものが強い力を要することなく薄く長い剥片を剥離できるようになった」との結果が報告されている（御堂島正 2022）。比較的低温とは、500 度C以下で、これは、火に石材を直接当てないなど工夫を要する。加熱処理には、窯等の高温を維持する設備は不要である。灰を蓄えることの出来る施設で、雨などに晒されずに長時間の保温が出来れば、加熱処理の施設とすることができる。

## (2) 工房跡の貯蔵

工房跡出土の石核は 85 個、多くが使用の進んだ残核であるが、93～96 番は、剥片が取られずに石核の原形として工房跡に残されたものである。図版 19 写真 6 で説明した出土区不明の 172 番は、本遺跡で出土した最も大形の石核で、石核調整が行なわれており何時でも使用できる石核である。工房跡を含めて調査区では、使用途中のもの、使用されていないものが相当数あり、これらは使用に備えて貯蔵された石核と捉えることができる。S I 8 では、大形の刃器用目的剥片（38～44 番）が出土している。この内、38～42 番は、剥片を接合すると原石である円礫となる。（図版 20 写真 15）円礫は石核調整されず、そのまま剥片供給材として使われた。図版 20 写真 15 で示すように、1～5 の剥片が剥がされた。これらは、2 次加工が施されていないが、鋭い剥離面を有した刃器用目的剥片で、S I 8 から纏まりを持って出土した。出土の状態、剥片の持つ性質から、使用に備えて貯蔵されたものと考えてよい。これらの貯蔵痕跡の把握は、工房跡復元の補完資料である。

## (3) 剥片石器の製作工程

出土した石核、剥片石器未製品、各種剥片等から、上北浦遺跡での石器製作の様子を各工程に分けて復元することができる。

河道でチャート材を選別して採取する。良質のチャート材は稀少で、材質を見極めて行う採取は、石器作りの大切な活動であった。本遺跡では、荒川中流域（寄居～熊谷間）で採取された円礫が使用されている。採取円礫については質の良いものが多く、吟味して採取活動が行われたことが分かる。

選別されて運ばれたチャート材は、石材の粗割が行われ、粗割りされた大小の石材は、各種石核に加工される。石核調整では、石核調整剥片が生じる。この剥片には大小いろいろあり、中には原石表皮が残されたものがある。図版 19 写真 5 がこれに相当する。

石核から諸種の目的剥片が剥がされる。石核の形状に応じていろいろな目的剥片がとられたが、その際、目的剥片にならない失敗剥片が生じた。失敗剥片は、剥片の厚さや形状等で分別された。失敗剥片の大凡の割合は約 2 割で、図版 19 写真 6 下段右端の中形石核において、目的剥片が得られる割合を試算した。

目的剥片を加工して諸種の剥片石器を作成する。目的剥片は、形や大きさを揃えるために剥片の折断が行われる。この時生じた折断片が、図版 20 写真 20 である。形が整えられた剥片は、各種石器に加工される。ここで生じる剥片は、大小様々な押圧剥離片である。また、剥片石器には、細かな加工に伴う

欠損がつきもので、これは未製品とされて廃棄されている。

本遺跡出土のチャート石核は、多数が 15 g 以下になるまで使用されている。これらの殆どは、これ以上剥片をとることができない残核である。残核の中には、刃器や石錐の素材となったものもある。良質石材は残核後にも活用されており、徹底した資源管理の様子を見ることができる。

これらの工程で生じた剥片の中で注意されるのは、図版 20 写真 19 の加熱痕跡が認められる剥片である。加熱処理は、硬質石材の加工を容易にするための技術で、御堂島正氏に取り上げて以来、その技術の痕跡が追求されている（御堂島正 1993）。ここでは、剥片石器製作の 5 つの工程の中で加熱処理が行われたのは、②の工程を想定している。石核として調整される前の粗割された素材は、加熱処理が行われるに相応しい階梯と考えられる。

### 引用・参考文献

- 田部井功 2023 『秩父合角ダム水没地域埋蔵文化財発掘調査報告書③ 下平遺跡 石器編』 小鹿野町教育委員会
- 小林 茂 1995 『秩父合角ダム水没地域埋蔵文化財発掘調査報告書 塚越向山遺跡』 合角ダム水没地域総合調査会
- 深田芳行 2023 「1号溝出土の石器と剥片」『秩父合角ダム水没地域埋蔵文化財発掘調査報告書③ 下平遺跡 石器編』 小鹿野町教育委員会
- 御堂島正 1993 「加熱処理による石器製作—日本国内の事例と実験的研究—」『考古学雑誌』79-1 日本考古学会
- 御堂島正 2022 「珪質頁岩の加熱処理—剥離の性質の改善に関する実験研究」『古代』第 149 号 早稲田大学考古学会

表 1 上北浦遺跡出土の石核（チャート・頁岩・黒曜石）  
 《凡例》 ・◎残核ないし残核に近い石核

・小形：50 g 未満、中形：50 g～199 g、大形：200 g 以上

番	石 材	重量 (g)	形 態	遺構・出土区	備 考
1	チャート	5	小形 板状	D 1	打面複数、小形剥片剥離 ◎
2	チャート	6	小形 板状	D 1	打面複数、小形剥片剥離、ポットリッド状剥離痕 ◎
3	チャート	8	小形 角柱状	D 1	打面複数、小形剥片剥離、表皮残 ◎
4	チャート	13	小形 角柱状	D 1	打面複数、小形剥片剥離、加熱痕跡、表皮残 ◎
5	チャート	131	中形 角柱状	D 2	表皮には摩滅痕あり、原石は河原で採取
6	チャート	19	小形 板状	D 3	小形（幅 2 cm）剥片剥離、加熱痕跡、良質石材
7	チャート	26	小形 板状	D 3	打面複数、小形剥片剥離
8	チャート	28	小形 板状	D 3	板状片面に表皮
9	チャート	48	小形 板状	D 3	打面複数、小形（幅 2 cm）剥片剥離
10	チャート	5	小形 板状	D	小形（幅 1 cm）剥片剥離、良質石材 ◎
11	チャート	6	小形 板状	D	打面複数 ◎
12	チャート	8	小形 板状	D	柱状片面に表皮 ◎
13	チャート	9	小形 板状	D	小形（幅 2 cm）剥片剥離 ◎
14	チャート	10	小形 角柱状	D	打面複数、小形（幅 1 cm）剥片剥離 ◎
15	チャート	12	小形 角錐状	D	打面複数、小形（幅 1 cm）剥片剥離
16	チャート	13	小形 板状	D	打面複数、小形（幅 1 cm）剥片剥離
17	チャート	15	小形 角錐状	D	打面複数、小形剥片剥離
18	チャート	21	小形 板状	D	小形（幅 2 cm）剥片剥離
19	チャート	8	小形 角柱状	E 1	打面複数、小形（幅 1 cm）剥片剥離 ◎
20	チャート	8	小形 板状	E 1	中形剥片の可能性あり ◎
21	チャート	9	小形 角錐状	E 1	打面複数、小形剥片剥離 ◎
22	チャート	10	小形 板状	E 1	小形剥片剥離、板状片面は表皮 ◎
23	チャート	11	小形 板状	E 1	小形剥片剥離、板状片面に表皮 ◎
24	チャート	14	小形 板状	E 1	小形剥片剥離 ◎
25	チャート	21	小形 板状	E 1	板状両面が表皮
26	チャート	25	小形 板状	E 1	小形（幅 2 cm 以上）剥片剥離
27	チャート	31	小形 角柱状	E 1	打面は柱状片側、小形（幅 2 cm）剥片剥離
28	チャート	43	小形 角錐状	E 1	打面複数、角錐頭部は表皮

番	石 材	重量 (g)	形 態	遺構・出土区	備 考
29	チャート	14	小形 角錐状	E 2	打面複数、小形剥片剥離 ◎
30	チャート	25	小形 角柱状	E 2	打面複数
31	チャート	7	小形 角柱状	E 3	幅狭の小形剥片剥離 ◎
32	チャート	7	小形 角柱状	E 3	幅狭の小形剥片剥離 ◎
33	チャート	7	小形 角柱状	E 3	打面複数、小形剥片剥離 ◎
34	チャート	10	小形 角柱状	E 3	打面複数、小形剥片剥離 ◎
35	チャート	13	小形 角柱状	E 3	打面複数、小形剥片剥離 ◎
36	チャート	18	小形 角柱状	E 3	打面複数、小形剥片剥離
37	チャート	22	小形 角柱状	E 3	打面複数、小形剥片剥離、表皮あり
38	チャート	23	小形 角錐状	E 3	打面複数、表皮面が打面
39	チャート	23	小形 板状	E 3	板状石核の両面が表皮
40	チャート	25	小形 板状	E 3	打面複数、小形(幅2cm)剥片剥離
41	チャート	26	小形 角錐状	E 3	打面複数、小形剥片剥離、表皮あり
42	チャート	30	小形 角錐状	E 3	打面複数、小形剥片剥離、角錐頭部表皮
43	チャート	3	小形 角柱状	E 4	打面複数、小形(幅1cm)剥片剥離、 ◎
44	チャート	9	小形 角柱状	E 4	打面複数、小形剥片剥離 ◎
45	チャート	23	小形 角錐状	E 4	打面複数、小形(幅1cm)剥片剥離
46	チャート	41	小形 角錐状	E 4	打面複数、材質不良
47	チャート	3	小形 角錐状	F 2	角錐頭部が打面、小形(幅1cm未満)剥片剥離 ◎
48	チャート	5	小形 柱状	F 2	角柱頭部が打面、小形(幅1cm未満)剥片剥離 ◎
49	チャート	6	小形 板状	F 2	打面複数、小形剥片剥離 ◎
50	チャート	7	小形 角錐状	F 2	打面複数、小形剥片剥離 ◎
51	チャート	12	小形 角錐状	F 2	打面複数、小形(幅1cm未満)剥片剥離、表皮残 ◎
52	チャート	12	小形 角錐状	F 2	打面複数、小形剥片剥離 ◎
53	チャート	13	小形 角錐状	F 2	打面複数、小形(幅1cm未満)剥片剥離 ◎
54	チャート	14	小形 角柱状	F 2	打面複数、小形(幅1cm未満)剥片剥離、頭部に表皮 ◎
55	チャート	14	小形 角錐状	F 2	打面複数、小形(幅1cm)剥片剥離、頭部表皮 ◎
56	チャート	18	小形 角錐状	F 2	打面複数、小形剥片剥離 ◎
57	チャート	19	小形 角柱状	F 2	打面は柱状頭部、側面に表皮
58	チャート	22	小形 角錐状	F 2	打面複数
59	チャート	26	小形 角柱状	F 2	両面表皮、扁平な原石が石材
60	頁岩	36	小形 角錐状	F 2	小形(幅2cm)剥片剥離、側面表皮、原石は河原で採取
61	チャート	6	小形 角錐状	F 3	打面複数、小形剥片剥離、角錐頭部表皮 ◎
62	チャート	8	小形 角錐状	F 3	打面複数、小形剥片剥離、角錐頭部表皮 ◎
63	チャート	8	小形 板状	F 3	打面複数、小形剥片剥離 ◎
64	頁岩	10	小形 角錐状	F 3	打面複数、小形剥片剥離 ◎
65	チャート	12	小形 角柱状	F 3	柱状頭部が打面
66	チャート	15	小形 角錐状	F 3	打面複数、小形剥片剥離 ◎
67	チャート	15	小形 角錐状	F 3	節理を利用して石核にする ◎
68	チャート	6	小形 角柱状	F 5	打面複数、小形(幅1cm)剥片剥離、石材良質 ◎
69	チャート	2	小形 角柱状	G 2	柱状の上下面が打面、小形剥片剥離 ◎
70	チャート	4	小形 角柱状	G 2	柱状の上下面が打面、小形剥片剥離 ◎
71	チャート	4	小形 角錐状	G 2	角錐上面が打面、小形剥片剥離 ◎
72	チャート	5	小形 角錐状	G 2	打面複数、小形剥片剥離 ◎
73	チャート	6	小形 角錐状	G 2	打面複数、小形剥片剥離、表皮加熱 ◎
74	チャート	7	小形 角錐状	G 2	角錐上面が打面、小形剥片剥離 ◎
75	チャート	8	小形 角錐状	G 2	角錐上面が打面、小形剥片剥離 ◎
76	チャート	9	小形 角錐状	G 2	角錐上面が打面、小形剥片剥離 ◎
77	チャート	9	小形 角柱状	G 2	柱状上面が打面、小形(幅1cm)剥片剥離 ◎
78	チャート	9	小形 角柱状	G 2	打面複数、小形剥片剥離 ◎
79	チャート	10	小形 角柱状	G 2	柱状の上下面が打面、小形剥片剥離 ◎
80	チャート	10	小形 板状	G 2	打面複数、小形剥片剥離 ◎
81	チャート	10	小形 板状	G 2	打面複数、小形剥片剥離 ◎
82	チャート	12	小形 角錐状	G 2	打面複数、小形剥片剥離 ◎
83	チャート	14	小形 角柱状	G 2	打面複数、小形剥片剥離、表皮加熱 ◎
84	チャート	14	小形 板状	G 2	打面複数、小形(幅1cm)剥片剥離 ◎
85	チャート	14	小形 角錐状	G 2	打面複数、小形剥片剥離 ◎
86	チャート	15	小形 板状	G 2	板状の上下面が打面、小形(幅1cm)剥片剥離 ◎
87	チャート	16	小形 角柱状	G 2	柱状の上下面が打面、小形(幅2cm)剥片剥離 ◎
88	チャート	16	小形 角錐状	G 2	打面複数、小形剥片剥離 ◎
89	チャート	17	小形 角柱状	G 2	柱状の上下面が打面、小形剥片剥離 ◎
90	チャート	17	小形 角錐状	G 2	打面複数、小形剥片剥離 ◎
91	チャート	22	小形 角錐状	G 2	打面複数、小形(幅1cm)剥片剥離 ◎



番	石 材	重量 (g)	形 態	遺構・出土区	備 考
92	チャート	23	小形 角柱状	G 2	打面複数、小形剥片剥離 ◎
93	チャート	30	小形 角柱状	G 2	表皮が周囲に残り、剥片が取られていない 石核の原形
94	チャート	40	小形 板状	G 2	表皮が周囲に残り、剥片が取られていない 石核の原形
95	チャート	42	小形 角柱状	G 2	剥片が取られていない
96	チャート	50	中形 板状	G 2	板状の上下面が打面、小形 (2 cm) 剥片剥離
97	チャート	13	小形 角柱状	S I 6	打面複数、小形剥片剥離 ◎
98	チャート	14	小形 角錐状	S I 6	打面複数、小形剥片剥離 ◎
99	チャート	14	小形 角柱状	S I 6	打面複数、小形剥片剥離 ◎
100	チャート	38	小形 板状	S I 7	打面複数、小形剥片剥離、表皮加熱
101	チャート	38	小形 角柱状	S I 7	打面複数、角柱の上下面が表皮
102	チャート	66	中形 角錐状	S I 7	打面複数、小形 (2 cm) 剥片剥離
103	チャート	4	小形 板状	S I 8	大きな石核から剥がされた痕跡をもつ ◎
104	チャート	7	小形 板状	S I 8	形を整えるため折断して石核調整 ◎
105	チャート	7	小形 角錐状	S I 8	打面複数、小形剥片剥離 ◎
106	チャート	8	小形 角錐状	S I 8	打面を動かして小形剥片剥離 ◎
107	チャート	8	小形 角柱状	S I 8	打面複数、小形剥片剥離 ◎
108	チャート	8	小形 角柱状	S I 8	打面複数、小形剥片剥離 ◎
109	チャート	8	小形 角錐状	S I 8	打面を動かして小形剥片剥離、錐状面が打面 ◎
110	チャート	10	小形 角錐状	S I 8	打面複数、小形剥片剥離 ◎
111	チャート	10	小形 角錐状	S I 8	打面複数、小形剥片剥離 ◎
112	チャート	11	小形 角柱状	S I 8	打面複数、小形剥片剥離 ◎
113	チャート	13	小形 角錐状	S I 8	打面複数、小形剥片剥離 ◎
114	チャート	15	小形 角錐状	S I 8	打面複数、小形剥片剥離 ◎
115	チャート	17	小形 角柱状	S I 8	打面を動かして小形剥片剥離 ◎
116	チャート	17	小形 板状	S I 8	板状石核両面から小形剥片剥離 ◎
117	チャート	8	小形 角柱状	S I 8	打面は角柱石核の上下面 ◎
118	チャート	10	小形 角柱状	S I 8	打面は角柱石核の上下面、側面に表皮 ◎
119	チャート	10	小形 角柱状	S I 8	打面は角柱石核上面、縦長の小形剥片剥離 ◎
120	チャート	12	小形 角錐状	S I 8	打面を動かし角錐上下面から小形剥片剥離 ◎
121	チャート	12	小形 角柱状	S I 8	打面を動かし角柱上下面から小形剥片剥離 ◎
122	チャート	13	小形 角錐状	S I 8	打面は角錐石核上下面 ◎
123	チャート	16	小形 角錐状	S I 8	打面複数、小形剥片剥離 ◎
124	チャート	17	小形 角錐状	S I 8	打面を動かして小形剥片剥離 ◎
125	チャート	18	小形 角錐状	S I 8	打面を動かして小形剥片剥離 ◎
126	チャート	18	小形 板状	S I 8	板状石核の上下は表皮、打面は表皮 ◎
127	チャート	19	小形 角柱状	S I 8	打面複数、小形剥片剥離
128	チャート	21	小形 角柱状	S I 8	打面複数、小形剥片剥離
129	チャート	22	小形 角錐状	S I 8	打面は錐部、小形剥片剥離
130	チャート	23	小形 角錐状	S I 8	打面は錐部、小形剥片剥離
131	チャート	23	小形 角錐状	S I 8	打面は錐部、小形剥片剥離
132	チャート	28	剥片状	S I 8	打面複数、大形剥片を石核にする
133	チャート	45	小形 角柱状	S I 8	角柱石核の上下面が打面
134	チャート	14	小形 角錐状	S I 9	主な打面は角錐部、小形剥片剥離 ◎
135	チャート	11	小形 角柱状	S I 4	打面を動かして剥離、小形剥片剥離 ◎
136	チャート	11	小形 角錐状	S I 4	打面複数、小形剥片剥離 ◎
137	チャート	17	小形 角柱状	S I 1	角柱上部が打面、小形剥片剥離
138	チャート	19	小形 角柱状	S I 1	打面複数、小形剥片剥離
139	チャート	21	小形 剥片状	S I 1	大形剥片を石核にする 打面複数、小形剥片剥離
140	チャート	29	小形 角柱状	S I 1	角柱石核の上下面が打面、幅 1 cm 長さ 3 cm の剥片が剥がされる
141	チャート	30	小形 角錐状	S I 1	打面複数、小形剥片剥離
142	チャート	30	小形 角錐状	S I 1	打面複数、小形剥片剥離
143	チャート	35	小形 角錐状	S I 1	主な打面は角錐部
144	チャート	51	中形 角錐状	S I 3	打面複数、小形剥片剥離
145	チャート	10	小形 角錐状	S K 4	打面複数、小形 (幅 1 cm) 剥片剥離 ◎
146	チャート	4	小形 角柱状		角柱上下面が打面、小形剥片剥離 ◎
147	チャート	6	小形 角柱状		打面複数、小形剥片剥離 ◎
148	チャート	18	小形 角錐状		打面複数、小形剥片剥離 ◎
149	チャート	26	小形 角錐状		打面複数、小形剥片剥離
150	チャート	11	小形 角柱状		打面複数、小形剥片剥離 ◎
151	チャート	13	小形 剥片状		剥片を石核にする ◎
152	チャート	20	小形 角柱状		角柱上下面が打面、小形剥片剥離、石材良質
153	チャート	4	小形 角錐状		主な打面角錐部 ◎
154	チャート	4	小形 剥片状		剥片を石核にする ◎

番	石 材	重量 (g)	形 態	遺構・出土区	備 考
155	チャート	8	小形 角柱状		角柱上下面が打面、小形剥片剥離 ◎
156	チャート	9	小形 角錐状		主な打面角錐部 ◎
157	チャート	7	小形 角柱状		角柱上下面が打面、小形(幅1cm)剥片剥離 ◎
158	チャート	8	小形 角柱状		打面複数、小形剥片剥離 ◎
159	チャート	9	小形 角錐状		主な打面角錐部 ◎
160	チャート	11	小形 角錐状		打面複数、小形剥片剥離 ◎
161	チャート	13	小形 角柱状		打面複数、小形剥片剥離、石材良質 ◎
162	チャート	16	小形 角錐状		打面複数、小形剥片剥離
163	チャート	17	小形 角柱状		打面複数、小形(幅1cm)剥片剥離
164	チャート	23	小形 角錐状		主な打面角錐部
165	チャート	25	小形 角錐状		打面複数、小形剥片剥離
166	チャート	27	小形 角柱状		角柱上下面が打面
167	チャート	14	小形 角錐状		角錐上面が打面、小形剥片剥離 ◎
168	チャート	15	小形 板状		打面が失われるまで使用 ◎
169	チャート	25	小形 角柱状		打面複数、縦長剥片等種々の剥片が剥がされる
170	チャート	32	小形 角柱状		角柱上面が打面
171	チャート	40	小形 角柱状		材質不良で廃棄
172	チャート	99	中形 角柱状		調整された石核で未使用、中形石核の本来の大きさ
173	黒曜石	5.7	小形 角錐状	S I 5	小形の剥片剥離 ◎
174	黒曜石	10.6	小形 角柱状	S I 5	◎
175	黒曜石	9.2	小形 角柱状	S I 8	角柱側面に古い剥離 ◎
176	黒曜石	6.2		E 3	側面に打面 ◎
177	黒曜石	15.5	小形 板状	F 3	側面に打面
178	黒曜石	39	小形 角錐状	F 3	角錐の柱状部を打面とし、比較的大きな剥片をとる

表2 上北浦遺跡出土の黒曜石原石

番	石 材	重量 (g)	最大厚 (mm)	遺構・出土区	備 考
1	黒曜石	6.6	15	S I 5	小形原石 剥離面あり
2	黒曜石	17.1		S I 5	小形原石 不純物混入
3	黒曜石	4.6	7	S I 6	小形原石 周囲は表皮
4	黒曜石	13.8		C 7	不純物が筋状に入る 利用されずに廃棄
5	黒曜石	8.7		E 2	不純物が筋状に入る 利用されずに廃棄
6	黒曜石	27.1		E 3	周囲が表皮 古い剥離面
7	黒曜石	65.8		E 3	こぶし大の原石 周囲は表皮 遺跡では最大
8	黒曜石	27.9		E 2	小形原石
9	黒曜石	7.6	10	D 2	薄手の小形原石 筋状の不純物
10	黒曜石	17.2		F 2	小形原石 筋状の不純物 利用されずに廃棄
11	黒曜石	3.1		F 3	小形原石 表皮に気泡 質が悪く利用できない
12	黒曜石	9.5	5	F 3	小形薄手の原石
13	黒曜石	9.3		G 2	小形原石 周囲に表皮
14	黒曜石	45.3	10	G 2	薄手の板状の原石 折断面を持つ
15	黒曜石	9.9	15	G 4	小形薄手の原石 石の質をみる剥離あり
16	黒曜石	10.2		G 4	小形原石
17	黒曜石	10.9		G 4	小形原石
18	黒曜石	6.6			小形原石、材質不良のため使用されず

表3-1 目的剥片、石鏃未製品、石槍未製品

番	石 材	重量 g	種 別	遺構・出土区	備 考
1	チャート	4.5	石鏃未製品	E 1	石鏃形態を作るが、体部と基部が未成形
2	チャート	4.9	石鏃用目的剥片	E 1	折断痕あり、石鏃用に形を整える
3	チャート	6.1	石鏃用目的剥片	E 1	折断痕3か所、石鏃用に形を整える
4	チャート	4.4	石鏃未製品	S I 6	先端から側面にかけて押圧剥離
5	頁岩	40	石槍未製品	S I 4	石槍形態は作られるが、細かな調整は未実施
6	チャート	4.6	石鏃未製品	S I 9	石鏃形態は作られるが、細かな調整は未実施
7	頁岩	17.7	石槍未製品	S I 10	石槍形態は作られるが、細かな調整は未実施
8	頁岩	16.2	石槍未製品		石槍形態は作られるが、細かな調整は未実施
9	チャート	2	石鏃未製品		短茎深挾形態、先端部欠損で廃棄
10	チャート	2.7	石鏃用目的剥片		石鏃用材とするため折断痕あり
11	チャート	2.7	石鏃用目的剥片		
12	チャート	2.9	石鏃用目的剥片		剥片獲得時の打痕、バルブ
13	チャート	3.4	石鏃用目的剥片		
14	チャート	4.2	石鏃用目的剥片		
15	チャート	8.2	石鏃用目的剥片		
16	チャート	16.1	石鏃用目的剥片		大形剥片を折断、石鏃用の目的剥片とする
17	頁岩	19.6	石槍用目的剥片		大形剥片を折断、石槍用の目的剥片とする
18	チャート	0.7	石鏃未製品		小形有茎石鏃、先端部欠損で廃棄
19	チャート	2.4	石鏃用目的剥片		剥片獲得時の打痕、バルブ
20	チャート	3.2	石鏃用目的剥片		
21	チャート	3.9	石鏃用目的剥片		石鏃用材とするための折断痕2か所
22	頁岩	26.2	石槍用目的剥片		厚みを有する縦長剥片
23	頁岩	26.6	石槍用目的剥片		厚みを有する大形剥片
24	黒曜石	0.9	有茎石鏃	S I 6	先端と基部が加工途中
25	黒曜石	0.5		S I 7	体部欠損で放棄
26	黒曜石	4	有茎石鏃	E 1	先端部欠損、厚さが減じられない
27	黒曜石	1	有茎石鏃	F 5	製作途中
28	黒曜石	1.5	有茎石鏃		左右不均衡、放棄

表3-2 目的剥片、刃器、刃器未製品、石鏃未製品等

番	石 材	重量 g	種 別	遺構・出土区	備 考
1	頁岩	11.1	刃器用目的剥片	D 2	剥片の一面は表皮、打面の対面は鋭い剥離面
2	頁岩	12.6	刃器用目的剥片	D 2	打面とバルブが観察される 剥片は厚みがある
3	頁岩	17.1	刃器用目的剥片	D 2	打面とバルブが観察される 縦長剥片で折断痕あり
4	頁岩	27.6	刃器用目的剥片	D 2	打面とバルブが観察される 三角形で厚みを有する
5	頁岩	37.2	刃器用目的剥片	D 2	打面とバルブが観察される こぶし大の円礫が原石
6	頁岩	42.3	刃器用目的剥片	D 2	バルブと剥片の縁辺には2次加工痕が観察される
7	頁岩	42.9	刃器用目的剥片	D 2	剥片の一面は表皮
8	頁岩	45.2	刃器用目的剥片	D 2	剥片の一面は表皮
9	頁岩	51.2	刃器用目的剥片	D 2	打面とバルブが観察される 原石は円礫
10	頁岩	51.4	刃器用目的剥片	D 2	原石はこぶし大の円礫
11	頁岩	64.1	刃器用目的剥片	D 2	打面とバルブが観察される 剥片の縁辺に粗い加工がある
12	チャート	1.6	不定形刃器	D	折断痕あり、鋭い剥離面に押圧剥離で刃部を付ける
13	チャート	3.8	不定形刃器	D	縦長剥片を折断、剥片の側縁を刃部とする 使用痕あり
14	頁岩	17.1	刃器用目的剥片	F 2	剥片の一面は表皮
15	頁岩	29.1	刃器用目的剥片	F 2	打面とバルブが観察される
16	頁岩	7.2	刃器用目的剥片	E 2	打面とバルブが観察される
17	チャート	9.4	不定形刃器	E 2	鋭い剥離面を刃部として使用、使用痕が観察できる
18	頁岩	36.5	刃器用目的剥片	E 2	打面とバルブが観察される、剥片は厚みを有する
19	チャート	2.5	不定形刃器	E 3	剥離面に使用痕が観察できる
20	チャート	2.7	刃器用目的剥片	E 3	
21	チャート	4.9	刃器用目的剥片	F 5	
22	頁岩	7	石鏃用目的剥片	F 5	尖った剥離面を石鏃用とする
23	頁岩	21.3	刃器用目的剥片	F 5	打面とバルブが観察される
24	チャート	5.3	石鏃用目的剥片	S I 5	
25	チャート	3	不定形刃器	S I 5	刃器として使用、刃こぼれが見られる
26	頁岩	22.2	刃器未製品	S I 5	打面を除き周囲に粗い刃がつけられる
27	頁岩	3.8	不定形刃器	S I 5	剥片の端部を刃器とする
28	頁岩	4.9	不定形刃器	S I 5	打面とバルブが観察される 形と大きさを折断で調整
29	頁岩	8.7	不定形刃器	S I 5	打面とバルブが観察される 鋭利な剥離面を刃部とする

番	石 材	重量 g	種 別	遺構・出土区	備 考
30	頁岩	13	刃器用目的剥片	S I 5	打面とバルブが観察される
31	頁岩	13.1	刃器用目的剥片	S I 5	鋭利な剥離面を刃部に活用する
32	頁岩	24	刃器用目的剥片	S I 5	横長剥片を折断して大きさの調整を行う
33	頁岩	15	刃器用目的剥片	S I 5	鋭利な剥離を刃部にしようとする
34	チャート	26.8	刃器用目的剥片	S I 5	打面とバルブを観察 横長剥片を折断して大きさの調整
35	頁岩	16.4	不定形刃器	S I 7	切り出し形の刃器
36	頁岩	26.9	刃器用目的剥片	S I 7	
37	頁岩	71.1	刃器	S I 7	鋭利な面に粗い刃をつける
38	頁岩	87.4	刃器用目的剥片	S I 8	38～42は同一母岩、番号順に剥がされる
39	頁岩	76.6	刃器用目的剥片	S I 8	
40	頁岩	36.8	刃器用目的剥片	S I 8	
41	頁岩	56.2	刃器用目的剥片	S I 8	
42	頁岩	20.9	刃器用目的剥片	S I 8	
43	頁岩	19.3	剥片	S I 8	43、44は同一石材
44	頁岩	58.4	剥片	S I 8	
45	頁岩	5.1	不定形刃器	S I 9	原石から剥がされた薄手の剥片、打面対面が刃部
46	頁岩	7	刃器用目的剥片	S I 9	大きさを整えるために折断されている
47	頁岩	37.1	刃器用目的剥片	S I 9	
48	チャート	6.6	剥片刃器	S I 4	使用による刃こぼれあり
49	頁岩	15	不定形刃器		鋭利な剥離面を刃部に活用する
50	チャート	3	刃器用目的剥片		鋭い剥離面を刃部にする
51	チャート	3.3	刃器用目的剥片		縦長剥片、鋭い剥離面を刃部にする
52	頁岩	8.1	刃器用目的剥片		打面とバルブが観察される 鋭い剥離面を刃部にする
53	チャート	3.5	石錐用目的剥片		尖った剥離面を活用する
54	チャート	14.3	刃器用目的剥片		小形円礫の周囲を加工して刃器用とする
55	チャート	15.5	石錐未製品		鋭い先端を有する
56	頁岩	20.5	不定形刃器		大きさを調整するため2面に折断痕
57	頁岩	23.4	石錐未製品		粗い剥離を行って石錐の刃部をつくる
58	チャート	31.5	刃器用目的剥片		大きさを調整するため3か所に折断痕
59	チャート	2.1	刃器未製品		石さじの柄部を作るための折断痕が見える
60	頁岩	7.9	刃器未製品		石さじの柄部を作るための折断痕が見える
61	頁岩	9.1	不定形刃器		鋭い剥離面を刃部とする 使用痕が観察できる
62	頁岩	10.1	刃器用目的剥片		
63	頁岩	14	不定形刃器		縦長剥片の側面を刃部とする 使用痕が観察できる
64	頁岩	5.4	不定形刃器		角柱状残核
65	チャート	10.6	不定形刃器		使用痕あり
66	頁岩	36.8	不定形刃器		角柱状残核
67	硬砂岩	78.5	打製石斧未製品		刃部近くで破損
68	黒曜石	2	不定形刃器	S I 6	鋭い剥離面の先端を刃部とする 使用痕あり
69	黒曜石	8.5	不定形刃器	F 2	剥片を折断して片面を刃部にする
70	黒曜石	5.1	不定形刃器	F 3	縦長剥片の先端を刃部
71	黒曜石	3.6	不定形刃器	G 4	縦長剥片の先端と側縁を刃部
72	黒曜石	3.7	不定形刃器	G 4	剥片の先端と側縁を刃部
73	黒曜石	1.5	不定形刃器		鋭い剥離面を刃器として使用、使用痕が観察できる

表3-3 各種剥片

番	石 材	重量 g	種 別	遺構・出土区	備 考
1	チャート	0.8	剥片	E 1	剥離痕が滑らか、リング不鮮明等加熱痕跡
2	チャート	1.8	剥片	E 1	剥離痕が滑らか、リング不鮮明等加熱痕跡
3	チャート	2.2	剥片	E 1	剥離痕が滑らか、リング不鮮明等加熱痕跡
4	チャート	3.2	剥片	E 1	剥離痕が滑らか、リング不鮮明等加熱痕跡 折断痕
5	頁岩	21.7	剥片	E 1	加熱痕跡、橙赤色に変色
6	チャート		石核調整剥片	S I 8	石核製作時の調整剥片、大小102個
7	頁岩		剥片	S I 8	頁岩剥片7個
8	チャート		折断片	S I 8	チャート剥片の折断片32個、折断されたくず片
9	チャート		折断片	S I 9	チャート剥片の折断片6個
10	チャート		折断片		チャート剥片の折断片14個、2次加工の押圧剥離片19個
11	チャート		失敗剥片		チャート目的剥片剥離時の失敗剥片60個
12	頁岩		失敗剥片		頁岩目的剥片剥離時の失敗剥片5個

表4 石核・原石・剥片石器等出土数

1 グリッド別

D1				E1			
	チャート	頁岩	黒曜石		チャート	頁岩	黒曜石
石核	4			石核	10		
石鏃				石鏃	1		1
石槍				石槍			
刃器				刃器			
石錐				石錐	1		
目的剥片				目的剥片	2		
原石				原石			

《凡例》

- ・石鏃、石槍、刃器、石錐は未製品を含む。
- ・目的剥片は剥片石器の目的剥片数。
- ・出土区不明は出土地点記載のない資料。
- ・原石を把握できたのは黒曜石のみ。
- ・1には2を含めない。

D2				E2				F2				G2			
	チャート	頁岩	黒曜石		チャート	頁岩	黒曜石		チャート	頁岩	黒曜石		チャート	頁岩	黒曜石
石核	1			石核	2			石核	14	1		石核	28		
石鏃	1			石鏃		1		石鏃	3		1	石鏃	4	2	
石槍				石槍				石槍				石槍			
刃器				刃器	1			刃器			1	刃器	2		
石錐				石錐				石錐				石錐	1		
目的剥片		11		目的剥片		2		目的剥片		2		目的剥片			
原石			1	原石			2	原石			1	原石			2

D3				E3				F3				G3			
	チャート	頁岩	黒曜石		チャート	頁岩	黒曜石		チャート	頁岩	黒曜石		チャート	頁岩	黒曜石
石核	4			石核	12		1	石核	7	1	2	石核			
石鏃		4		石鏃		2		石鏃	2		3	石鏃	1		
石槍				石槍				石槍				石槍			
刃器				刃器	1			刃器			1	刃器			
石錐				石錐				石錐				石錐			
目的剥片				目的剥片	1			目的剥片				目的剥片			
原石				原石			2	原石			2	原石			

E4				F4				G4			
	チャート	頁岩	黒曜石		チャート	頁岩	黒曜石		チャート	頁岩	黒曜石
石核	4			石核				石核			
石鏃				石鏃			2	石鏃			2
石槍				石槍				石槍			
刃器				刃器				刃器			2
石錐				石錐				石錐			
目的剥片				目的剥片				目的剥片			
原石				原石				原石			3

出土区不明				F5			
	チャート	頁岩	黒曜石		チャート	頁岩	黒曜石
石核	27			石核	1		
石鏃	2		3	石鏃			1
石槍		3		石槍			
刃器	2	6	1	刃器			
石錐		1		石錐			
目的剥片	13	5		目的剥片		2	
原石				原石			

2 遺構別 (所在グリッド)

第1号竪穴建物跡 [S11] (F5)				第2号竪穴建物跡 [S12] (G4)				第3号竪穴建物跡 [S13] (F4)				第4号竪穴建物跡 [S14] (E1)			
	チャート	頁岩	黒曜石		チャート	頁岩	黒曜石		チャート	頁岩	黒曜石		チャート	頁岩	黒曜石
石核				石核				石核				石核	2		
石鏃	1			石鏃				石鏃		1		石鏃		2	
石槍				石槍		1		石槍				石槍		1	
刃器				刃器				刃器				刃器	1		
石錐				石錐				石錐				石錐			
目的剥片				目的剥片				目的剥片				目的剥片			
原石				原石				原石				原石			

第5号竪穴建物跡 [S15] (F2・F3)				第6号竪穴建物跡 [S16] (F2)				第7号竪穴建物跡 [S17] (D1・D2)				第8号竪穴建物跡 [S18] (G3・H3)			
	チャート	頁岩	黒曜石		チャート	頁岩	黒曜石		チャート	頁岩	黒曜石		チャート	頁岩	黒曜石
石核			2	石核	4			石核	3			石核	31		1
石鏃	3	1		石鏃	4	1	1	石鏃	2		1	石鏃	2	1	
石槍				石槍				石槍				石槍			
刃器		4		刃器			1	刃器		2		刃器		1	
石錐				石錐				石錐				石錐			
目的剥片	2	4		目的剥片				目的剥片		1		目的剥片		10	
原石			2	原石			1	原石				原石			

## 付編 3

### 上北浦遺跡出土の獣骨

茂原 信生（京都大学理学部名誉教授・霊長類研究所所長）

櫻井 秀雄（獨協大学医学部第二解剖学教室）

梶ヶ山真里（（独）国立科学博物館人類研究部）

上北浦遺跡は、埼玉県熊谷市北部の江波地区にある遺跡で、縄文時代後期～晩期に属する遺跡である。遺跡は、利根川支流の自然堤防上にある。2021年から熊谷市教育委員会によって発掘調査が行なわれており、その際に獣骨が出土した。ほとんどが破片で、合計614点ほどある。

頭蓋骨のような板状の骨はひびが入っており、四肢骨にはうろこ状の亀裂が入っているため、焼かれて灰化したものであることが確認できる。獣骨は、すべてが焼かれており、それに焼かれていないトリの骨が数点出土した。

#### (1) 出土した動物骨

哺乳類の2種とトリである。

鳥類

ガン聾科の一種

哺乳類

鯨偶蹄類

ニホンジカ *Cervus nippon*

イノシシ *Sus scrofa*

出土した動物のほとんどはシカとイノシシの骨で、それ以外の哺乳類は見つかっていない。シカの角を利用した人工物（骨角器）は考古学の項でも述べられているように何点かが出土している。シカの角の出土物には、大きなものはなく、骨角器などを作った際の残滓と思われる製作途中のものがある。

なお、ここで「ニホンジカ」や「イノシシ」を用いているのは、この縄文時代のものとしてニホンジカやイノシシと考えて差しつかえないと思われるからである。ブタとの区別はできない。

#### (2) 出土骨について

分析鑑定したものを、遺構別のリストにして簡単に記載する（別表参照）。さほど多い量ではないので、遺跡としての特徴を抽出するのは難しいが、最後に全体の特徴を考えてみたい。

##### 1) イノシシ（写真1・2）

量は少ないが、身体各部の骨がまんべんなく出土している。頭蓋骨では、下顎骨が多い。下顎骨の正中部が、2点出土している。大きさがかなり異なるので、オスとメスカ、あるいは、成獣ともっと若い個体というちがいの可能性がある。F2グリッドからは数点の下顎骨が出土しているが、重複している部位はないので、同一個体の可能性がある。成獣の下顎骨である。他に、S I 6の肩甲骨や脛骨がある。

肩甲骨は、肩甲窩を含めて数点出土している。脛骨は近位部が出土していて、骨端が未化骨なので、まだ若い個体である。S I 7からは、腓骨の遠位部が2点出土しており、両者はかなり大きさが違う。どちらも骨端は癒合していて、成獣と考えていいので、大きさの差はオスとメスの違いの可能性が高い。

下顎骨の関節突起の外側（写真1-4）や、指の基節骨側面にカットマーク様のものが見られる（S I 7-8）。解体時についたものであろう。

## 2) ニホンジカ（写真3）

すべて焼かれており、合計で80点（全体のおよそ13%）ほどである。頭蓋骨も一部、四肢骨などがあるが細片化している。量的には鹿角が最も多い。鹿角は、各遺構からまんべんなく出土している。すべてが破片で、大きな破片はない。鹿角で小さいものは判定しにくいので、実際の鹿角の個数はさらに多いと思われる。これらは加工された残り物、あるいは製作途中で失敗したものが焼かれたと考えられる。

## 3) トリの一種

ガン亜科の左脛足根骨遠位端や、不明の四肢骨片3点が出土している。これらは、それぞれ違う遺構から出土している。焼けていないので混入と思われるが、遺構が異なるなど不明な点がある。

## (3) 全体の特徴

全体で、600点ほどの動物骨が出土している。哺乳類は、ニホンジカとイノシシだけである。トリ以外は、すべて焼かれた骨である。縄文時代の遺跡から最も多く出土しているのは、一般的にはシカとイノシシである。本遺跡の場合も同様であるが、それ以外の動物の骨がトリ以外全く出土していないのは、ひとつの特徴と考えていいだろう。理由は、今のところ不明である。出土量としては、シカの角の破片が多い。四肢骨がそれに次ぎ、頭蓋骨の出土は少ない。四肢骨は、細片化していて同定できないものが多い。鹿角の中には、加工されたと思われるものもある。ガン亜科の一種とされたトリの骨は、焼かれていない。他のトリの骨も焼かれていない。

トリの骨の鑑定では、北海道大学の江田真毅さんのお世話になりました。感謝いたします。

表 上北浦遺跡出土の動物骨リスト

写真No.	出土遺構	分析No.	動物種	左右	骨名	部位
	SI4	1	イノシシ	不明	上顎骨	齒槽部片（3点）
写真1-3	SI4	2	イノシシ	不明	齒	左下M2（咬耗していない）
	SI4	3	イノシシ？	不明	齒	齒根片（3点）
	SI4	4	イノシシ	左	手根骨	果骨？
写真3-3	SI4	5	ニホンジカ	左	下顎骨	下顎骨
写真3-12	SI4	6	ニホンジカ	右	大腿骨	遠位内側部
	SI4	7	ニホンジカ	不明	鹿角	破片3点（加工痕があるもの1点）
	SI5	1	トリ		四肢骨片	（種名不明）
写真1-12	SI5	2	イノシシ	右	頭頂骨	破片
	SI5	3	イノシシ	不明	脛骨	遠位外側部
	SI5	4	イノシシ	右	足根骨	踵骨遠位部（若い個体）
	SI5	5	イノシシ	左	足根骨	第IV足根骨
	SI5	6	ニホンジカ		椎骨	関節突起？（2点）
写真3-5	SI5	7	ニホンジカ		椎骨（頸椎：順位不明）	関節頭
	SI5	8	ニホンジカ	不明	鹿角	破片14点
写真2-2	SI5	9	イノシシ	右	橈骨	近位部
写真1-13	SI6	1	イノシシ		椎骨	胸椎棘突起基部
写真1-2	SI6	2	イノシシ	不明	齒	齒根片

写真No.	出土遺構	分析No.	動物種	左右	骨名	部位
写真2-7	SI6	3	イノシシ	左	肩甲骨	関節窩部
写真2-4	SI6	4	イノシシ	右	尺骨	遠位部 (骨端未化骨：若い個体)
写真3-9	SI6	5	ニホンジカ	右	大腿骨	骨幹遠位内側部
写真3-10	SI6	6	ニホンジカ?	右	大腿骨	骨幹遠位内側部
写真3-11	SI6	7	ニホンジカ	左	大腿骨	骨幹遠位外側部
写真3-13	SI6	8	ニホンジカ	右	足根骨	距骨
	SI6	9	ニホンジカ	不明	鹿角	破片 6 点
写真2-9	SI6	10	イノシシ	右	脛骨	近位部 (骨端未化骨：若い個体)
写真2-6	SI6	11	イノシシ	左	肩甲骨	近位部 (12・13 と同一個体)
写真2-6	SI6	12	イノシシ	左	肩甲骨	前縁部
	SI6	13	イノシシ	不明	肩甲骨	肩甲骨棘部
写真1-8	SI7	1	イノシシ	左右	下顎骨	正中部 (小さい)
写真2-1	SI7	2	イノシシ	右	橈骨	近位部
写真2-5	SI7	3	イノシシ	右	尺骨	遠位骨端
写真2-3	SI7	4	イノシシ	左	尺骨	滑車切痕部
写真2-10	SI7	5	イノシシ	右	腓骨	遠位部
	SI7	6	イノシシ	右	腓骨	遠位部
写真2-15	SI7	7	イノシシ	左	足根骨	中心足根骨
	SI7	8	イノシシ	不明	指骨	基節骨近位部
	SI7	9	イノシシ	左	肋骨	近位部破片
写真3-4	SI7	10	ニホンジカ	不明	歯	破片
写真3-1	SI7	11	ニホンジカ	右	下顎骨	下顎角部 (後縁)
写真3-2	SI7	12	ニホンジカ	左	下顎骨	下顎頭
写真3-7	SI7	13	ニホンジカ	左	肩甲骨	近位部 (関節窩を含む)
写真3-8	SI7	14	ニホンジカ	左	肩甲骨	遠位内側部
写真3-6	SI7	15	ニホンジカ	右	尺骨	滑車切痕を含む近位部 (骨端未化骨：若い個体)
	SI7	16	ニホンジカ	不明	鹿角	破片 22 点 (加工痕があるもの 4 点)
写真1-5	SI7	17	イノシシ	左	下顎骨	臼歯部外側
写真1-1	SI7	18	イノシシ	不明	歯	臼歯歯片
	D1	1	イノシシ	左	第Ⅲ中手骨	近位部
	D1	2	ニホンジカ	左?	大腿骨	遠位部外側
	D2	1	イノシシ	不明	中手骨か中足骨	遠位部
	D2	2	ニホンジカ	不明	鹿角	破片 16 点 (加工痕があるもの 1 点)
写真1-14	E1	1	イノシシ	左	上腕骨	遠位部内側
	E1	2	ニホンジカ	不明	鹿角	破片 3 点
	E1	3	トリ	不明	四肢骨片	種名不明 (2 点)
	E2	1	ニホンジカ	不明	鹿角	破片 2 点
	F2	1	イノシシ		椎骨	椎骨棘突起基部
	F2	2	イノシシ	不明	上顎骨	齒槽骨片 (4 点)
写真1-7	F2	3	イノシシ	左右	下顎骨	正中部 (左右切歯の齒槽あり)
写真1-4	F2	4	イノシシ	右	下顎骨	下顎頭
写真1-6	F2	5	イノシシ	右	下顎骨	下顎体小白歯部
写真1-9	F2	6	イノシシ	左	下顎骨	下顎枝への移行部
写真1-10	F2	7	イノシシ	左	下顎骨	下顎角部
写真1-11	F2	8	イノシシ	左	下顎骨	M3 齒槽部
	F2	9	イノシシ	不明	歯	切歯歯根 (左 I 1: 中切歯)
	F2	10	イノシシ	不明	歯	下顎骨片 (齒槽部: 位置不明) 3 点
	F2	11	イノシシ	左	足根骨	踵骨
写真2-14	F2	12	イノシシ	左	足根骨	距骨
	F2	13	イノシシ	不明	第Ⅱか第Ⅴ中手骨か中足骨	遠位部
	F2	14	ニホンジカ	不明	鹿角	破片 4 点
	F3	1	トリ: ガン亜科の一種	左	足根骨	脛足根骨遠位端 (焼けていない)
	F3	2	イノシシ	不明	下顎骨	臼歯齒槽部
写真2-8	F3	3	イノシシ	左	寛骨	腸骨部
写真2-11	F3	4	イノシシ	左	足根骨	踵骨の距骨関節部
写真2-12	F3	5	イノシシ	右	足根骨	距骨
	F3	6	イノシシ	右	足根骨	距骨 (小さい)
写真2-13	F3	7	イノシシ	左	足根骨	距骨 (小さい)
写真3-14	F3	8	ニホンジカ	不明	中手骨か中足骨	遠位部
	F3	9	ニホンジカ	不明	鹿角	破片 4 点
写真2-16	G2	1	イノシシ	右	足根骨	第Ⅳ足根骨
	G2	2	イノシシ	不明	第Ⅱか第Ⅴ中節骨	完形
	G2	3	イノシシ	不明	指骨	基節骨近位部
	G2	4	イノシシ	不明	指骨	中節骨近位部
	G2	5	ニホンジカ	不明	鹿角	破片 7 点

※上記の表とは別に、動物種別のリストも提出されましたが、紙幅の都合で割愛します。(編者註)



写真1 イノシシ(1)

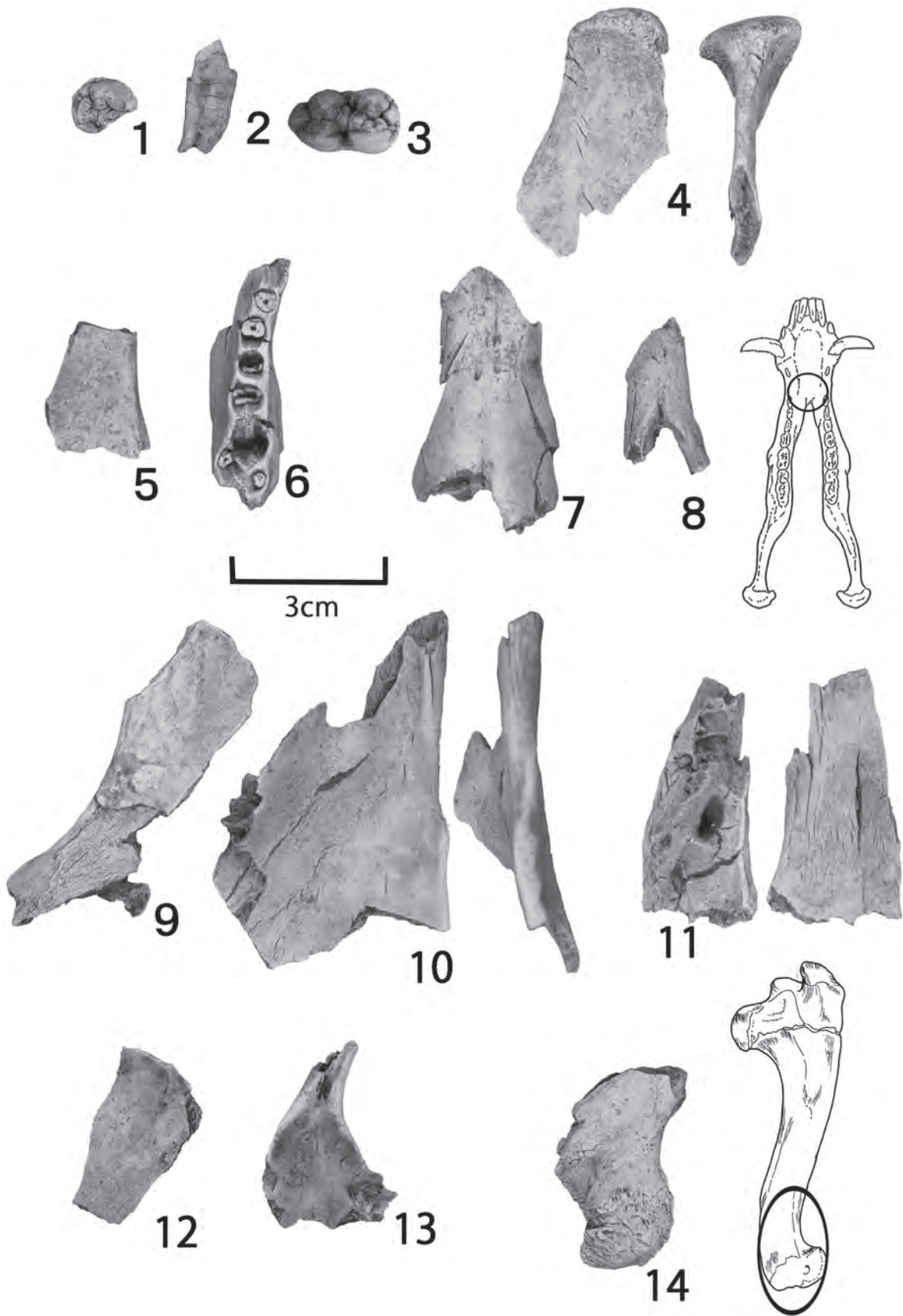


写真2 イノシシ(2)

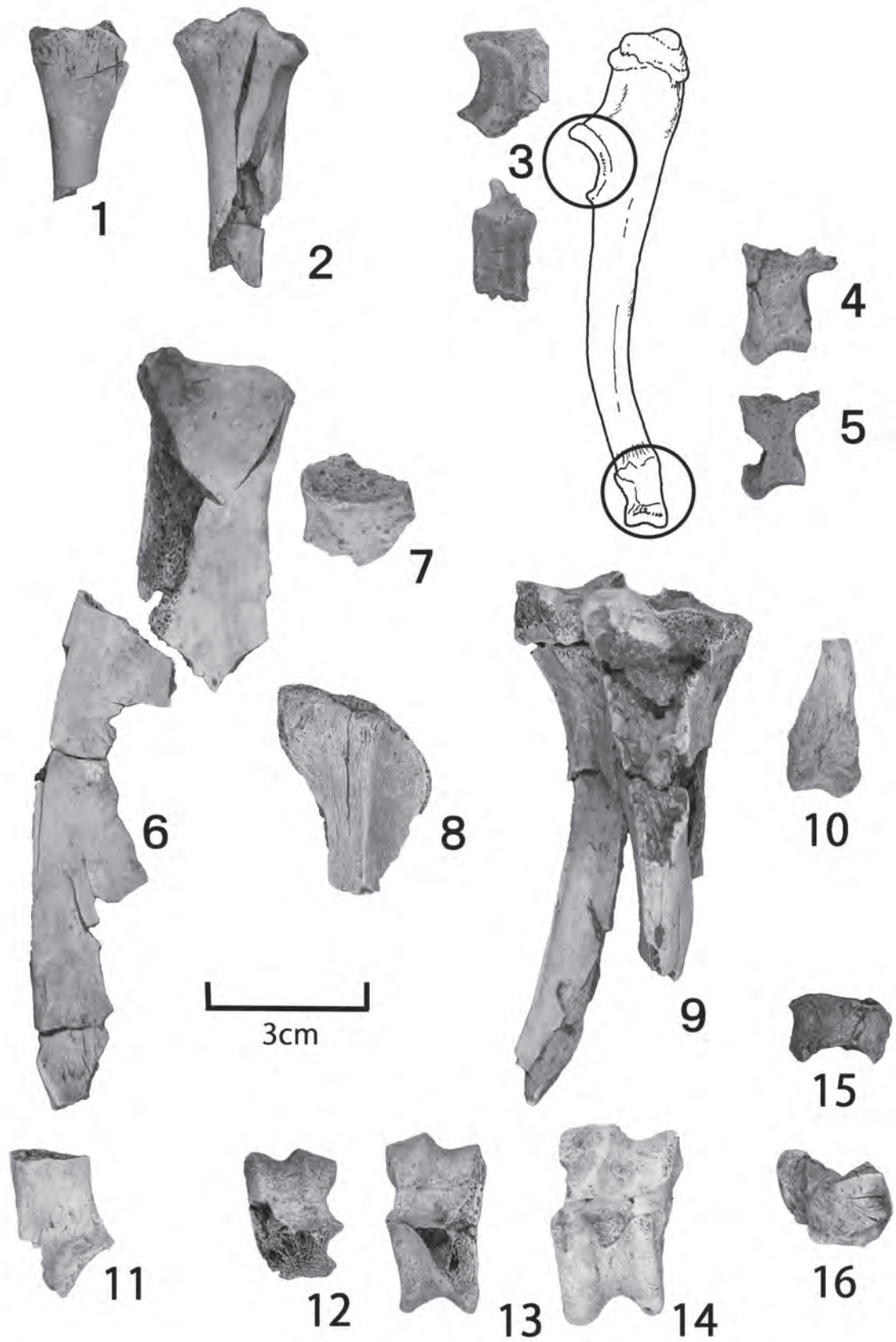
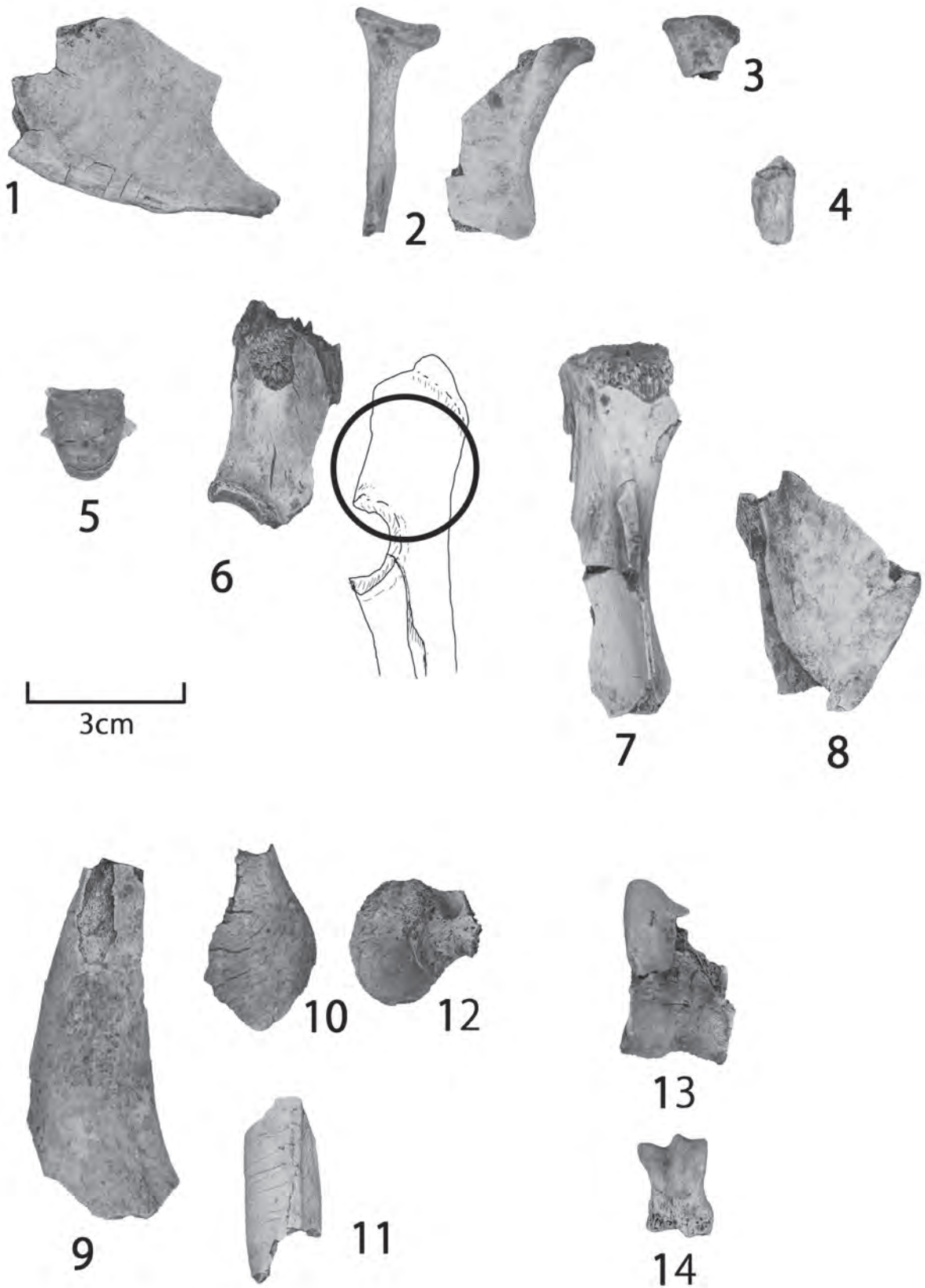


写真3 ニホンジカ



# 写 真 图 版

## 遺物写真の個体番号について

単体写真の場合は、該当する挿図の個体番号を併記した。

集合写真の場合は、該当する挿図番号のみを併記し、個体番号を下記のように集約した。

### ○集合写真掲載遺物の番号

#### 図版9

- 1 第5図1・2・4～6・11～15・19・20・23
- 2 第33図1～16
- 4 第7図3～7
- 5 第9図1・3～6・8・15・16・19  
第10図9・10
- 7 第12図1～4・10  
第13図1～4・10・14・20・30
- 8 第15図1～3・5・6  
第16図2・5・6・17・21

#### 図版10

- 1 第19図1・2・6・7・13・15・17
- 3 第22図1～3・5・7
- 4 第22図8・1・第24図1・3・4・6  
第25図16

#### 図版11

- 6 第34図1・2・4・12・14・17～19・22  
第35図7・9・13
- 7 第37図1・2・4・6・7
- 8 第38図9～22・24・第40図14・16・17・20

#### 図版12

- 1 第39図1～12・第40図3～7
- 2 第43図1～6・8～12
- 3 第44図1・4～17
- 4 第16図15・1・第19図14  
第24図22・第34図25  
第35図1・4～6・10・11・14・16・18  
第40図10～13・第53図17・18
- 5 第17図10・第19図5・第20図11  
第28図23・第48図9～20・
- 6 第9図25・26・第13図18・第25図15  
第28図20・第46図17～25
- 7 第54図1・3・13・14・18～20・29・30・33  
第73図1・7・9・14・17  
第74図1・5・7・9
- 8 第55図1～10・30～32・34・36・38・39  
第56図1～3・7～9

#### 図版13

- 1 第57図1～20・第59図18・19・24
- 3 第60図1～8・10・11
- 4 第60図12～20
- 5 第61図2・4・7・12・14・16～18・21・23  
第61図28・第62図1・2・5・6・9  
第62図10～12・15・17・22・23・25
- 6 第63図1～8
- 7 第64図1～3・9・10・12・14・15
- 8 第65図1・2・第66図1

#### 図版14

- 1 第66図3・4  
第68図1・2・5～8・14・15・17
- 2 第69図1・3～5・7・8  
第70図1～3・12～15・第71図9～19

#### 図版16

- 3 第80図1・2・3
- 4 第83図2・3・4
- 7 第85図1～24
- 8 第85図25～36
- 9 第86図1～16
- 10 第87図1～4

#### 図版17

- 2 第87図5～15
- 3 第89図1～13
- 5 第91図1・2・5・9・11～13・15・17～25
- 6 第91図26～36・39～43

#### 図版18

- 1 付編1第1図3・第4図18～20
- 2 付編1第2図1～6・第4図24～29
- 3 付編1第3図1・4・5・8・9・11  
第3図13～15・18～20・23・26・27  
第4図13
- 4 付編1第5図1～7



1 調査区付近遠景（南西上空から）



2 調査区全景（真上から、上が北東）

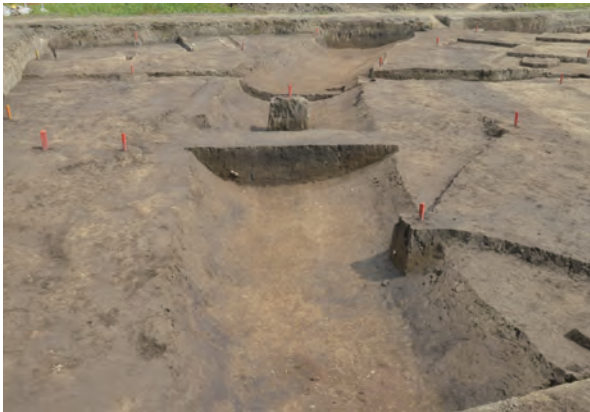
図版 2



1 調査区付近遠景（南西から・鉄塔右下）



2 調査区付近遠景（南西上空から）



3 古墳時代～中世面北東側全景



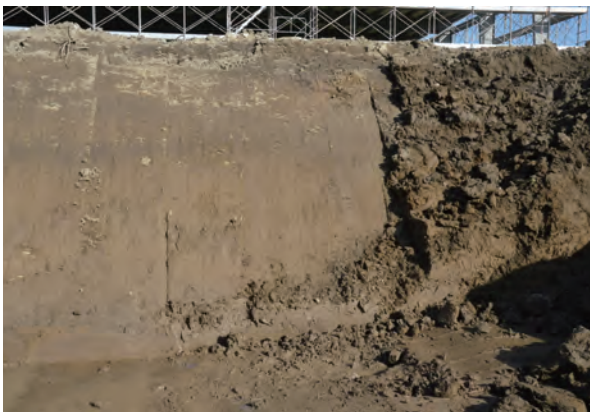
4 同左調査風景



5 縄文時代面上層全景



6 同左調査風景



7 縄文時代面下層遺構検出状況



8 同左工事掘削状況



1 縄文下層第1地点検出状況



2 第1号竖穴建物跡遺物出土状況 1



3 第1号竖穴建物跡遺物出土状況 2



4 第5号竖穴建物跡床面検出状況



5 第5号竖穴建物跡遺物出土状況



6 第6号竖穴建物跡北西半床面検出状況



7 第6号竖穴建物跡硬化烧土床検出状況 1



8 第6号竖穴建物跡硬化烧土床検出状況 2



図版 4



1 第6号竖穴建物跡硬化焼土床断ち割り状況



2 第7号竖穴建物跡検出状況



3 第7号竖穴建物跡遺物出土状況 1



4 第7号竖穴建物跡遺物出土状況 2



5 第7号竖穴建物跡遺物出土状況 3



6 第7号竖穴建物跡遺物出土状況 4



7 第8号竖穴建物跡検出状況 1



8 第8号竖穴建物跡検出状況 2



1 第4号土坑白色物質検出状況



2 第4号土坑



3 第5号土坑遺物出土状況



4 第5号土坑断ち割り状況



5 第9号土坑遺物出土状況



6 第1号性格不明遺構埋土堆積状況



7 第2号溝跡岩版出土状況 1



8 第2号溝跡岩版出土状況 2

図版 6



1 古墳時代～中世面東側全景



2 第9号竪穴建物跡遺物出土状況



3 第9号竪穴建物跡カマド



4 第12号竪穴建物跡カマド煙道部



5 第13号竪穴建物跡



6 第13号竪穴建物跡カマド



7 第10号土坑遺物出土状況



8 第11号土坑



1 第17号土坑



2 第1号井戸跡



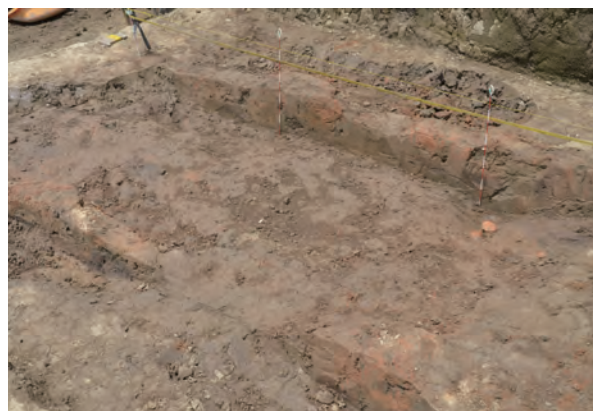
3 第2号井戸跡



4 第2号性格不明遺構



5 第3号性格不明遺構確認状況



6 第3号性格不明遺構断ち割り状況



7 第3号性格不明遺構



8 第1号溝跡

图版 8



1 第1号沟迹北端完掘状况



2 第1号沟迹南端沟底土层断面



3 第1号沟迹沟底遗物出土状况 1



4 第1号沟迹沟底遗物出土状况 2



5 第2号沟迹



6 第4号沟迹



7 第4号性格不明遺構（手前右側）



8 第17~21号土坑



1 縄文時代下層 第5図



2 縄文時代中期～後期遺物 第33図



3 第1号竪穴建物跡 第7図2



4 第2号竪穴建物跡 第7図



5 第4号竪穴建物跡 第9・10図



6 第5号竪穴建物跡 第12図9



7 第5号竪穴建物跡 第12・13図



8 第6号竪穴建物跡 第15・16図

图版 10



1 第7号竖穴建物跡 第19图



2 第8号竖穴建物跡 第23图4



3 第8号竖穴建物跡 第23图



4 第8号竖穴建物跡 第25图



5 第5号土坑 第29图1



6 第5号土坑 第29图2



7 第5号土坑 第29图3



8 第9号土坑 第30图2



1 第9号竪穴建物跡 第37図3



2 E3グリッド 第42図1



3 E3グリッド 第48図1



4 E2グリッド 第48図2



5 E3グリッド 第52図1



6 大波状口縁 第34図



7 突起のある平口縁 第37図



8 帯縄文及び無文帯の平口縁 第38・40図



図版 12



1 紐線文をもつ平口縁 第39・40図



2 有段口縁 第42・43図



3 列点文をもつ有段口縁 第44図



4 姥山式土器 第34・35図



5 大洞式土器 第48図



6 製塩土器 第46図



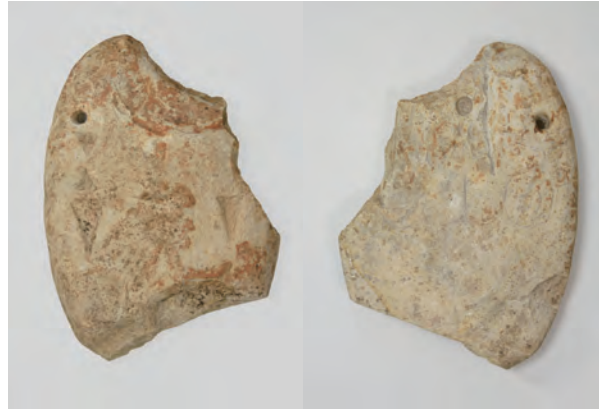
7 土製円板・石錘 第54・73・74図



8 耳飾り 第55・56図



1 土偶・土版等特殊製品 第 57・59 図



2 岩版 第 58 図 1



3 独鈷石・石剣 第 60 図



4 石剣未製品 第 60 図



5 石鏃・石錐・スクレイパー 第 61・62 図



6 打製石斧 第 63 図



7 磨製石器 第 64 図



8 石皿 第 65・66 図

図版 14



1 砥石 第66・68図



2 赤色顔料付着磨石 第69～71図



3 付編3掲載以外の鹿角・肋骨



4 縄文時代遺構・包含層出土の鉱物



5 第4号土坑第4層白色物質



6 焼成されたジガバチの巣



7 古墳時代～中世面全景（北東から・広角撮影）



1 第9号竖穴建物跡 第77图4



2 第9号竖穴建物跡 第77图8



3 第9号竖穴建物跡 第77图9



4 第9号竖穴建物跡 第77图12



5 第9号竖穴建物跡 第77图14



6 第9号竖穴建物跡 第77图16



7 第9号竖穴建物跡 第77图22



8 第9号竖穴建物跡 第77图27



9 第9号竖穴建物跡 第77图28

图版 16



1 第13号竖穴建物跡 第80图4



2 第13号竖穴建物跡 第80图5



3 第13号竖穴建物跡 第80图



4 第10号土坑 第83图



5 第2号性格不明遺構 第83图10



6 第3号性格不明遺構 第83图11



7 第1号溝跡 第85图



8 第1号溝跡 第85图



9 第1号溝跡 第86图



10 第1号溝跡 第87图



1 第1号溝跡出土須惠器片



2 第1号溝跡 第87图



3 第2号溝跡 第89图



4 第1号井戸跡出土焼土塊



5 土錘・鞆羽口・鉄滓 第91图



6 貝巢穴痕泥岩・石製模造品 第91图



7 付編1第1图1



8 付編1第1图2

図版 18



1 付編1第1・4図



2 付編1第2・4図



3 付編1第3・4図



4 付編1第5図



5 付編2写真1



6 付編2写真2



7 付編2写真3



8 付編2写真4



1 付編2写真5



2 付編2写真6



3 付編2写真7



4 付編2写真8



5 付編2写真9



6 付編2写真10



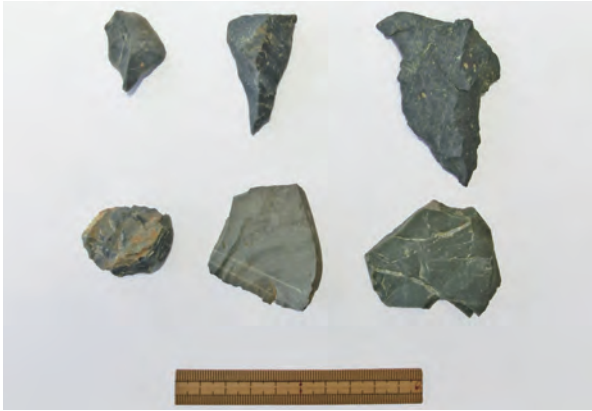
7 付編2写真11



8 付編2写真12



图版 20



1 付編2写真13



2 付編2写真14



3 付編2写真15



4 付編2写真16



5 付編2写真17



6 付編2写真18



7 付編2写真19



8 付編2写真20

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	かみきたうらいせき							
書名	上北浦遺跡							
副書名	埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書							
巻次	—							
シリーズ名	—							
シリーズ番号	第46集							
編集者名	山川 守男							
編集機関	埼玉県熊谷市教育委員会							
所在地	〒360-0107 熊谷市千代329番地 熊谷市立江南文化財センター TEL048-536-5062							
発行年月日	西暦2024（令和6）年3月25日							
ふりがな	ふりがな	コード				調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	北緯	東経		m <sup>2</sup>	
かみきたうらいせき 上北浦遺跡	くまがやしえなみ 熊谷市江波 あざかみきたうら 字上北浦27 番3他	11202	61-024	36° 12' 54"	139° 23' 06"	20210412 ～ 20210621	655	工場建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
上北浦遺跡	集落跡	縄文時代 中期～晩期	竪穴建物跡8 土坑9 性格不明遺構1 土器集中地点2	縄文土器 打製石器 磨製石器 独鈷石・石剣 土偶・土版 岩版・骨角器	多量の土器とともに岩版や製塩土器等他地域との交流を示す遺物が出土した。また、石剣、石器、赤色顔料等の生産・製作に関わる遺物も検出した。			
		古墳時代 後期～終末期	竪穴建物跡4 土坑2 溝跡1	土師器・須恵器 土錘 石製模造品	集落跡西端を区画する7世紀代の大溝を検出した。底面は、小礫や土器片を敷いて踏み固められていた。			
		平安時代	竪穴建物跡1 土坑9 溝跡1 性格不明遺構3	土師器・須恵器 轆羽口・鉄滓	10世紀代の鍛冶・製鉄関連遺構と見られる土坑、性格不明遺構、竪穴建物跡等を検出した。			
		中世	溝跡2 井戸跡2 土坑1	青磁・白磁 陶器 土師質土器 鉄製品・石製品	13世紀代の館跡の堀と見られる溝を検出した。			

埼玉県熊谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 第46集

## 上北浦遺跡

令和6(2024)年3月25日発行  
発行／埼玉県熊谷市教育委員会  
印刷／関東図書株式会社